主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

－坂城町内－

かみごみょうじょうりすいでん し
上五明条里水田址

２０１１．３

長野県千曲建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

上五明条里水田址　遠景

SB62　出土遺物

SK4　出土遺物

SB32　出土遺物

はじめに

県道長野上田線は、長野市から千曲市、坂城町を経て上田市に至る、千曲川の左岸側を通る主要地方道です。この道路は、地域の生活を支えるとともに、千曲川の右岸側に並行する国道18号の代替道路として広域的な交通ネットワークの一端を担う重要な路線です。今回の千曲市力石から坂城町上五明の区間を結ぶ力石バイパスの事業地内には、二つの周知の遺跡があり、平成13年度から長野県埋蔵文化財センターが記録作成のための発掘調査を実施してきました。本書は、この内、埴科郡坂城町に所在する上五明条里水田址の発掘調査報告書です。

上五明条里水田址は、これまでも坂城町教育委員会や当センターにより発掘調査が行われており、千曲川の氾濫原に立地する遺跡であるがゆえに、古墳時代から古代・中世の集落跡や水田跡等が地中深くに埋もれていることが確認されております。

今回の発掘調査で発見されました古墳時代の集落跡は、千曲川左岸地域では最大規模とみられ、地域史を語る上では欠くことのできない資料となりました。また、平安時代の水田跡は洪水砂層に覆われ、さらに、その洪水砂層を掘りこんで10世紀代の大規模な集落跡が発見されました。従前から、当地は「古代更科郡村上郷」の比定地と目されて参りましたが、その証左となる十分な規模を有する古代の集落跡が発見されていませんでした。今回の調査結果は、それを補って余りあるものと考えます。そうした調査成果の詳細につきましては、本書をご覧いただければと思いますが、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました長野県千曲建設事務所の方々、長野県教育委員会や千曲市教育委員会、坂城町教育委員会の方々、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

例　言

1　本書は長野県埴科郡坂城町に所在する上五明条里水田址の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業に伴う事前調査として、長野県千曲建設事務所からの受託事業として財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺跡の概要は長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』23～27で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：50000 坂城）、坂城町都市計画図（1：2500）をもとに作成した。

5　本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系（旧測地系）を用いている。

6　発掘調査にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た。（敬称略）

測量・空中写真撮影：新日本航業（株）、（株）アンドー、（株）写真測図研究所

土器実測：国際文化財（株）

人骨・獣骨鑑定：京都大学名誉教授　茂原信生　　総合研究大学院大学　本郷一美

^{14}C年代測定：（株）パレオ・ラボ、（株）加速器研究所

樹種・種実同定：（株）パレオ・ラボ

珪藻・花粉・プラントオパール分析：（株）パレオ・ラボ、（株）古環境研究所

リン酸カルシウム分析：（株）古環境研究所

製鉄関係遺物分析：JFEテクノリサーチ

遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）

7　発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表します。（敬称略）

青木一男　出河裕典　助川朋広　田中弘明　時信武史　原明芳　森川実　守矢早苗　坂城町教育委員会　神長官守矢史料館　千曲市教育委員会　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　長野県立歴史館　六ヶ郷用水組合

8　発掘調査の担当者、発掘補助員、整理補助員は第1章第2節第1表に記載した。

9　本書の執筆は、以下の通りである。調査第1課長上田典男が校閲し、調査部長大竹憲昭が総括した。

第1章第1節、第2章第1節、第3章第3節：上田典男

第2章第2節：西香子

上記以外：寺内貴美子

なお、第4章第2節は茂原信生氏、本郷一美氏に玉稿を賜った。

10　本書に添付したCDには、以下の内容を収録した。

本文PDFファイル、自然科学分析報告書、遺構一覧表、報告書掲載遺物表

なお、整理作業時に遺構記号等が変更になったものについては、遺構記号等変更表に記載した。

11　本書で報告した上五明条里水田址の記録類・出土遺物は坂城町教育委員会に移管される予定である。

凡　例

1．掲載した実測図の縮尺は原則として次の通りで、当該箇所のスケールの上に記してある。
　ただし、調査区全体図・遺構配置図・挿図などは任意である。

竪穴住居跡　1：40、1：60、1：80	住居内施設　1：40	掘立柱建物跡　1：80
溝跡　1：60、1：80、1：160	土坑　1：20	土器集中　1：10

2．掲載した遺構写真の縮尺は任意の大きさである。

3．遺構実測図中のスクリーントーンは以下のように用いた。これ以外の場合は図中に凡例を示した。

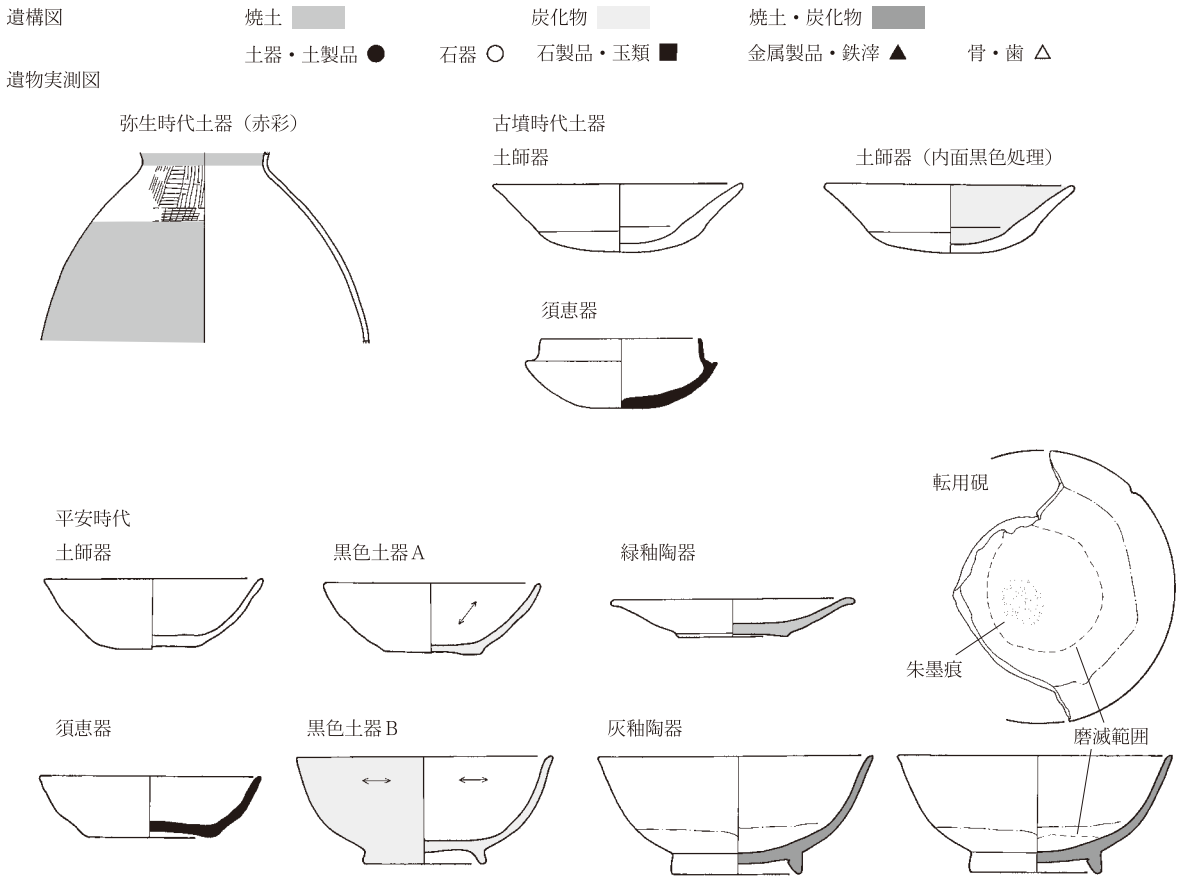
4．遺物実測図の縮尺は原則として以下の通りである。

土器　1：4	埴　輪　1：4	瓦塔・土製品　1：3	土錘　1：2
石器　1：4	石製品　1：2	臼玉　1：1	
鉄製品・製鉄関係遺物　1：4		鉄鐸・銅鈴　1：2	八稜鏡　2：3

5．遺物写真の縮尺は次の通りである。

土器　約 1：4	埴　輪　約 1：4	土製品　約 1：3	瓦塔・土錘　約 1：2
石器　約 1：4	石製品　約 1：2	臼玉　約 1：1	羽口　約 1：2
鉄製品・製鉄関係遺物　約 1：4		鉄鐸・銅鈴　約 1：2	八稜鏡　約 2：3

6．土器の種類などは以下のように表わしている。



目　次

巻頭図版
はじめに
例言
凡例
目次

第１章　調査の経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　1　主要地方道　長野上田線　力石バイパスの建設計画 …… 1
　　2　埋蔵文化財の保護協議 …… 1
　　3　力石バイパス関連遺跡の発掘調査に係る受委託契約 …… 2
　第２節　発掘調査・整理作業の体制と方法 …… 4
　　1　体制 …… 4
　　2　発掘調査における記録の方法 …… 4
　　3　発掘調査の概要と経過 …… 6
　　4　整理作業の経過 …… 7
第２章　遺跡周辺の環境 …… 10
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 10
　第２節　遺跡の歴史的概観 …… 10
　第３節　基本層序 …… 19
第３章　遺構と遺物 …… 43
　第１節　弥生時代後期 …… 43
　　1　遺構概観 …… 43
　　2　竪穴住居跡 …… 43
　第２節　古墳時代後期 …… 43
　　1　遺構概観 …… 43
　　2　竪穴住居跡 …… 43
　　3　掘立柱建物跡 …… 50
　　4　溝跡 …… 51
　　5　遺構外出土遺物 …… 52
　第３節　平安時代前期 …… 97
　　1　遺構概観 …… 97
　　2　水田跡 …… 97
　第４節　平安時代後期 …… 101
　　1　遺構概観 …… 101
　　2　竪穴住居跡 …… 101
　　3　掘立柱建物跡 …… 111

4　遺物集中…… 113
5　墓跡・土坑…… 114
6　溝跡…… 115
7　遺構外出土遺物…… 117
第 4 章　まとめ…… 181
第 1 節　出土骨に関する分析…… 181
1　上五明条里水田址出土の人骨について…… 181
2　上五明条里水田址出土の馬歯について…… 185
第 2 節　調査の成果…… 189
参考・引用文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　調査グリッド設定図
第 2 図　周辺遺跡分布図
第 3 図　土層図
第 4 図　全体図 1
第 5 図　全体図 2
第 6 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 1
第 7 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 2
第 8 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 3
第 9 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 4
第 10 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 5
第 11 図　弥生～古墳時代の遺構割付図 6
第 12 図　平安時代前期水田図 1
第 13 図　平安時代前期水田図 2
第 14 図　平安時代前期水田図 3
第 15 図　平安時代前期水田図 4
第 16 図　平安時代後期遺構割付図 1
第 17 図　平安時代後期遺構割付図 2
第 18 図　平安時代後期遺構割付図 3
第 19 図　平安時代後期遺構割付図 4
第 20 図　平安時代後期遺構割付図 5
第 21 図　平安時代後期遺構割付図 6
第 22 図　平安時代後期遺構割付図 7
第 23 図　平安時代後期遺構割付図 8
第 24 図　SB53
第 25 図　SB11遺構図 1
第 26 図　SB11遺構図 2
第 27 図　SB11遺物 1
第 28 図　SB11遺物 2
第 29 図　SB12
第 30 図　SB13・14遺構図
第 31 図　SB13・14遺物
第 32 図　SB20遺構図
第 33 図　SB20遺物
第 34 図　SB21・27遺構図 1
第 35 図　SB21・27遺構図 2 ・遺物
第 36 図　SB26
第 37 図　SB43・44遺構図
第 38 図　SB43・44遺物
第 39 図　SB49
第 40 図　SB50
第 41 図　SB70遺構図
第 42 図　SB70遺物
第 43 図　SB72遺構図
第 44 図　SB69・72遺物
第 45 図　SB76・78遺構図
第 46 図　SB76・78遺物
第 47 図　SB79遺構図
第 48 図　SB79遺物
第 49 図　SB80・82遺構図
第 50 図　SB82遺構図・遺物

第 51 図　SB92遺構図
第 52 図　SB92遺物
第 53 図　SB71・73・74・83遺物
第 54 図　SB85・90・91遺物
第 55 図　ST5・ 6 遺構図
第 56 図　ST11・20遺構図
第 57 図　ST21遺構図
第 58 図　SD7
第 59 図　SD10遺構図
第 60 図　SD49・50・51遺構図
第 61 図　SD10・49遺物
第 62 図　遺構外出土遺物
第 63 図　埴輪 1
第 64 図　埴輪 2
第 65 図　埴輪 3
第 66 図　土製品・臼玉・石製品
第 67 図　水田遺構図 1
第 68 図　水田遺構図 2
第 69 図　水田遺構図 3
第 70 図　SB1遺構図
第 71 図　SB1遺物
第 72 図　SB2・ 3
第 73 図　SB5
第 74 図　SB7
第 75 図　SB10
第 76 図　SB17・18
第 77 図　SB19
第 78 図　SB28・29遺構図
第 79 図　SB28・29遺物
第 80 図　SB30
第 81 図　SB31
第 82 図　SB32遺構図
第 83 図　SB32遺物
第 84 図　SB32銅鈴・鉄鐸
第 85 図　SB34・35遺構図 1
第 86 図　SB34・35遺構図 2 ・SB34遺物
第 87 図　SB35遺物
第 88 図　SB36・40遺構図 1
第 89 図　SB36・40遺構図 2 ・遺物
第 90 図　SB38・39遺構図
第 91 図　SB46遺構図
第 92 図　SB46遺物
第 93 図　SB47
第 94 図　SB55
第 95 図　SB57
第 96 図　SB58・59遺構図
第 97 図　SB58遺物
第 98 図　SB61遺構図
第 99 図　SB61遺物
第 100 図　SB62遺構図 1
第 101 図　SB62遺構図 2
第 102 図　SB62遺構図 3
第 103 図　SB62遺構図 4
第 104 図　SB62遺物 1
第 105 図　SB62遺物 2
第 106 図　SB62遺物 3
第 107 図　SB63
第 108 図　SB65
第 109 図　SB88
第 110 図　SB4・ 6 ・ 8 ・ 9 ・60・64・66遺物
第 111 図　ST1・ 7 ・14・17遺構図
第 112 図　ST3・ 4 遺構図
第 113 図　ST8・ 9 ・10遺構図
第 114 図　ST12・15・16・17遺構図
第 115 図　ST18・19遺構図
第 116 図　SQ1・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 遺構図
第 117 図　SQ1・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 遺物
第 118 図　SK4
第 119 図　SK4鉄鐸
第 120 図　SK250・580・643
第 121 図　SK513・515・621・622
第 122 図　SD4・ 9 遺構図
第 123 図　SD4・ 9 遺物
第 124 図　SD11・12・13・14・16遺構図 1
第 125 図　SD11・12・13・14・16遺構図 2
第 126 図　SD14・16遺物
第 127 図　SK・SD遺物
第 128 図　遺構外出土遺物
第 129 図　瓦塔・土製品
第 130 図　製鉄関係
第 131 図　馬歯出土状況
第 132 図　SK4出土の下顎歯

第 133 図　SK643出土の上顎歯
第 134 図　SB7出土の下顎歯
第 135 図　SK2出土のウマの上顎臼歯
第 136 図　SK2出土のウマの下顎臼歯
第 137 図　XIN1グリッド出土のウマの右側臼歯

挿表目次

第 1 表　体制
第 2 表　周辺遺跡一覧
第 3 表　上五明条里水田址出土の人の上顎歯の計測値と比較資料
第 4 表　上五明条里水田址出土の人の下顎歯の計測値と比較資料
第 5 表　上五明条里水田址出土のウマの上顎歯の計測値と比較資料
第 6 表　上五明条里水田址出土のウマの下顎歯の計測値と比較資料
第 7 表　出土鉄鐸・銅鈴一覧

写真目次

PL 1　遺構（弥生・古墳）SB
PL 2　遺構（古墳）SB
PL 3　遺構（古墳）SB
PL 4　遺構（古墳）SB・ST
PL 5　遺構（古墳）SD
PL 6　遺構（平安）SK4
PL 7　遺構（平安）SB32
PL 8　遺構（平安）水田跡
PL 9　遺構（平安）水田跡
PL10　遺構（平安）SL
PL11　遺構（平安）水田跡・土層断面・SB
PL12　遺構（平安）SB
PL13　遺構（平安）SB
PL14　遺構（平安）SB
PL15　遺構（平安）SB62
PL16　遺構（平安）ST
PL17　遺構（平安）SD・SK
PL18　遺構（平安）SQ・馬歯
PL19　遺物（弥生・古墳）土器・埴輪
PL20　遺物（古墳）土器（SB）
PL21　遺物（古墳）土器（SB・SD・遺構外）
PL22　遺物（古墳）土器（SB）
PL23　遺物（古墳）臼玉・磨製石斧・石製模造品・子持勾玉・石器
PL24　遺物（平安）SK4（土器・鉄鐸）
PL25　遺物（平安）SB32（銅鈴・鉄鐸・石製品・八稜鏡）
PL26　遺物（平安）土器（SB）
PL27　遺物（平安）土器（SB・SD）
PL28　遺物（平安）土器（SB）
PL29　遺物（平安）土器（SQ）猿面硯・墨書刻書
PL30　遺物（平安）瓦塔・土錘・土製品
PL31　遺物（平安）石器・石帯・羽口
PL32　遺物（平安）炉壁・鉄滓

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経緯

１　主要地方道　長野上田線　力石バイパスの建設計画

県道長野上田線は、長野市から千曲市、坂城町を経て上田市に至る、千曲川の左岸側を通る主要地方道である。千曲川の右岸側には国道18号が並行してあり、県道長野上田線は、国道の代替道路としても広域的な交通ネットワークの一端を担う重要な路線である。そのため、１日の交通量が１万台を超え、特に千曲市力石地籍では、幅員が狭く、屈曲していることもあり、交通の難所となっていた。交通の円滑化と沿道地域の安全で快適な生活環境を創出するために、バイパス建設が計画された。国道18号についても千曲川の左岸側にバイパス建設計画があり、一部の区間で供用が開始されている。

力石バイパスの設計協議は平成７年度から開始され、平成10年度に千曲市大字上山田を起点に、坂城町大字上五明を終点とする全体延長1,820ｍのルートが決定した。平成13年度には、起点側の１期工区（920ｍ）の事業化が決定、平成16年度に終点側の２期工区（900ｍ）の事業化が決定し、平成22年３月６日に全線開通を迎えた。なお、２期工区は国道18号上田篠ノ井バイパスの計画線上に位置している。

２　埋蔵文化財の保護協議

力石バイパスのルート上には、力石条里遺跡群（上山田町―現千曲市）と上五明条里水田址（坂城町）という周知の埋蔵文化財包蔵地があるため、平成12年11月20日に、事業者である更埴建設事務所（現千曲建設事務所）と、上山田町教育委員会（現千曲市教育委員会）、長野県教育委員会の三者により、工事が先行する力石条里遺跡群についての保護協議がなされた。更埴建設事務所により提示された事業計画・内容に基づいて協議した結果、遺跡の内容を記録にとどめるために発掘調査を実施することとなった。ただし、調査主体者及び調査着手時期については決定を見ず、再協議となった。

平成13年４月17日に実施された更埴建設事務所、上山田町教育委員会、長野県教育委員会の三者による再協議で、調査主体者を当センターとし、当センターが13年度中には遺跡の内容を確認する調査ができる方向で調整することとなった。

平成13年８月27日の更埴建設事務所、長野県教育委員会、当センターの三者による保護協議で、13年度の11月～12月の間に確認調査を実施し、その調査結果を踏まえて、14年度の調査規模・調査体制を決めていくこととした。確認調査は平成13年12月５日～12月17日に実施され、縄文時代後期から近世に至る２～５枚の文化層が確認されたこと、水田址と集落跡がかかること等の調査成果が得られた。

平成14年３月14日、更埴建設事務所と当センターの二者協議で、確認調査の結果や14年度調査の着手時期は５月以降となること、１期工区の６～７割程度が用地買収調印済みであること等が報告・協議され、平成14年度から始まる力石条里遺跡群の本発掘調査を迎えることとなった。平成14年度以降は、更埴建設事務所、長野県教育委員会、上山田町教育委員会、当センターの四者による協議を年１回、定期的に持ち、工事計画や用地買収の進捗状況、発掘調査の進捗状況及び成果を共有した。個別具体的な事案の協議については、更埴建設事務所と当センターの二者協議で調整してきた。

なお、平成15年12月17日に実施された、更埴建設事務所、長野県教育委員会、千曲市教育委員会、坂城町教育委員会、当センターの五者協議の際に、２期工区が事業化されたことが提示され、２期工区（力石条里遺跡群、上五明条里水田址）の本発掘調査も引き続き当センターで実施することとなった。

3　力石バイパス関連遺跡の発掘調査に係る受委託契約

千曲建設事務所と当センターの二者により、埋蔵文化財発掘調査業務の受委託契約を結び、遂行した。４月当初から発掘調査に着手できるように、受委託契約の時期等を両者で調整したため、年度を越えた契約期間となった場合もある。契約期間と契約額は以下のとおりである。

平成13年度

業務名　　平成13年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　上山田町力石（３）　力石条里遺跡群
契約期間　　平成13年12月５日～平成14年３月22日　　契約額　　3,519,000円

平成14年度

業務名　　平成14年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　上山田町力石　力石条里遺跡群
契約期間　　平成14年６月３日～平成15年９月30日　　契約額　　130,500,000円

＊14年度事業費は、契約額の130,500,000から15年度への繰越額42,803,000を差し引いた87,697,000となる。

平成15年度

業務名　　平成14年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　上山田町力石　力石条里遺跡群
契約期間　　平成14年６月３日～平成15年９月30日　　契約額　　130,500,000円

業務名　　平成14年度緊急地方道路整備Ａ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　上山田町力石（２）　力石条里遺跡群
契約期間　　平成15年３月５日～平成15年９月30日　　契約額　　21,800,000円

業務名　　平成15年度県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　　平成15年９月24日～平成16年３月10日　　契約額　　49,047,000円

＊15年度事業費は、14年度契約額130,500,000から14年度事業費の87,697,000を差し引いた繰越額42,803,000と14年度契約額21,800,000、15年度契約額の49,047,000の合計額113,650,000となる。

平成16年度

業務名　　平成16年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　　平成16年４月１日～平成17年３月18日　　契約額　　54,401,000円

平成17年度

業務名　　平成17年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　　（主）長野上田線　千曲市力石　力石条里遺跡群
契約期間　　平成17年４月１日～平成18年３月17日　　契約額　　42,163,000円

平成18年度

業務名　　平成17年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明（６）　力石条里遺跡群
契約期間　平成18年３月28日～平成19年３月20日　　契約額　　43,761,000円

平成19年度

業務名　　平成18年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明（５）　力石条里遺跡群
契約期間　平成19年３月28日～平成20年３月20日　　契約額　　48,462,000円

業務名　　平成19年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明（２）　上五明条里水田址
契約期間　平成19年９月18日～平成20年３月20日　　契約額　　24,476,000円

平成20年度

業務名　　平成19年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明（３）　上五明条里水田址
契約期間　平成20年３月27日～平成21年３月10日　　契約額　　40,994,000円

業務名　　平成20年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明　上五明条里水田址他
契約期間　平成20年８月１日～平成21年３月10日　　契約額　　32,514,000円

平成21年度

業務名　　平成20年度地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明　上五明条里水田址
契約期間　平成21年２月３日～平成21年９月30日　　契約額　　23,455,000円

業務名　　平成21年度地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石
契約期間　平成21年７月１日～平成22年３月31日　　契約額　　28,920,000円

平成22年度

業務名　　平成21年度地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務
業務箇所　（主）長野上田線　千曲市力石～坂城町上五明
契約期間　平成22年２月８日～平成23年３月31日　　契約額　　36,950,000円

第２節　発掘調査・整理作業の体制と方法

長野県埋蔵文化財センターでは、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため『遺跡調査の方針と手順』を作成しており、これを基本としたうえで、遺跡の状況に応じた計画・方法を策定して発掘調査を行った。

１　体制

平成18～22年度までの、調査体制は第１表に示した。

第１表　体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成18年	仁科松男	市澤英利	上田典男	西　香子　市川桂子
平成19年	仁科松男	平林　彰	上田典男	贄田　明　寺内貴美子　山崎まゆみ
平成20年	仁科松男	平林　彰	上田典男	西　香子　寺内貴美子　調査員　鈴木時夫
平成21年	仁科松男	平林　彰	上田典男	西　香子　寺内貴美子　調査員　鈴木時夫
平成22年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	西　香子　寺内貴美子
平成18～21年度　発掘補助員 朝日奈富士子　石浦市郎　今井せつ子　牛澤政子　大橋廣司　沖田勝之　沖田松子　荻原勝子　尾島平一　加藤周子 木ノ瀬勝男　黒田清男　倉島徳明　小林作蔵　小林武彦　小林哲三　小林奈美江　小林英子　坂田昭二　坂田良人　佐藤昭子 島田雅博　諏訪忠三　関口庸一　高桑豊治　高野正道　高橋貫二　高橋元一　高橋敏己　塚田徳雄　中澤ヒデ子　中沢　幸 中島祐子　中島裕子　西沢貞雄　西野入金巳　半田純子　深沢優子　松本　晃　丸山昌美　水沢邦久　宮下容子　望月勝二 森下和枝　柳沢悦子　山崎　忠　横沢生枝　横沢　昇　依田　萌　若林郁子				
平成18～20年度　基礎整理補助員 朝日奈富士子　今井せつ子　木ノ瀬勝男　倉島由美子　小林哲三　小林奈美江　高野正道　高橋元一　滝沢久子　塚田徳雄 中澤ヒデ子　中島裕子　西野入金巳　半田純子　深沢優子　森下和枝　山崎　忠				
平成21・22年度　本格整理補助員 石田多美子　市川ちず子　宇賀村節子　大内秀子　柄沢登紀子　小林知子　近藤朋子　塩野入奈菜美　鳥羽仁美　中島裕子 西島典子　半田純子　柳原澄子　山崎みな子　渡辺恵美子				

２　発掘調査における記録の方法

（１）遺跡の名称と記号

遺跡の名称と遺跡記号は、下記の通りである。遺跡記号は、記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット３文字で略表現した記号である。１文字目は長野県を９分割した地区記号で、埴科郡が該当する「B」、２文字目および３文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの二文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記に遺跡記号を利用している。

遺跡名称：上五明条里水田址（かみごみょうじょうりすいでんし）

遺跡記号：BKJ

（２）調査区（グリッド）の設定と略称（第１図）

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X＝0.0000、Y＝0.0000）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した。

大々地区は、200×200ｍの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を40×40ｍの25区画に分割したもので、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベット番

号を与えた。

中地区は、大地区を８×８ｍの25区画に分割したもので、北西から南東へ１～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、大地区を２×２ｍの400区画に分割したもので、西から東へＡ～Ｔのアルファベット、北から南へ１～20のアラビア数字を組み合わせて番号を与えた。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

グリッド杭の打設は測量業者に委託して実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

このグリッド設定は、同じく県道長野上田線力石バイパス建設のため当センターで実施した、千曲市の力石条里遺跡群の調査と同じである。

なお、分割調査のために設定した仮地区は第３図に示した。

（３）遺構の名称と記号

遺構記号は検出時に決定するため、遺構の性格に適合しない場合がある。そのため遺構は、主に平面形状や分布の特徴を指標として区分し、遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため遺構記号を用いた。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則とした変更していない。発掘の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。遺構内施設についても同様である。

発掘作業および本書で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

ＳＢ：おおむね、一辺３ｍを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。
【竪穴住居跡、竪穴状遺構】

ＳＫ：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないＳＢよりも平面形が小さな掘り込み。
【土坑、井戸】

ＳＴ：ＳＢよりも平面形が小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。
【掘立柱建物跡】

ＳＡ：ＳＢよりも平面形が小さな掘り込みや石が列として配置するもの。【柵、築地】

ＳＤ：帯状の掘り込み。【溝跡、自然流路跡】

ＳＣ：連続する堅い面や帯状の盛り土やＳＤに挟まれる帯状の面。【畦、畝】

ＳＬ：複数の帯状の掘り込みや盛り上がりが規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。
【畑跡、水田跡】

ＳＦ：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床、被熱土坑】

ＳＱ：遺物が面的に集中するもの。【廃棄場】

なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴等やＳＴを構成する個々の掘り込みにはPit（Ｐ）を付した。

（４）遺構検出と遺構調査の手順

基本的な調査の進め方は、重機で表土を剥いだ後、前述のようにグリッドを設定して人力で遺構検出を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名またはグリッド名あるいは、帰属遺構名を付して取り上げた。遺構調査面が２面以上ある場合は、その調査面まで、重機による剥ぎを行った。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、新旧関

係の新しい遺構から古い遺構へ、という流れで行った。平面形で新旧のわからないものは、随時トレンチを入れて断面より確認して作業を進めた。遺構はそれぞれに十文字方向あるいは単一の方向で土層を観察し、記録した。掘り下げが終了した遺構は、測量・写真撮影を経て終了した。

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘補助員が行った。また、前記の測量基準杭を基準とする簡易遣り方測量を基本としたが、業者委託の単点測量（水田跡の測量など）も併用した。基本的に遺構測量は、中地区（８ｍ×８ｍ）単位に区切った割付図としたが、必要に応じて住居跡などは個別の遺構図を作成した。遺構測量の縮尺はほとんどの場合1：20で、必要に応じて1：10で実測した。

発掘中の遺構等の撮影は、マミヤＲＢ・ペンタックス（６×７）とニコンＦＭ２（35㎜）を併用し、ともにモノクロネガフィルム（ネオパン100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100Ｆ）で撮影した。撮影はすべて調査研究員または調査員が行い、現像と焼付けは業者に依頼した。空中写真は業者委託により実施した。

３　発掘調査の概要と経過

上五明条里水田址の発掘調査は、平成18年から21年にかけて実施した。調査は、当時の現道等に区切られた①～④区を設定して行った（第３図）。年次別の発掘調査の概要と経過は以下の通りである。

平成18年度　①・②・③区でトレンチ調査を行った。調査期間は10月26日～12月15日、調査地は坂城町上平字出浦ほかで、調査面積は950㎡である。次年度から本格的に始まる発掘調査の事前に、面的調査を必要とする範囲や調査面数を決定する資料とするために、３か所のトレンチを設定して確認調査を行った。

①区に設定したトレンチ１では洪水砂に覆われた平安時代前期の溝跡・水田跡、③区に設定したトレンチ２では平安時代後期を中心とした竪穴住居跡・溝跡・土坑を検出した。一方、②区に設定したトレンチ３では水田耕作による堆積が幾層にも観察できたが遺物を含む土壌化した層は確認できず、地区により遺構の種類や分布状況に差異があることが明らかになった。

平成19年度　③ａ・ｂ・ｃ・ｇ・ｈ、④ａ区の面的調査と④ｂ区のトレンチ調査を行った。調査期間は５月７日～12月11日、調査地点は坂城町上平字出浦ほかで、調査面積は、7,339㎡である。③ａ区では、掘立柱建物跡と溝跡を確認し調査区の北西に遺構が広がらないことを確認した。③ｂ・ｃ区では、ほぼ全面で平安時代と古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑などを検出し、鉄鐸が副葬された平安時代後期の木棺墓も確認した。③ｇ・ｈ区では、北西隅に平安時代後期の住居跡を１軒検出したが、それより南東には溝１条のみで、集落が途切れることを確認した。④ａ区では、調査区の北西側約２／３は古代水田と思われる低地、残り南東側１／３が一段上がった平安時代後期の集落の端で竪穴住居跡や溝跡などを確認した。なお、④区は当初用地を東西に２分割して北をａ区、南をｂ区と分けていたが、ａ区の東西に先行トレンチをいれて遺構の状況を確認したところ、県道沿いの東側は遺構の密度が高く年度内での調査終了は困難と判断された。そのため、千曲建設事務所と協議を行い④区全体の西側は19年度に調査を終了させ、東側は次年度以降の調査となった。これに伴い④区西側を④ａ区、東側を④ｂ区と、調査区の名称を変更した。

平成20年度　①・②ａ-ｃ・ｄ・ｅ・③ｉ区の面的調査を行った。調査期間は４月11日～12月12日、調査地点は坂城町上平字出浦ほかで、調査面積は10,382㎡である。①区では平安時代前期の水田跡が洪水砂に覆われている状況が確認され、この洪水砂は、調査区の北西にいくほど薄くなり途中からは堆積がなくなることを確認した。また、流路跡から馬形埴輪と円筒埴輪の破片が多数出土した。②ａ-ｃ・d区は平安時代後期の集落跡、洪水砂に覆われた平安時代前期の水田跡、弥生時代後期の竪穴住居跡、弥生時代後期～古

墳時代の溝跡･土坑を確認した。なお、平安時代後期の竪穴住居跡からは、八稜鏡と鉄鐸が出土した。②ｅ区では、古墳時代・平安時代とも溝跡を確認した。③ｉ区では、平安時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴住居跡などを確認した。

平成21年度　④ｂ・ｃ区の面的調査を行った。調査期間は４月３日～７月22日、調査地点は坂城町上五明字中村で、調査面積は1,654㎡である。工事用道路を確保するため、平成19年度に④ｂ区とした調査区をｂ・ｃ区に分けて調査を実施した。両地区とも当初の予想通り高い密度での遺構調査となり、平安時代だけで３面、古墳時代１面、平安時代後期以降１面の調査となった。平安時代以降の面は調査区の一部で確認でき、竪穴状遺構・土坑を確認した。平安時代は後期を中心に竪穴住居跡・土坑・遺物集中などを確認した。竪穴住居跡では東西約７ｍ×南北約９ｍの鍛冶炉を持つ大形住居跡も確認しており、多量の土器も出土した。古墳時代では６世紀を中心とした竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などを確認した。

４　整理作業の経過

（１）基礎整理作業

発掘調査年度の冬期に基礎整理作業として、以下の作業を行った。

図面は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら、矛盾を整理し記録漏れを補い、竪穴住居跡などの個別遺構図については、２次原図を作成した。写真については、モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35㎜はマウントを付け、６×７はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35㎜カラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡記号・地区・撮影内容・撮影方向を記している。

遺物は、注記を行い、材質（種別）・取り上げ単位ごとの数量・大まかな器種を確認して台帳に登録した。

（２）本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成21・22年度に実施した。

図面類は、基礎整理作業で作成した修正図や２次原図をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図（全体図）などを作成し、製図ペンでトレースを行った。

遺物は、土器・土製品、石器・石製品、その他の遺物に大別して整理作業を進めた。

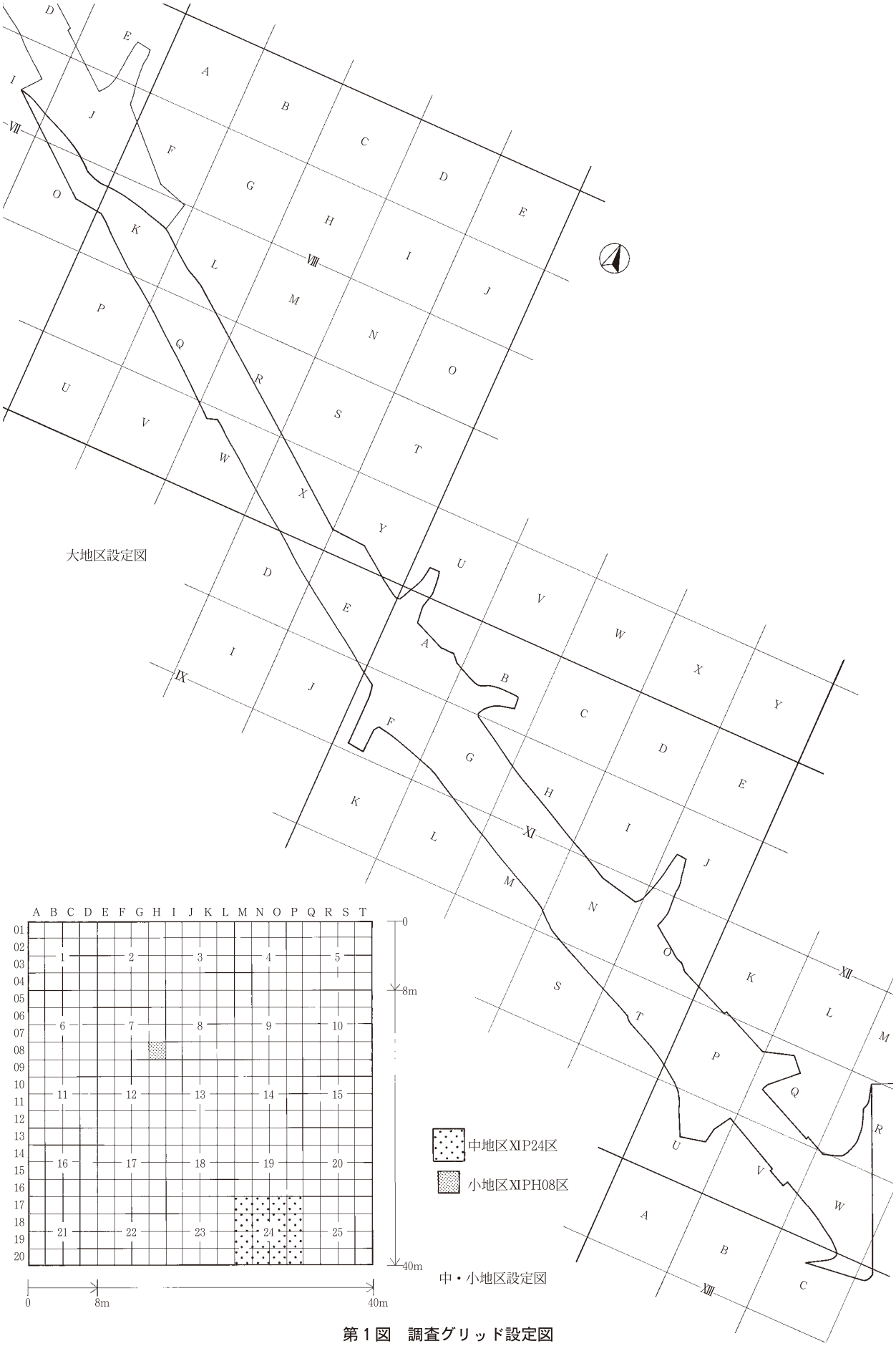
土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。出土遺物は遺構単位に観察し、出土遺物の全体像を把握した後に遺構内・遺構外出土遺物ともできる限り図化・掲載した。実測は手実測（一部パドラス援用）により、1：1縮尺で長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に鉛筆で図化し、必要に応じて拓本も用いた。また、一部の土器は業者委託で実測を行った。トレースは長野県埋蔵文化財センターで実測を行ったものは製図ペンを用いた手作業、業者委託したものは委託業者によりデジタルトレースを行った。掲載した土器については、観察表を作成した。

石器は報告書掲載遺物を抽出し、実測は手実測により1：1縮尺で当センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて当センターで、製図ペンを用いて手作業で行った。掲載した石器については、観察表を作成した。

その他の遺物は、材質別に分類し遺存度が良好でかつ器種が判別可能なものを抽出し図化した。実測は手実測により、1：1縮尺で当センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースは当センターで、製図ペンを用いて手作業で行った。

遺物の写真撮影は、業者委託により実施した。撮影にはカラーリバーサルフィルム（フジクローム100Ｆ）を使用した。

出土した遺物や実測図面・写真等の記録類は、報告書刊行後、坂城町教育委員会に移管し、保管予定である。



第１図　調査グリッド設定図

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

力石バイパス建設に伴って調査を実施した力石条里遺跡群及び上五明条里水田址は、「坂城広谷」（本間1931）と称される千曲川中流域に位置する。千曲川は、埼玉・山梨・長野の３県の県境をなす甲武信岳を源とし、南佐久地域を流れて、佐久平（盆地）を北に進み、上田盆地では北西に流路をとって流れ、上田盆地の西端、岩鼻の峡隘地を突破して坂城町にはいる。この岩鼻の峡隘地から千曲市の屋代付近までの間を、地形的な特徴から「坂城広谷」、または「千曲川貫通谷」（井上1968）と称している。「坂城広谷」は、「全長約16km、氾濫原をつくる谷底の幅は岩鼻付近で約650mと最も狭く、（略）千曲市の一重山と湯ノ崎間で約2,200mと広い。谷底の氾濫原は下流で海抜約350m、上流は約400mである。」（塩野入1991）。千曲川はこの谷底を蛇行しながら北西方向に流れ、「坂城広谷」を挟んで、西側に三ツ頭山（1,164.3m）・大林山（1,333.0m）・冠着山（1,252.2m）を連ねた河西山地が、東側には太郎山（1,164.3m）・大道山（1,319.4m）・鏡台山（1,269.0m）を連ねる河東山地が「坂城広谷」と同じ方向に走っている。両側の山系から流れ出る小河川は扇状地を形成するが、その扇端部は千曲川の氾濫原によって右岸・左岸とも切られている。力石条里遺跡群及び上五明条里水田址は、千曲川左岸の氾濫原上に立地している。

二つの遺跡は、千曲市と坂城町にそれぞれ所在し、行政区画が異なっているために別々の遺跡名で呼ばれるが、両者とも千曲川の氾濫により形成された後背湿地と自然堤防（微高地）上に連続して立地する広大な面積を擁する遺跡であり、力石条里遺跡群の範囲内には、弥生時代～中世の集落跡として登録されている薬師堂遺跡、力石西沖遺跡、桜宮遺跡が含まれている。いずれの遺跡範囲でも、現地表面にて条里的地割が窺い知れることから遺跡名に「条里」が冠されている。この条里的地割の起源は、これまでの上山田町教育委員会（現千曲市教育委員会）や坂城町教育委員会の発掘調査を経て、中世豪族村上氏の力によって13世紀代に部分的に完成したのではないかと推察されている。

第２節　遺跡の歴史的概観

両遺跡の所在する「坂城広谷」という地域の歴史的な変遷について、分布する遺跡を主に、時代を追って概観する。第２図は「坂城広谷」の上流部、上田市の半過岩鼻から千曲川に架かる大正橋（獅子ヶ鼻）周辺までの遺跡分布図である。なお、３市町にわたるため遺跡番号は煩雑となるが、各市町の番号をそのまま使用している。

旧石器時代　千曲川流域で最も注目されるのは、和田峠や霧ヶ峰等の黒曜石原産地と下流域の野尻湖遺跡群である。河川を通行ルートの一つと考えれば「坂城広谷」は両者を結ぶルート上に位置し、おそらく旧石器時代の人々も通過しただろうことは十分予想される。生活の痕跡である遺構や明確な遺物包含層が把握された遺跡は域内には認められないものの、幾つかの遺跡から旧石器時代の石器が採集されている。

千曲川右岸地域では、谷川の扇状地上に立地する保地遺跡（坂城３-１）から14,000～15,000年前と想定される上ヶ屋型彫器（黒曜石製）、頁岩製の小形の尖頭器・石核が、扇状地端崖上に立地する上ノ平遺跡（千曲337）から黒曜石製の彫刻器が採集されている。

千曲川左岸地域では、扇状地端崖上に立地する千曲市三島A遺跡で珪岩製の尖頭器様石器と剥片が、崖

錐状地形上に立地する千曲市中村遺跡からは輝緑凝灰岩製の尖頭器が採集されている。

縄文時代　時代的な変遷をみると、早期押型文期の遺跡が山沿いに分布し、前期に入り扇状地に、中期後半以降沖積地（千曲川氾濫原）へと進出してくる。千曲川の右岸・左岸とも同様な状況である。特に注目すべきは、縄文時代になると拠点的な集落が作られるようになることである。「坂城広谷」の長野盆地側出口付近に千曲市屋代遺跡群があり、「坂城広谷」内では、千曲川左岸地域の千曲市幅田遺跡群、右岸地域の保地遺跡（坂城３-１）などが代表例である。特に、幅田遺跡や円光房遺跡を含む幅田遺跡群は、千曲川中流域屈指の遺跡で、住居跡群のみならず、墓地や配石遺構等の遺構群を併せ持ち、まさに縄文文化ネットワークを構成したセンター的要素を担っていたと考えられる。回廊は単に通過するためのものだけでなく、居住や生産、精神世界を支える基盤として当時の人々の生活に位置づいたと言える。

千曲川右岸地域では、山地に立地する坂城町和平A遺跡・平沢遺跡で楕円押型文土器が確認されている。扇状地上に立地する込山A遺跡（坂城30-１）では早期後半条痕文系土器群・前期後半諸磯式土器群、金井遺跡（坂城２-１）で中期の土偶、保地遺跡（坂城３-１）で後期から晩期の土器・石器群とともに特殊儀礼的遺構や再葬墓が検出されている。再葬墓からは遺存状況の良好な人骨が多数確認され様々な分析がなされている。

千曲川左岸地域では、山間地に立地する千曲市芝平遺跡や樂葉遺跡で楕円押型文や中期・後期の土器が出土している。扇状地に立地する幅田遺跡群（幅田遺跡、円光房遺跡）は前期から晩期までの土器群や石器群とともに生活痕跡が確認されている。同じく扇状地上の堀之内遺跡（千曲438）では前期初頭の尖底土器が確認され、新屋遺跡（千曲469）では後期初頭の敷石住居跡が調査されている。千曲川の氾濫原上に立地する力石条里遺跡群（千曲401）では後期・晩期の土器が確認されている。

弥生時代　「坂城広谷」という限られた範囲の中では、東海地方からの条痕文系土器群で代表される前期末～中期前葉の土器群が出土する遺跡が散見する程度である。こうした遺跡の在り方は、中期後半の栗林式期まで続いている。栗林式期は中部高地における弥生時代の確立期とも言われ、北信地域を中心に、松本平、諏訪湖盆、上伊那、佐久平と広域にわたる文化圏を形成しており、その影響範囲は群馬県にまで広がっている。そうした状況の中、「坂城広谷」と上田盆地は遺跡数が極めて少なく、後期箱清水式期に至らないと大規模な集落跡等は見いだせない。しかも、後期箱清水式土器の文様等にも地域色が生み出され、後期終末～古墳時代初頭にかけて最後まで箱清水式の独自色を保持した御屋敷式土器の標式遺跡である御屋敷遺跡（千曲430）は「坂城広谷」に所在する。また、箭塚遺跡（千曲326）からは朝鮮半島で製作されたと考えられる細形銅剣が発見されており、欠損後の再加工品として古くから注目を集めている。穿孔の状況から再加工は後期に行われたとの指摘があるが、こうした青銅器の来歴については不明な部分が多すぎる。以上のことの背景を考究することが今後の大きな課題の一つであるが、今回の力石条里遺跡群（千曲401）の調査によって、新たな知見を得ることができた。一つは、条痕文系土器や遠賀川系土器が東海地方からもたらされ、在地の土器群と見事に融合し、そうした土器を棺として用いる再葬が確認されたことである。一つは、箱清水式土器が含まれる遺物包含層の下層に栗林式土器が含まれる遺物包含層が確認され、土層の堆積状況が良好な地点では、両者の間に無遺物層が確認されたことである。こうした層位的事実は長野市の松原遺跡でも確認されており、したがって、上田盆地から「坂城広谷」に至る地域では栗林式期の遺跡が見つかっていないだけという可能性も皆無ではない。いずれにせよ、中野市柳沢遺跡での青銅器埋納坑発見以来、青銅器に限らず、土器様式の意味するところや集落・墓域を含めた遺跡相互の関係、土器の広域編年等の見直し作業が急務である。

千曲川右岸地域では後期にならないと人々の生活痕跡は見いだせない。千曲川の沖積面の微高地上に立地する中町遺跡（坂城１-４新地遺跡）、百々目利遺跡（坂城１-３）、田町遺跡（坂城１-５）、塚田遺跡

（坂城１-７）などから後期箱清水式土器、扇状地上に保地遺跡（坂城３-１）、山間地に後期和平B遺跡がある。

千曲川左岸地域では、千曲市芝原遺跡や上田市の中の沢遺跡（上田321）などで変形工字文をモチーフにした土器群や条痕文系土器群が散見され、八王子山遺跡（千曲329）では長野市の松節遺跡と同様の土器群が出土しており注目される。中期後半では薬師堂遺跡（千曲401-１）や桜宮遺跡（千曲401-３）で集落跡が、後期になると、島遺跡（坂城46）・小野沢遺跡（坂城48）・力石西沖遺跡（千曲401-２）・御屋敷遺跡（千曲430）で集落跡が、堀之内遺跡（千曲438）で土器棺墓等が確認されている。

古墳時代　「坂城広谷」の開口部である善光寺平南部には千曲市森将軍塚古墳をはじめとした前方後円墳が築造されているが、「坂城広谷」にはそうした首長墓は見られず、５世紀代とされる右岸地域の仮称東平１号墳・２号墳（当センター調査）や竪穴式石室を持つといわれる左岸地域の天神山古墳（千曲421）が「坂城広谷」では最も古い古墳と把握される。前方後円墳等が築造されない「坂城広谷」でも、右岸地域では寺浦遺跡（坂城８-１）・込山E遺跡（坂城30-５立町遺跡）、左岸地域では御屋敷遺跡（千曲430）、中の沢遺跡（上田321）で、古墳時代初頭から４世紀代に至る集落跡が確認されている。中でも御屋敷遺跡は、弥生時代後期終末段階から５世紀代まで継続する集落遺跡であり、土器型式（様式）の変遷とともに社会構造の変革を捉える上で重要な遺跡である。その後も左岸地域では、５世紀代の集落遺跡として島遺跡（坂城46）があり、今回の上五明条里水田址（坂城78）の調査においても５世紀代・６世紀代の集落跡が検出された。

一方、この地域で確認されている古墳のほとんどは、横穴式石室を主体部とする後期古墳である。後期古墳は千曲川右岸・左岸地域とも千曲川に流れ込む中小河川ごとに古墳群として捉えられ、それぞれ集落遺跡との対応関係を想定し得る。ただ、千曲川右岸地域の千曲川氾濫原に立地する東裏遺跡（坂城１-１）などの集落遺跡に対応する古墳群が把握できない点や、祭祀遺跡として全国的にも注目を集めている青木下遺跡（坂城１-８）を社会空間の中でどのように位置付けていくか等、追求すべき課題は多く残っている。なお、千曲川左岸地域の古墳群には、上流部から上田市半過古墳群（清水下古墳―上田315、中の沢１号古墳―上田319ほか）、福沢古墳群五狭支群（坂城83）・福沢古墳群小野沢支群（坂城47）・出浦沢古墳群（坂城45）、千曲市釜屋古墳群（釜屋１号古墳―千曲444、観音林古墳―千曲446ほか）・新山古墳群（天神山古墳―千曲421、西山古墳―千曲413ほか）があり、福沢古墳群小野沢支群の御厨社古墳（坂城47-１）は千曲川水系最大の横穴式石室を持つ古墳として知られる。

古代　「坂城広谷」では千曲川を挟んで右岸地域が埴科郡、左岸地域が更科郡となり、今回調査を実施した二つの遺跡は更科郡村上郷に比定される範囲に位置している。右岸地域・左岸地域とも奈良・平安時代を通して集落遺跡や窯業遺跡が分布し、山上部に祭祀的な性格を持つことが推定される遺跡も右岸地域に坂城町和平A・C遺跡、左岸地域に籠岩遺跡（坂城76）がある等、総じて似通っている。ただ、右岸地域には郡内及び郡域を超えた瓦の流通ルートの中に位置づいている土井ノ入窯跡（坂城32）があり、仏教関連の遺跡として込山廃寺跡（坂城54）や北日名経塚（坂城40）といった遺跡があり、大きな相違点として捉えられる。今回の上五明条里水田址の調査で、地表下３～４ｍから10世紀代の集落が発見され、地中深くに眠っていて、いまだ発見されてない遺跡（施設）が幾つもあることが予想できる。調査課題の一つとしておきたい。なお村上郷は信濃国府や国分寺が造営された小県郡に接し、南方の山間部を東山道が通るという位置関係にある。したがって、通行ルートを千曲川沿いだけでなく、室賀峠を越えて東山道という通行ルートがあったことも想定しておく必要があり、東山道の開設は扇状地単位でまとまっていた空間構成を大きく打ち破るものであったと考えたい。その結果、上五明条里水田址で集落を営んでいた人々が、一般の古代集落ではみられない鉄鐸や鈴、八稜鏡、猿面硯等を入手することができたのではなかろうか。

中世　歴史の表舞台では「村上氏」が大活躍する時代であるが、考古学的資料からこの地域の様相を明らかにすることは困難である。遺跡においても城館跡が中心となるが、千曲川左岸地域では集落遺跡として登録されている遺跡もある。その他、製鉄遺跡として著名な坂城町開畝遺跡（坂城21）が千曲川右岸地域にある。また、千曲川右岸地域の日名沢川による扇状地上に蓬平経塚（坂城28）、観音平経塚（坂城55）があり、古代に属する北日名経塚（坂城40）もこの地域に立地する。社宮神経塚（坂城５）のみ、沖積面に面した扇状地上に立地している。

「坂城広谷」と称されるこの地域は、千曲川に流れ込む中小河川によってつくられた扇状地扇端部が千曲川の氾濫原が切るにとどまらず、千曲川から供給される土砂が扇状地や山裾を埋めていると考えられる。このことは、扇状地以外の場所、すなわち、氾濫原に面している山が、ちょうど海面に浮かぶ島のような状態に見え、山裾がないことからも想定される。こうした状況は、力石条里遺跡群・上五明条里水田址に近接する自在山（岩井堂山）が最も顕著である。今回の上五明条里水田址の調査で発見された６世紀代の馬形埴輪等は、自在山（岩井堂山）の千曲川に面した側の山裾近くに、形象埴輪をめぐらす古墳が築造され、それが千曲川が運んだ土砂によって埋没した可能性を示唆している。また、古代更科郡の村上郷を研究しようとする時、これまでは古代の遺跡数や発見されている竪穴住居跡の数が少なすぎて、ともすればそれが研究を進める上で支障となっていた。今回の力石バイパス建設に伴う二つの遺跡の発掘調査は、まだ見ぬ遺跡が数多く地中に眠っていることを代弁するものでもあり、その調査成果は遺跡個々にとどまらず、地域に波及していくものと考える。今後も、既存の資料群をベースに、再検討や再構築を繰り返して、地形的な制約や地域的・時代的特殊性を見出していく必要があり、地域史を見直していく時期にきていると考えられる。

周辺遺跡分布図 1：50,000

第 2 図　周辺遺跡分布図

第 2 表　周辺遺跡一覧

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	326	箭塚遺跡										祭祀跡
	327	西洞古窯址						○				窯跡
	328	若宮遺跡			○	○	○	○				集落跡
	329	八王子山遺跡			○	○	○	○				祭祀跡
	335	清雲寺遺跡							○			社寺跡
	336	上ノ平古墳				○						古墳
	337	上ノ平遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	351	若宮西遺跡			○	○	○	○				散布地
	352	佐良志奈神社遺跡				○	○	○	○			城館跡
	359	福井焼窯址								○		窯跡
	360	葛尾城跡							○			城館跡
	361	しょうば池遺跡							○			散布地
	401	力石条里遺跡群		○	○	○	○	○	○			水田跡他
	401-1	薬師堂遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	401-2	力石西沖遺跡			○	○		○	○			集落跡
	401-3	桜宮遺跡			○	○		○	○			集落跡
	402	出浦城跡							○			城館跡
	403	御局遺跡							○			散布地
	404	穴場遺跡		○								散布地
	405	荒神原遺跡		○	○			○				散布地
	406	荒神原古墳				○						古墳
	407	天坂遺跡						○	○			集落跡
	408	矢塚南古墳				○						古墳
	409	矢塚古墳				○						古墳
	410	寄合古墳				○						古墳
	411	寄合遺跡							○			城館跡
	412	西山遺跡		○		○		○				集落跡
	413	西山古墳				○						古墳
	414	三昧古墳				○						古墳
	415	堂前畑遺跡			○	○		○				集落跡
	416	清水古墳				○						古墳
	417	新山清水遺跡						○	○			集落跡
	418	三本木遺跡				○		○	○			散布地
	419	新山・宿遺跡				○		○	○			集落跡
	420	越道古墳				○						古墳
	421	天神山古墳				○						古墳
	422	越道山古墳				○						古墳

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	423	入山城跡							○			城館跡
	424	堤林遺跡						○	○			散布地
	425	新山山ノ神遺跡		○			○	○	○			集落跡
	426	富田入古墳				○						古墳
	427	姥塚古墳				○						古墳
	428	鍛冶在家遺跡					○	○				窯跡・散布地
	429	カロオケ遺跡				○		○	○			集落跡
	430	御屋敷遺跡		○	○	○	○	○	○			集落跡
	431	御屋敷 1 号古墳				○						古墳
	432	御屋敷 2 号古墳				○						古墳
	433	羽場遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	434	羽場 2 号古墳				○						古墳
	435	羽場 1 号古墳				○						古墳
	436	山伏塚古墳				○						古墳
	437	堀之内 1 号古墳				○						古墳
	438	堀之内遺跡				○	○	○	○			集落跡
	439	堀之内 2 号古墳				○						古墳
	440	牧ノ内遺跡				○	○	○	○			集落跡
	441	女涙坂古墳				○						古墳
	442	牧ノ内古墳				○						古墳
	443	釜屋遺跡		○	○	○	○	○	○			集落跡
	444	釜屋 1 号古墳				○						古墳
	445	釜屋 2 号古墳				○						古墳
	446	観音林古墳				○						古墳
	447	漆原遺跡						○	○			散布地
	448	原ノ前遺跡		○	○	○		○	○			散布地
	453	弥勤寺古墳				○						古墳
	454	四ッ塚古墳群				○						古墳
	455	弥勤寺遺跡				○	○	○				散布地
	456	堂上古墳				○						古墳
	457	富士塚古墳				○						古墳
	458	金毘羅山古墳				○						古墳
	459	東国寺裏古墳				○						古墳
	460	水上遺跡			○			○	○			集落跡
	461	水上 2 号古墳				○						古墳
	462	水上 1 号古墳				○						古墳
	463	藤木塚古墳				○						古墳

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
千曲市	464	丸山南古墳				○						古墳
	465	上山田丸山古墳				○						古墳
	466	宿遺跡			○	○	○	○	○			集落跡
	467	清水坂古墳				○						古墳
	468	上山田和合遺跡				○	○	○				集落跡
	469	新屋遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	470	上山田大門遺跡				○		○	○			集落跡
	471	城野腰遺跡			○	○	○	○	○			集落跡（居館跡）
	472	天神原古墳				○						古墳
	473	宮沢川古墳				○						古墳
	474	波閇科神社裏遺跡		○		○	○	○				散布地・祭祀跡
	477	城山裏古墳				○						古墳
	478	荒砥城跡							○			城館跡
	479	荒砥小城跡							○			城館跡
坂城町	1	南条遺跡群			○	○	○	○				集落跡
	1-1	東裏遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-2	御殿裏遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-3	百々目利遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-4	中町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-5	田町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-6	廻り目遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-7	塚田遺跡			○	○	○	○				集落跡
	1-8	青木下遺跡			○	○	○	○				水田跡・祭祀跡
	2	金井西遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	2-1	金井遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	2-2	社宮神遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	2-3	並木下遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3	金井東遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	3-1	保地遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-2	山金井遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-3	大木久保遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	3-4	酒玉遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	4	栗ヶ谷古墳				○						古墳
	5	社宮神経塚							○			経塚
	6	町横尾遺跡		○	○	○	○	○				散布地
	7	北畑古墳				○						古墳
	8	中ノ条遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
坂城町	8-1	寺浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-2	上町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	8-3	東町遺跡			○	○	○	○				集落跡
	8-4	北浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-5	宮上遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	8-6	北川原遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	9	南条塚穴古墳				○						古墳
	13	前原墳墓群							○	○		墳墓
	14	御堂川古墳群山口支群				○						古墳
	19	御堂川古墳群山田支群				○						古墳
	20	豊饒堂遺跡		○	○							集落跡
	21	開畝遺跡			○	○	○	○				集落跡
	22	人塚古墳										古墳
	23	四ッ屋遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	24	戌久保遺跡				○	○	○				集落跡
	25	入田遺跡					○	○				散布地
	26	塚内古墳				○						古墳
	27	金毘羅山遺跡		○	○	○	○	○				散布地
	28	蓬平経塚							○			経塚
	29	岡の原窯跡						○				窯跡
	30	込山遺跡群		○	○	○	○	○				集落跡
	30-1	込山Ａ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-2	込山Ｂ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-3	込山Ｃ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-4	込山Ｄ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	30-5	込山Ｅ遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	31	日名沢遺跡群			○	○	○	○				集落跡
	31-1	日名沢遺跡			○	○	○	○				集落跡
	31-2	丸山遺跡			○	○	○	○				集落跡
	32	土井ノ入窯跡					○	○				窯跡
	33	平林遺跡		○								散布地
	34	垣外窯跡						○				窯跡
	37	金毘羅山古墳				○						古墳
	38	村上氏館跡							○			城館跡
	40	北日名経塚							○			経塚
	41	北日名塚穴古墳群				○						古墳
	41-1	北日名塚穴１号墳				○						古墳

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
坂城町	41-2	北日名塚穴 2 号墳				○						古墳
	42	梅ノ木遺跡		○								散布地
	43	栗田窯跡					○					窯跡
	44	葛尾城跡							○			城館跡
	45	出浦沢古墳群				○						古墳
	45-1	出浦支群 1 号墳				○						古墳
	45-2	出浦支群 2 号墳				○						古墳
	45-3	出浦支群 3 号墳				○						古墳
	45-4	出浦支群 4 号墳				○						古墳
	45-5	出浦支群 5 号墳				○						古墳
	45-6	島支群 1 号墳				○						古墳
	45-7	島支群 2 号墳				○						古墳
	46	島遺跡			○	○	○	○				集落跡
	47	福沢古墳群				○						古墳
	47-1	小野沢支群 1 号墳				○						古墳（御厨社古墳）
	47-2	小野沢支群 2 号墳				○						古墳
	47-3	小野沢支群 3 号墳				○						古墳（ヤックラ古墳）
	47-4	小野沢支群 4 号墳				○						古墳
	48	小野沢遺跡			○	○	○	○				集落跡
	49	福沢古墳群越堂支群				○						古墳
	50	福泉寺裏古墳				○						古墳
	51	狐落城跡							○			城館跡
	52	三水城跡							○			城館跡
	53	開畝製鉄遺跡							○			製鉄跡
	54	込山廃寺跡							○			寺院跡
	55	観音平経塚							○			経塚
	56	栗田小鍛冶跡							○			製鉄跡
	57	塩之原遺跡					○	○				集落跡
	58	南日名遺跡			○	○	○	○				集落跡
	59	葛尾城根小屋跡							○			城館跡
	60	姫城跡							○			城館跡
	61	坂木代官所跡								○		屋敷跡
	62	田町遺跡群				○	○	○				散布地
	63	御所沢墳墓群							○			墳墓
	66	砥沢古墳				○						古墳
	67	中ノ条代官所跡								○		屋敷跡

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
坂城町	69	観音坂城跡							○			城館跡
	70	南鯉の川遺跡					○	○	○			散布地・寺院跡
	71	口留番所跡								○		屋敷跡
	72	和合城跡							○			城館跡
	76	籠岩遺跡						○				散布地
	77	出浦城跡							○			城館跡
	78	上五明条里水田址						○	○	○		水田址
	79	出浦遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	80	村上氏館跡							○			城館跡
	81	福沢氏居館跡							○			城館跡
	82	小野沢窯跡					○	○				窯跡
	83	福沢古墳群				○						古墳
	83-1	五狭支群 1 号墳				○						古墳
	83-2	五狭支群 2 号墳				○						古墳
	83-3	五狭支群 3 号墳				○						古墳
	84	荒宿遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	85	網掛原遺跡		○	○	○	○	○				集落跡
	86	祭祀跡						○				祭祀跡
	87	島黄銅鉱採掘跡									○	採掘跡
	88	島マンガン鉱採掘跡									○	採掘跡
	89	上平黄銅鉱採掘跡									○	採掘跡
	90	横吹北国街道跡								○		街道跡
上田市	312	下半過山遺跡		○								包蔵地
	313	清水下遺跡			○	○	○	○				包蔵地
	314	清水下窯跡						○				窯跡
	315	清水下古墳				○						古墳
	316	影通古墳				○						古墳
	317	北沢古墳				○						古墳
	318	堂の入遺跡					○	○	○			包蔵地
	319	中の沢 1 号墳				○						古墳
	320	中の沢 2 号墳				○						古墳
	321	中の沢遺跡						○				包蔵地
	322	中の沢 3 号墳				○						古墳
	323	前沢古墳				○						古墳
	349	塚田古墳				○						古墳
	350	三ツ頭遺跡		○								包蔵地

市町村	番号	遺跡名	時代時期								種別
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近代	
上田市	351	中畑遺跡						○				包蔵地
	352	山脇遺跡						○				包蔵地
	353	片山遺跡		○								包蔵地
	354	鷹野遺跡		○								包蔵地
	355	宮原遺跡		○								包蔵地
	356	藤庄遺跡			○							包蔵地
	357	中島遺跡						○				包蔵地
	358	上洞遺跡						○				包蔵地
	359	五位塚古墳				○						古墳
	422	和合城跡								○		城跡
	425	小泉城跡								○		城跡
	426	伊勢崎城跡								○		城跡
	427	跡部城跡								○		城跡
	428	笹洞城跡								○		城跡
	429	原畑城跡								○		城跡

第３節　基本層序

層序は調査地区の壁面の土層観察により概略を把握し、本格整理作業時に層序を確定した。本遺跡の基本層序と遺構検出面を、地区ごとに対比できるように柱状概念図で表した（第３図）。分層は以下の通りである。なお、柱状概念図には、各時代の遺構検出面も合わせて表記した（１平安後期以降、２平安後期、３平安前期、４弥生後期～古墳時代）。

Ⅰ層　道路造成工事・駐車場造成などによる造成土・砕石。

Ⅱ層　現・旧耕作土。中世以降、現代までの連続した水田耕作による堆積と思われる。

Ⅱ´層　旧耕作土。基本的にⅡ層と同じ。

Ⅲ層　黒褐色砂層10YR3/2。洪水に起因すると思われる砂（Ⅳ層）が土壌化した層である。平安時代後期の包含層である。

Ⅲ´層　暗褐色10YR3/3～にぶい黄褐色10YR4/3土層。平安時代後期の包含層だが、洪水砂に由来しない。

Ⅳ層　褐色砂層10YR4/1。洪水に起因する砂が堆積した層である。

Ⅴ層　灰黄褐色土層10YR5/2。平安時代前期に相当すると思われる水田層である。

Ⅴ´層　黄褐色10YR5/8～灰黄褐色10YR4/2土層。平安時代前期に相当すると思われる層である。

Ⅵ層　黄褐色10YR5/6～灰黄褐色10YR4/2土層。

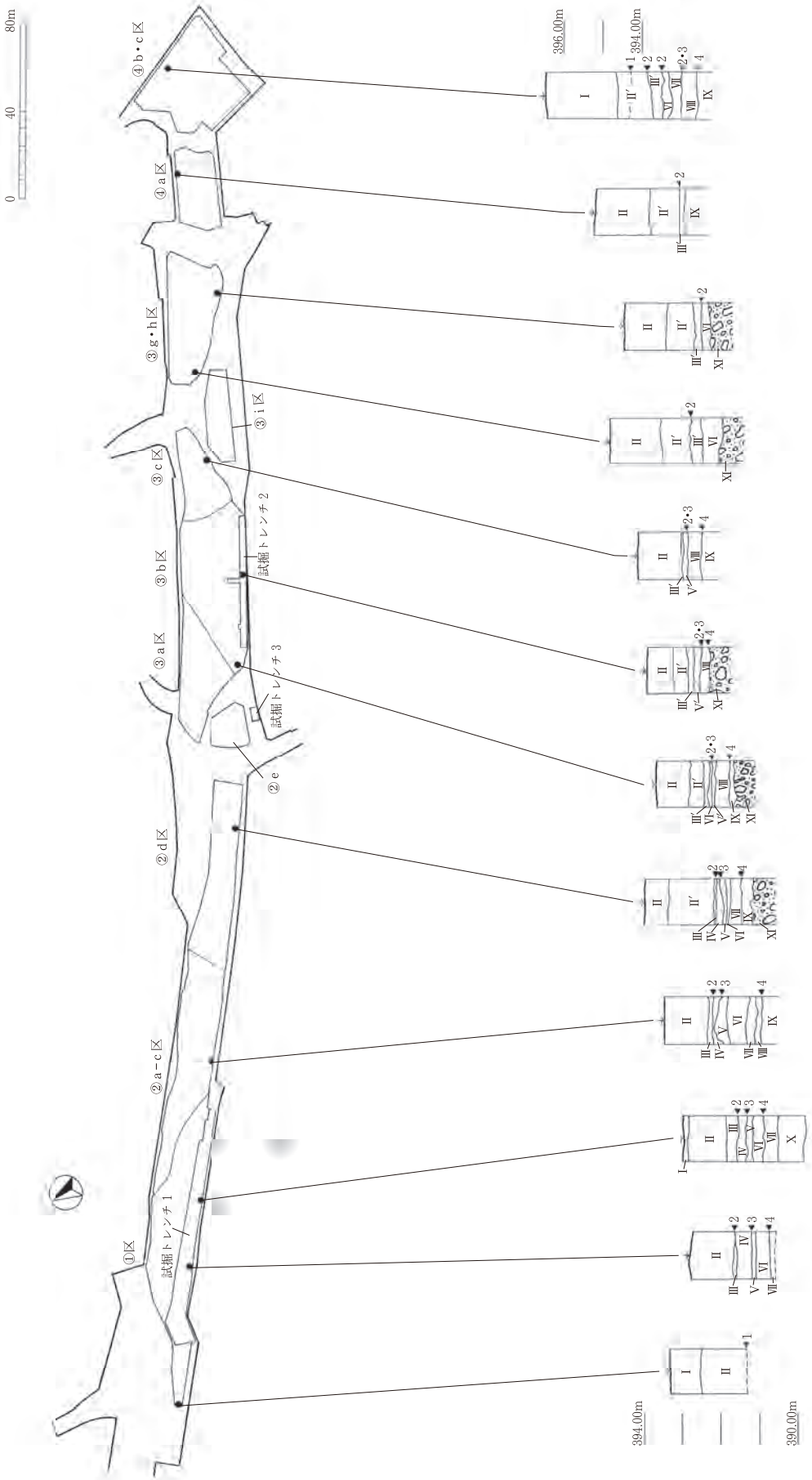
Ⅶ層　褐色10YR4/4～暗褐色10YR3/3土層。

Ⅷ層　暗褐色10YR3/4～黒褐色10YR2/3土層。古墳時代の包含層である。

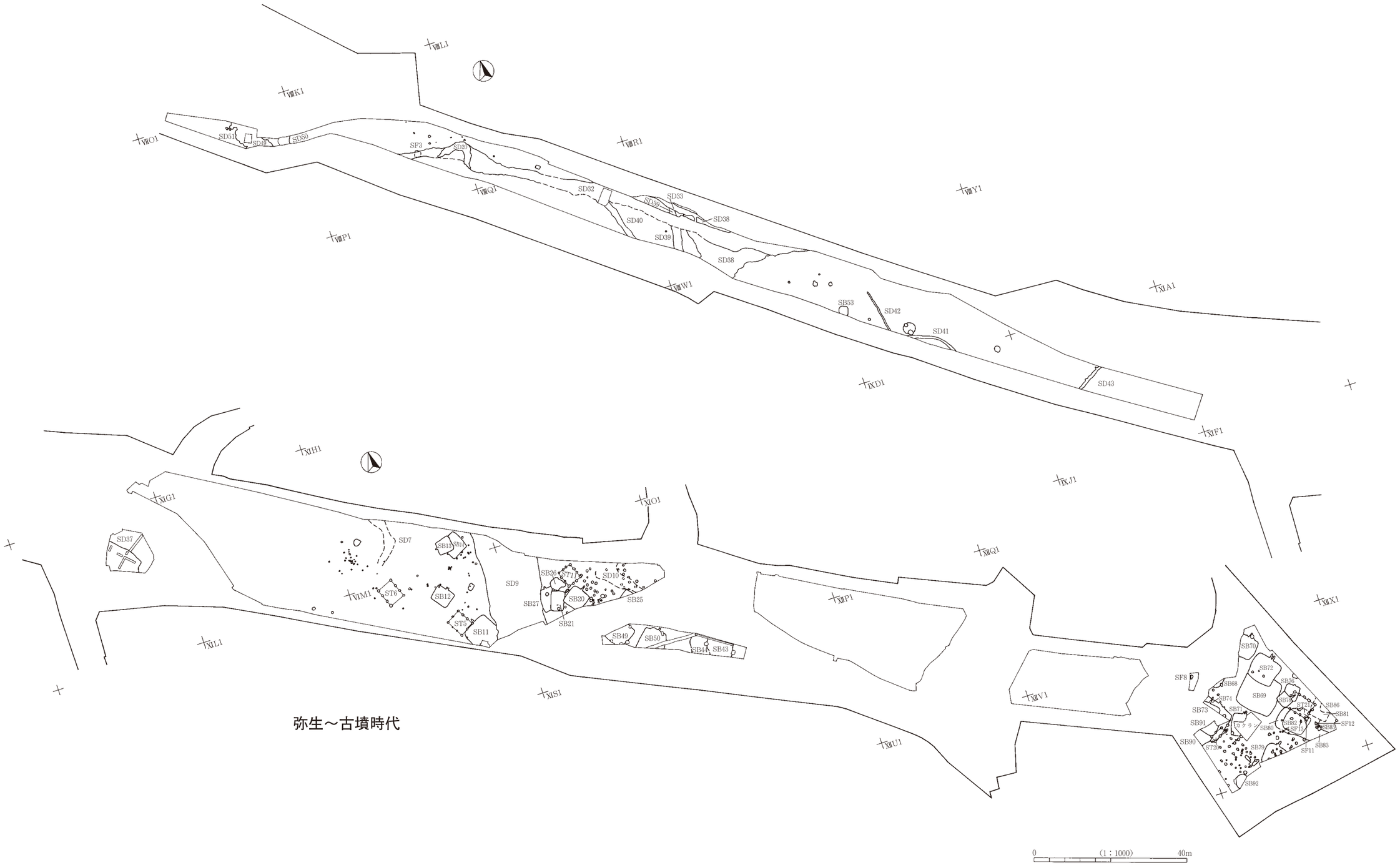
Ⅸ層　にぶい黄褐色10YR4/3～暗褐色10YR3/4土層。砂質。

Ⅹ層　灰黄褐色土層10YR4/2。

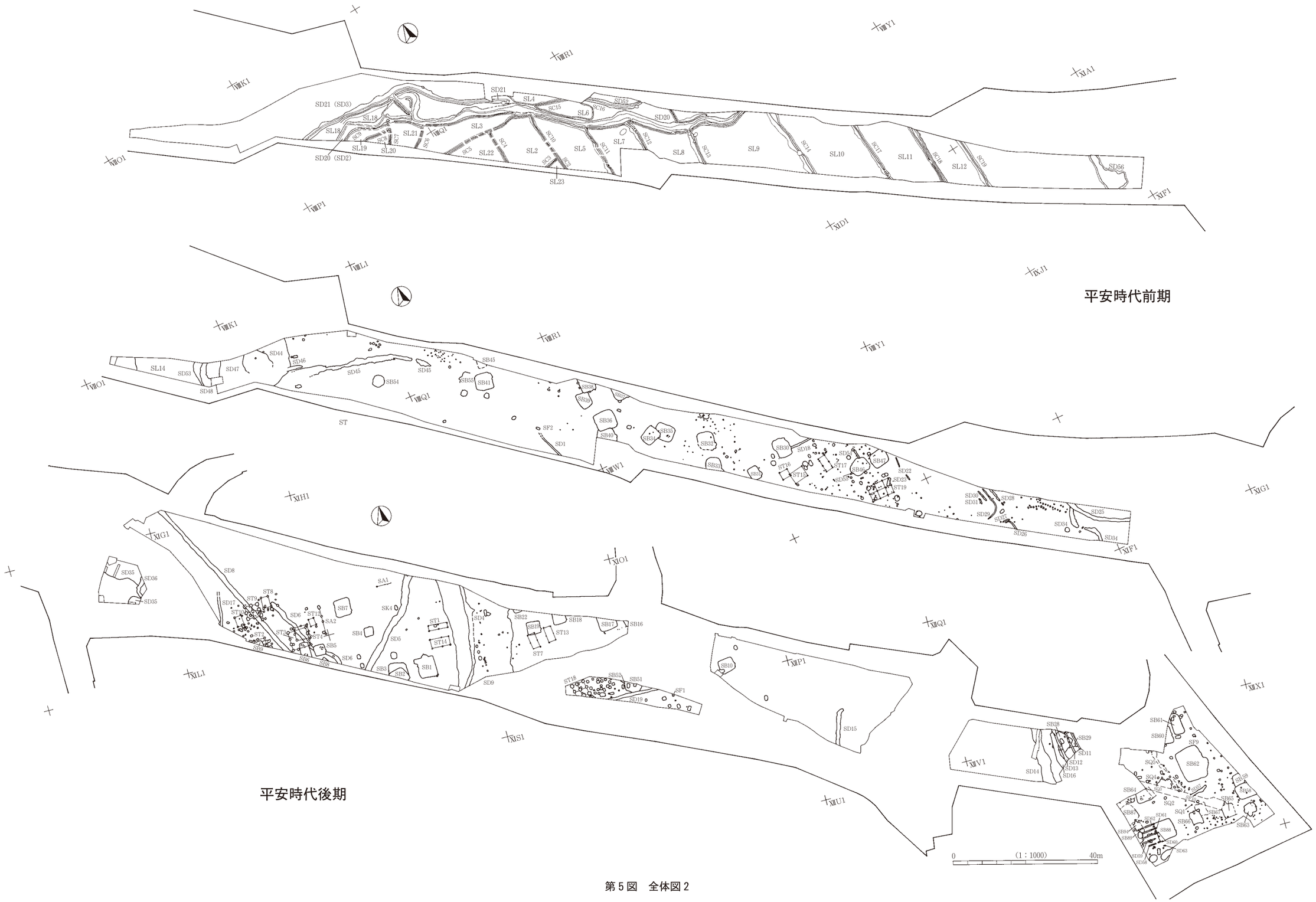
Ⅺ層　礫層。


0
40
80m
④b・c区
④a区
③g・h区
③i区
③c区
③b区
③a区
試掘トレンチ2
試掘トレンチ3
②e
②d区
②a－c区
試掘トレンチ1
①区
396.00m
394.00m
390.00m

第３図　土層図

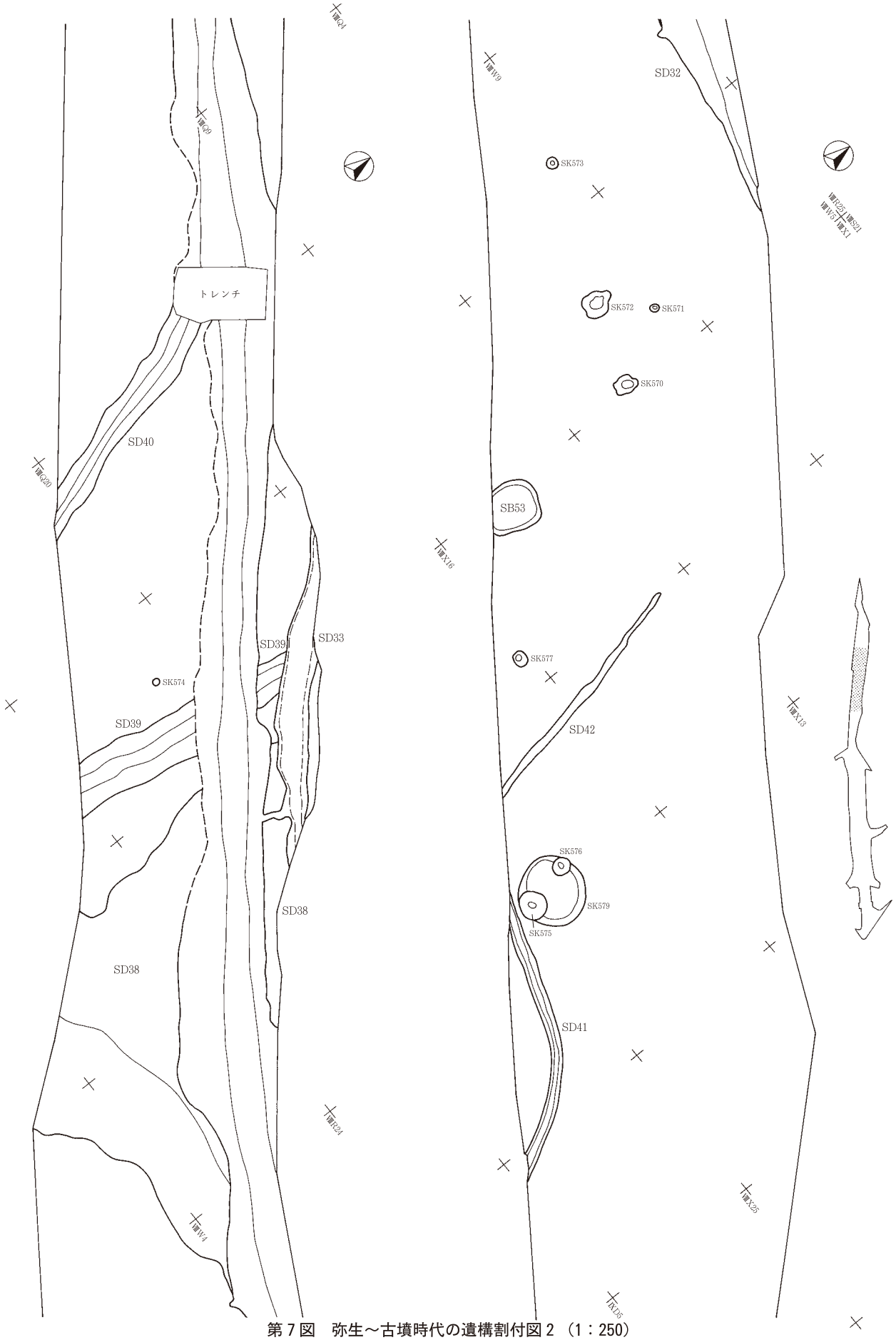

弥生～古墳時代
SD51
SD49
SD50
SF3
SD30
SD32
SD33
SD29
SD38
SD40
SD39
SD38
SB53
SD42
SD41
SD43
SD37
SD7
SB13
SB12
SD9
SB26
ST11
SD10
SB20
SB25
SB27
SB21
ST5
SB11
SB49
SB50
SB44
SB43
ST6
SB70
SB72
SB68
SB69
SB74
SB73
SB71
SB91
SB90
ST20
SB79
SB80
SB82
SF13
SB85
SB86
SB81
SF12
SB83
SF11
SB92
SF8
0
(1：1000)
40m

第４図　全体図１

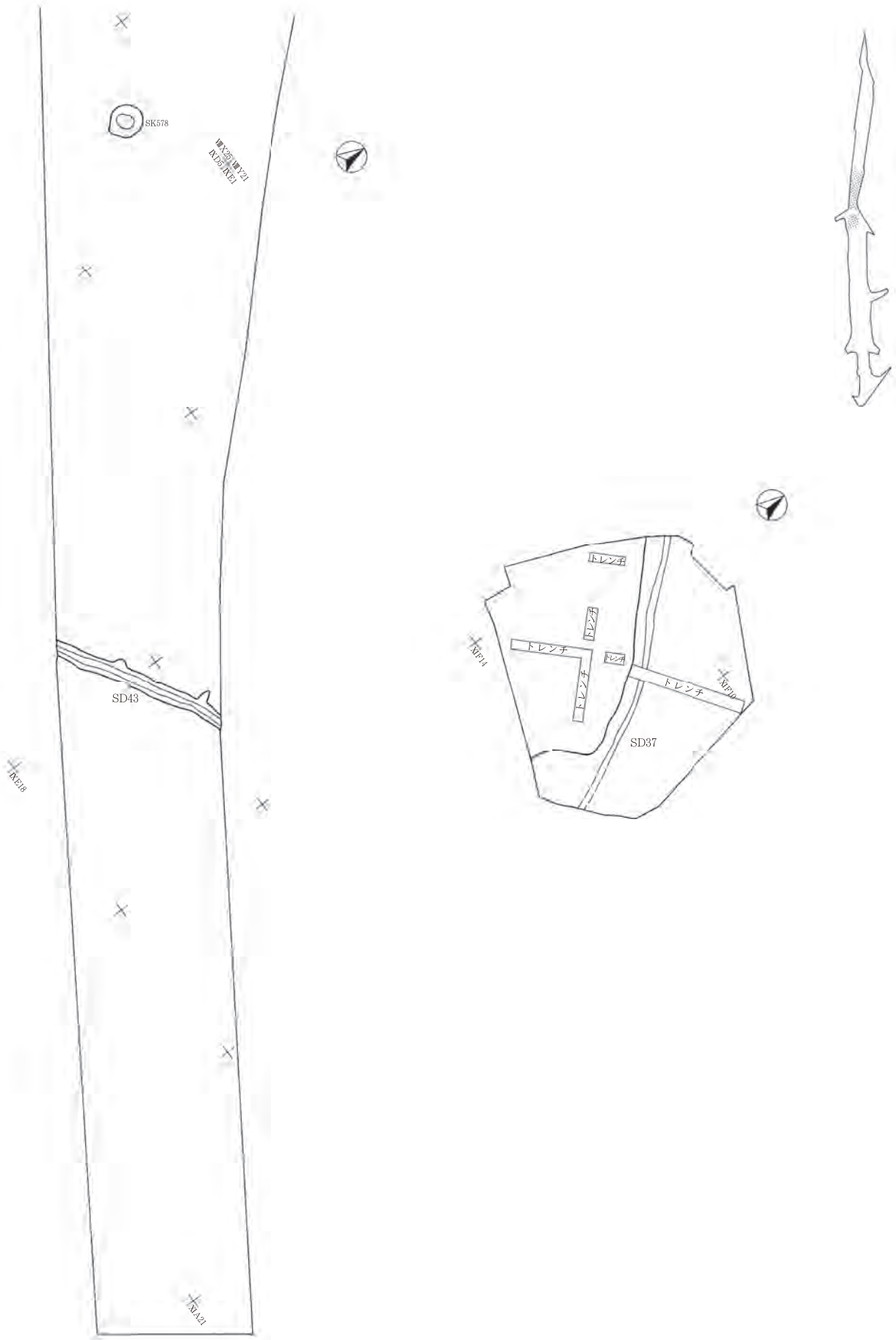


第５図　全体図２

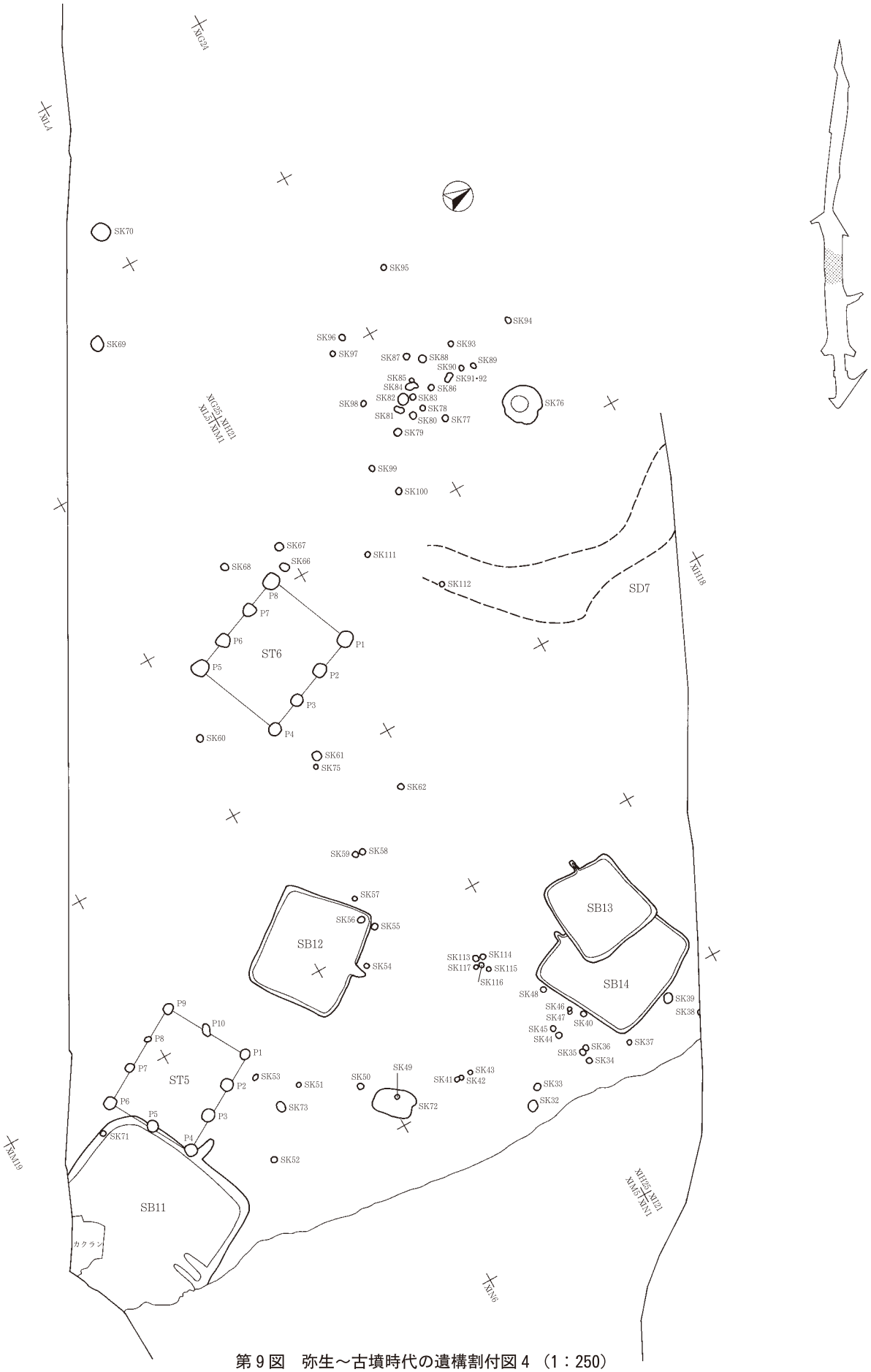
第６図　弥生～古墳時代の遺構割付図１（1：250）



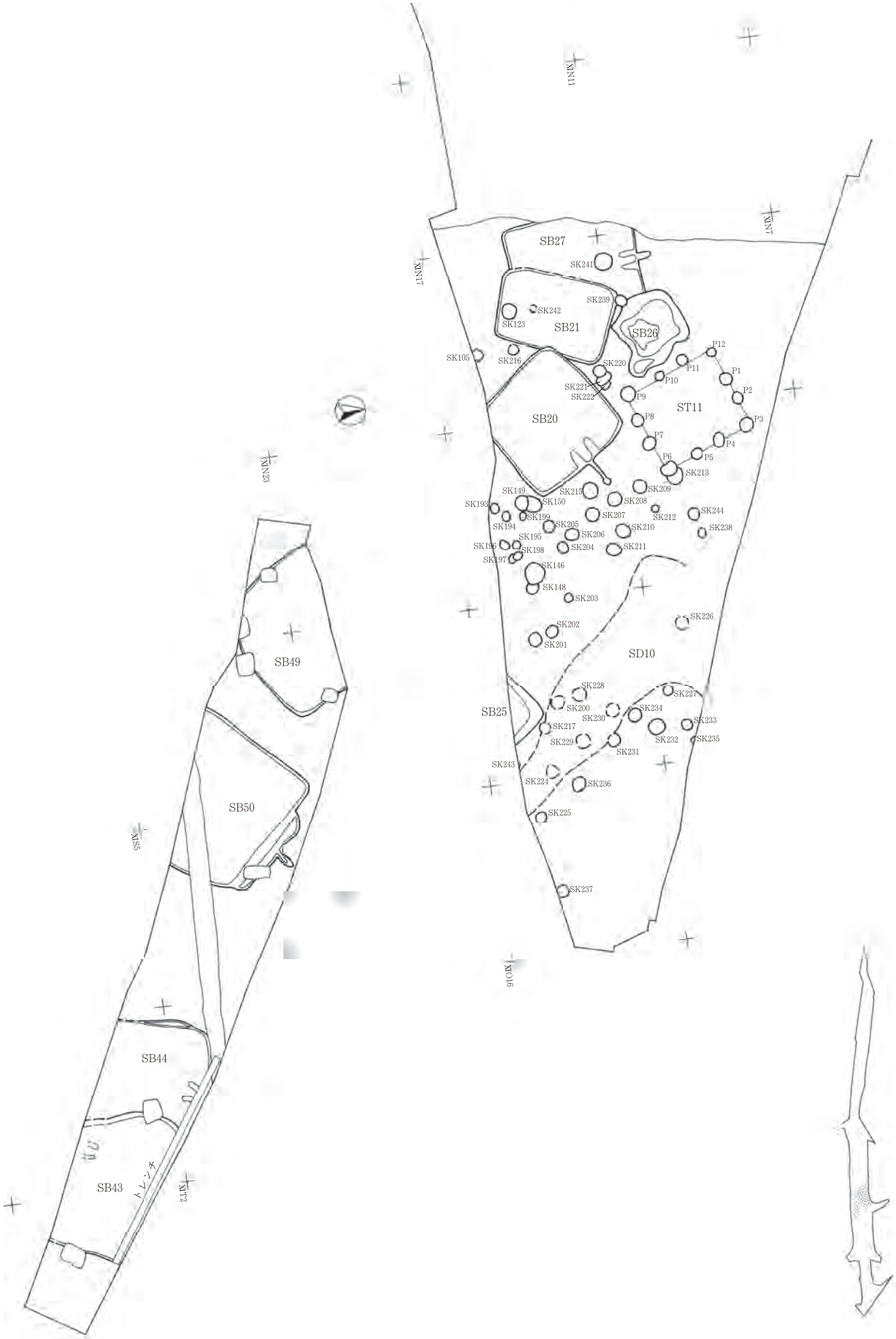
第７図　弥生～古墳時代の遺構割付図２（1：250）



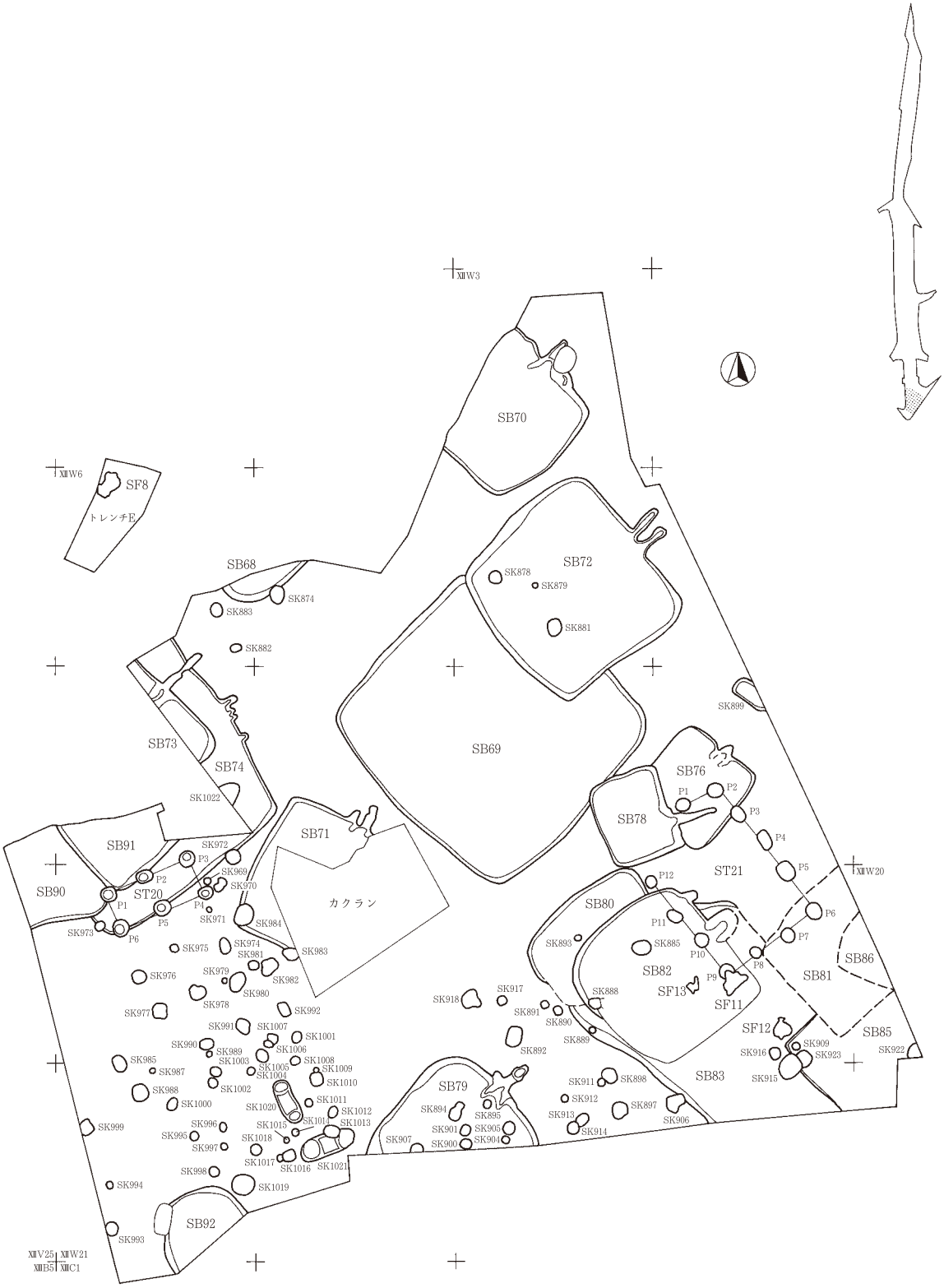
第８図　弥生～古墳時代の遺構割付図３（1：250）



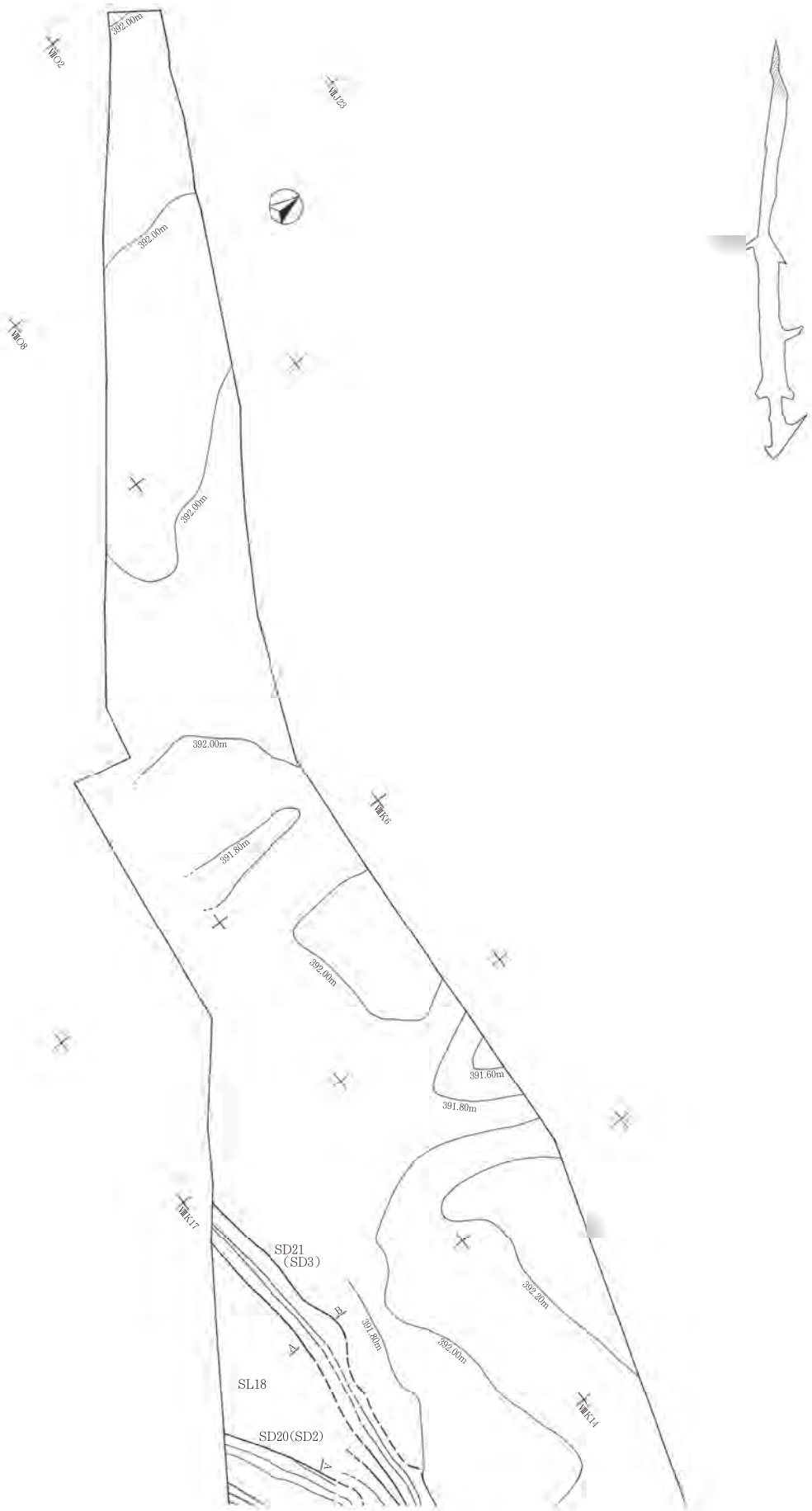
第９図　弥生～古墳時代の遺構割付図４（1：250）



第10図　弥生～古墳時代の遺構割付図５（1：250）



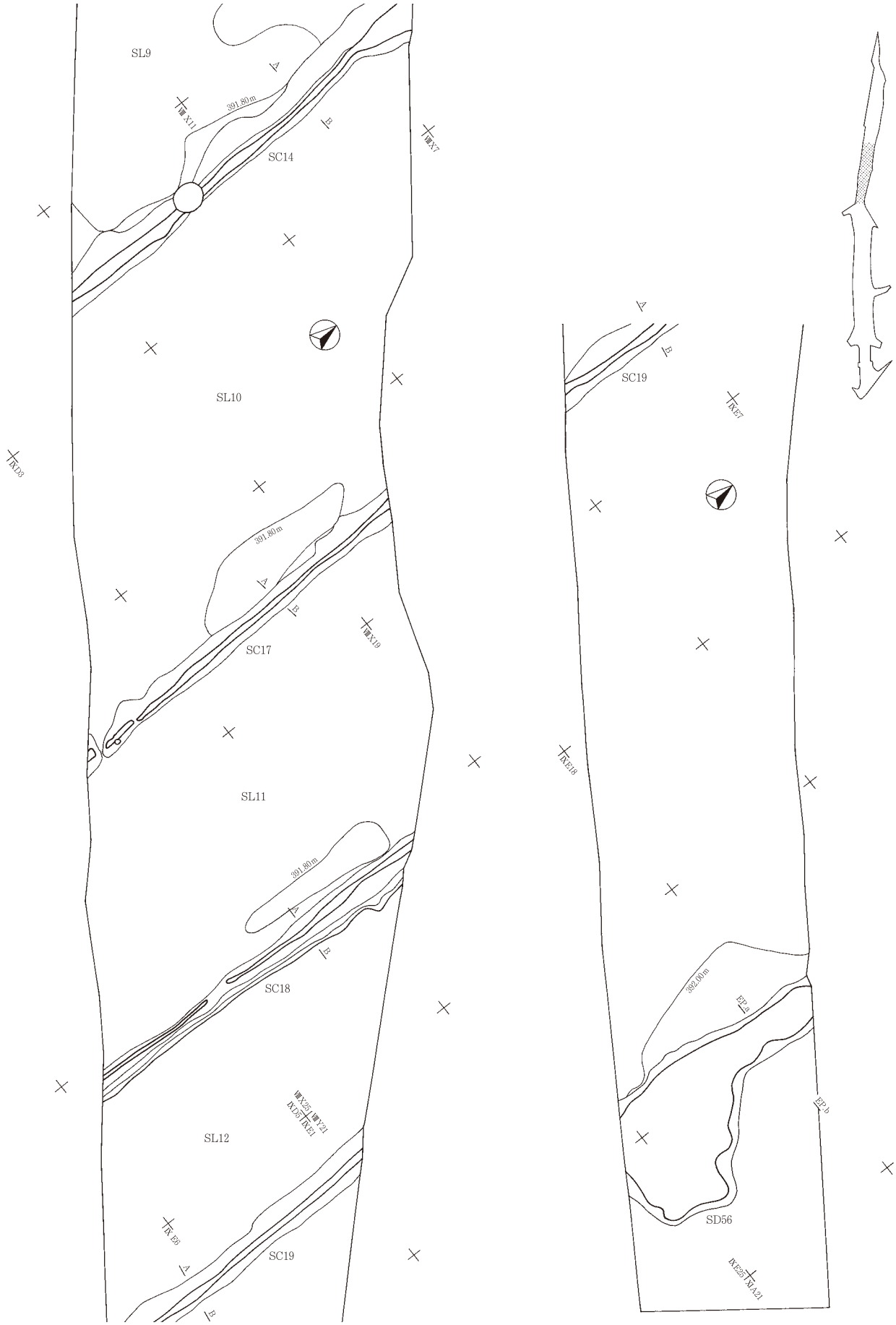
第11図　弥生～古墳時代の遺構割付図６（1：250）



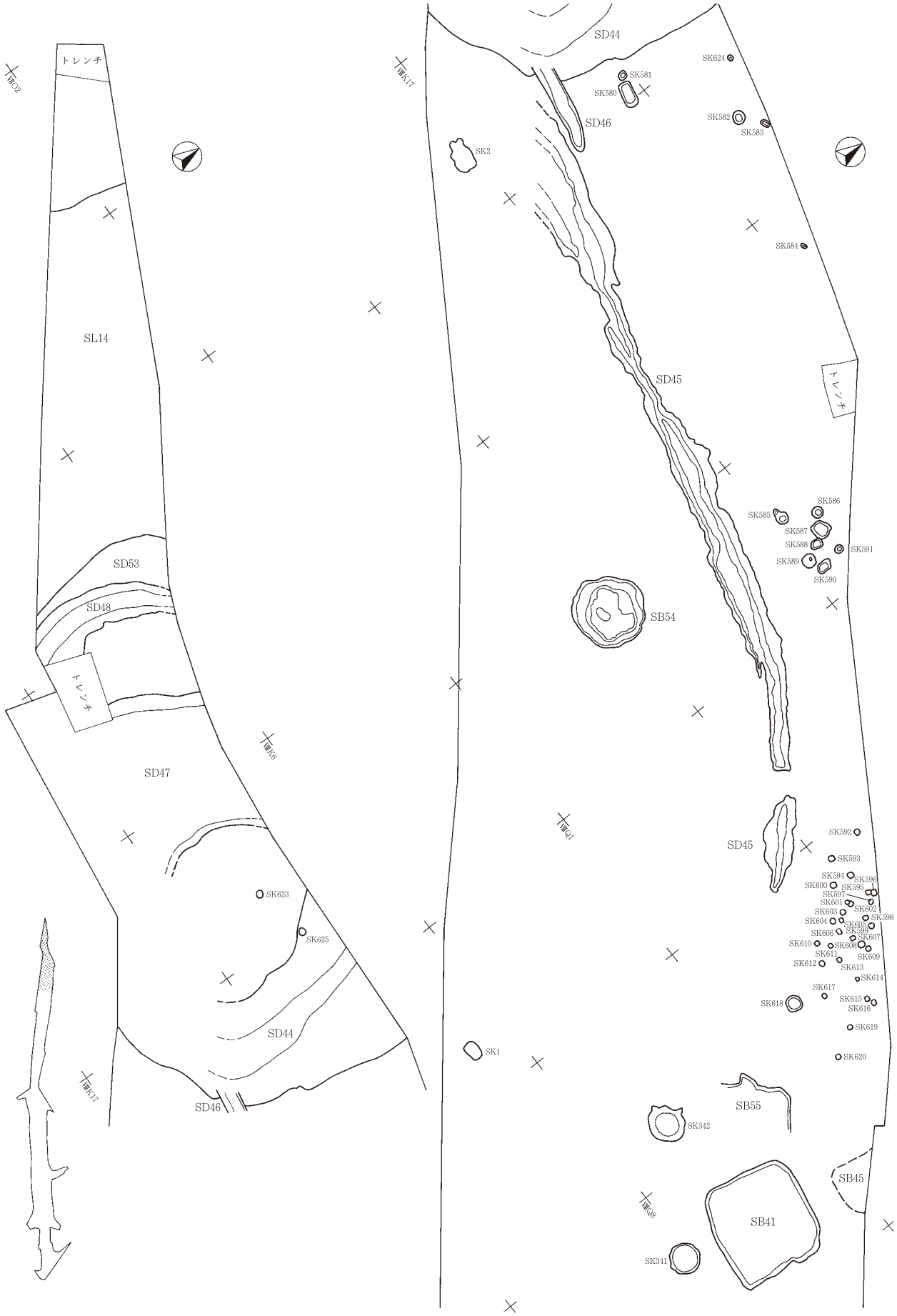
第12図　平安時代前期水田図１（1：250）

第13図　平安時代前期水田図２（1：250）

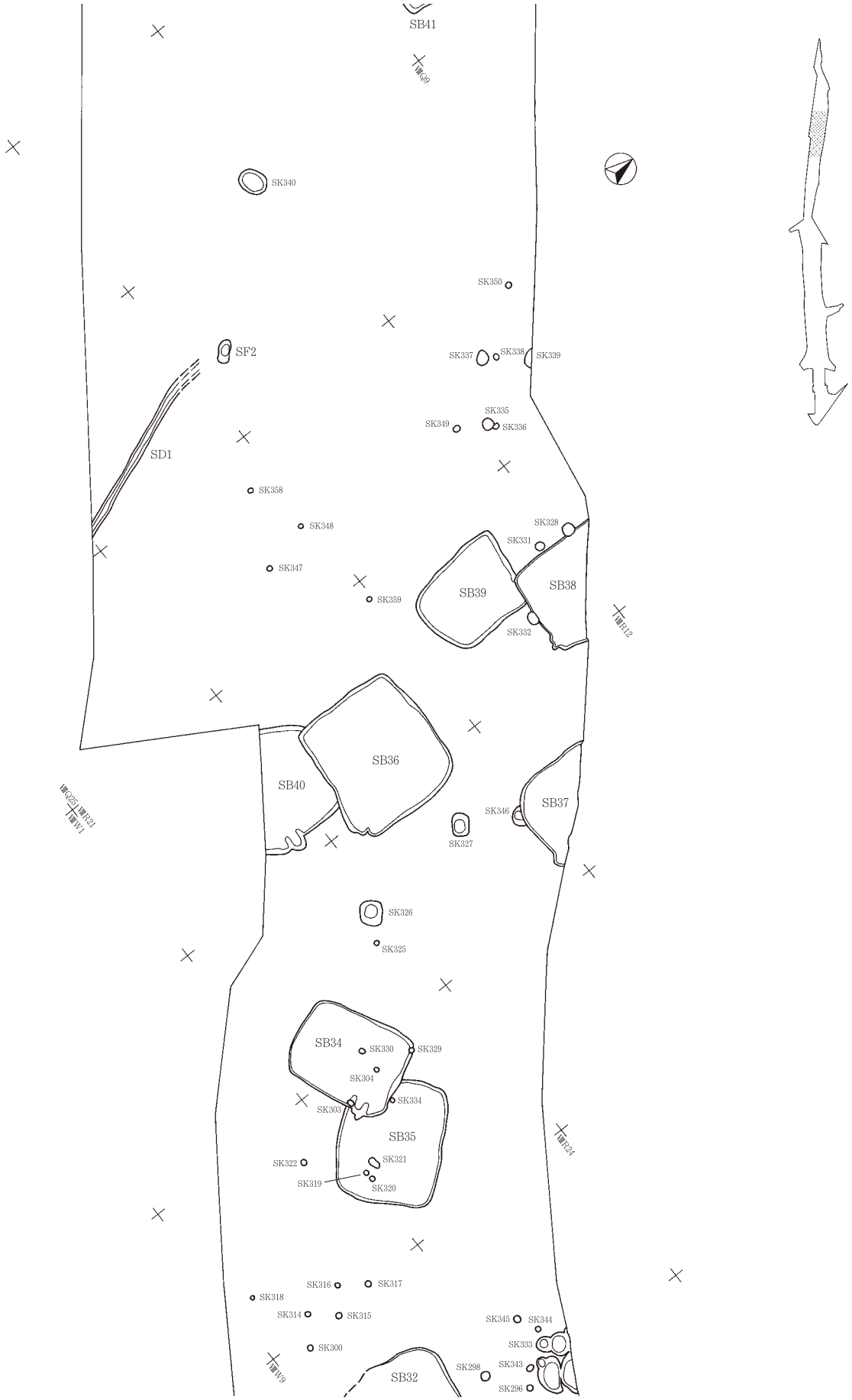
第14図　平安時代前期水田図３（1：250）



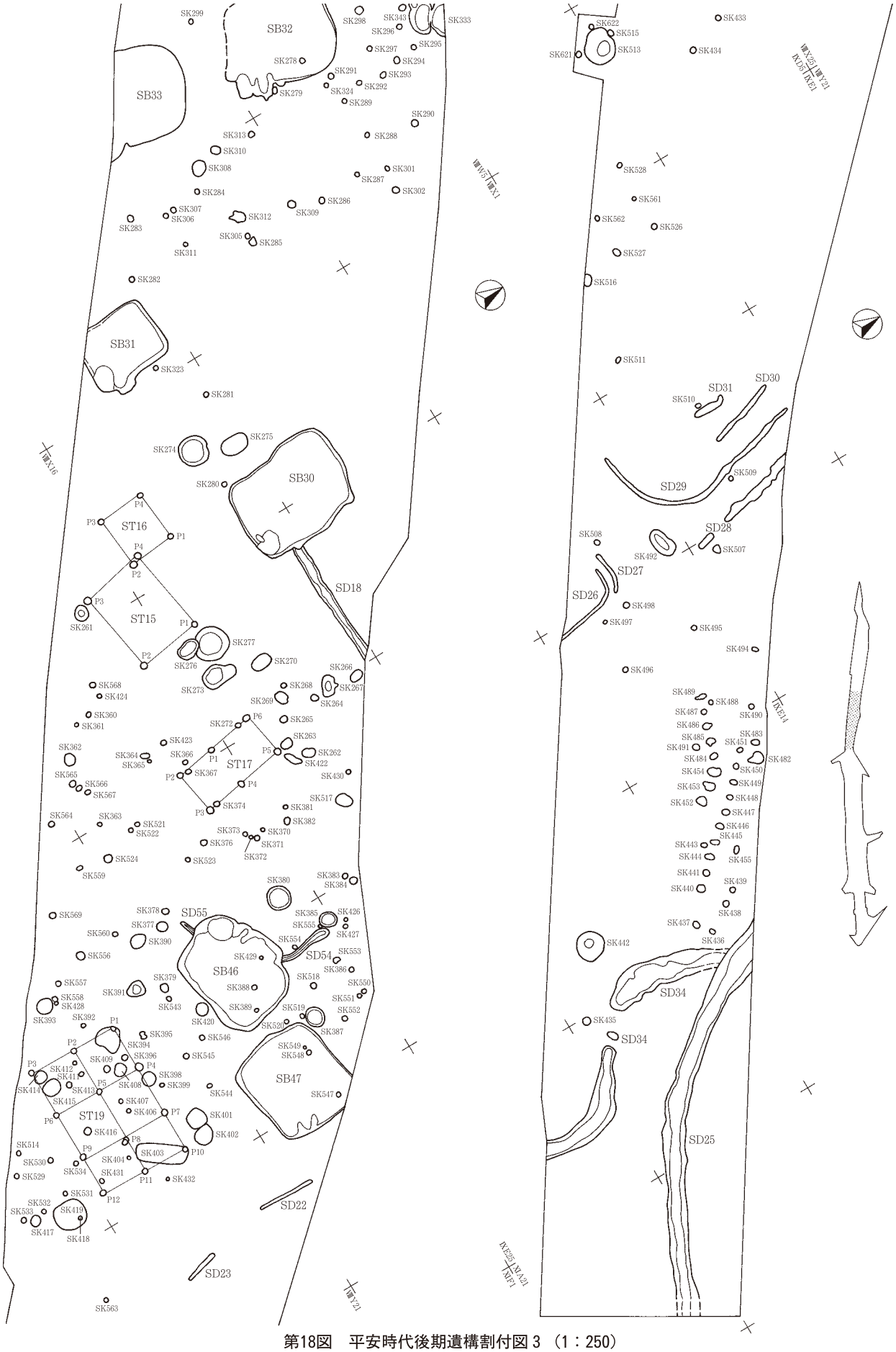
第15図　平安時代前期水田図４（1：250）



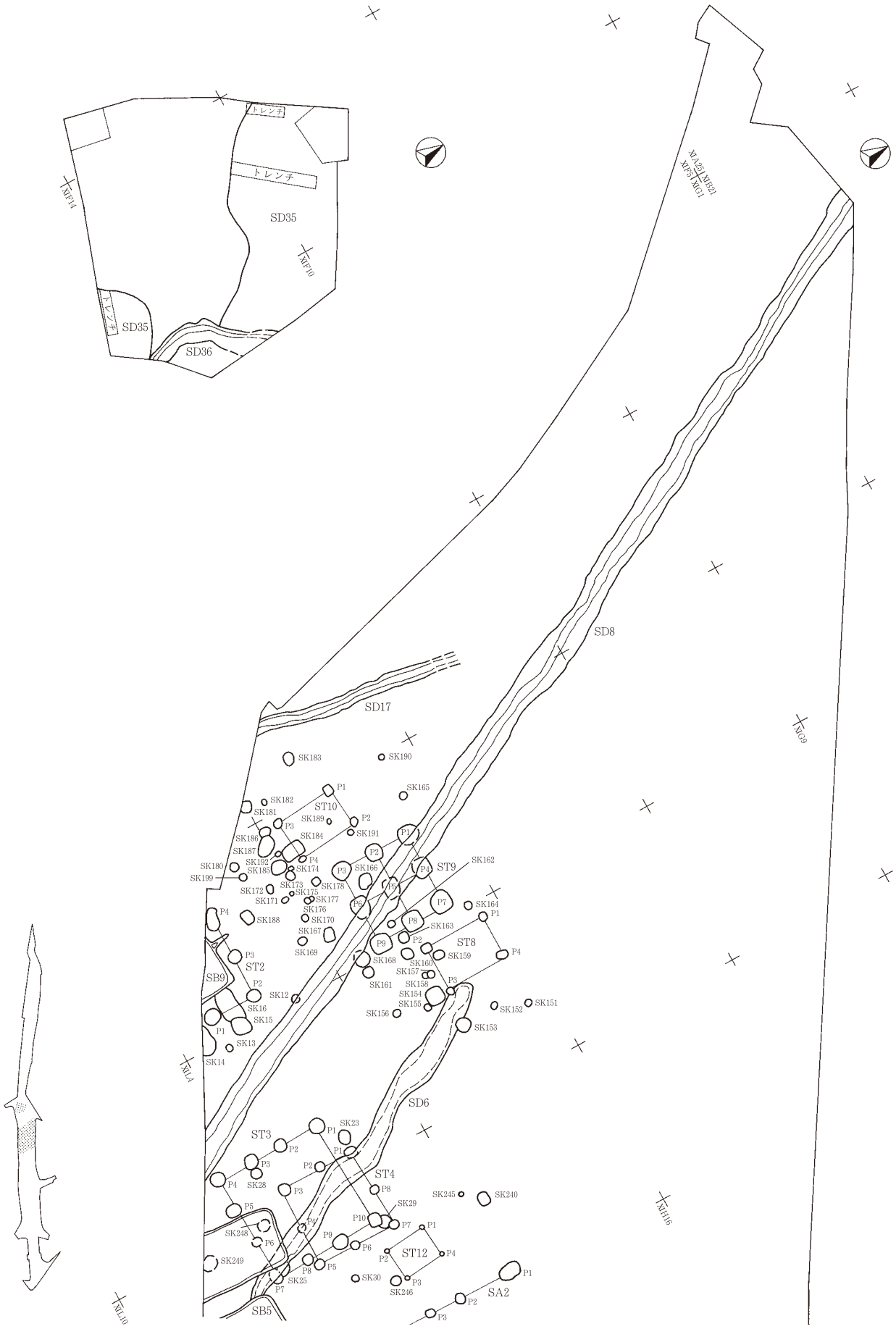
第16図　平安時代後期遺構割付図１（1：250）



第17図　平安時代後期遺構割付図２（1：250）



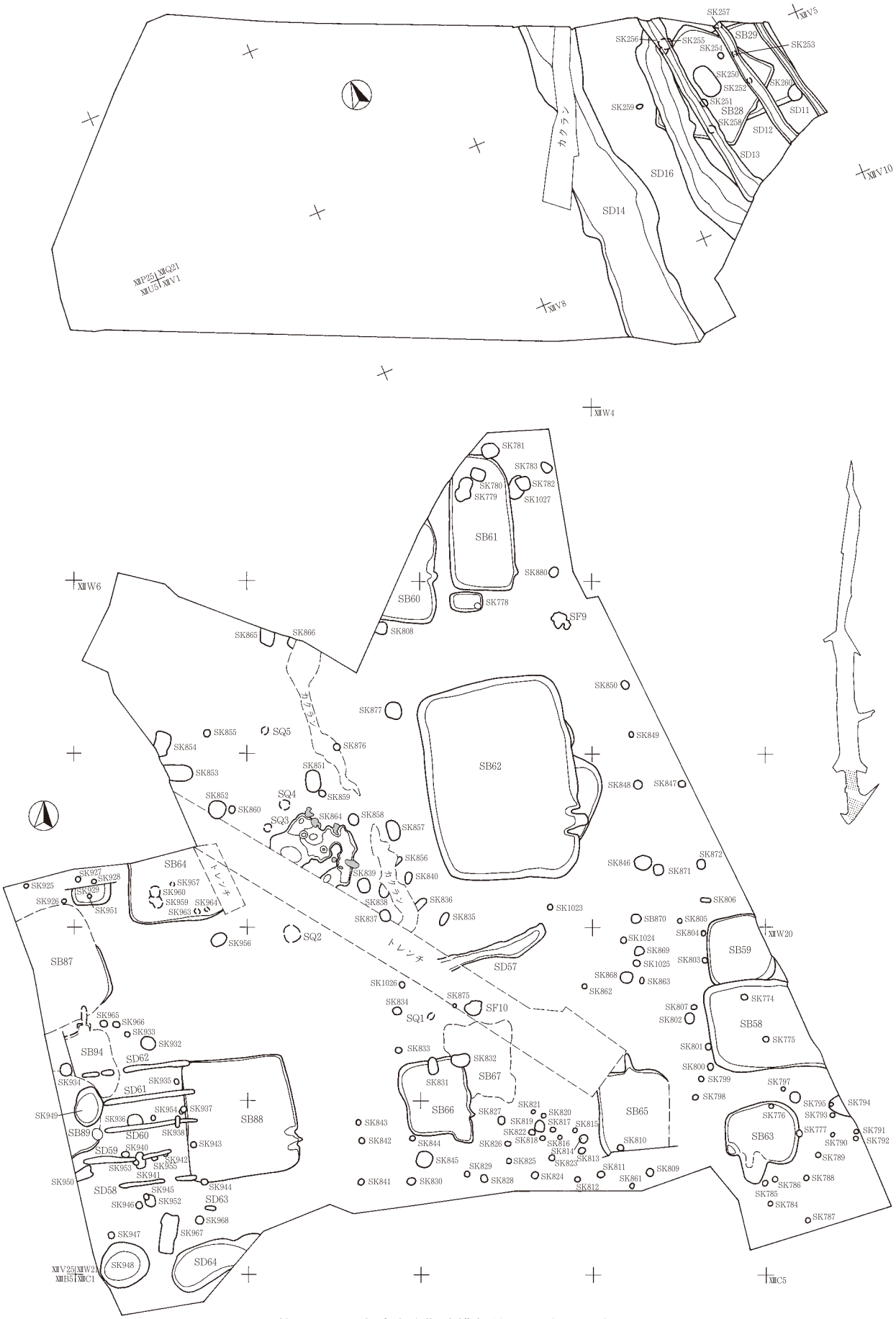
第18図　平安時代後期遺構割付図３（1：250）



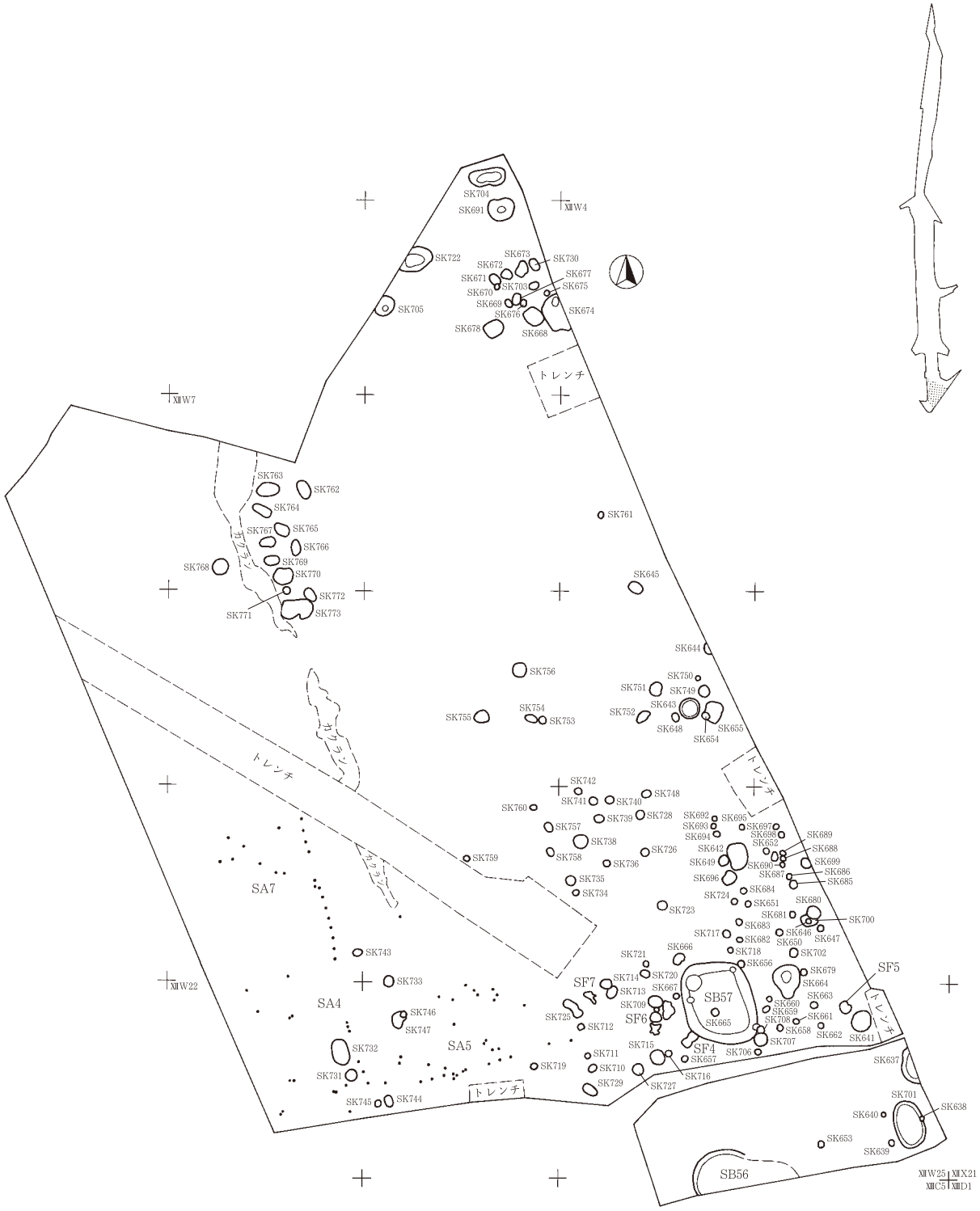
第19図　平安時代後期遺構割付図４（1：250）

第20図　平安時代後期遺構割付図５（1：250）

第21図　平安時代後期遺構割付図６（1：250）



第22図　平安時代後期遺構割付図７（1：250）



第23図　平安時代後期遺構割付図８（1：250）

第３章　遺構と遺物

第１節　弥生時代後期

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は、Ⅸ層上面で検出された遺構で弥生時代後期に属する遺構である。明確にこの時期に属する遺構は、②区の竪穴住居跡１軒である。他の地区では土器片が少量出土している。

２　竪穴住居跡

SB53（第24図、PL１・19）：②区　ⅧW15　ⅧX11

遺構：Ⅷ層を剥いで検出した。十字に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。南側が調査区外になるが、約230㎝×260㎝の隅丸長方形を呈すると思われる。壁は床面から緩やかに立ち上がり、壁高は約30㎝を測る。床面は中央部分のみやや堅く叩き締められているが、他ははっきりしない。不整形な地床炉を持つ。柱穴は不明である。

遺物：箱清水式土器の壺の頸部から胴部にかけての破片が、炉の上から出土している。壺は口縁部および胴下半部を欠損しているが、頸部文様帯には２条１組の垂下文によりＴ字文が施され、横走する直線文の最下位は簾状文となる。口縁部内外面と胴部が赤彩される。

第２節　古墳時代後期

１　遺構概観

本項で掲載した遺構は、Ⅸ層上面で検出された遺構で古墳時代後期に属する。竪穴住居跡・掘立柱建物跡などを確認し、土器が多く出土したのは、③ｂ・ｃ・ｉ、④ｂ・ｃ区である。竪穴住居跡は、５世紀後半と６世紀後半の２時期に分かれる。５世紀後半の竪穴住居跡は主に③ｂ・ｃ区、６世紀の竪穴住居跡は③ｃ・④ｂ・ｃ区に分布する。①・②・③ａ区では溝跡や土坑などと土器片の出土がみられる。③ｇ・ｈ区と④ａ区はトレンチによる断面精査の結果、古墳時代に相当する層を確認しなかったため、面的調査を実施していない。出土土器の器種分類は、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12-長野市内10-榎田遺跡』に基づいて行った。

２　竪穴住居跡

SB11（第25～28図、PL１・20）：③ｂ区　ⅪM9・14・15・19

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。ST5に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。南側と南西隅が調査区外、南東がSD9に切られているが、一辺800㎝前後の隅丸方形か隅丸長方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は48㎝を測る。炭化物が広がり、やや硬化している面を床とした。カマドは東壁ほぼ中央に位置すると思われ、北から76°東に振れる。袖の長さ約160㎝、袖の外縁での幅約100㎝・内縁での幅約45㎝を測る。袖は粘土で構築され、袖内部・火床ともよく焼けている。また、袖先には石が残存している。この石の内側にはカマドをふさぐように大きな楕円形の礫があった。煙道は、カマド内部からSD9の壁面まで延びて

いるのを確認した。このカマドとは別に北壁に煙道が１本伸びており、カマドの作り替えが行われたと思われる。柱穴と考えられるのはピット１・７・10であるが、柱痕跡は確認できなかった。また柱穴と考えられるピット以外に、床面から溝状の遺構・土坑が検出されている。周辺の同時期の竪穴住居跡と比べ大形であり、特にカマドの大きさは顕著である。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の丸木材の樹種同定を行ったが、木材組織が明瞭でなかったため樹種は判明しなかった。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した丸木材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、529-604calAD（72.8%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：14・15・16・19・20・21はカマドから出土している。１～６は土師器坏３・５・６は内面を黒色処理している。７は須恵器坏身である。８～10は土師器鉢、11・12・14・15は土師器高坏、13・16・17は土師器壺、18は土師器甑、19～22は土師器甕である。23は初期須恵器の甕である。24は砂岩製の砥石でカマド付近から出土している。この他に石製模造品と思われる片岩製の勾玉・紡錘車（第66図２・３、PL23）が出土している。遺構の年代は、出土土器の様相から５世紀後半と思われる。^{14}C年代測定では６世紀前半～７世紀初めという結果であったが、測定試料は埋土出土なので土器より新しい年代を示したと思われる。

SB12（第29図、PL１）：③ｂ区　XIM3・４・８・９

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。514㎝×440㎝のやや不整な隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は34㎝を測る。中央部とカマド右側の床面近くでは拳～人頭大の円礫が集中している。南隅付近から東にかけてとカマド左側には礫層の堆積がみられ、この直上では灰色粘性土の貼床を確認した。灰色粘性土は２～３㎝の厚さだが、カマド左側の厚い箇所では10㎝を測る。カマドは北東壁のほぼ中央に位置し、北から50°東に振れる。構造は不明。割れた礫がカマド前面で出土したが、そのうち６点が接合した。意図的に割ってカマド周辺に廃棄した可能性が考えられる。ピット１～４が柱穴と考えられる。

遺物：１・２は土師器坏で１は内面を黒色処理している。３は土師器鉢、４は土師器高坏、５は土師器壺、６は土師器甕である。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられる。

SB13（第30・31図、PL１）：③ｂ区　XIH24

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB14を切る。SB13・14は非常に似た埋土だが、SB14のほうが黄色味を帯びるということで分層した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い関係・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。416㎝×400㎝の隅丸方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は25㎝を測る。炭化物が広がりやや硬い面を床とした。SB14とのレベル差はない。カマドは西壁中央よりやや北寄りに位置し、北から100°西に振れる。構造は不明。割れた礫がカマド前面で出土したが、これら礫と本址から出土した他の礫、さらにSB14から出土した礫が接合した。意図的に割ってカマド周辺に廃棄した可能性が考えられる。ピットは２基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

遺物：１・２は土師器坏、３は須恵器高坏の坏部、４は須恵器甕の口縁部である。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられる。

SB14（第30・31図、PL１・21）：③ｂ区　XIH24・25

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB13に切られる。SB13・14は非常に似た埋土だが、本址のほうが黄色味を帯びるということで分層した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い関係・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。558㎝×532㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は30㎝を測る。炭化物が広がりやや硬い面を床とした。SB13とのレベル差はない。カマドは西壁中央よりやや南寄りに位置し、北から105°西に振れる。構造は不明。カマド左側に小さな円礫が集中していた。ピットは６基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。
分析：骨　埋土からシカの歯が出土した。
分析：年代測定　竪穴埋土から出土した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、337-535calAD（95.4%）である。分析の詳しい結果は、付属CDに収録したので参照されたい。
遺物：１～６は土師器坏である。５は底部にヘラ書きで「×」が記され、６は内面を黒色処理している。７～９は土師器甕、10は土師器高坏の脚部、11は須恵器高坏の坏部で把手がついている。12は砂岩製の砥石でピット５から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられ、^{14}C年代測定の結果とも相違しない。

SB20（第32・33図、PL２・21）：③ｃ区　XIN8・12・13
遺構：Ⅷ層を剥いで検出。平面精査でSB21を切ることを確認した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。南隅が調査区外になるが536㎝×535㎝の方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は45㎝を測る。炭化物・円礫が広がる面を床とした。一部には貼床が確認できた。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、北から56°東に振れる。規模は小さいが、SB11と同じ粘土袖の先に礫があるカマドである。煙道先の煙出口には礫が数点出土している。カマド内部からは13の土師器小形甕と４の土師器坏形土器が重なった状態で出土しており、支脚として利用したと考えられる。柱穴はピット３・８・９・11と考えられる。なお、柱穴以外のピットは本址と重複していた掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。
遺物：カマド左側に土器が集中する。１～７は土師器坏である。８は鉢、10は土師器壺、９・12・13は土師器甕、11は須恵器甕、14は須恵器提瓶である。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB21（第34・35図）：③ｃ区　IXN７・12
遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB20に切られることを平面精査で、SB27を切ることをサブトレンチによる断面精査で確認した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。535㎝×364㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40㎝を測る。カマドは南西壁のほぼ中央に位置し、北から157°西に振れる。構造は不明で、支脚石と火床が検出されただけである。柱穴はピット１～４と考えられる。
分析：骨　埋土からシカの歯とイノシシの歯が出土した。
遺物：１・２は土師器坏、３は須恵器坏身、４は須恵器甑であろうか。５・６は土師器甕、７は土師器甑である。この他に滑石製の臼玉が１点埋土から出土した（第66図20、PL23-20）。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられる。

SB26（第36図、PL２）：③ｂ区　XIN7
遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB19に切られ、SB27を切っている。十字設定したベルトに沿った方向に先行

トレンチを入れたが、遺物・円礫が多く掘り下げが困難であったため、ベルトを残して遺構を掘り下げた。380㎝×355㎝の不整形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は40㎝を測る。埋土は他の遺構と比べ粘性が強い。形状より竪穴住居とは考え難く、土器や礫などがの多量に出土することから、祭祀または廃棄の場所であった可能性が考えられる。

分析：種子同定　竪穴埋土出土の炭化種子を種子同定し、モモ核と判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の種子同定を実施した炭化種子の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、425-540calAD（95.4%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１～７は土師器坏で、４・５は内面を黒色処理している。８は土師器鉢で内面を黒色処理している。９・14は土師器甕、15は土師器甑、13は須恵器短頸壺である。10・11・12はミニチュア土器である。この他に滑石製の臼玉が１点埋土から出土した（第66図13、PL23-13）。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられ、^{14}C年代測定の結果とも相違しない。

SB27（第34・35図、PL１）：③ｃ区　XIN6・７・11・12

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB21・SD9に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。612㎝×598㎝の隅丸方形を呈する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40㎝を測る。カマドは北壁のほぼ中央に位置し、北から９°西に振れる。規模は小さいが、SB11と似た構造のカマドである。ただし袖は砂質土で構築し、大きな楕円形の礫は火床の上に置かれている。ピットは６基検出されたが、柱穴と考えられるのはピット６だけである。ピット４・５はカマド袖石の抜取り痕と思われる。

分析：骨　埋土から焼けた鳥の骨が出土した。

遺物：１・２は土師器坏、３～５は土師器鉢で５は内面を黒色処理している。６・７は土師器甕である。この他にカマド右の土器片の下から滑石製の臼玉が10点（第66図１～10、PL23-１～10）、西壁際の床面近くから２点（第66図11・12、PL23-11・12）出土した。遺構の年代は出土土器の様相から５世紀後半と考えられる。

SB43（第37・38図、PL21）：③ｉ区　XIT1・２

遺構：Ⅷ層中で検出。SK353・356に切られるのを平面精査で、SB44を切ることを断面観察で確認した。北壁際と十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の半分近くが調査区外になるため、形状は不明。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30㎝を測る。やや硬く広がる面を床とした。カマドは南壁の中央やや西寄りに位置していると思われるが、全体の形状が不明なのではっきりしない。石を芯材にして粘土を貼りつけて構築されていたと考えられるが、半分以上が調査区外である。ピットは３基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

分析：骨　埋土からイノシシの切歯が出土した。

遺物：埋土より多量の土器が出土している。１～13は土師器坏で、１・２・７・10・13は内面を黒色処理している。14は土師器短頸壺で内外面をよく磨いて黒色処理している。18は土師器高坏、19は土師器壺、20は土師器甕である。15～17は須恵器で、15は坏蓋、16は坏身、17は高坏坏部である。21は安山岩製の敲石、22は砂岩製の砥石である。この他に滑石製の臼玉が１点（第66図23、PL23-23）カマド内から、土器片を丸く加工した土製品が３点（第66図２～４）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６

世紀後半と考えられる。

SB44（第37・38図、PL２）：③ｉ区　XIO21　XIT1

遺構：Ⅷ層中で検出。SK356に切られるのを平面精査で、SB43に切られることを断面観察で確認した。北壁際と十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の半分以上が調査区外になるため、形状は不明。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は34㎝を測る。一部硬い面があるところを床とした。カマドは北壁の中央やや西寄りに位置していると思われるが、全体の形状が不明なのではっきりしない。石を芯材にして粘土を貼りつけて構築されていたと考えられるが、壊されている。カマド内には東西に並んで２個の支脚石が残る。ピットは確認できなかった。

遺物：１・２は土師器坏で内面を黒色処理している。３は土師器壺である。４～６は須恵器で、４は蓋、５は壺胴部、６は甕であろうか。この他に滑石製の臼玉が１点（第66図21、PL23-21）、土器片を丸く加工した土製品が１点（第66図１）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB49（第39図、PL２）：③ｉ区　XIN18・19・23・24

遺構：Ⅷ層中で検出。ST18、SK471・479～481・503～505に切られるのを平面精査で確認した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の半分以上が調査区外になるため、形状は不明。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は18㎝を測る。一部硬い面があるところを床とした。カマドは東壁の中央やや北寄りに位置していると思われるが、火床が残っているだけである。南西壁際でも床面に焼土が検出され、カマドの作り替えの可能性も考えられる。ピットは１基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

遺物：１は土師器鉢、２は土師器坏で、１・２とも内面を黒色処理している。３は土師器高坏脚部、４は土師器甕である。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB50（第40図、PL２）：③ｉ区　XIN24・25

遺構：Ⅷ層中で検出。SD19、SK458～466・474・499～502に切られるのを平面精査で確認した。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の一部が調査区外になるため、形状は不明だが方形を呈すると思われる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30㎝を測る。一部硬い面があるところを床とした。カマドは北壁のほぼ中央に位置し、北から44°東に振れる。袖は、石を芯材にして粘土を貼りつけて構築されていたと考えられるが、粘土部分は残っていない。石の芯材が残存するのは東側の袖だけである。カマド内には東西に並んで２個の芯材が残るが、西側は石、東側は土師器高坏の脚部を使用している。調査当初はカマド部分が突出する形状と考えていたが、床面の高さやカマド西側袖の芯材が残存しないため、２軒の竪穴住居跡が切り合っていた可能性も考えられる。ピットは３基検出され、柱穴と考えられる。

分析：骨　カマド内から焼けたシカ末節骨が出土した。

遺物：１は土師器坏で内面を黒色処理している。３は土師器高坏、５は土師器壺で内面を黒色処理している。６は土師器甕でカマド南東の床面付近から胴下半部を欠いた状態で逆位に置かれた状態で出土した。２・４はミニチュア土器である。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB69（第44図、PL２）：④ｂ区　XⅡW7・８・12・13・18

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB72・78に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。1458㎝×1400㎝の隅丸方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は38㎝を測る。カマド・ピットは確認できなかった。

遺物：１・２は土師器坏で、１は内面を黒色処理している。５～７は土師器甕、８はミニチュア土器、３は須恵器坏蓋、４は須恵器高坏脚部で透かしがある。この他に滑石製の臼玉が２点（第66図26・27、PL23-26・27）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB70（第41・42図、PL３）：④ｂ区　XⅡW2・３・８

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SK1027に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の一部が調査区外になるため、形状は不明だが隅丸方形か隅丸長方形を呈すると思われる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は48㎝を測る。カマドは北東壁のほぼ中央に位置すると思われ、北から40°東に振れる。西側袖と煙道が残存する。

分析：骨　イノシシの中手骨、ウマの中手骨か中足骨、シカ・イノシシの歯が出土した。

遺物：１・２は土師器坏、３・４は鉢、５・６は土師器高坏、７・11は土師器甕、８はミニチュア土器、９は須恵器坏身、10は須恵器壺である。この他に滑石製の臼玉が２点（第66図24・25、PL23-24・25）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB72（第43・44図、PL３）：④ｂ区　XⅡW3・８・９・13

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB69のトレンチ調査時に確認。SK881に切られ、SB69を切る。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。1044㎝×990㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は44㎝を測る。カマドは２基検出され、どちらも北東壁のほぼ中央に位置し、北から48°東に振れる。火床・煙道が残るだけで形状は不明。ピットは５基検出し、柱穴は１～４と考えられる。ピット１では断面で柱痕跡を確認した。図示してないが、竪穴住居跡中央よりやや南西から南西壁にかけて炭と焼土が広がっているのを確認している。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材を、樹種同定し、コナラ属コナラ節であることが判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１～４は土師器坏で、１～３は内面を黒色処理、２は底面にヘラ書きがある。６・７はミニチュア土器と思われる。５は須恵器坏、８は土師器高坏、９・10は土師器甕である。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB76（第45・46図、PL３・22）：④ｂ区　XⅡW13・14

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB78・ST21に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。残りが悪いが隅丸方形を呈すると思われる。壁高は38㎝を測る。カマドは北東壁ほぼ中央に位置し、北から42°東に振れる。袖の一部・火床・煙道が残存する。ピットは４基検出したが、ピット３は掘り込みが確認できなかった。ピット２は柱痕跡が確認でき柱穴と考えられるが、ピット１・４は柱穴と確認できなかった。

遺物：１・２は土師器坏で２は内面を黒色処理している。３は土師器鉢、４・５は土師器甕である。この他に滑石製の臼玉が２点（第66図16・17、PL23-16・17）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB78（第45・46図、PL３）：④ｂ区　XⅡW13・14

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB76を切る。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。385㎝×325㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は28㎝を測る。カマドは東壁中央より南に位置し、北から74°東に振れる。両袖の付け根に礫が残存する。煙道は比較的長く煙出口からは礫が出土している。ピットは確認できなかった。

遺物：１は土師器坏で内面を黒色処理している。土器が少ないが、遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB79（第47・48図、PL３）：④ｂ区　XⅡW17・18・22・23

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SK894・895・900・901・904・905・907に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の約１/２が調査区外になるが隅丸方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、壁高は35㎝を測る。カマドは東壁中央に位置すると思われ、北から48°東に振れる。石を芯材にして粘土を貼りつけて構築されていたと考えられるが、粘土部分は残っていない。ピットは３基検出した。ピット１・２が柱穴と思われる。

分析：骨　シカの末節骨と歯が出土した。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材を樹種同定し、エノキ属であることが判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１～５は土師器坏で１・３は内面を黒色処理している。６は須恵器の坏蓋、７は土師器の高坏坏部で内面を黒色処理している。８は土師器壺、９は土師器甑。10～12は土師器甕である。この他に滑石製の臼玉が２点（第66図18・19、PL23-18・19）埋土から出土した。遺構の年代は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

SB80（第49・50図）：④ｂ区　XⅡW18

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB82に切られ、SB83を切る。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の大部分をSB82に切られているので形状は不明。壁高は10.5㎝を測る。カマドは確認できなかった。ピットは２基検出し、そのうちピット２は柱穴と考えられる。

分析：樹種・種子同定　ピット２出土の炭化材と竪穴埋土出土の種子を同定し、炭化材はアサダ、種子はモモ核であることが判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

SB82（第49・50図、PL22・23）：④ｂ区　XⅡW18・19

遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SB80・83を切る。ST21との切り合い関係は不明。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。残りは悪いが626㎝×600㎝の隅丸方形を呈する。壁高は20㎝を測る。カマドは北東壁のほぼ中央に位置し、北に51°東に振れる。袖は石を芯材にして粘土を貼りつけて構築している。火床は強く焼けている。ピットは３基検出したが、１基はST21のピットと判断した。残りは柱穴とは確認できなかった。

分析：骨　イノシシの歯が出土した。

遺物：１は土師器坏で内面を黒色処理している。２・３は土師器壺、４は土師器高坏、５は土師器台付甕、

６は土師器甕である。遺構の年代は出土土器の様相から７世紀と考えられる。緑色片岩製の石製模造品（第66図５、PL23-29）はSB82・83トレンチ出土である。

SB92（第51・52図、PL４・22）：④ｃ区　ⅩⅡW21　ⅩⅢC1
遺構：Ⅷ層を剥いで検出。SK1028に切られる。十字設定したベルトに沿った方向に先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の半分近くが調査区外になるため形状は不明。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は60㎝を測る。カマドは西壁付近に位置し、北から82°西に振れる。袖は石を芯材にして粘土を貼りつけて構築されていたと考えられるが、粘土部分は残っていない。ピットは確認できなかった。
分析：**骨**　シカ・イノシシの歯が出土した。
遺物：カマド周辺から多く出土している。１～８は土師器坏で４～６は内面を黒色処理している。９は須恵器壺、10・11はミニチュア土器、12は土師器高坏、13は土師器瓿、14～22は土師器甕である。15・17は甕口縁で胴部を欠いているが、カマド南側に逆位で置かれた状態で出土した。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

その他SB出土土器
SB71（第53図、PL２）：④ｂ区　ⅩⅡW11・12・16・17
１～３は土師器坏で内面を黒色処理している。４・５は土師器鉢、６～８は土師器甕である。５～８はカマドから出土している。遺構の時期は出土土器の様相から７世紀と考えられる。
SB73（第53図）：④ｂ区　ⅩⅡW6・11
１・２は土師器坏で２は内面を黒色処理している。３は須恵器坏蓋、４は土師器高坏である。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀前半頃と考えられる。
SB74（第53・66図、PL23）：④ｂ区　ⅩⅡW6・11・12・16
１～４は土師器坏で２・３は内面を黒色処理している。５は土師器甕である。緑色片岩製の石製模造品（第66図６、PL23-30）は埋土出土である。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。
SB83（第53図、PL４）：④ｂ区　ⅩⅡW18・19・24
１・２は土師器坏で１は内面を黒色処理している。３は土師器甕である。
SB85（第54図、PL４）：④ｂ区　ⅩⅡW19・20・24・25
１・２は土師器坏で１は内面を黒色処理している。３は須恵器坏身、４～６は土師器甕である。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。
SB90（第54図）：④ｃ区　ⅩⅡV15・20　ⅩⅡW11・16
１は土師器坏、２は土師器高坏脚部で１ヶ所に穴が穿ってある。３は土師器壺である。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。
SB91（第54・66図、PL23）：④ｃ区　ⅩⅡW11・16
１は土師器把手付土器、３・４は土師器鉢、２・５は土師器甕である。石製模造品と思われる凝灰岩製の紡錘車（第66図４、PL23-31）は埋土から出土した。遺構の時期は出土土器の様相から６世紀後半と考えられる。

３　掘立柱建物跡

③ａ・ｂ・ｃ、④ｂ・ｃ区で検出された。遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判

断したため、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

ST5（第55図、PL４）：③ｂ区　XIM8・９・13・14
Ⅷ層を剥いで検出した。SB11を切る。南北３間、東西２間の建物で、長軸方向はN25°W。柱間寸法は南北150～180㎝、東西約200㎝である。円形～楕円形を呈し、深さ10～50㎝でⅨ・XI層を掘りこんでいる。柱痕跡は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST6（第55図、PL４）：③ｂ区　XIH22　XIM１・２
Ⅷ層を剥いで検出した。南北３間、東西１間の建物で、長軸方向はN20°W。柱間寸法は南北160～180㎝、東西約410～430㎝である。ピット１・３・４・７が円形、ピット２・５・６・８が隅丸方形を呈し、深さ20～60㎝でXI層を掘りこんでいる。柱痕跡は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST11（第56図）：③ｃ区　XIN7・８
Ⅷ層を剥いで検出した。SK213を切る。南北３間、東西３間の建物で、長軸方向はN20°W。柱間寸法は南北120～170㎝、東西100～150㎝とやや不規則である。ほぼ円形を呈し、深さ15～50㎝でⅨ層を掘りこんでいる。柱痕跡は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST20（第56図）：④ｃ区　XIIW11・16
Ⅷ層を剥いで検出した。SB90・91・74を切る。南北１間、東西２間の建物で、長軸方向はN25°E。柱間寸法は南北140～160㎝、東西160～190㎝である。ピット１・３・４・５・６は円形～楕円形、ピット２は隅丸長方形を呈し、深さ30～40㎝でⅨ層を掘りこんでいる。柱痕跡は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST21（第57図）：④ｃ区　XIIW14・18・19
遺構：Ⅷ層を剥いで検出し、基礎整理時に全体図より並びを確認してSTとした。SB76を切る。SB81・82の切り合いは不明であるが、ST21が切っている可能性が考えられる。南北４間、東西３間の建物で、長軸方向はN40°W。柱間寸法は南北140～180㎝、東西約140㎝である。円形～楕円形を呈し、深さ20～40㎝でⅨ層を掘りこんでいる。柱痕跡は認められなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。
分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材とピット２出土の炭化材を樹種同定し、埋土出土の炭化材はスギ、ピット２出土の炭化材はアサダと判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

４　溝跡

SD7（第58図、PL５）：③ｂ区　XIH12・17・22
遺構：SB7東側のⅢ´層を剥いだ面で、円礫を中心に北西から南西方向に弧状にのびる遺物集中が検出された。幅150～300㎝、長さ約13m、ほぼ平面状で掘りこみや水の流れた痕跡は認められなかった。礫の下層はⅧ層（古墳時代包含層）がほとんど堆積せず、細砂層が厚く堆積して北西方向に落ち込んでいる様子が確認できたため、この遺構は地形の落ち込みの縁に沿って、廃棄または置かれたものの可能性が考えられる。平安時代の調査面での検出だが、土層の堆積状況・出土遺物から古墳時代の遺構とした。

遺物：須恵器や土師器が集中している箇所が認められた。１・２は土師器坏、３・４は土師器鉢、５は須恵器坏身、６・７は土師器甕である。

SD10（第59・61図、PL５・21・23）：③ｃ区　XIN8・９・13・14・15
遺構：③ｃ区平安時代の調査面で、円礫と須恵器片が集中するSD7とよく似た状況が確認された。そこで土器・礫を残しながら掘り下げたところ、北東から南東方向に弧状にのびる遺物集中が検出された。調査壁やトレンチで精査を行ったが、掘りこみは確認されなかった。この遺構の西側は③ｇ区に向かってⅧ層が落ち込んでおり、古墳時代の竪穴住居跡も途切れる。SD7と同じく、地形の落ち込みの縁に沿って、廃棄または置かれたものの可能性が考えられる。
遺物：北壁付近で須恵器大甕の破片が集中する。須恵器片は礫上部に多く出土している。１～３は土師器坏、５は土師器高坏、６は須恵器高坏である。４は土師器鉢、７は須恵器壺、８・９は須恵器甕である。10は砂岩製の砥石、11～13は安山岩製の凹石である。

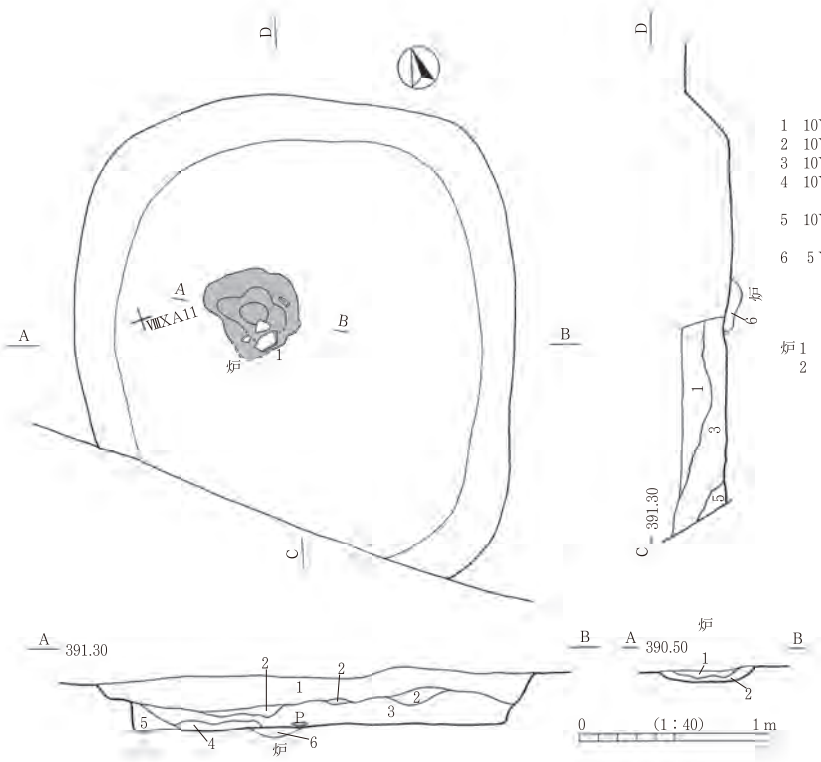
SD49・50・51（第60・61図、PL５・23）：①区　VIIO4・９・10
遺構：調査区を南北に横切る幅５m以上の溝状の落ちこみを検出したので、北壁にトレンチを入れ、土層を確認してから埋土を掘り下げた。いずれのSDからも埴輪の破片が出土している。SD49は底部がかなり凸凹し、なだらかに立ち上がる。SD50を切る。埋土は複層で自然堆積、自然流路と思われる。北壁断面から輝緑岩製の磨製石斧（１）が出土している。図示していないが、底部からは曲物や種子が出土している。SD50は底部が丸く、斜めに立ち上がる。埋土は複層で自然堆積、自然流路と思われる。SD51の底部はやや凸凹し、なだらかに立ち上がる。SD49に切られる。埋土は複層。自然堆積で、自然流路と思われる。埋土の堆積状況や出土遺物から、古墳時代から中世に至るまで、流路の形状や水流の方向・速度等を変えながら、この区域に恒常的もしくは断続的に自然流路があったと考えられる。また、埴輪の出土は、上流方向に埴輪列を伴う古墳の存在が想定され、当地域の古墳時代像を考える上で、革新的な資料を得たことになるであろう。

埴輪（第63～65図、PL19）：SD49・50・51の埋土から出土した。多くはSD51からの出土である。いずれの破片も器面の摩耗が激しく、内外面のハケ調整は観察できなかった。SD49・50-１～４はSD49出土、６はSD50出土、５はSD49・50のトレンチからの出土である。１～４は円筒埴輪の破片である。１は基底部から20㎝程残存し、基底部の直径が12.4㎝で上部にむかって若干ひらいている。２は口縁部、３・４は突帯部を含む胴部の破片である。５・６は形象埴輪の破片と考えられる。SD51-１は馬形埴輪の頭部の一部である。鼻面にかかる馬具に鋲がついているのが確認できるが、多くは剥がれ落ち、痕跡が確認できるのみである。鼻穴は中央に寄り、貫通していない。比較的小型の馬形埴輪と思われる。２～４は形象埴輪の破片と考えられる。５～９は円筒埴輪の口縁部、10～16は突帯部を含む胴部の破片で15は円形の透かし孔の一部が含まれる。17～25は基底部の破片だが、17・18・20は直径が小さく、馬形埴輪の脚部と考えられる。

５　遺構外出土遺物（第62・66、PL21・23）

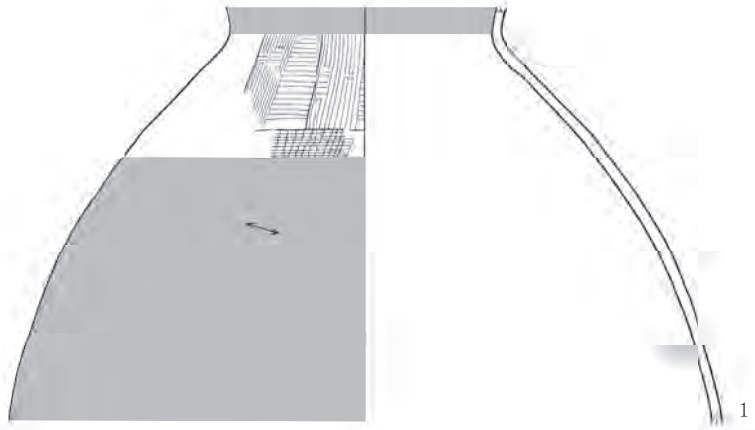
１・３（土師器坏）、４（須恵器坏身）、６（土師器鉢）、12（土師器高坏）、15・16（土師器甕）は③ｃ区検出面から、７～10（土師器小型丸底壺）は③ｉ区検出面から、11（土師器壺）は④ｂ区トレンチＥから、２（土師器坏）、５（土師器口縁部）、13・14（土師器高坏）は④ｂ・ｃ区検出面から出土している。２・

３・12は内面を黒色処理している。５は棒状工具で施文している。14は脚部に小さい穴を１箇所あけている。滑石製の臼玉は③ｃ区XIN14グリッドから３点（第66図14・15・22、PL23-14・15・22）出土している。子持勾玉（第66図-１）は泥質岩製で平安時代の溝跡（SD9）埋土から出土している。

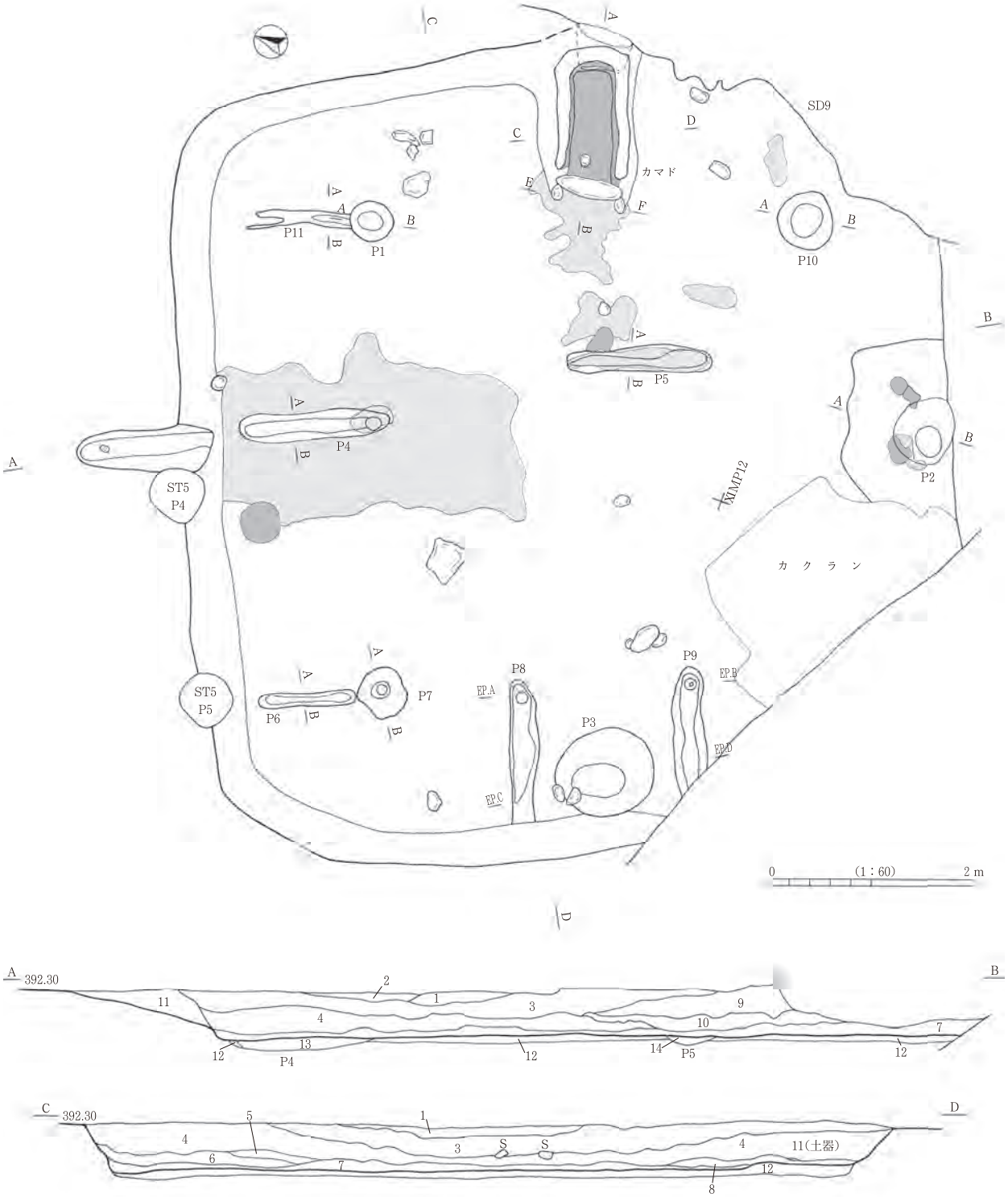


1　10YR2/3　黒褐色土　φ10～15㎜のにぶい黄褐色土少量。
2　10YR4/3　にぶい黄褐色土
3　10YR2/3　黒褐色土　炭化物極少量。
4　10YR2/3　黒褐色土　φ10㎜位の灰黄褐色土少量。炭化物をやや多く含む。
5　10YR2/3　黒褐色土　φ10㎜位のにぶい黄褐色土少量。上層に比べやや明るい。
6　5 YR4/4　にぶい赤褐色土　砂質。

炉１　10YR3/2　黒褐色土　炭化物極少量。
　２　5 YR4/4　にぶい赤褐色土　砂質。

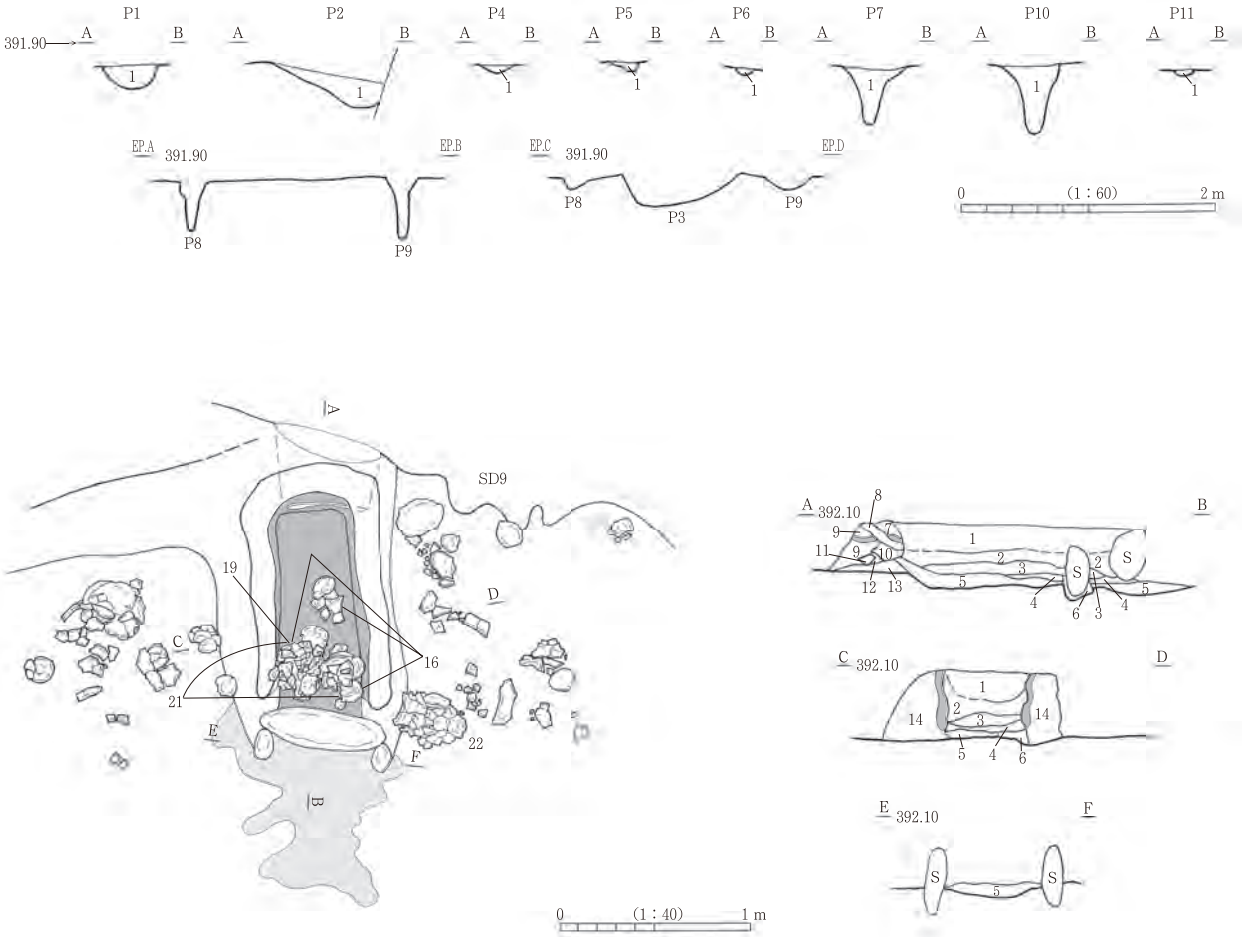


第24図　SB53



1	10YR3/3	暗褐色土	φ５～15㎜の円礫少量。
2	10YR3/3	暗褐色土	１層より炭化物多い。
3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。φ１～５㎜の小円礫少量。
4	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の褐色砂・φ１～５㎜の円礫少量。
5	10YR3/3	暗褐色土	４層より褐色砂多い。
6	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の円礫少量。
7	10YR3/3	暗褐色土	
8	10YR3/3	暗褐色土	７層より褐色砂多い。
9	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の円礫少量。
10	10YR3/2	黒褐色土	褐色砂少量。
11	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の焼土粒少量。煙道埋土。
12	10YR4/2	灰黄褐色土	褐色土・焼土粒・炭化物少量。φ１～50㎜の円礫少量。
13	10YR3/4	暗褐色土	黄褐色土・小円礫少量。
14	10YR3/4	暗褐色土	黄褐色土・灰少量。

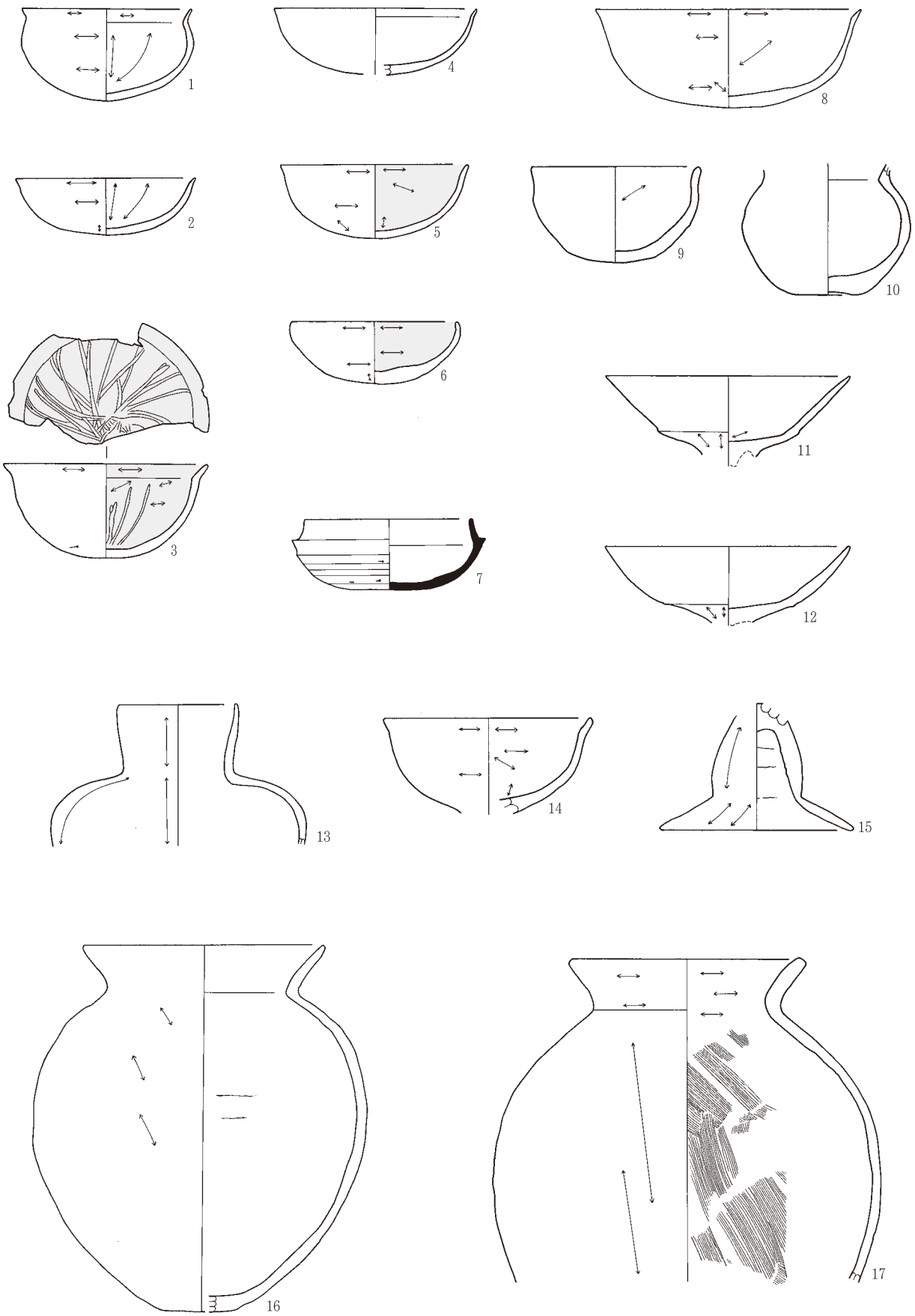
第25図　SB11遺構図１



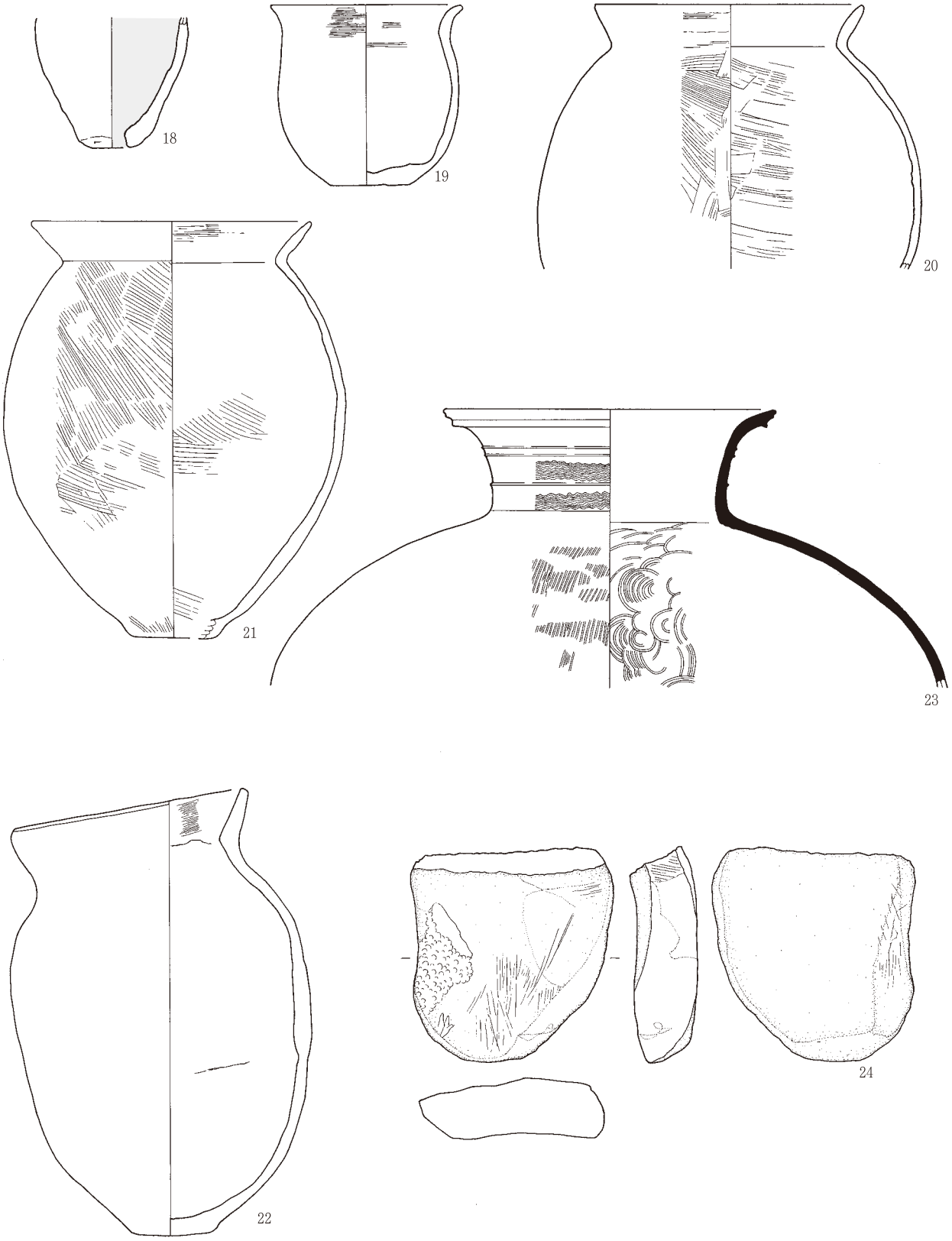
1　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜以下の焼土粒・炭化物・φ10㎜以下の小円礫少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　φ10～20㎜の焼土粒少量。
3　５YR4/6　赤褐色焼土　灰少量。
4　10YR5/2　灰黄褐色土　灰層。１層の焼土混入。
5　５YR4/6　赤褐色焼土　３層より砂質。灰あまり混入せず。
6　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒・炭化物混入。
7　10YR3/4　暗褐色土
8　10YR3/4　暗褐色土　焼土ブロックやや多く混入。
9　10YR3/4　暗褐色土　煙道埋土。焼土粒・炭化物混入。ＳＤ9の影響あり。
10　10YR3/4　暗褐色土　煙道埋土。焼土粒・炭化物・８層ブロック混入。
11　10YR3/4　暗褐色土　８層に似るが焼土含まず。
12　10YR3/4　暗褐色土　10層に似るが８層ブロック少ない。
13　10YR3/4　暗褐色土　焼土ブロック多く含む。
14　10YR3/4　暗褐色土　カマド構築土。

P1　1　10YR3/4　暗褐色土　灰黄褐色土少量。
P2　1　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒・炭化物少量。
P4　1　10YR3/4　暗褐色土　黄褐色土・φ10㎜位の円礫少量。
P5　1　10YR3/4　暗褐色土　黄褐色土・灰少量。
P6　1　10YR4/2　灰黄褐色土　φ１～30㎜の円礫少量。
P7　1　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒・φ１～30㎜の円礫少量。
P10　1　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒・炭化物少量。
P11　1　10YR4/2　灰黄褐色土　φ１～30㎜の円礫少量。

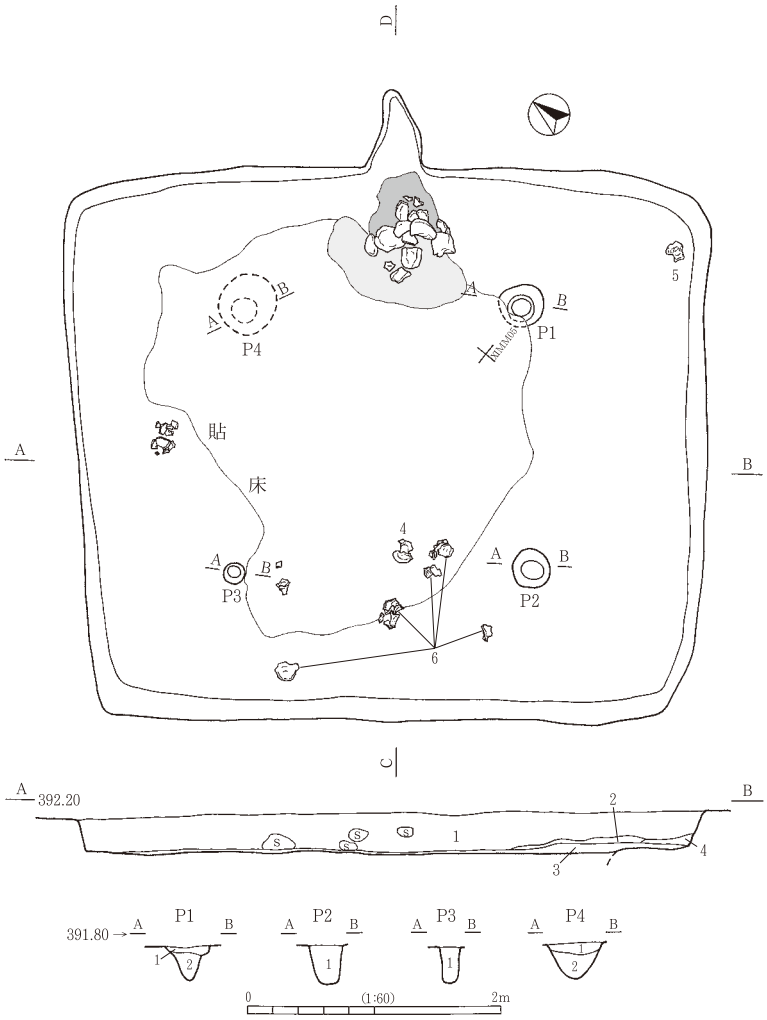
第26図　SB11遺構図２

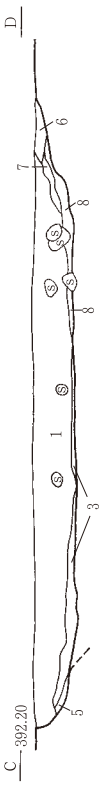


第27図　SB11遺物１



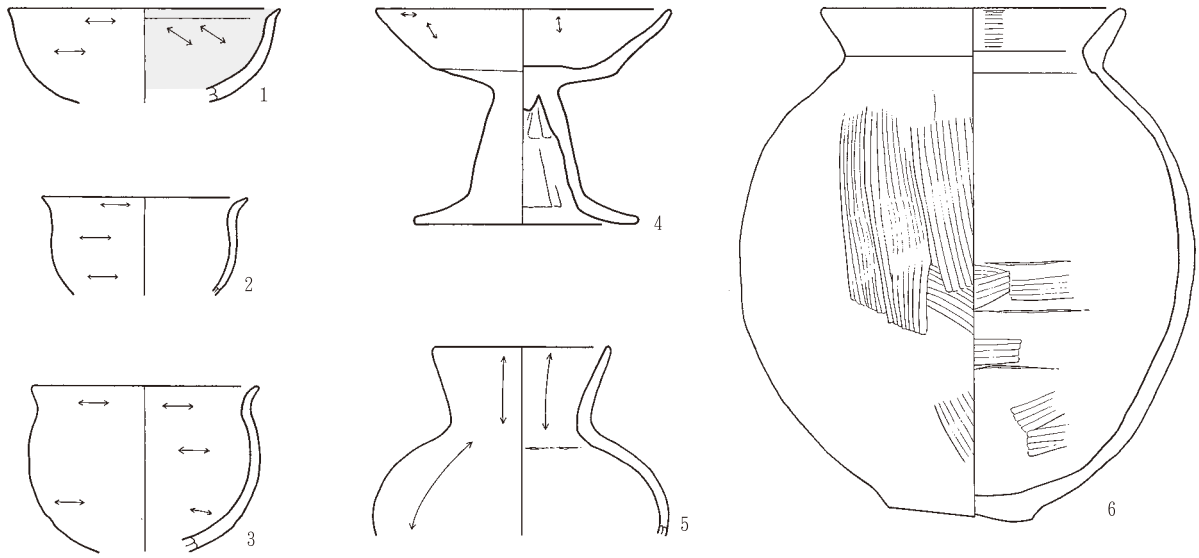
第28図　SB11遺物２



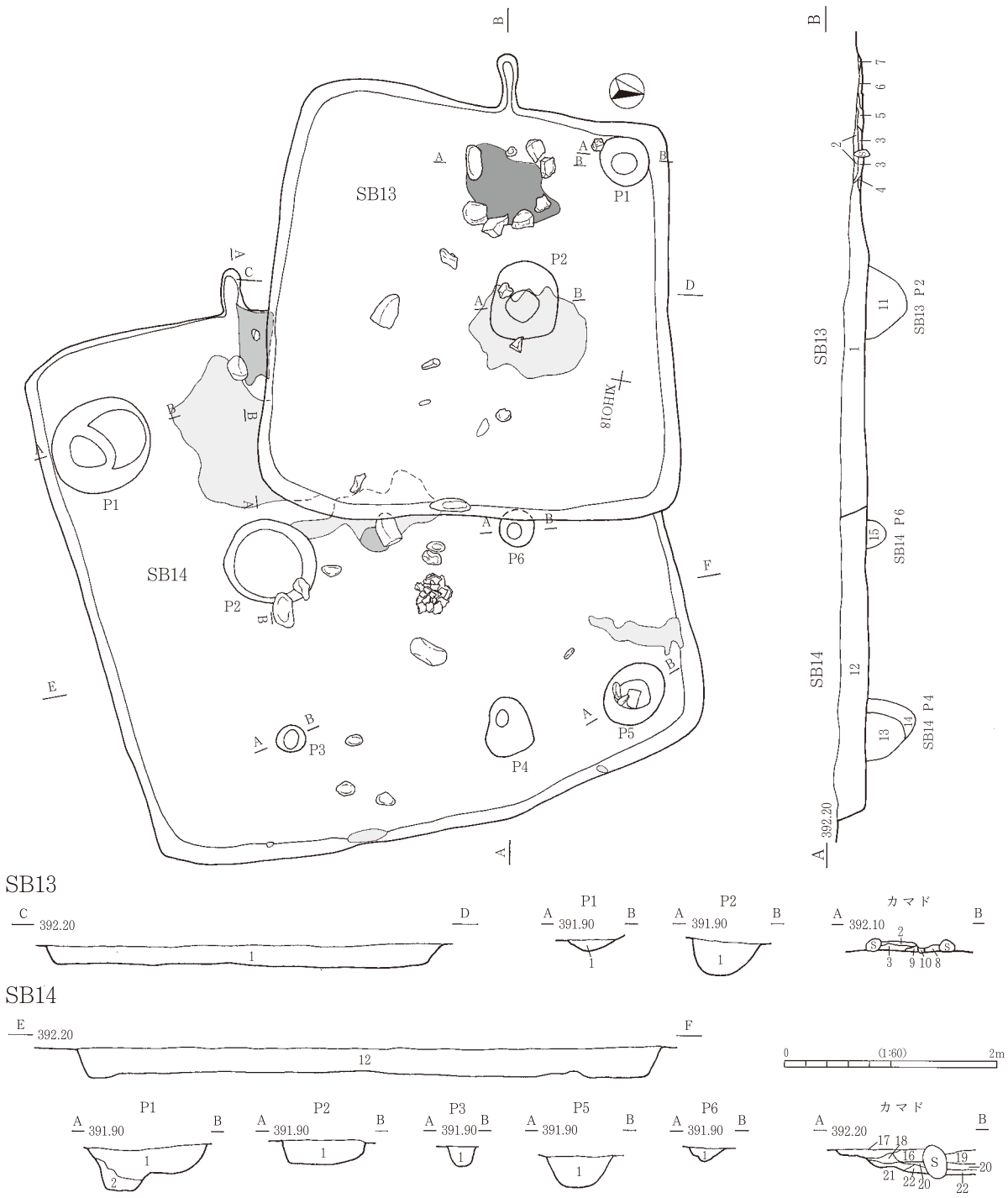


1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物・φ10㎜位の円礫少量。	
2	10YR3/2	黒褐色土	粘土分を含み上層よりやや灰色がかる。	
3	10YR5/2	灰黄褐色土	炭化物少量混入。鉄分の沈着多い。	
4	10YR3/3	暗褐色細砂	φ1～20㎜の礫少量混入。	
5	10YR5/2	灰黄褐色土	炭少量。暗褐色土混入。	
6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量混入。	
7	10YR3/3	褐色土	焼土粒・炭化物少量。粘性土混入。	
8	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物少量。粘性土・黒褐色土混入。	

P1	1	10YR3/3	暗褐色土	灰黄褐色土混入。
	2	10YR4/2	灰黄褐色土	
P2	1	10YR3/3	暗褐色土	灰黄褐色土混入。
P3	1	10YR3/3	暗褐色土	灰黄褐色土混入。
P4	1	10YR3/3	暗褐色土	灰黄褐色土混入。
	2	10YR4/2	灰黄褐色土	



第29図　SB12

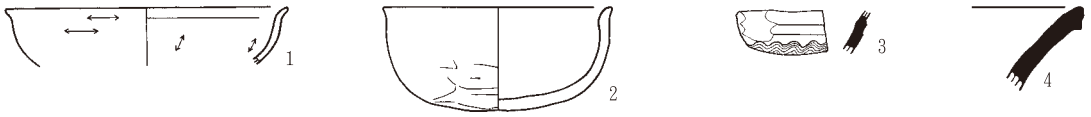


1　10YR3/3　暗褐色土　φ１～５㎜の焼土粒極少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒少量。
3　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜位の焼土粒少量。炭化物多い。
4　10YR3/3　暗褐色土　２層に似るが炭が層状に混入。
5　10YR3/3　暗褐色土　φ５～10㎜の焼土粒やや多い。φ10㎜の炭化物少量。褐色砂混入。
6　10YR3/3　暗褐色土　φ５～10㎜の焼土粒やや多い。φ10㎜の炭化物少量。
7　10YR3/3　暗褐色土
8　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒・φ５㎜位の炭化物極少量。
9　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒少量。
10　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒少量。
11　10YR3/3　暗褐色土　φ１～10㎜の焼土粒・炭化物少量。
12　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒・φ５㎜位の炭化物少量。
13　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒・φ５㎜位の炭化物極少量。
14　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜位の円礫少量。
15　10YR3/3　暗褐色土
16　10YR3/3　暗褐色土　φ１～10㎜の焼土粒やや多い。
17　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒多い。
18　10YR3/3　暗褐色土　φ１～3㎜位の焼土粒少量。
19　10YR3/3　暗褐色土　φ５㎜位の焼土粒・φ1㎜位の炭化物少量。
20　10YR3/3　暗褐色土　灰混じり土。
21　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒混入。
22　10YR3/3　暗褐色土

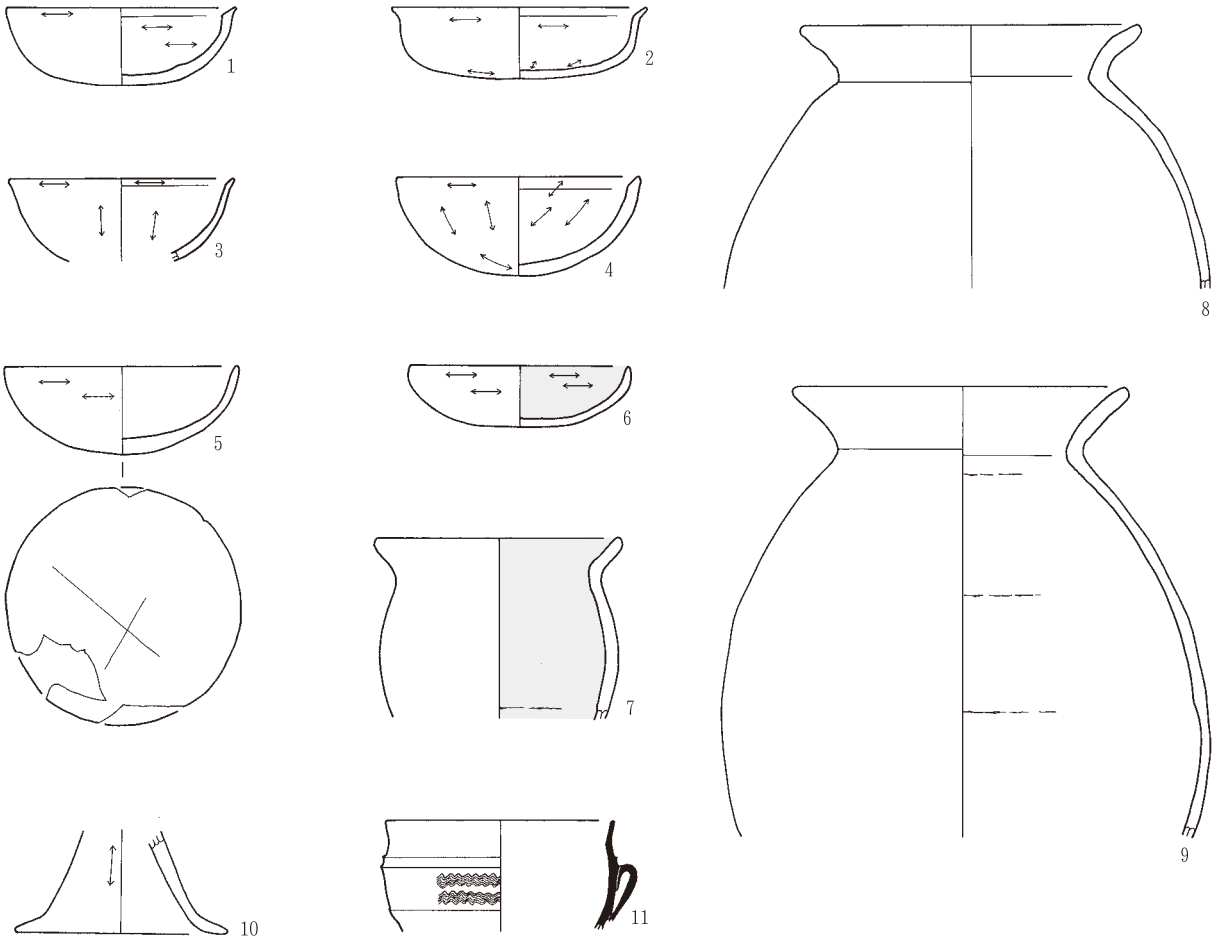
SB13　Ｐ１　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒・炭化物少量。
　　Ｐ２　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１～10㎜の焼土粒・炭化物少量。
SB14　Ｐ１　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１㎜位の焼土粒・φ５㎜位の炭化物極少量。
　　2　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜位の円礫少量混入。
　　Ｐ２　1　10YR3/3　暗褐色土　褐色砂少量。φ10～200㎜位の円礫少量。
　　Ｐ３　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
　　Ｐ５　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
　　Ｐ６　1　10YR3/3　暗褐色土

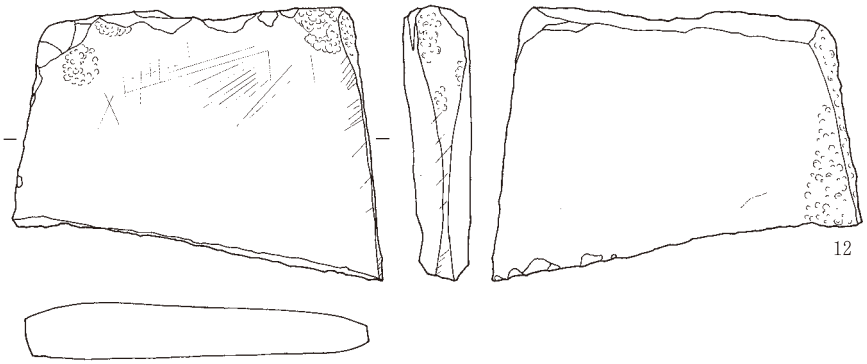
第30図　SB13・14遺構図

SB13

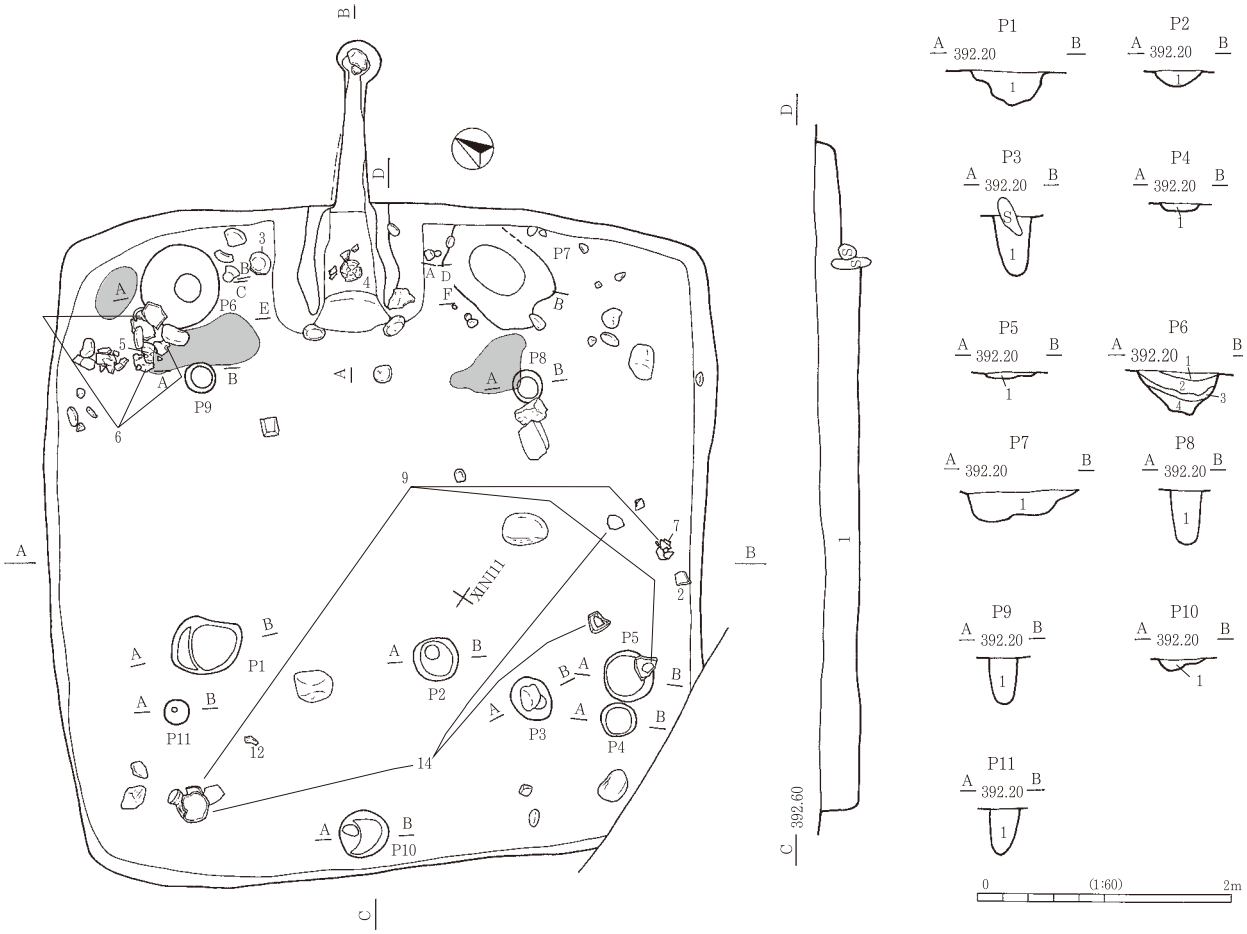


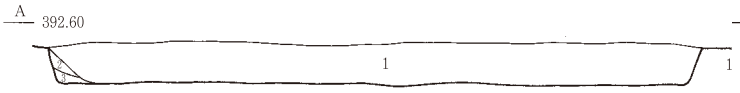
SB14



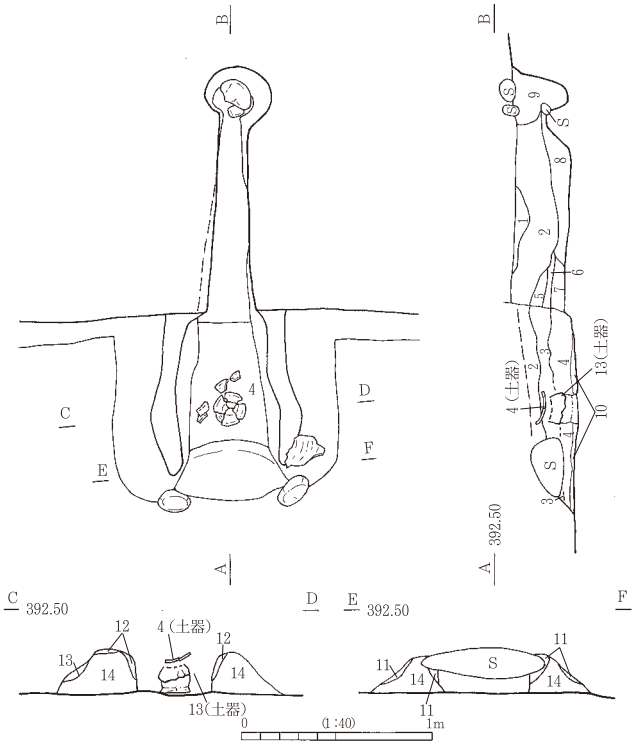


第31図　SB13・14遺物



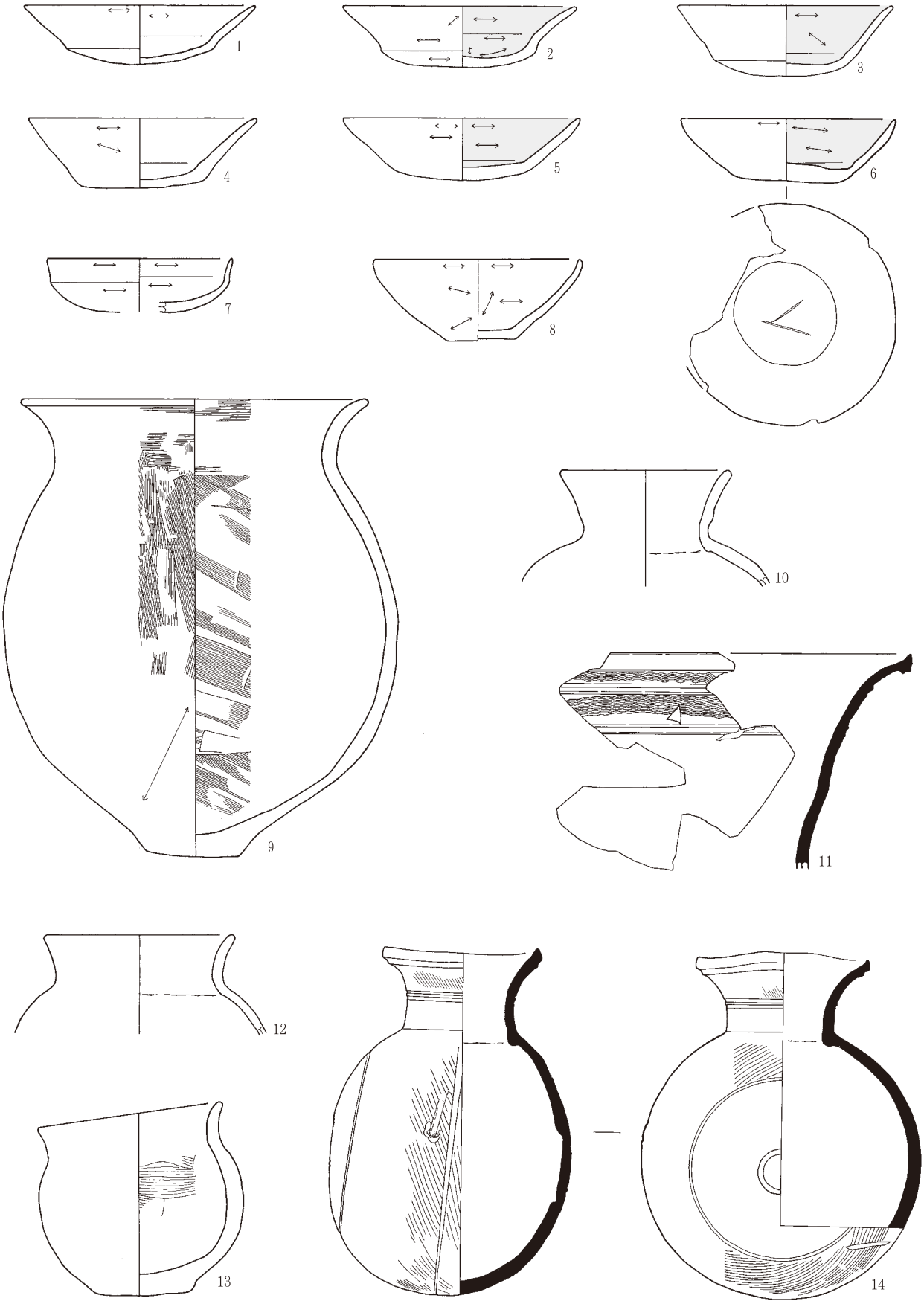


1	10YR3/4	暗褐色土	φ10㎜位の黄褐色土多い。炭化物少量。白色混入物あり。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色細砂	暗褐色土極少量。白色粒子・炭化物少量。
3	10YR3/2	黒褐色土	白色混入物あり。

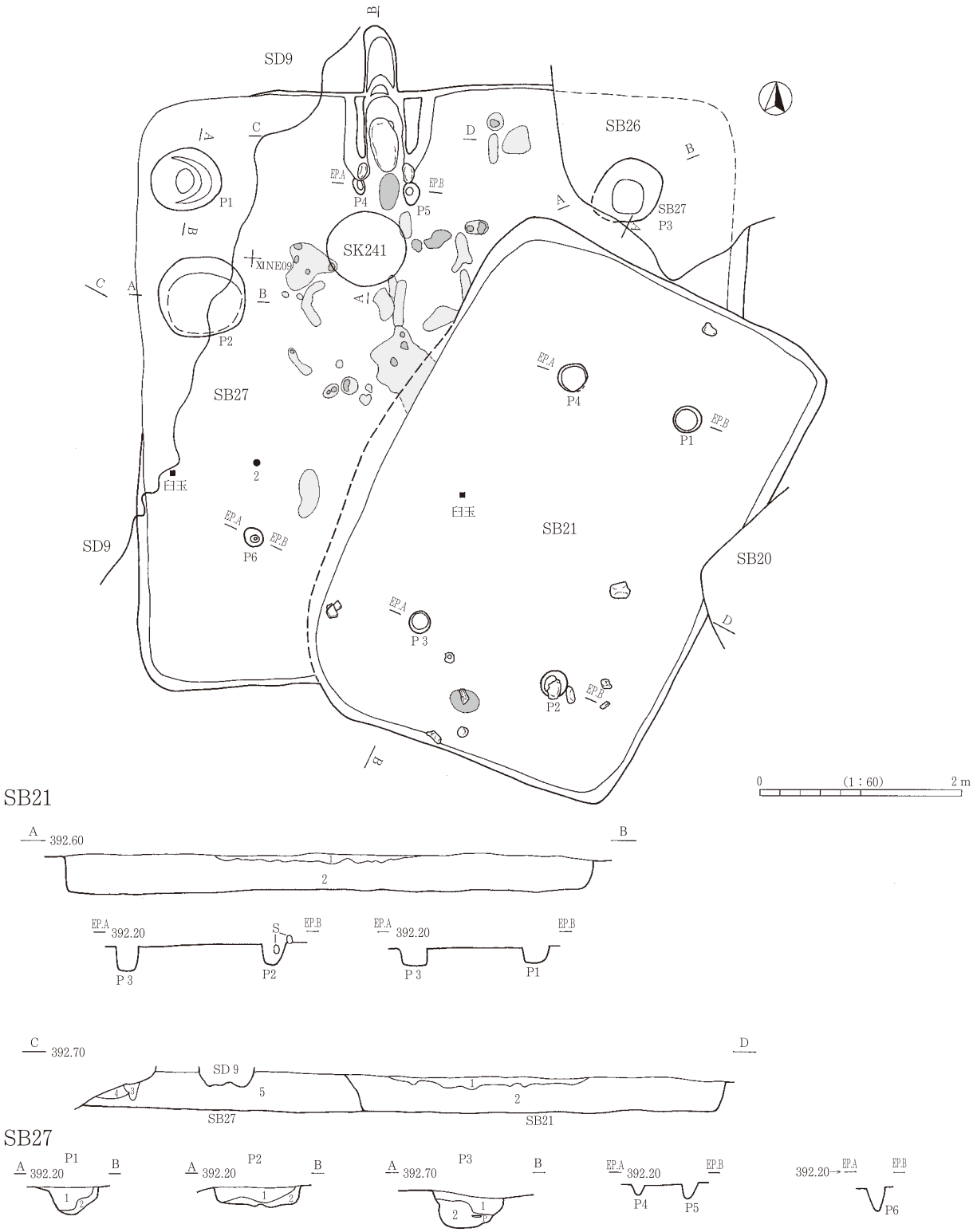


P１	1	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・円礫少量。
P２	1	10YR3/3	暗褐色土	灰色粘土・φ10㎜位の炭化物少量。
P３	1	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土混入。10×35㎝位の礫混入。
P４	1	10YR3/3	暗褐色土	灰色粘土・φ10㎜位の炭化物少量。
P５	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物少量。
P６	1	10YR3/3	暗褐色土	灰褐色粘土・細礫少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	１層の土に焼土多く混入。灰色粘土・炭化物少量。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	灰色粘土少量。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	灰色粘土・炭化物・灰少量。３層より砂質。
P７	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物少量。
P８	1	10YR3/3	暗褐色土	φ７㎜位の黒褐色土混入。
P９	1	10YR3/3	暗褐色土	φ７㎜位の黒褐色土混入。
P10	1	10YR3/4	暗褐色土	炭化物少量混入。
P11	1	10YR3/3	暗褐色土	φ７㎜位の黒褐色土混入。
カマド	1	10YR4/4	褐色土	
	2	10YR3/3	暗褐色土	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
	4	5 YR4/6	赤褐色焼土	
	5	5 YR4/6	赤褐色焼土	
	6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物・灰やや多く混入。
	7	5 YR4/6	赤褐色焼土	
	8	7.5YR3/2	黒褐色土	やや砂質焼土ブロック・炭化物少量混入。
	9	7.5YR3/2	黒褐色土	焼土ブロック・灰色粘土・暗褐色砂質土・黒褐色土が混在。
	10			炭化物・灰層。
	11	10YR3/4	暗褐色土	焼土少量。
	12	10YR3/4	暗褐色土	焼土多い。
	13	10YR3/4	暗褐色土	焼土。
	14	10YR3/4	暗褐色土	カマド構築土。

第32図　SB20遺構図



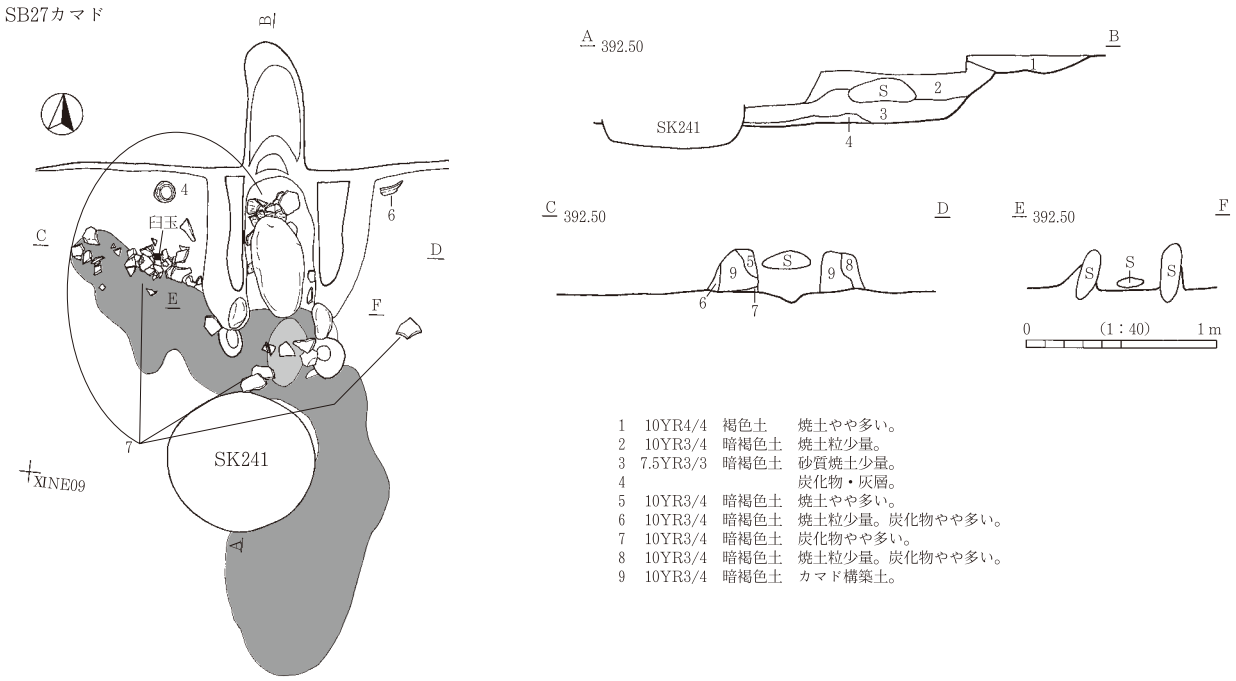
第33図　SB20遺物



SB21・27　1　10YR5/4　にぶい黄褐色土　炭化物極少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物・φ100㎜以下の円礫少量。
3　10YR3/2　黒褐色土
4　10YR3/4　暗褐色土
5　10YR4/4　褐色土　砂質。炭化物少量。床直上に炭化物多い。

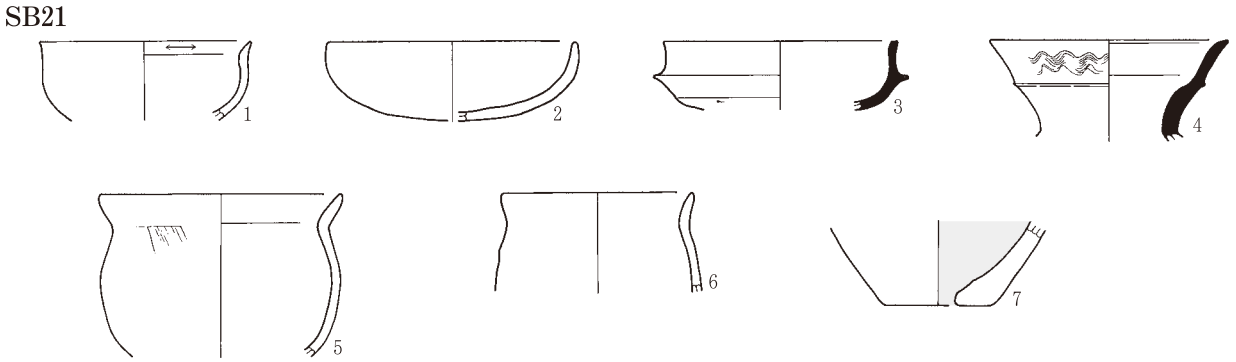
SB27　P1　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物・灰少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　１層の土に焼土・炭化物多く混入。底部・壁面に焼土・炭化物が層状に堆積。
P2　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。
P3　1　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒・炭化物少量。
2　10YR3/1～3/2　黒褐色土　炭化物・灰多い。

第34図　SB21・27遺構図１

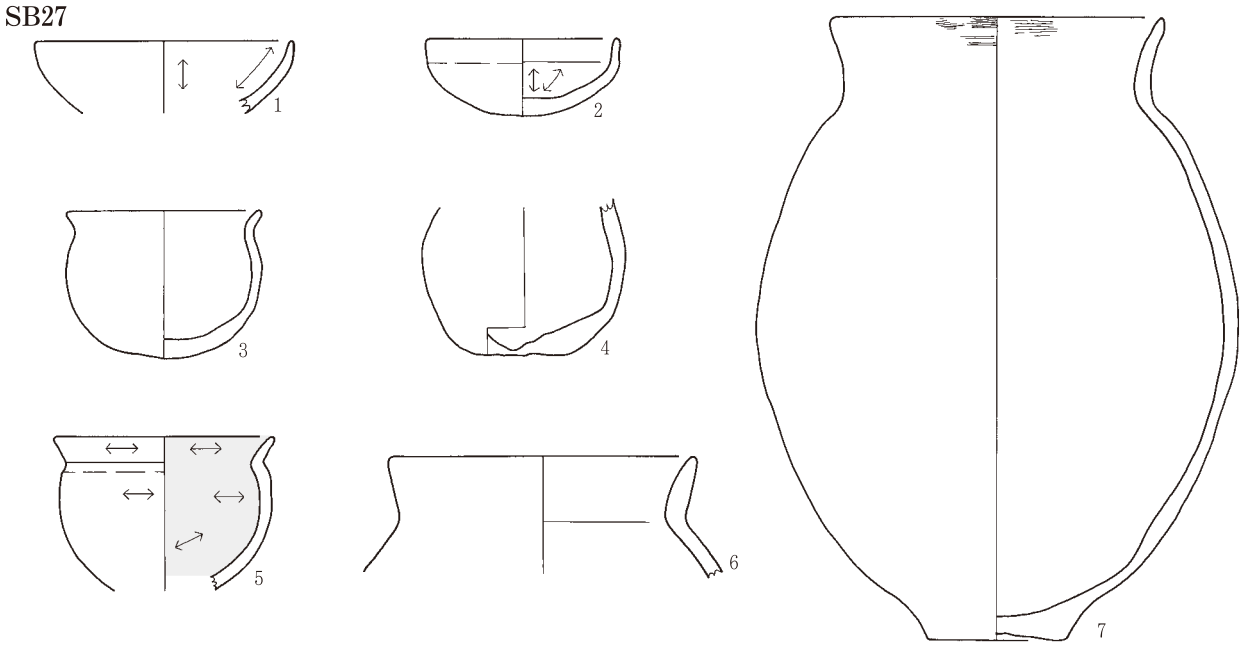


1　10YR4/4　褐色土　焼土やや多い。
2　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒少量。
3　7.5YR3/3　暗褐色土　砂質焼土少量。
4　炭化物・灰層。
5　10YR3/4　暗褐色土　焼土やや多い。
6　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒少量。炭化物やや多い。
7　10YR3/4　暗褐色土　炭化物やや多い。
8　10YR3/4　暗褐色土　焼土粒少量。炭化物やや多い。
9　10YR3/4　暗褐色土　カマド構築土。

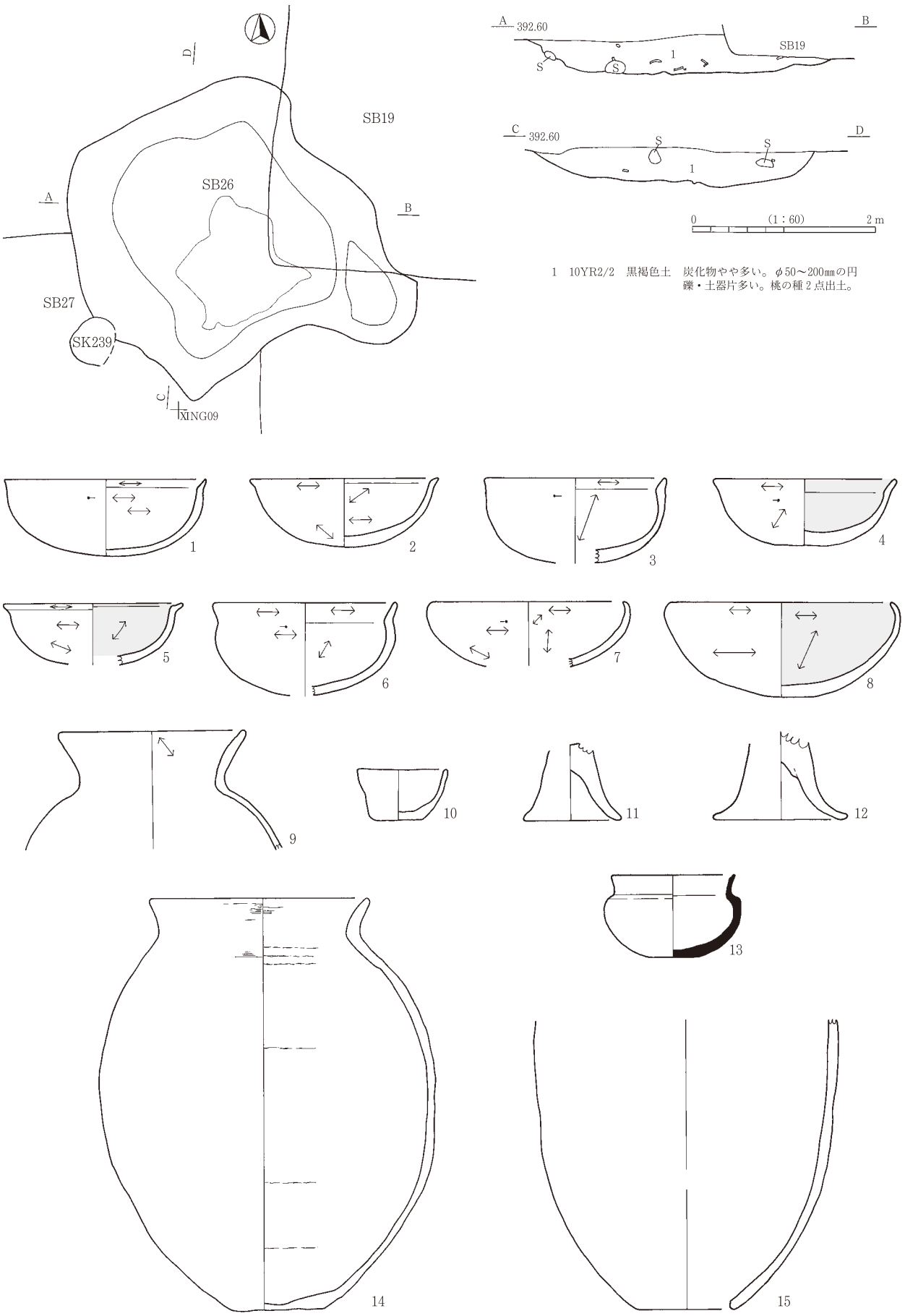
SB21



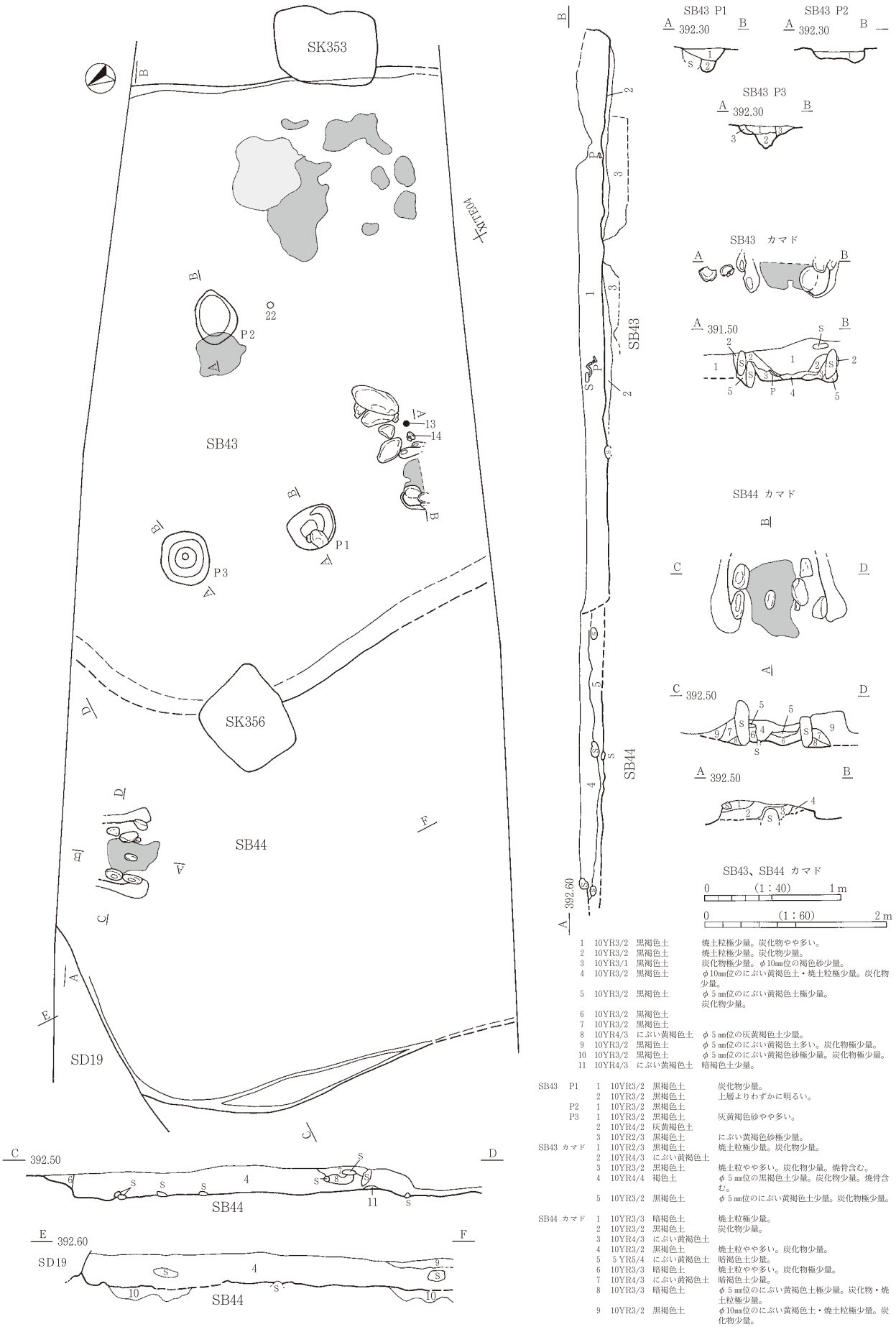
SB27



第35図　SB21・27遺構図２・遺物


SB19
SB26
SB27
SK239
XING09
A
B
C
D
392.60
S
1
0
(1：60)
2 m
1　10YR2/2　黒褐色土　炭化物やや多い。φ50～200㎜の円礫・土器片多い。桃の種２点出土。

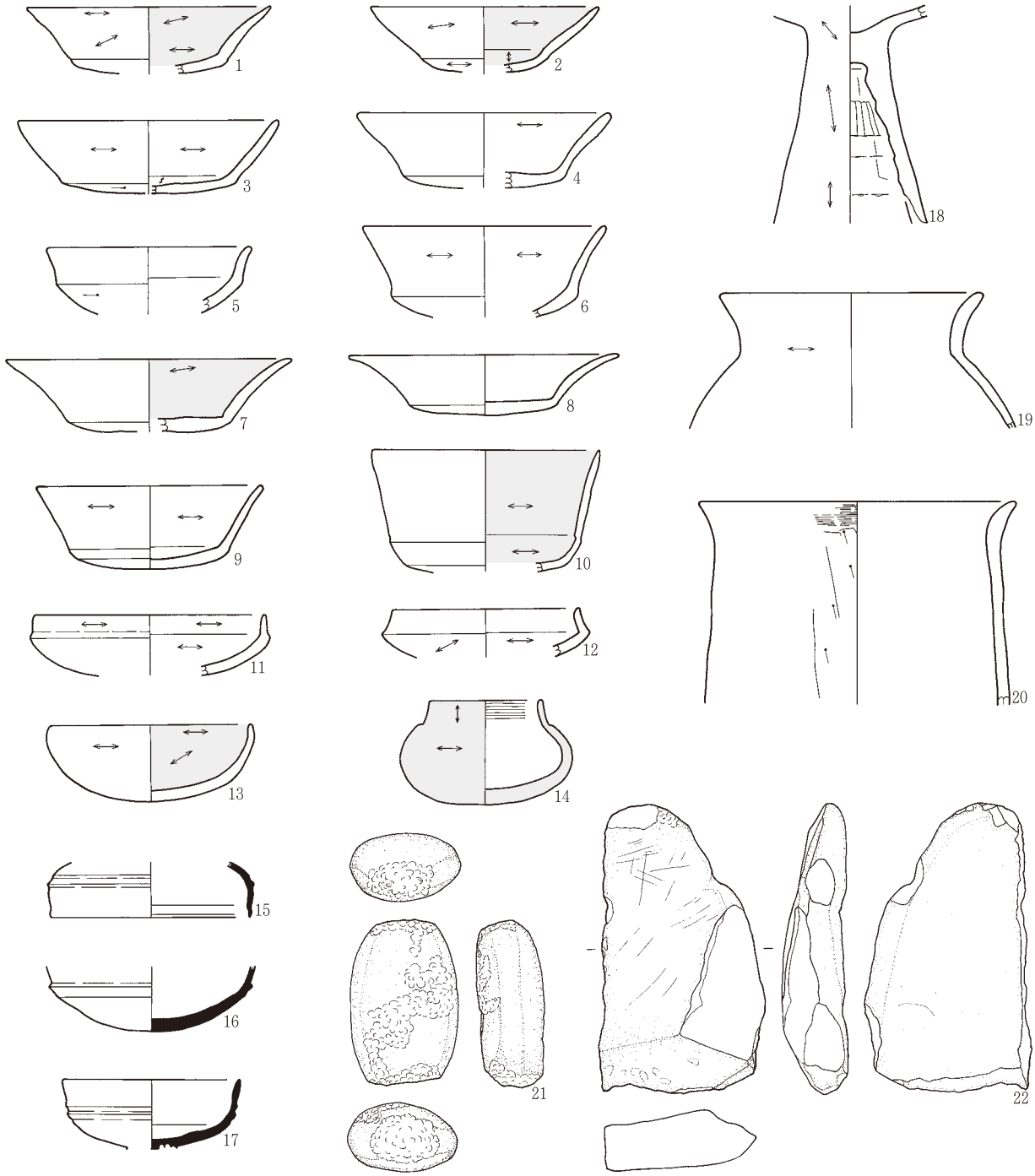
第36図　SB26



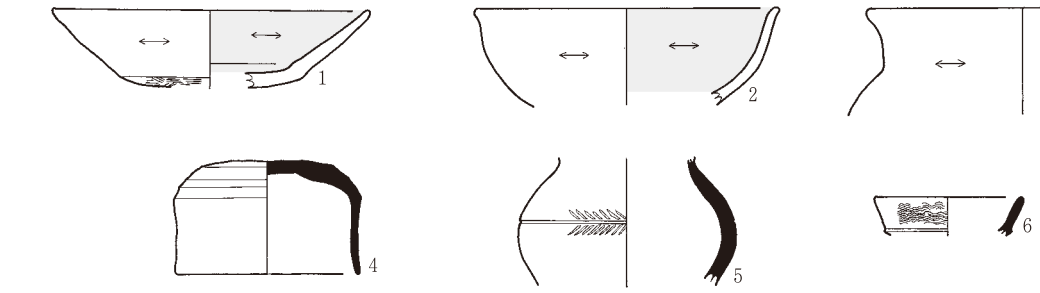
	1	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒極少量。炭化物やや多い。
	2	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	3	10YR3/1	黒褐色土	炭化物極少量。φ10mm位の褐色砂少量。
	4	10YR3/2	黒褐色土	φ10mm位のにぶい黄褐色土・焼土粒極少量。炭化物少量。
	5	10YR3/2	黒褐色土	φ５mm位のにぶい黄褐色土極少量。炭化物少量。
	6	10YR3/2	黒褐色土	
	7	10YR3/2	黒褐色土	
	8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５mm位の灰黄褐色土少量。
	9	10YR3/2	黒褐色土	φ５mm位のにぶい黄褐色土多い。炭化物極少量。
	10	10YR3/2	黒褐色土	φ５mm位のにぶい黄褐色砂極少量。炭化物極少量。
	11	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色土少量。
SB43　P1	1	10YR3/2	黒褐色土	炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	上層よりわずかに明るい。
P2	1	10YR3/2	黒褐色土	
P3	1	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色砂やや多い。
	2	10YR4/2	灰黄褐色土	
	3	10YR2/3	黒褐色土	にぶい黄褐色砂極少量。
SB43 カマド	1	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
	3	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒やや多い。炭化物少量。焼骨含む。
	4	10YR4/4	褐色土	φ５mm位の黒褐色土少量。炭化物少量。焼骨含む。
	5	10YR3/2	黒褐色土	φ５mm位のにぶい黄褐色土少量。炭化物極少量。
SB44 カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	炭化物少量。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
	4	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒やや多い。炭化物少量。
	5	５YR5/4	にぶい黄褐色土	暗褐色土少量。
	6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒やや多い。炭化物極少量。
	7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色土少量。
	8	10YR3/3	暗褐色土	φ５mm位のにぶい黄褐色土極少量。炭化物・焼土粒極少量。
	9	10YR3/2	黒褐色土	φ10mm位のにぶい黄褐色土・焼土粒極少量。炭化物少量。

第37図　SB43・44遺構図

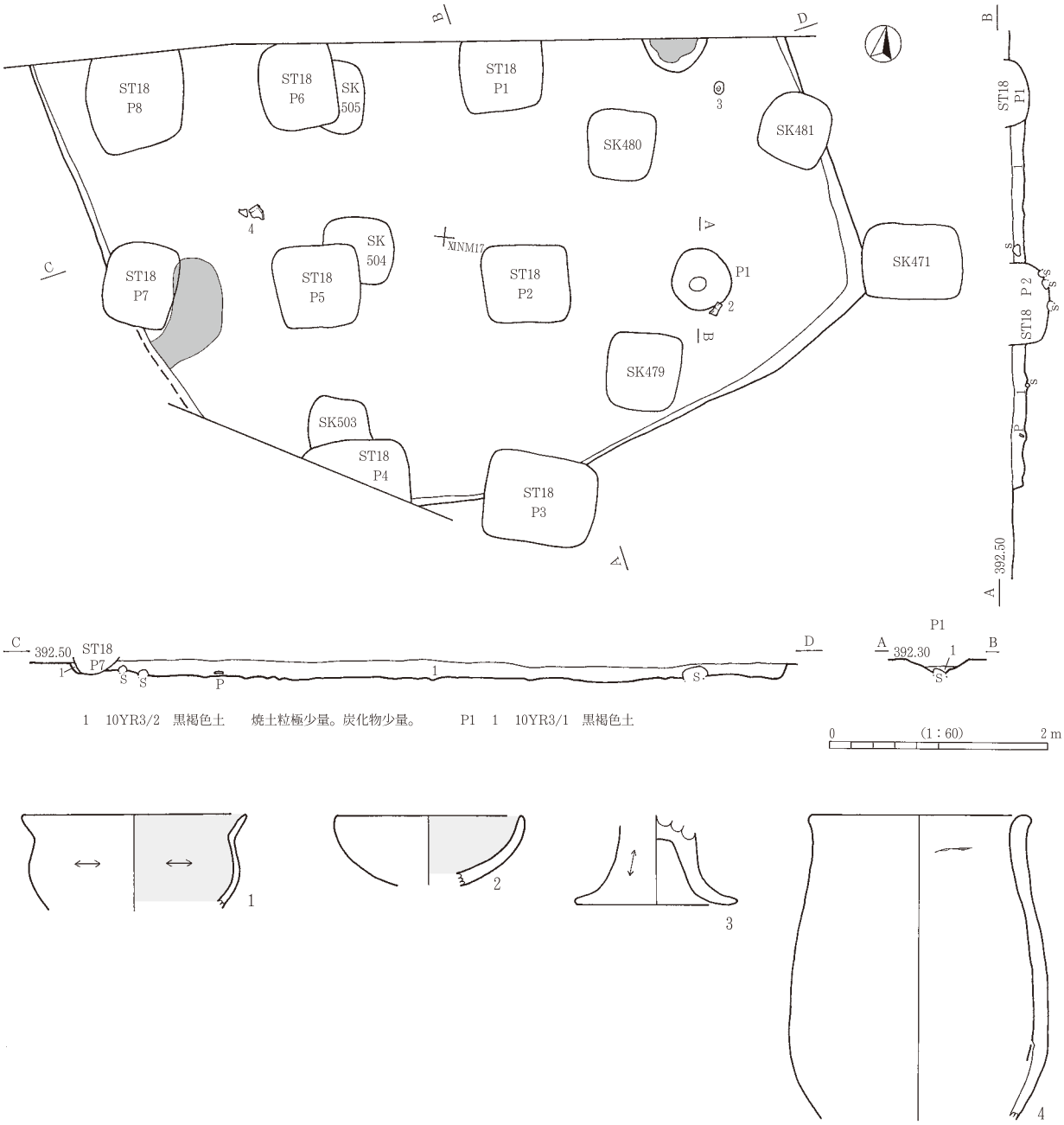
SB43



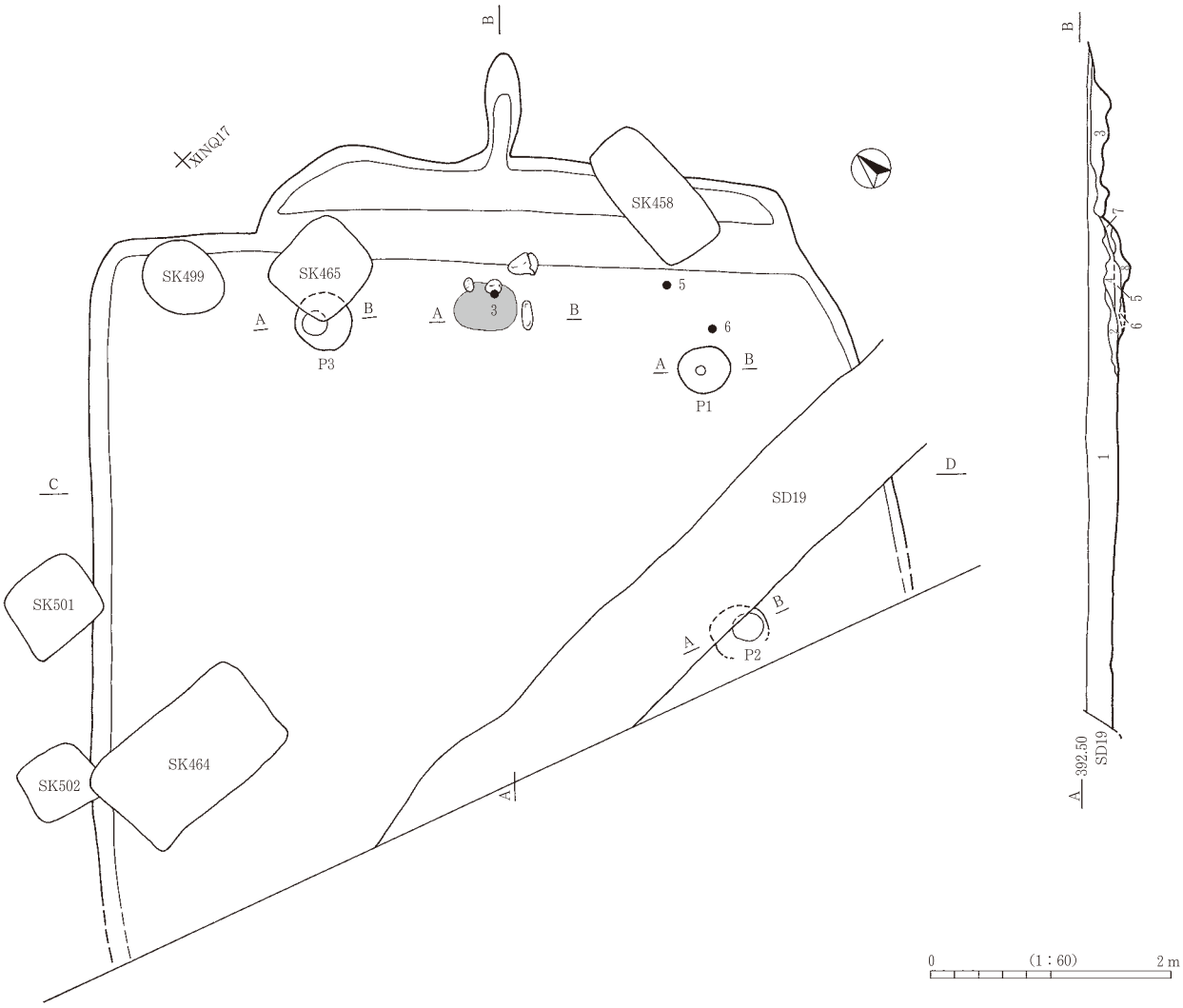
SB44

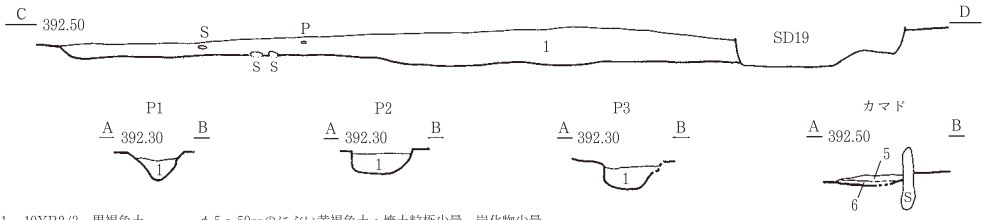


第38図　SB43・44遺物

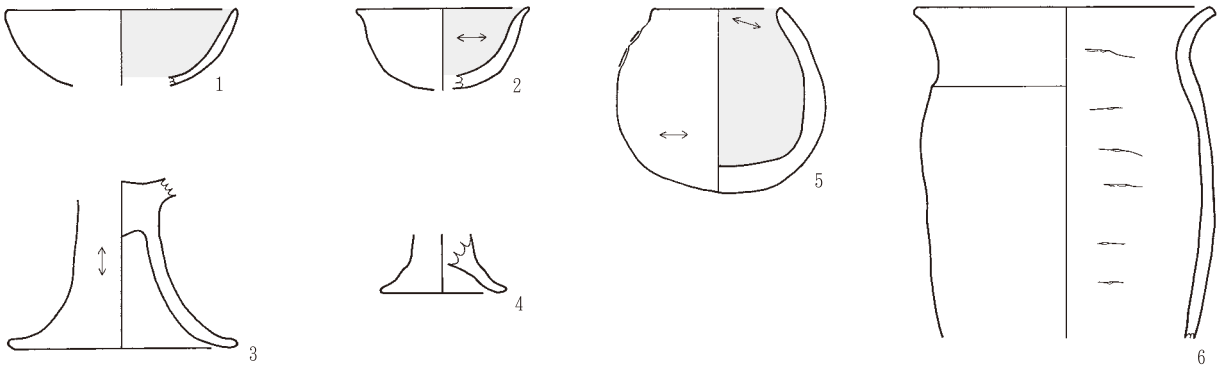

ST18 P8
ST18 P6
SK 505
ST18 P1
SK480
SK481
SK471
SK 504
ST18 P5
ST18 P2
ST18 P7
SK479
SK503
ST18 P4
ST18 P3
XINM17
P1
392.50
392.30
1 10YR3/2 黒褐色土　焼土粒極少量。炭化物少量。
P1 1 10YR3/1 黒褐色土
0 (1：60) 2 m

第39図　SB49

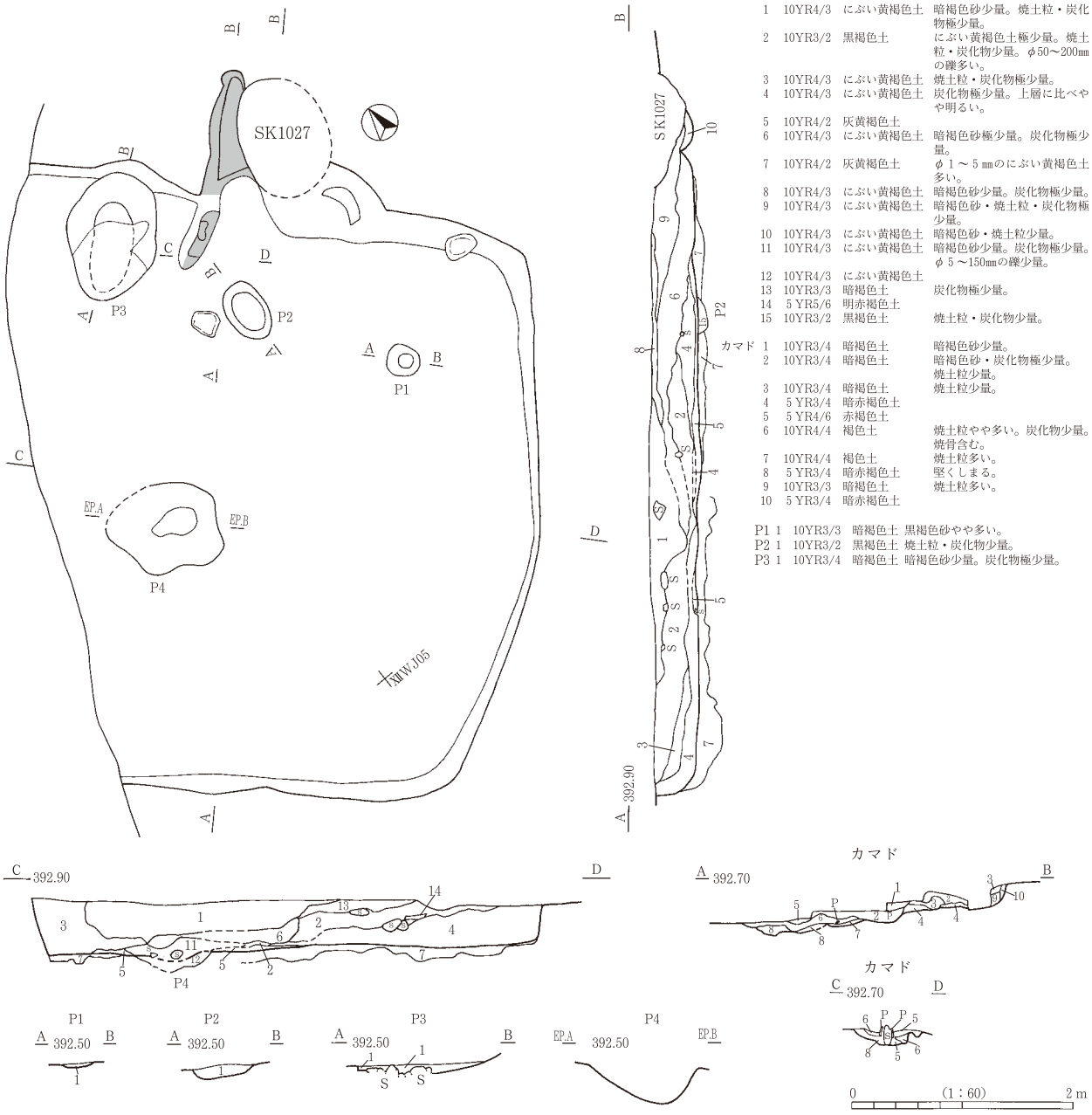




1　10YR2/3　黒褐色土　　φ５～50㎜のにぶい黄褐色土・焼土粒極少量。炭化物少量。
2　10YR3/2　黒褐色土　　焼土粒やや多い。炭化物・灰極少量。
3　10YR3/3　暗褐色土　　砂質。φ５㎜位の極暗赤褐色土少量。炭化物極少量。
4　10YR3/3　暗褐色土　　砂質。φ５㎜位の極暗赤褐色土少量。
5　　灰層。
6　５YR4/3　にぶい赤褐色土
7　５YR3/3　暗赤褐色土　　砂質。暗褐色砂少量。
8　10YR3/3　暗褐色土　　焼土粒・炭化物極少量。
P1　1　10YR2/3　黒褐色土　焼土粒・炭化物極少量。
P2　1　10YR2/3　黒褐色土　P1の１層に似るが焼土含まず。
P3　1　10YR2/3　黒褐色土　P1の１層に似るが焼土粒・炭化物少ない。



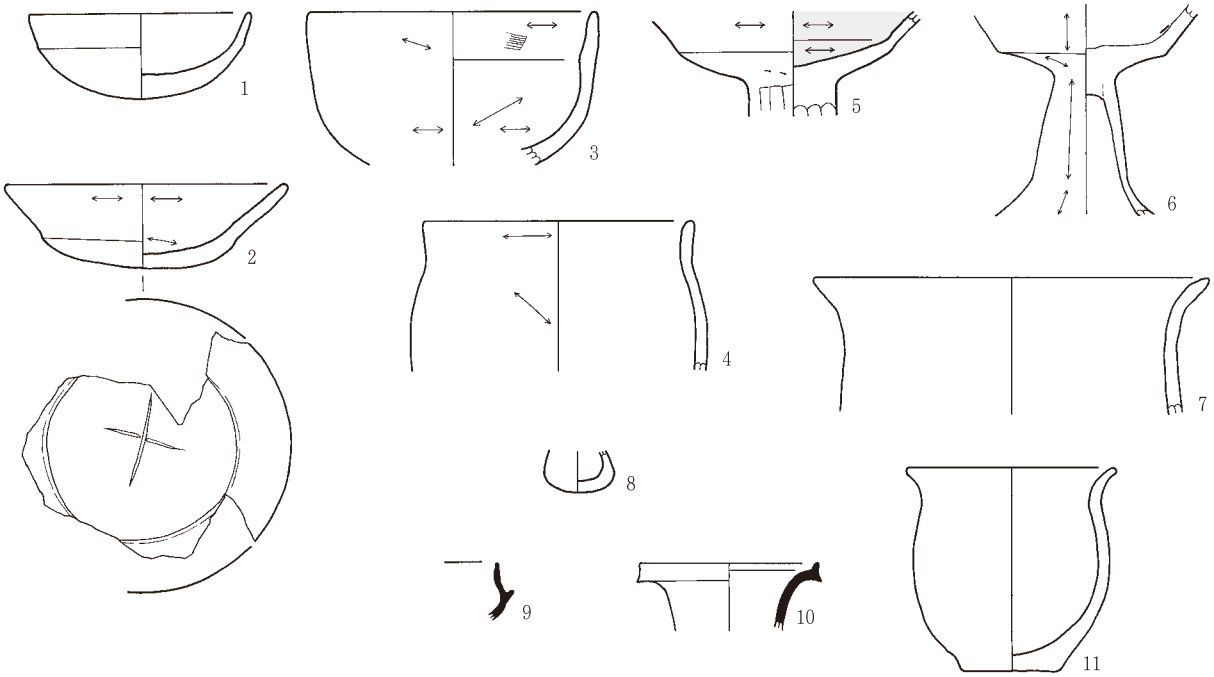
第40図　SB50



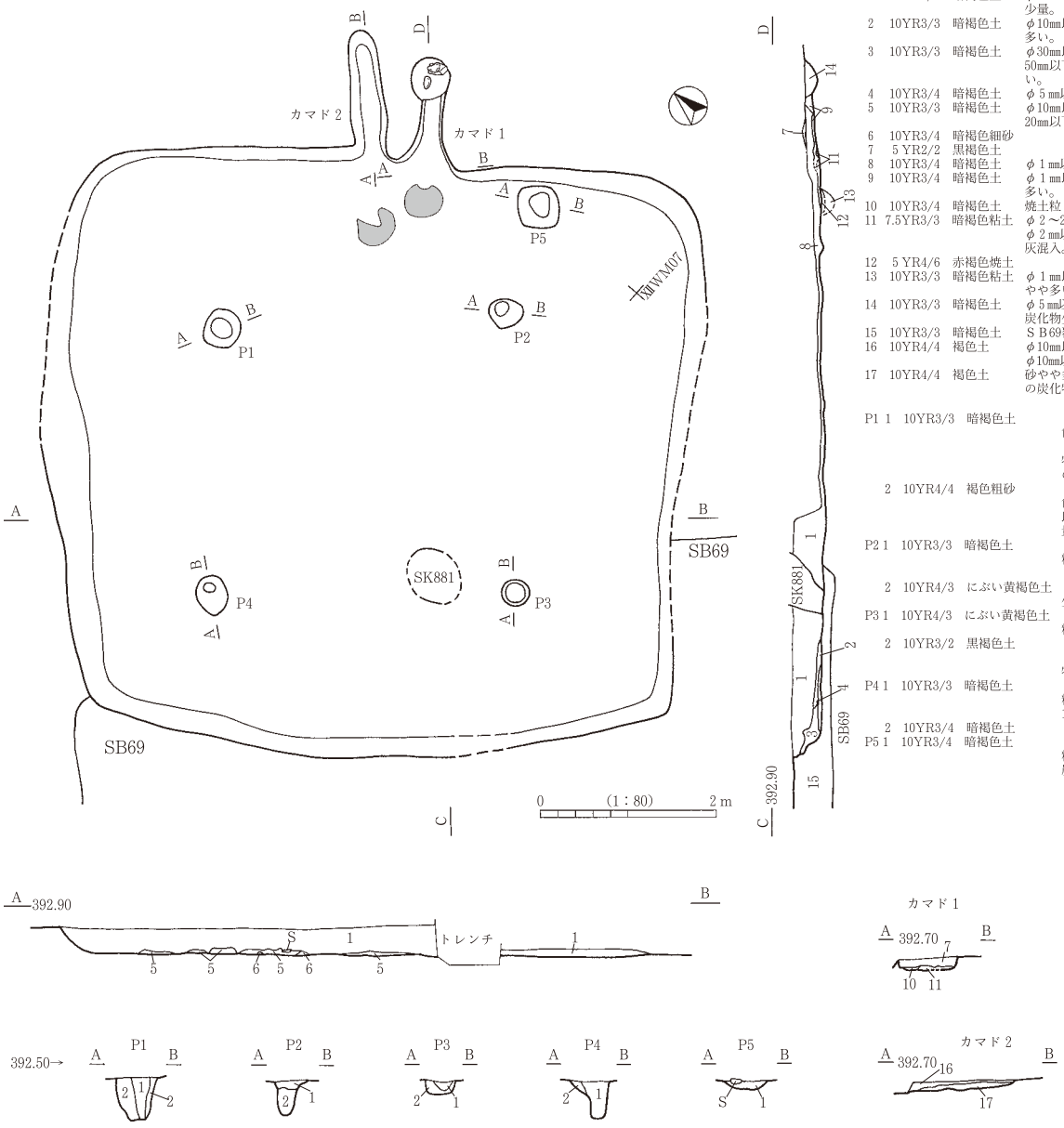
1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂少量。焼土粒・炭化物極少量。
2	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色土極少量。焼土粒・炭化物少量。φ50～200㎜の礫多い。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒・炭化物極少量。
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物極少量。上層に比べやや明るい。
5	10YR4/2	灰黄褐色土	
6	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂極少量。炭化物極少量。
7	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜のにぶい黄褐色土多い。
8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂少量。炭化物極少量。
9	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂・焼土粒・炭化物極少量。
10	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂・焼土粒少量。
11	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色砂少量。炭化物極少量。φ５～150㎜の礫少量。
12	10YR4/3	にぶい黄褐色土	
13	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極少量。
14	5YR5/6	明赤褐色土	
15	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒・炭化物少量。
カマド 1	10YR3/4	暗褐色土	暗褐色砂少量。
2	10YR3/4	暗褐色土	暗褐色砂・炭化物極少量。焼土粒少量。
3	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒少量。
4	5YR3/4	暗赤褐色土	
5	5YR4/6	赤褐色土	
6	10YR4/4	褐色土	焼土粒やや多い。炭化物少量。焼骨含む。
7	10YR4/4	褐色土	焼土粒多い。
8	5YR3/4	暗赤褐色土	堅くしまる。
9	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒多い。
10	5YR3/4	暗赤褐色土	

P1 1　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色砂やや多い。
P2 1　10YR3/2　黒褐色土　焼土粒・炭化物少量。
P3 1　10YR3/4　暗褐色土　暗褐色砂少量。炭化物極少量。

第41図　SB70遺構図



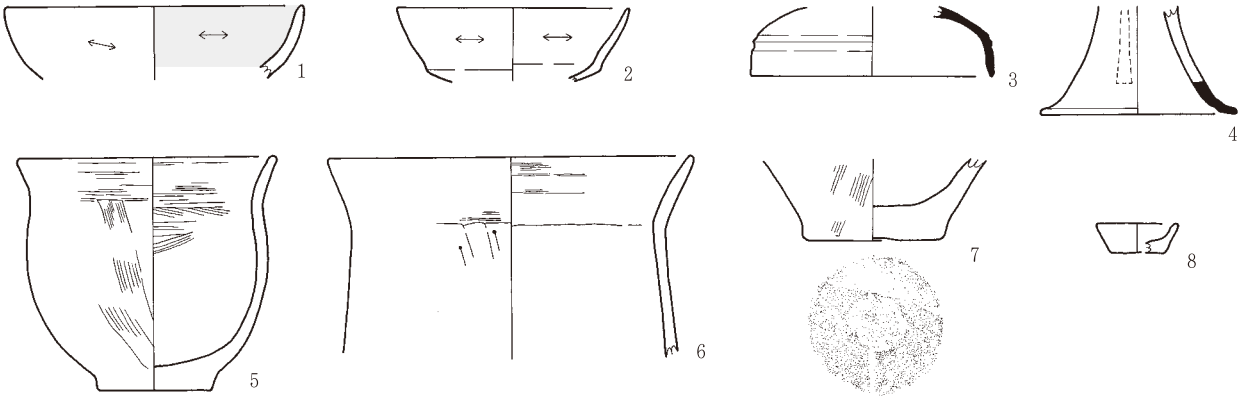
第42図　SB70遺物



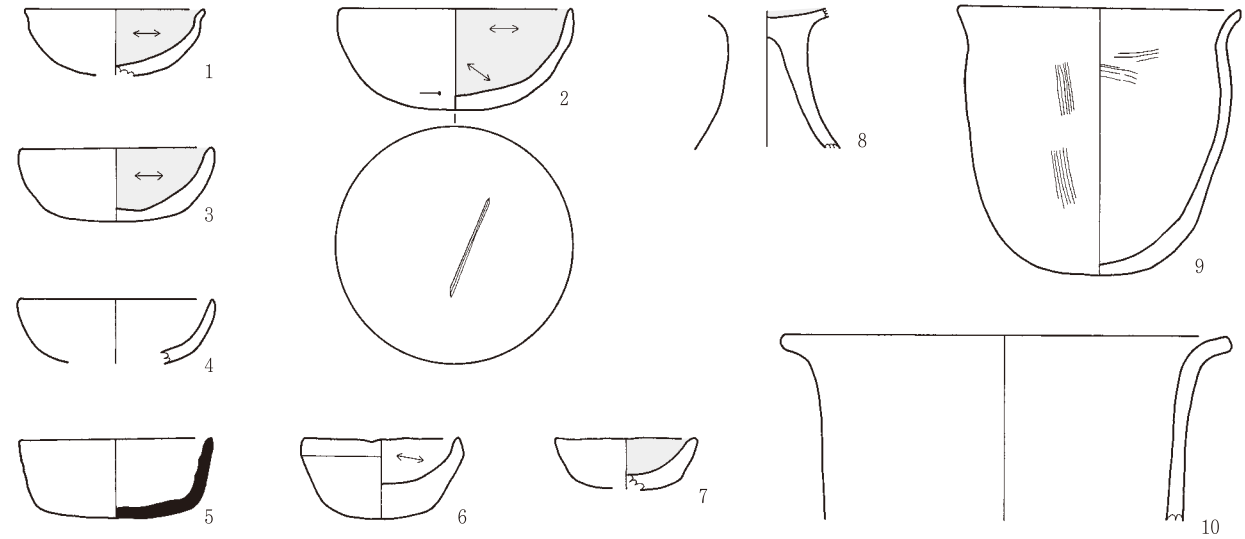
1	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土少量。
2	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の炭化物やや多い。
3	10YR3/3	暗褐色土	φ30㎜以下の焼土粒・φ50㎜以下の炭化物やや多い。
4	10YR3/4	暗褐色土	φ５㎜以下の炭化物少量。
5	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の焼土粒・φ20㎜以下の炭化物少量。
6	10YR3/4	暗褐色細砂	
7	５YR2/2	黒褐色土	
8	10YR3/4	暗褐色土	φ１㎜以下の焼土粒少量。
9	10YR3/4	暗褐色土	φ１㎜以下の焼土粒やや多い。
10	10YR3/4	暗褐色土	焼土粒・炭化物少量。
11	7.5YR3/3	暗褐色粘土	φ２～20㎜の焼土粒多い。φ２㎜以下の炭化物少量。灰混入。
12	５YR4/6	赤褐色焼土	
13	10YR3/3	暗褐色粘土	φ１㎜以下の褐灰色粘土やや多い。
14	10YR3/3	暗褐色土	φ５㎜以下の黒褐色粘土・炭化物少量。
15	10YR3/3	暗褐色土	ＳＢ69覆土。
16	10YR4/4	褐色土	φ10㎜以下の黒褐色土・φ10㎜以下の炭化物少量。
17	10YR4/4	褐色土	砂やや多い。φ５㎜以下の炭化物極少量。
P1 1	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ10㎜以下の炭化物・φ100㎜以下の礫極少量。
2	10YR4/4	褐色粗砂	φ10㎜以下の褐灰色土少量。φ５㎜以下の炭化物極少量。
P2 1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の焼土粒極少量。φ２～５㎜の炭化物少量。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ２㎜位の炭化物少量。
P3 1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ２㎜以下の焼土粒・炭化物少量。
2	10YR3/2	黒褐色土	φ２㎜位の焼土粒・φ２～５㎜の炭化物少量。
P4 1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～２㎜の焼土粒極少量。φ１～10㎜の炭化物少量。
2	10YR3/4	暗褐色土	
P5 1	10YR3/4	暗褐色土	φ２～10㎜の焼土粒・φ２～20㎜の炭化物少量。

第43図　SB72遺構図

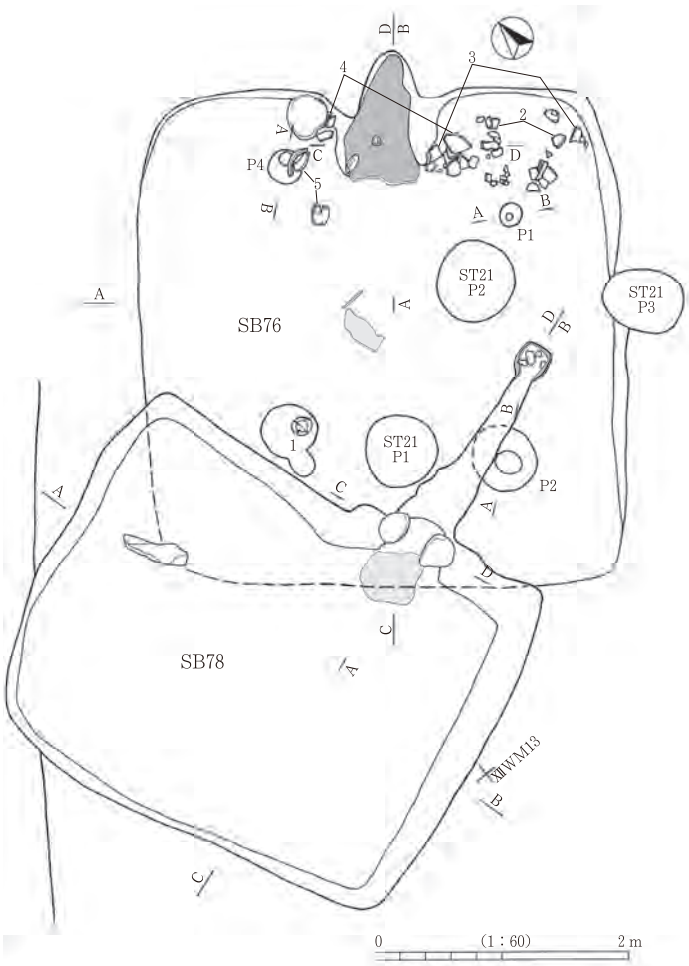
SB69



SB72

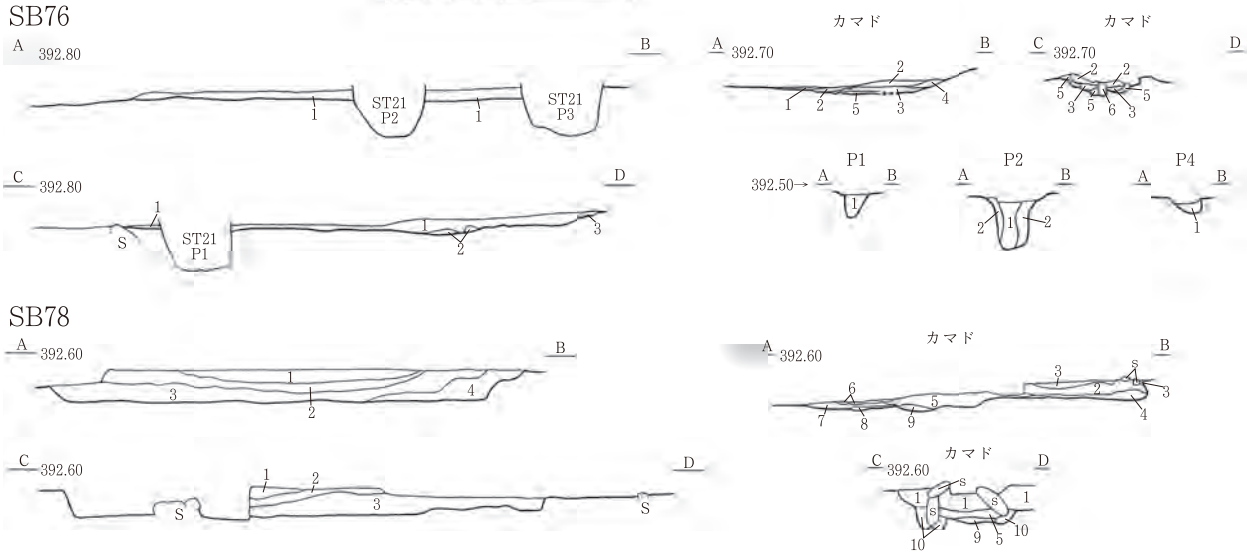


第44図　SB69・72遺物



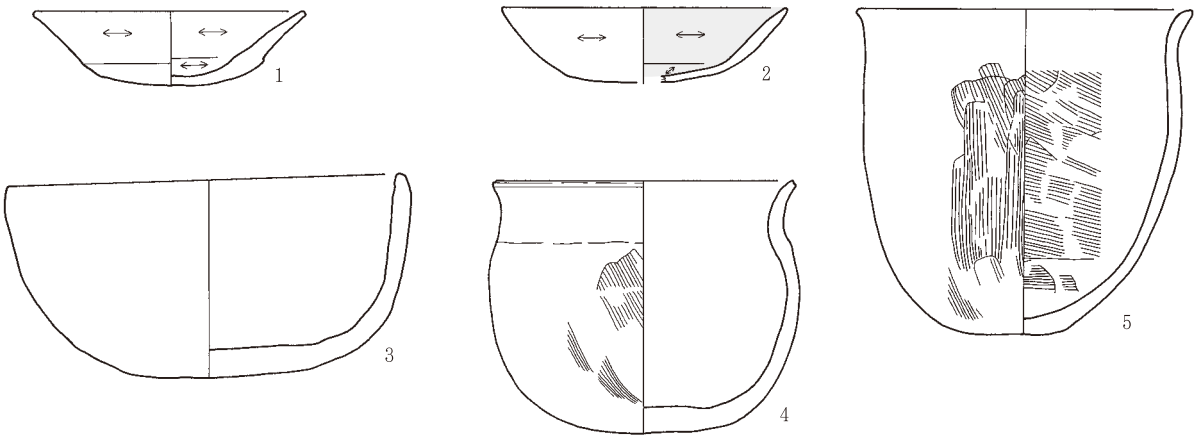
SB76	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒やや多い。炭化物少量。
	3	5 YR3/4	暗赤褐色土	
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量。炭化物多い。
	2	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒やや多い。炭化物少量。
	3	10YR5/3	にぶい黄褐色土	焼土粒やや多い。炭化物極少量。
	4	5 YR3/2	暗赤褐色土	焼土粒少量。
	5	5 YR3/4	暗赤褐色土	
	6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量。炭化物極少量。
P1	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物極少量。
P2	1	10YR3/4	暗褐色土	φ50㎜位の灰黄褐色砂少量。炭化物少量。
	2	10YR3/4	暗褐色土	φ50㎜位の灰黄褐色砂少量。
P4	1	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極少量。

SB78	1	10YR3/4	暗褐色土	炭化物少量。
	2	10YR3/4	暗褐色土	炭化物極少量。上層に比べやや明るい。
	3	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	4	10YR3/4	暗褐色土	炭化物極少量。
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。φ５㎜位の焼土粒やや多い。炭化物少量。
	3	5 YR3/2	暗赤褐色土	暗褐色土多い。
	4	5 YR3/2	暗赤褐色土	暗褐色土少量。灰少量。
	5	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	暗褐色土極少量。炭化物少量。灰やや多い。
	6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量。炭化物多い。灰少量。
	7	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極少量。
	8	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量。炭化物やや多い。灰少量。
	9	5 YR3/4	暗赤褐色土	
	10	10YR3/3	暗褐色土	φ５～50㎜位の焼土粒少量。炭化物少量。

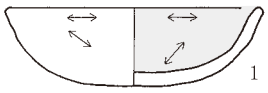


第45図　SB76・78遺構図

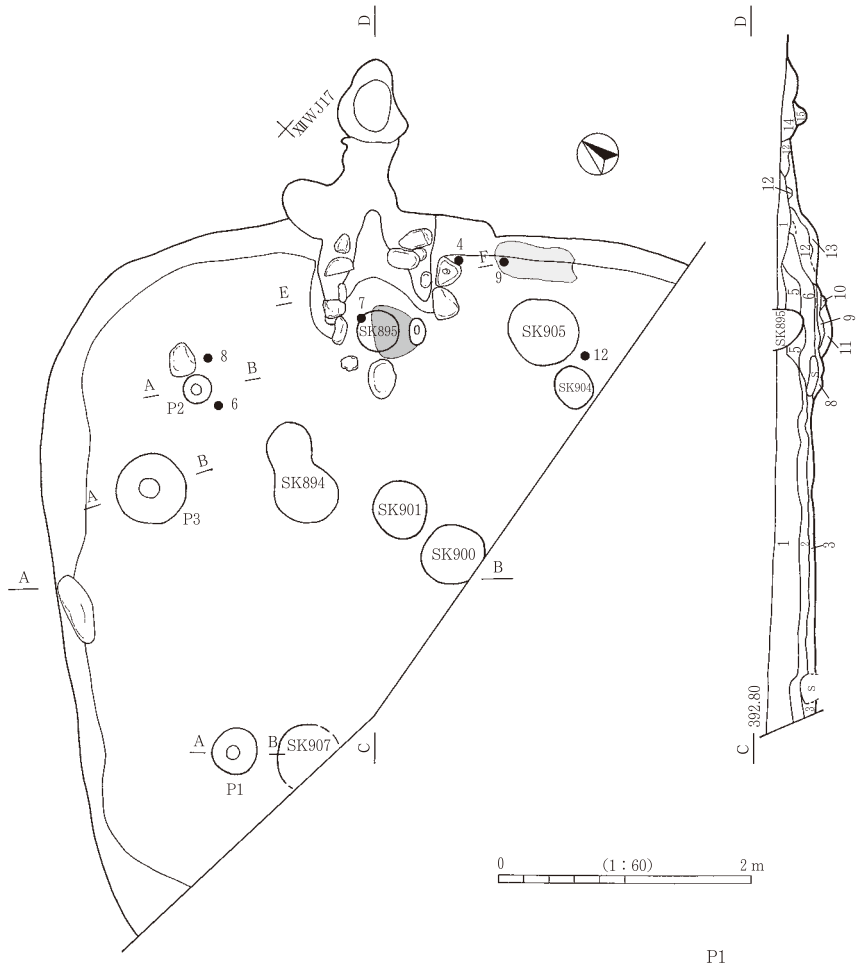
SB76



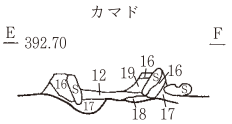
SB78

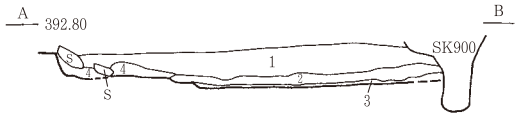


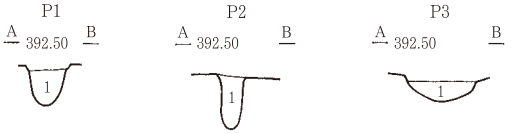
第46図　SB76・78遺物



1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。
2　10YR5/2　灰黄褐色土　炭化物極少量。
3　10YR3/2　黒褐色土　炭化物極少量。
4　10YR3/3　暗褐色土　炭化物やや多い。
5　10YR3/3　暗褐色土　φ５㎜位の灰黄褐色土少量。焼土粒・炭化物極少量。
6　10YR3/3　暗褐色土　φ５㎜位の灰黄褐色土少量。焼土粒やや多い。炭化物少量。
7　10YR4/3　にぶい黄褐色土
8　10YR3/2　黒褐色土　焼土粒やや多い。炭化物少量。灰極少量。
9　10YR5/2　灰黄褐色土　焼土粒少量。炭化物極少量。灰多い。
10　５YR4/4　にぶい赤褐色土　焼土粒多い。灰少量。
11　５YR3/4　暗赤褐色土
12　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒やや多い。炭化物少量。
13　５YR2/4　極暗赤褐色土　暗褐色土やや多い。焼土粒やや多い。
14　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。
15　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒やや多い。炭化物少量。
16　10YR4/3　にぶい黄褐色土　焼土粒少量。炭化物極少量。
17　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒極少量。炭化物少量。
18　10YR4/2　灰黄褐色土　焼土粒少量。炭化物極少量。
19　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒多い。炭化物極少量。灰少量。

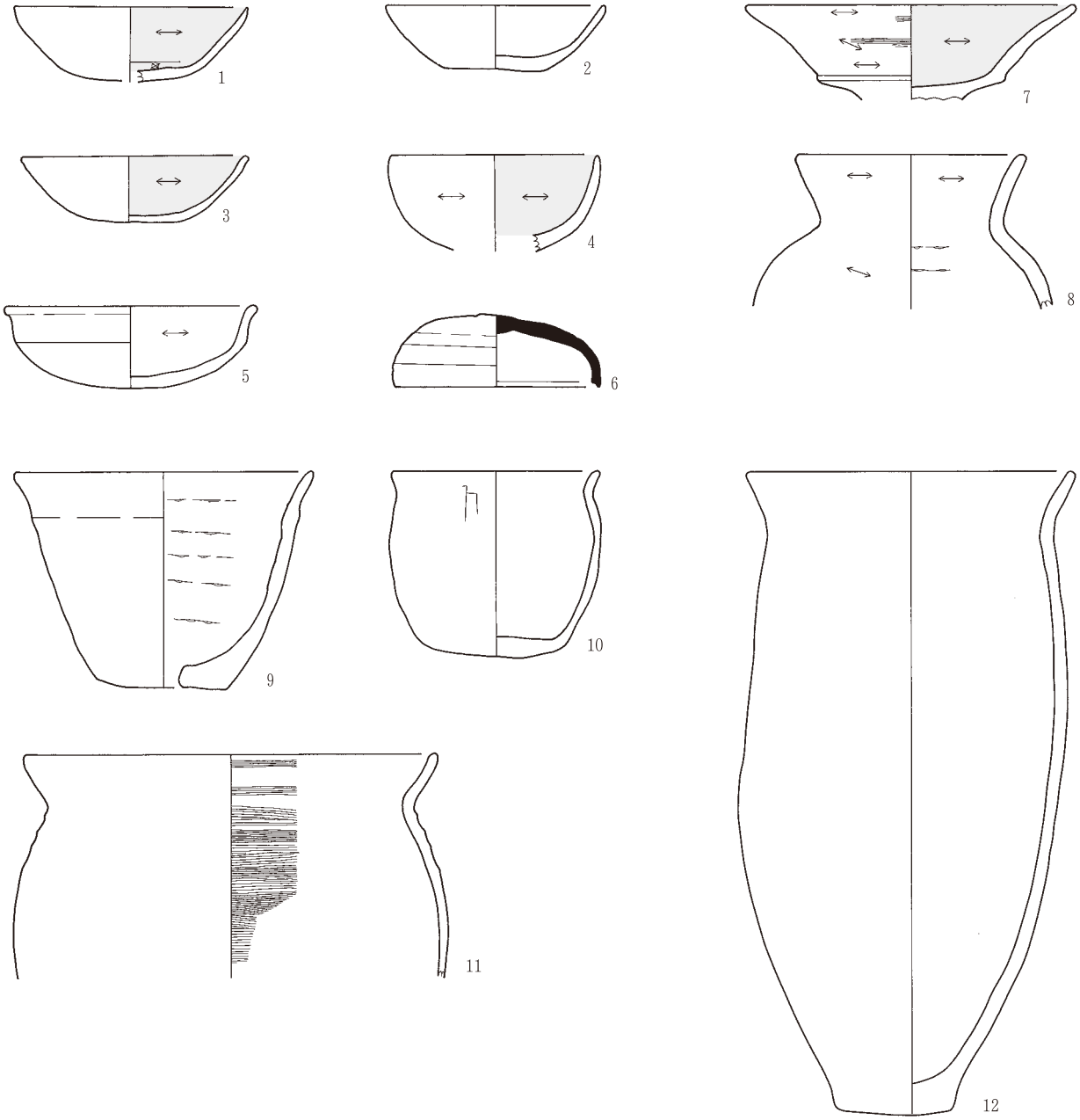




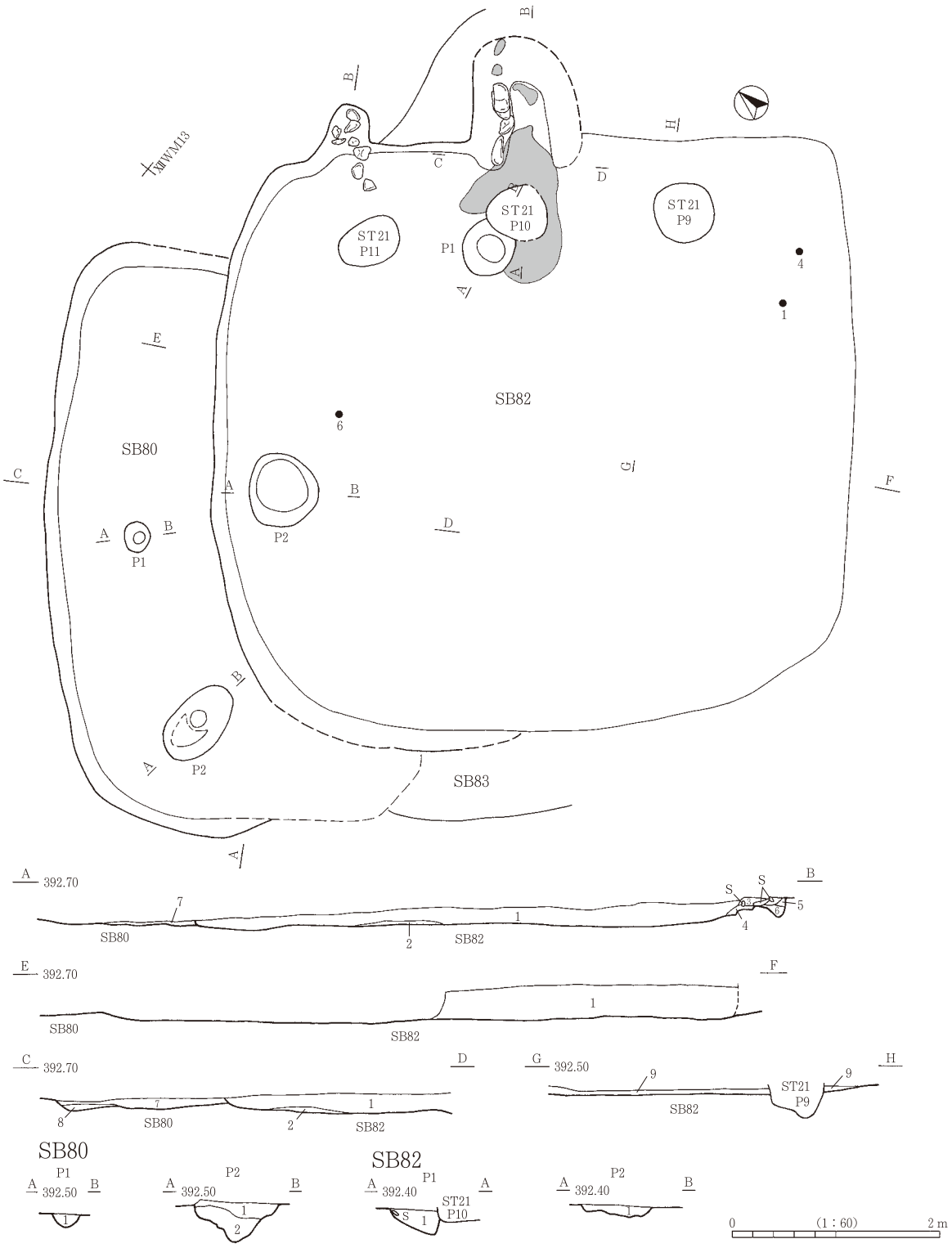


P1　1　10YR3/4　暗褐色土　炭化物極少量。
P2　1　10YR3/4　暗褐色土　炭化物極少量。
P3　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。

第47図　SB79遺構図



第48図　SB79遺物

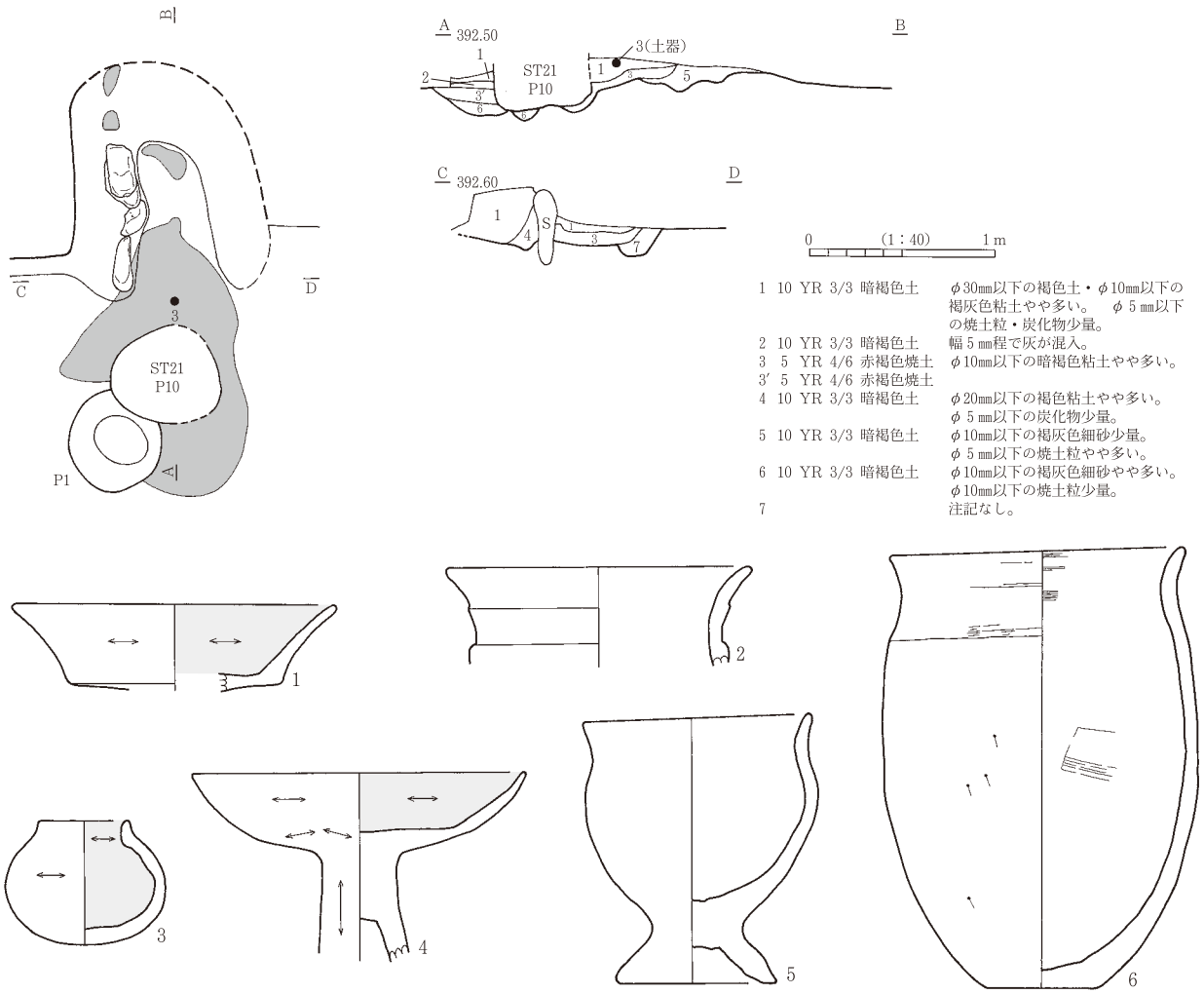


SB80・SB82　1　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜以下の褐灰色土・φ10㎜以下の炭化物少量。
2　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜以下の褐灰色粗砂やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。
3　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜以下の灰少量。
4　10YR2/3　黒褐色土　φ10㎜以下の焼土粒・φ10㎜以下の炭化物が少量。
5　10YR4/4　褐色土
6　10YR2/3　黒褐色土　φ20㎜以下の焼土粒やや多い。φ10㎜以下の炭化物少量。
7　10YR3/3　暗褐色土　φ20㎜以下の褐色砂・φ5㎜以下の炭化物少量。
8　10YR3/4　暗褐色土　φ10㎜以下の褐灰色砂やや多い。φ20㎜以下の焼土粒少量。
9　10YR3/3　暗褐色土　φ５㎜以下の褐灰色粘土やや多い。

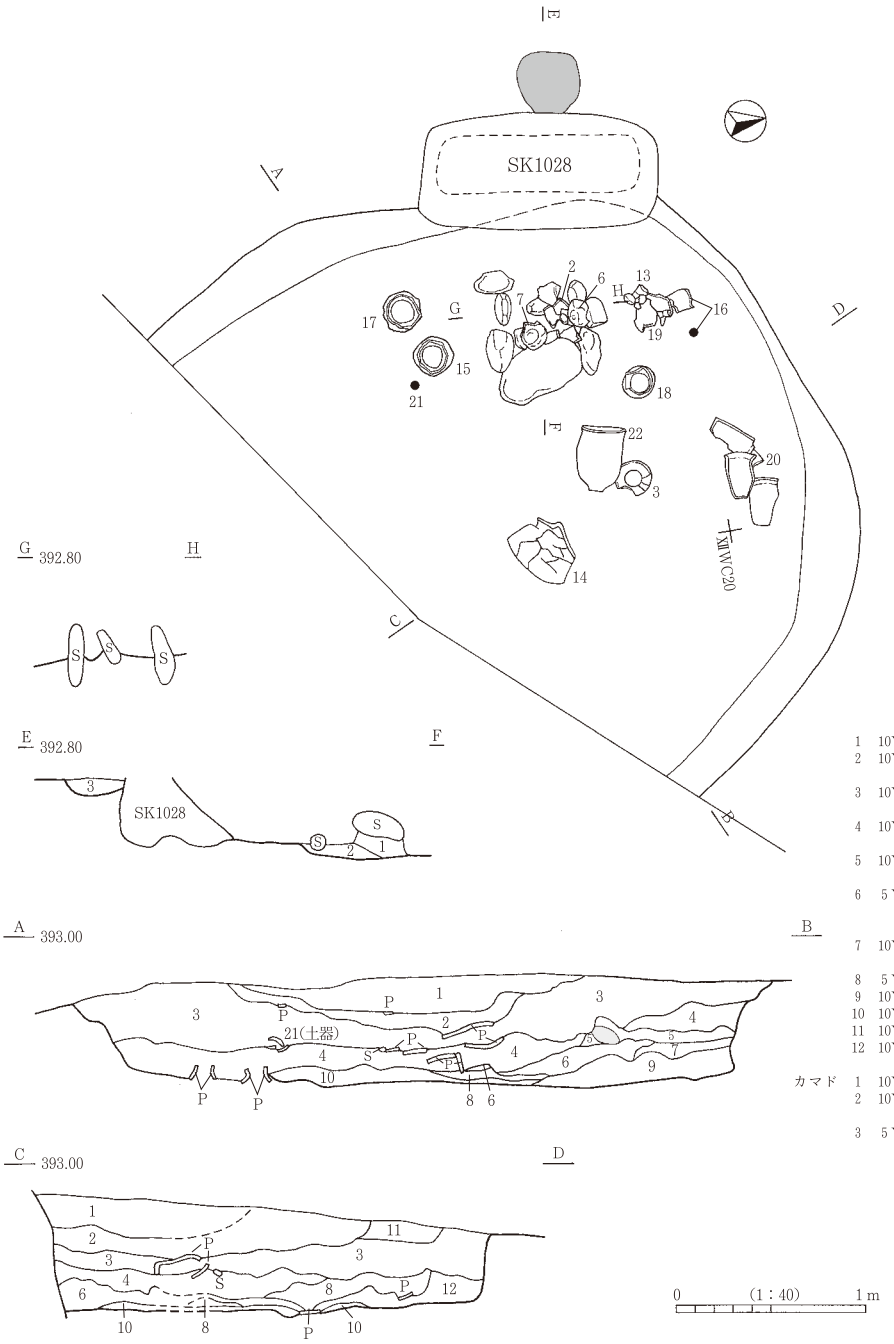
SB80 P1　1　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜以下の褐色細砂・φ５㎜以下の炭化物少量。
P2　1　10YR3/3　暗褐色土　φ100㎜以下の黒褐色土やや多い。φ10㎜以下の炭化物少量。
2　10YR3/4　暗褐色砂　φ30㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。

SB82 P1　1　10YR3/3　暗褐色土　φ10㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。
P2　1　10YR3/3　暗褐色土　φ20㎜以下の褐灰色粗砂やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。

第49図　SB80・82遺構図

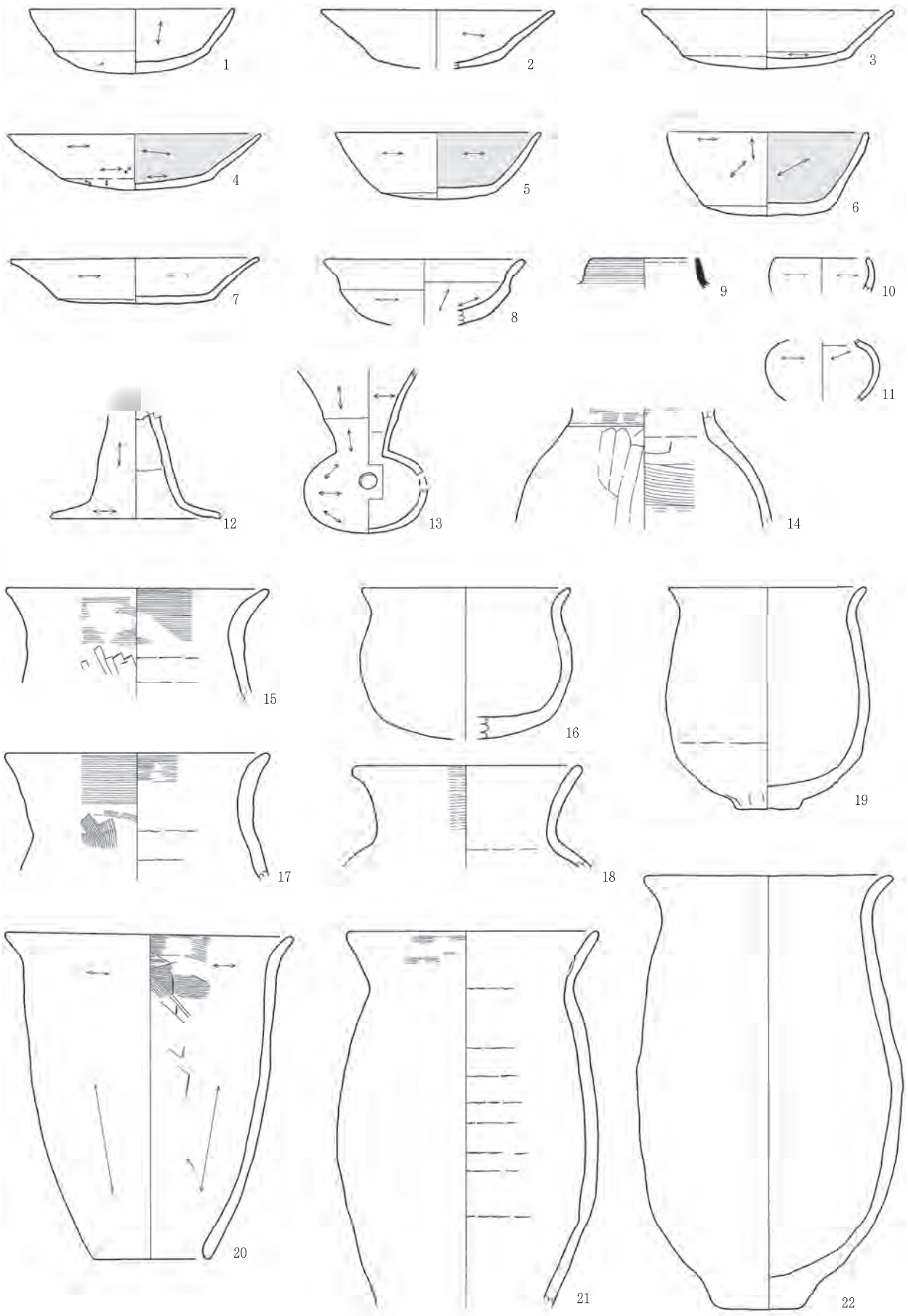


第50図　SB82遺構図・遺物



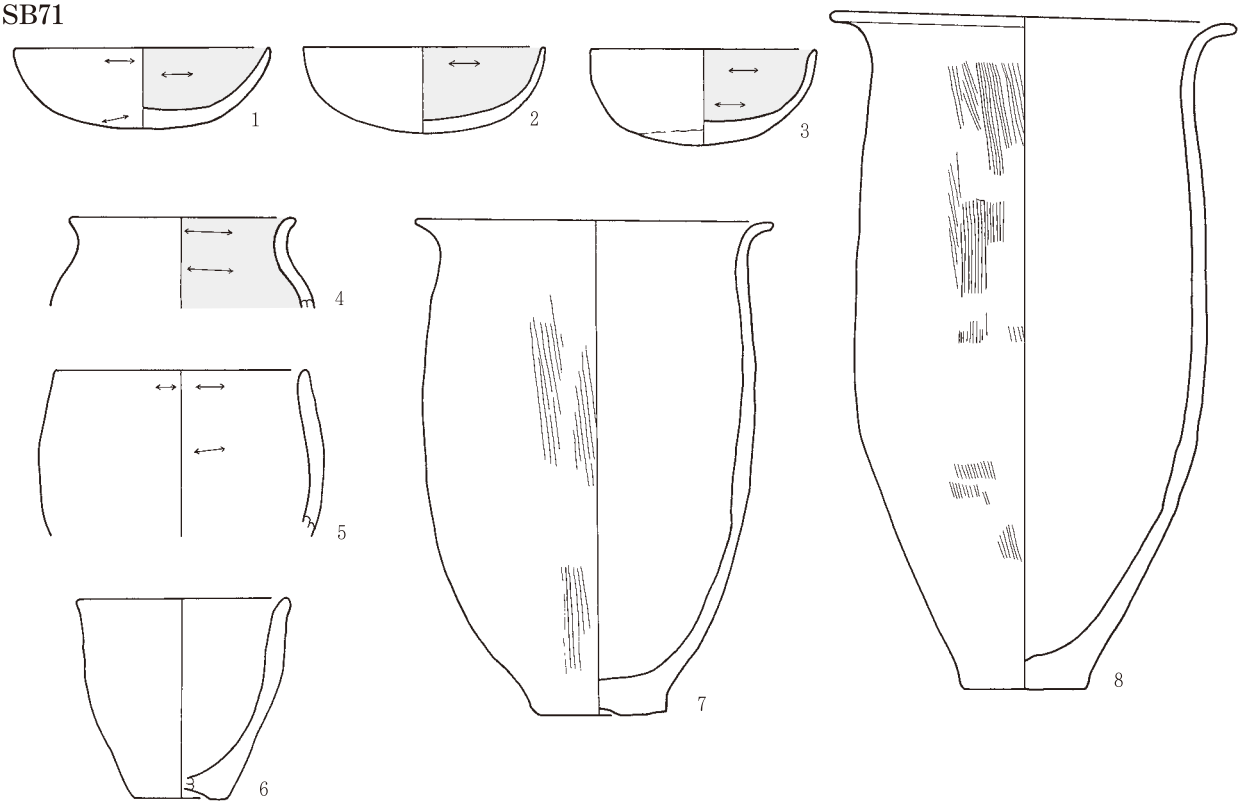
1	10YR2/2	黒褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
2	10YR3/2	黒褐色土	φ５～50㎜の黄褐色土少量。炭化物極少量。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５㎜位の黒褐色土少量。炭化物少量。
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５㎜位の黒褐色やや多い。焼土粒少量。炭化物極少量。
5	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５～50㎜の黒褐色土やや多い。焼土粒少量。炭化物やや多い。
6	５YR3/2	暗赤褐色土	φ５～30㎜のにぶい黄褐色土少量。焼土粒少量。炭化物やや多い。
7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５㎜位の黒褐色土少量。炭化物極少量。
8	５YR3/3	暗赤褐色土	炭化物極少量。
9	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物極少量。
10	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物多い。
11	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物極少量。
12	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ５㎜位のにぶい黄褐色土少量。炭化物やや多い。
カマド 1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物やや多い。灰少量。
2	10YR5/2	にぶい黄褐色土	焼土粒少量。炭化物やや多い。灰多い。
3	５YR3/2	にぶい黄褐色土	にぶい黄褐色砂やや多い。

第51図　SB92遺構図

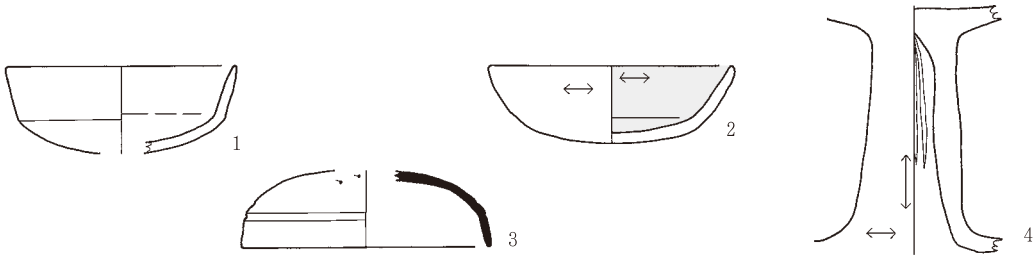


第52図　SB92遺物

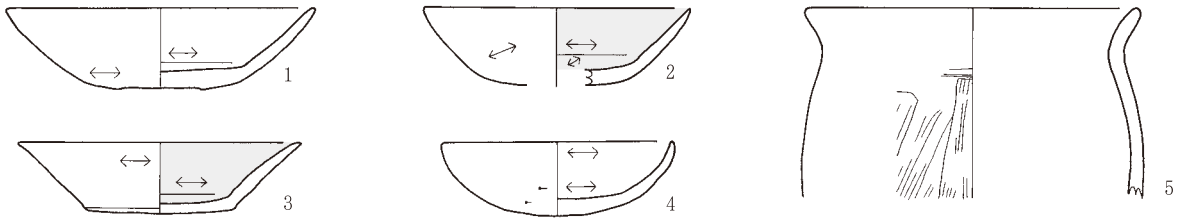
SB71



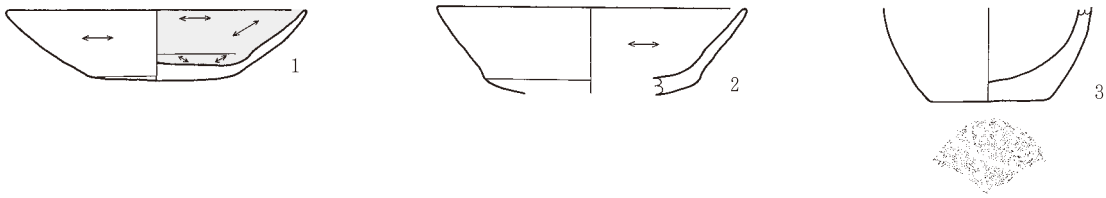
SB73



SB74

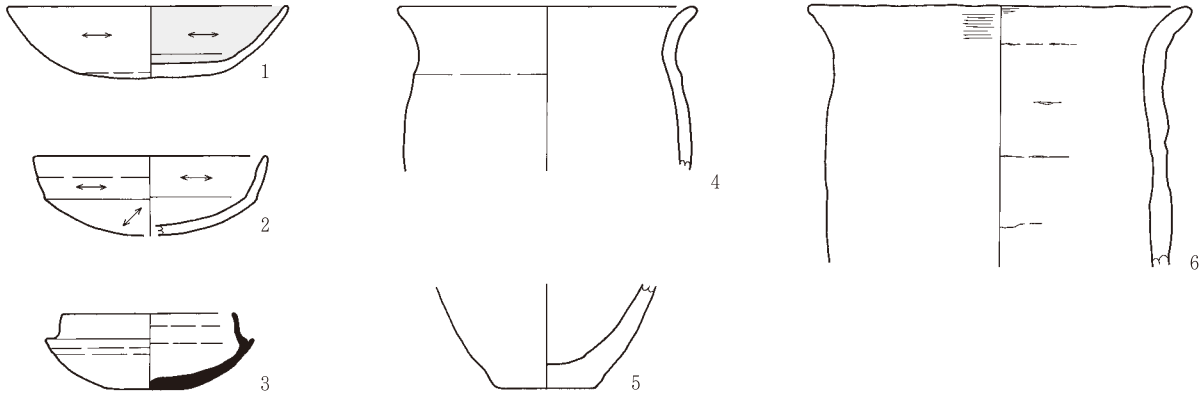


SB83

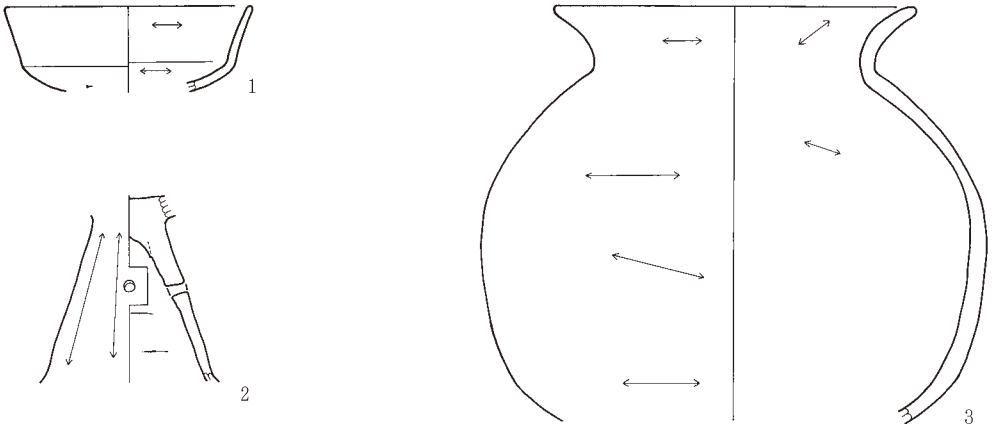


第53図　SB71・73・74・83遺物

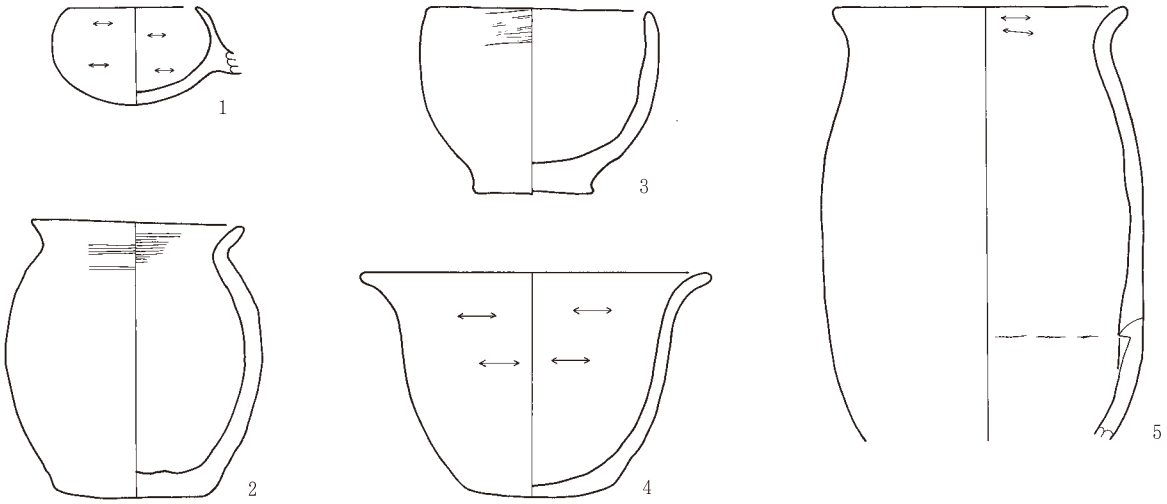
SB85



SB90

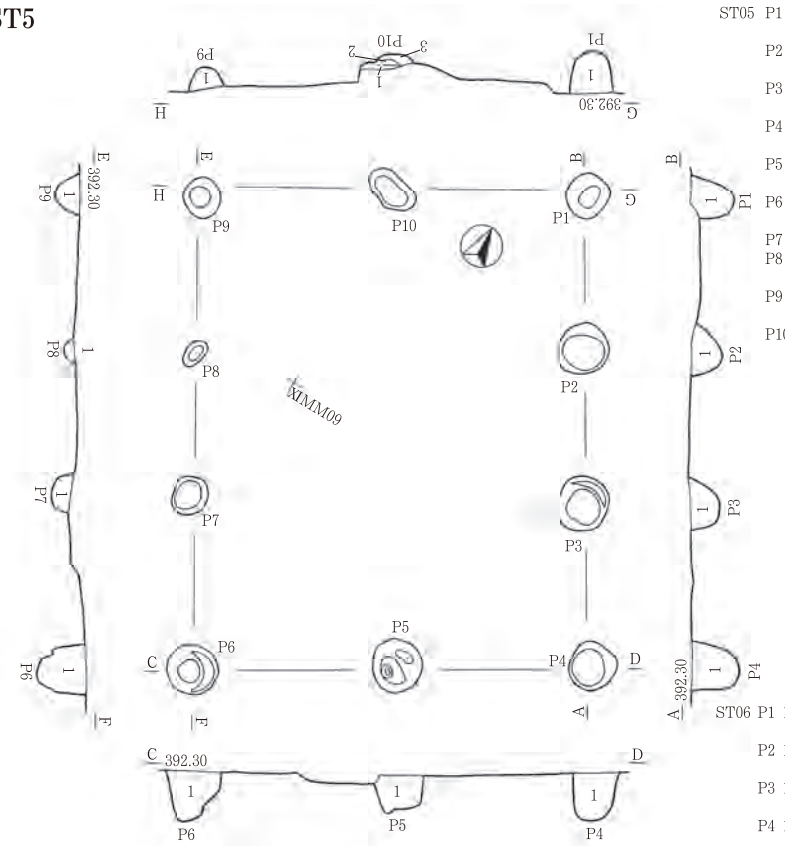


SB91



第54図　SB85・90・91遺物

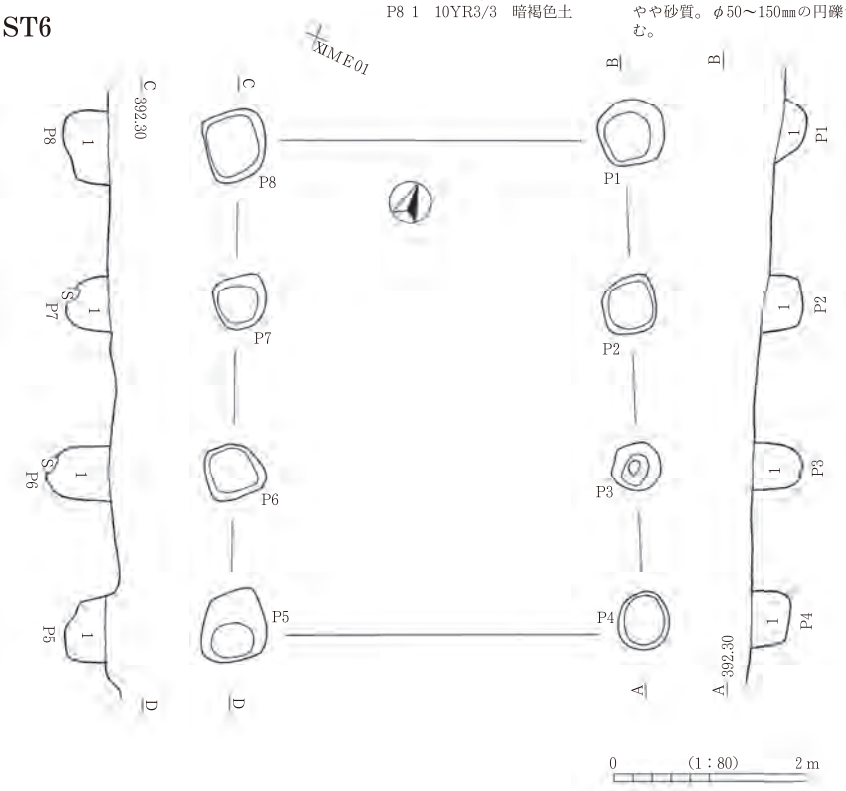
ST5



ST05 P1 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P2 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P3 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土ブロック少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P4 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P5 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P6 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。φ200㎜位の円礫少量。
P7 1 10YR3/3 暗褐色土 褐色土極少量。
P8 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P9 1 10YR3/3 暗褐色土 φ10㎜位の褐色土少量。φ１～２㎜の炭化物少量。
P10 1 10YR3/3 暗褐色土 褐色土極少量。
2 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・暗褐色土含む。
3 10YR3/3 暗褐色土 褐色土極少量。

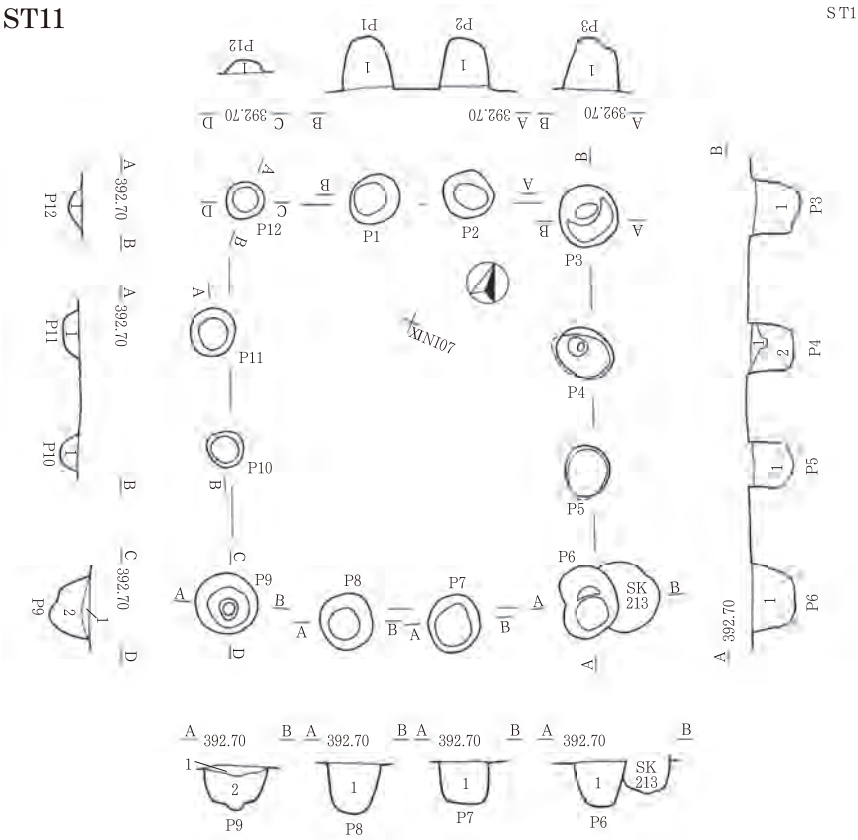
ST06 P1 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。炭化物少量。φ50～150㎜の円礫含む。
P2 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。炭化物少量。φ100～150㎜の円礫含む。
P3 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。焼土粒極少量。炭化物少量。φ50㎜位の円礫含む。
P4 1 10YR3/3 暗褐色土 灰黄褐色粘土含む。焼土粒・φ50㎜位の円礫極少量。炭化物少量。
P5 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。焼土粒極少量。炭化物・φ50㎜位の円礫少量。
P6 1 10YR3/3 暗褐色土 灰黄褐色粘土含む。焼土粒極少量。炭化物・φ１～200㎜の円礫少量。
P7 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。炭化物少量。φ50～150㎜の円礫含む。
2 10YR4/2 灰黄褐色土 φ２～３㎜位のにぶい黄褐色土粒少量。
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや砂質。
P8 1 10YR3/3 暗褐色土 やや砂質。φ50～150㎜の円礫含む。

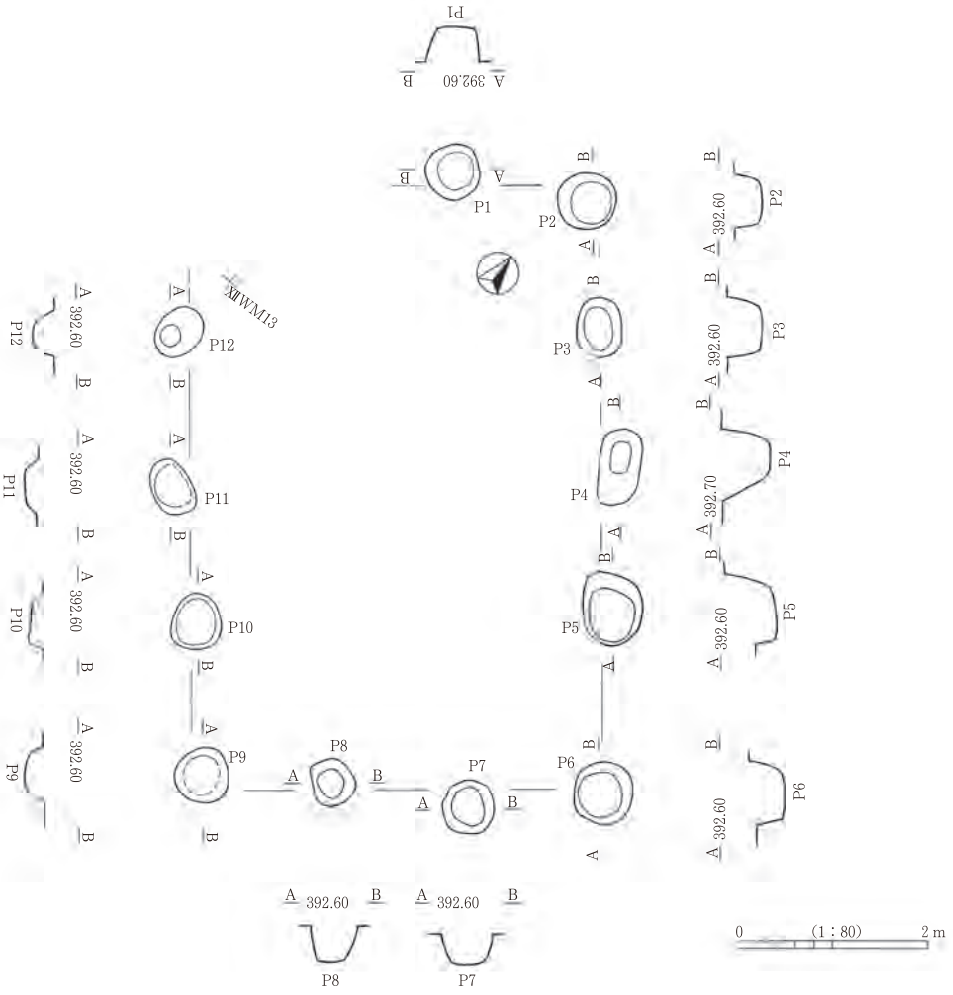
ST6



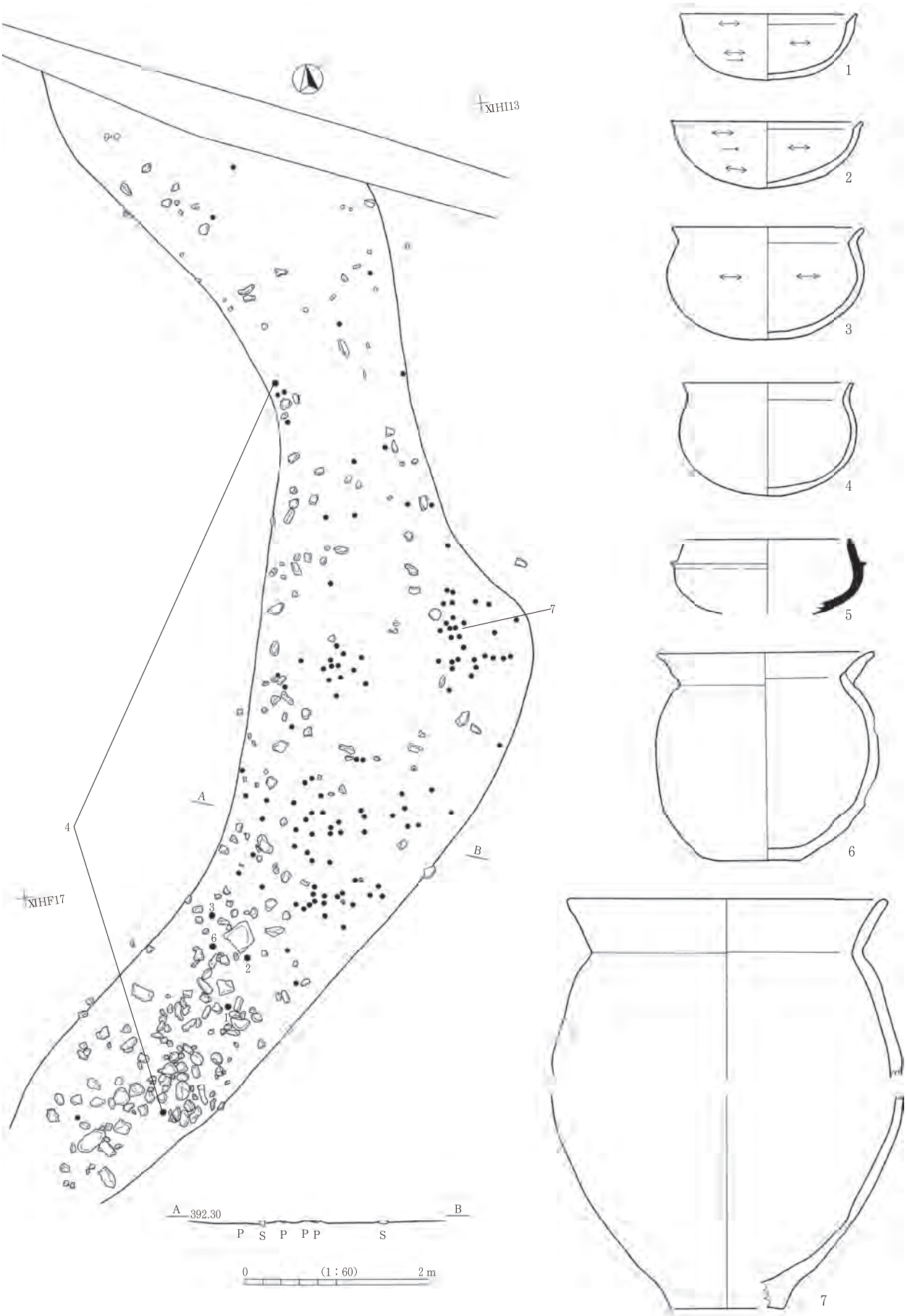
第55図　ST5・6遺構図

ST11


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
SK 213
392.70
392.70
392.70

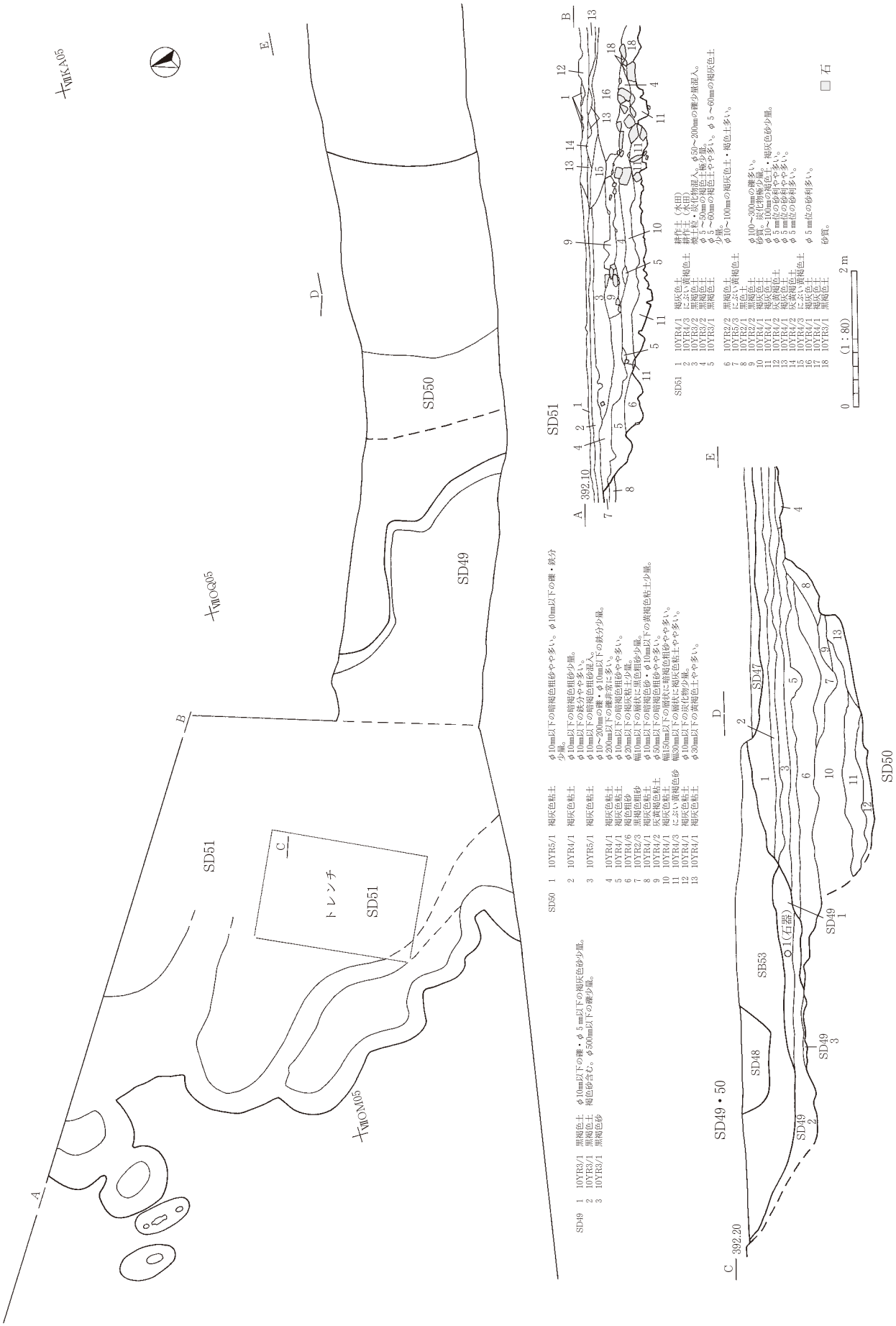


第57図　ST21遺構図

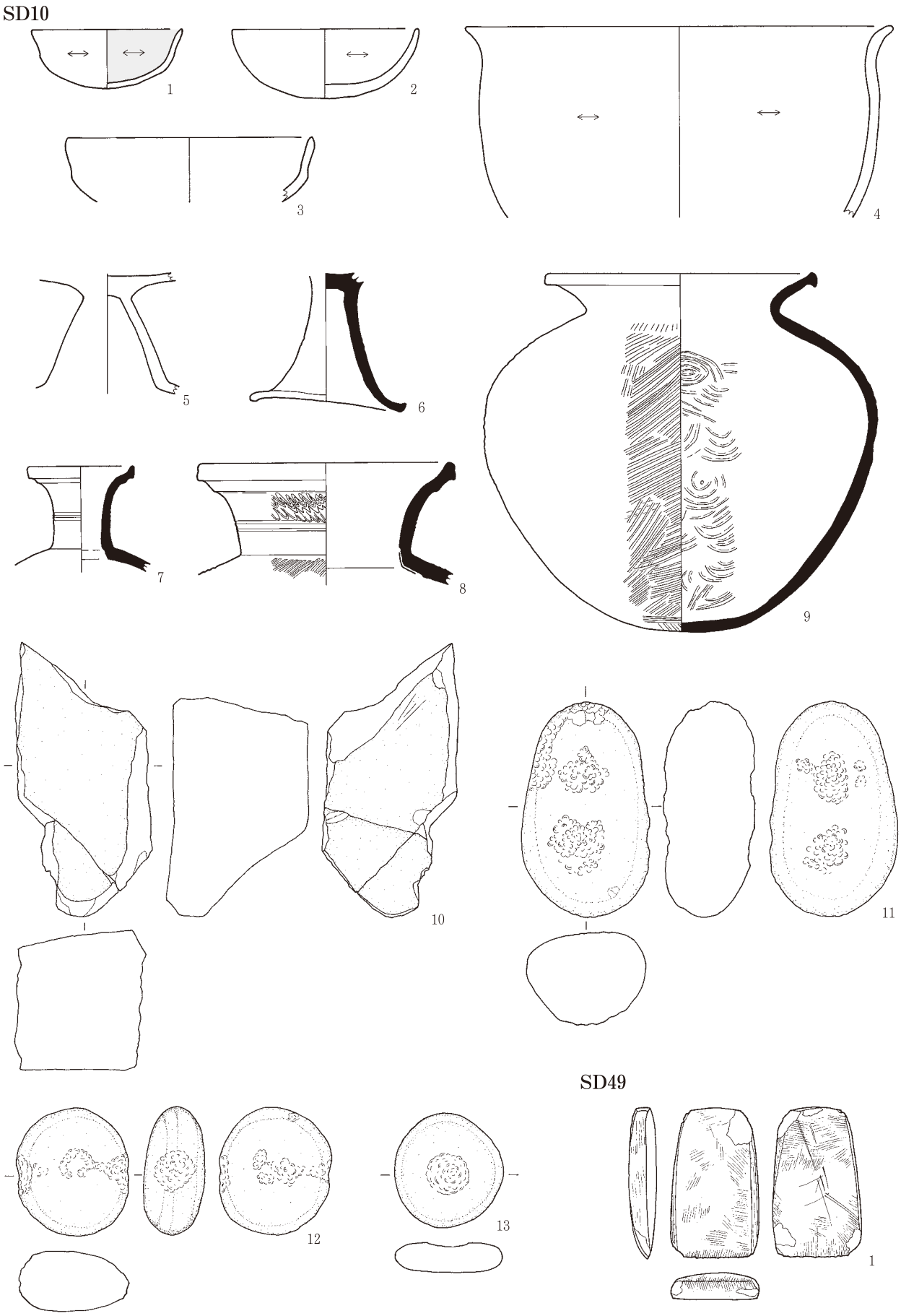


第58図　SD7

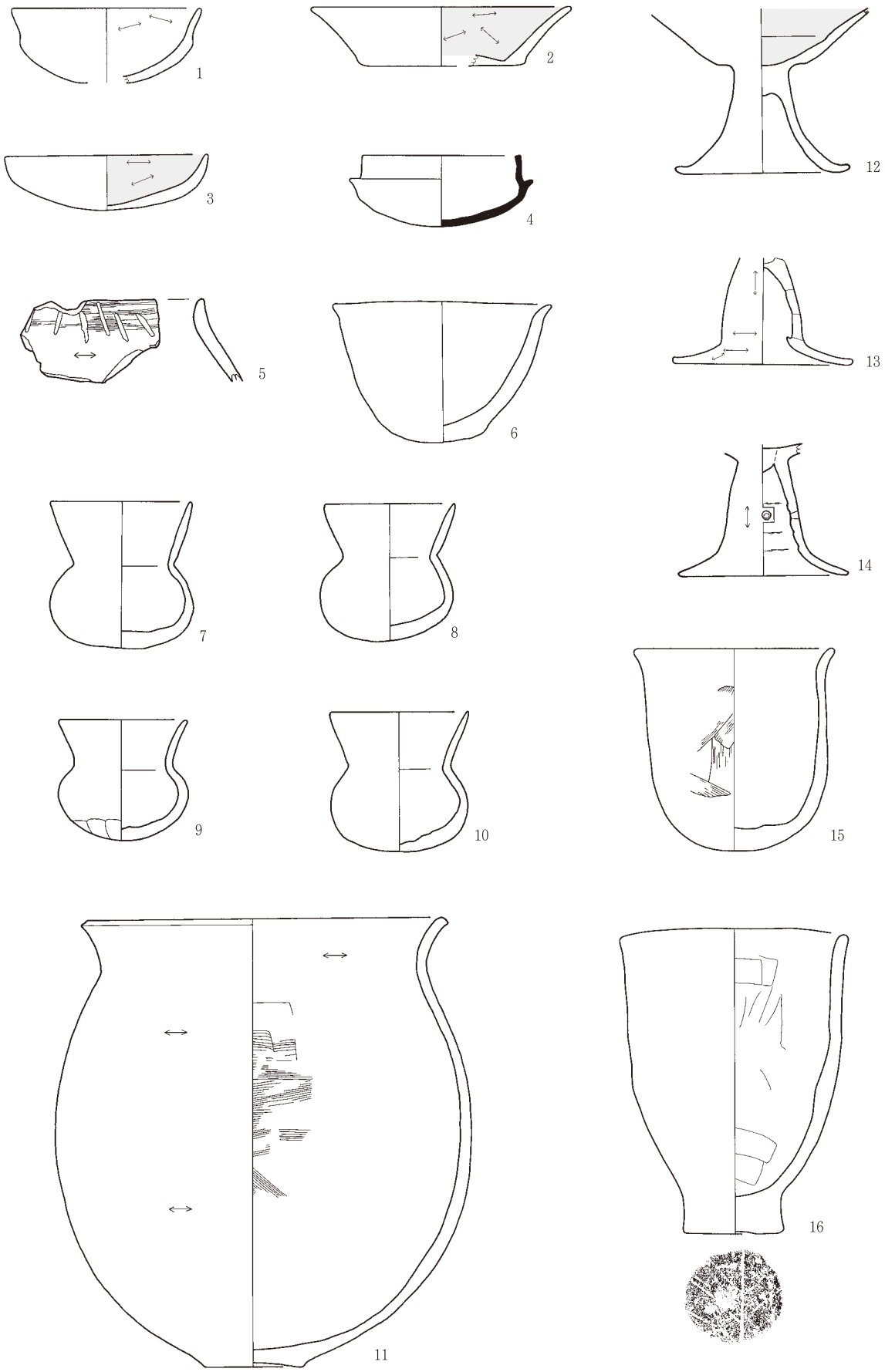
第59図　SD10遺構図



第60図　SD49・50・51遺構図

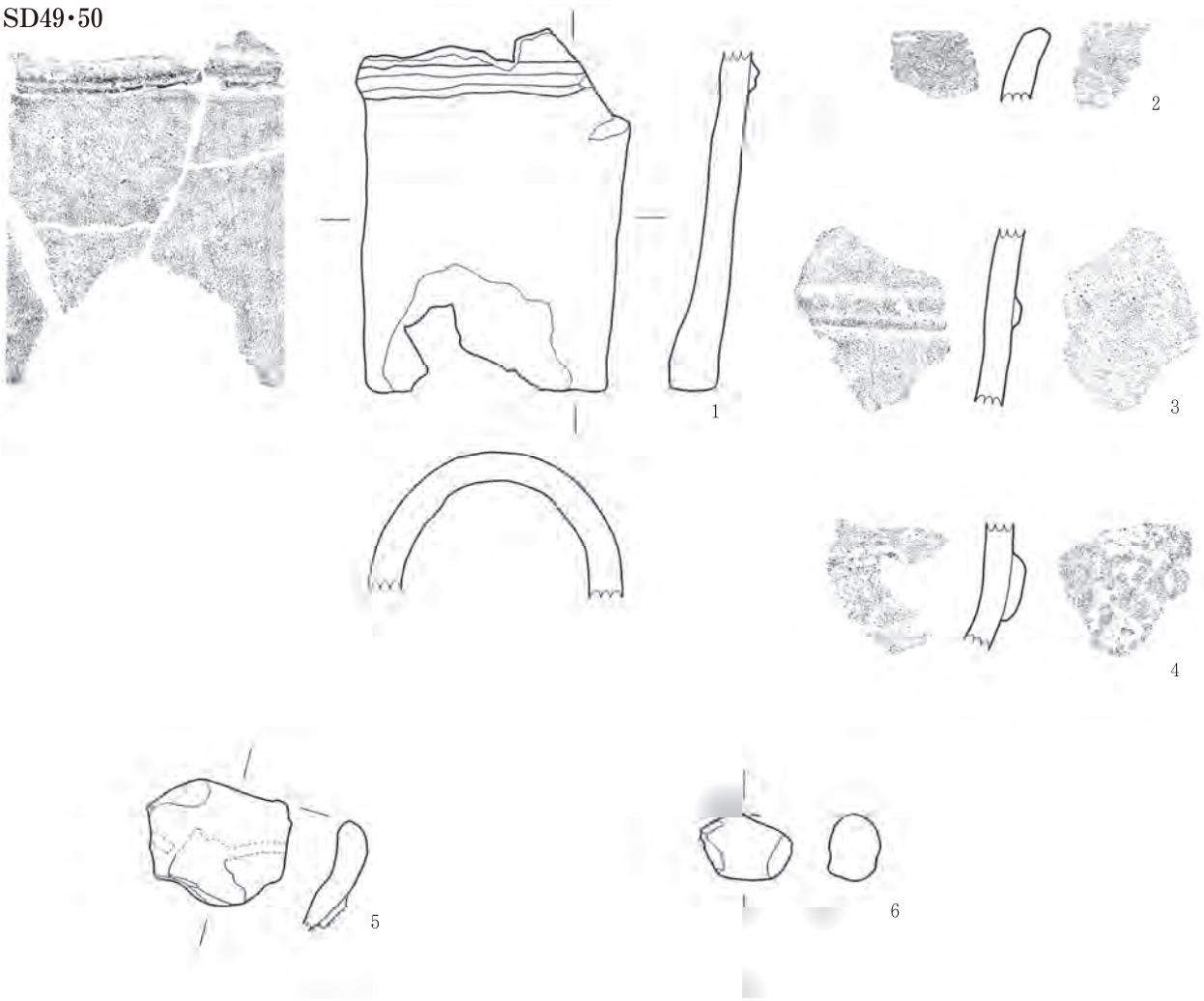


第61図　SD10・49遺物

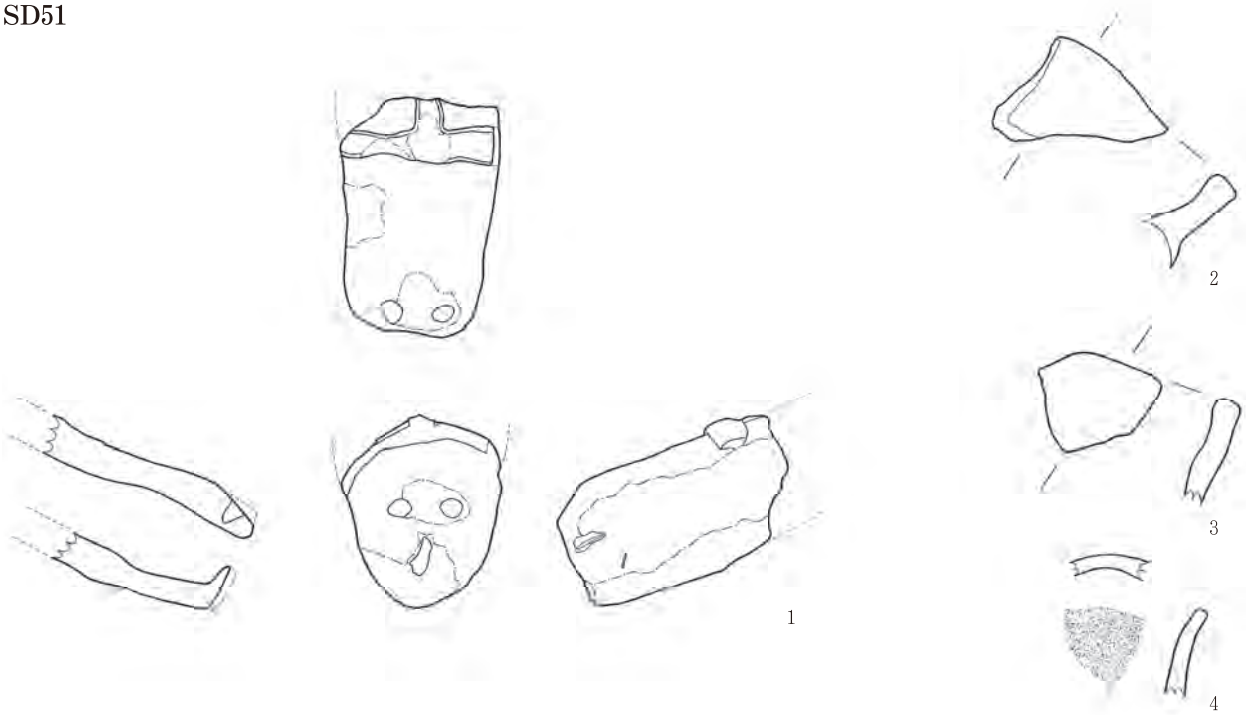


第62図　遺構外出土遺物

SD49・50

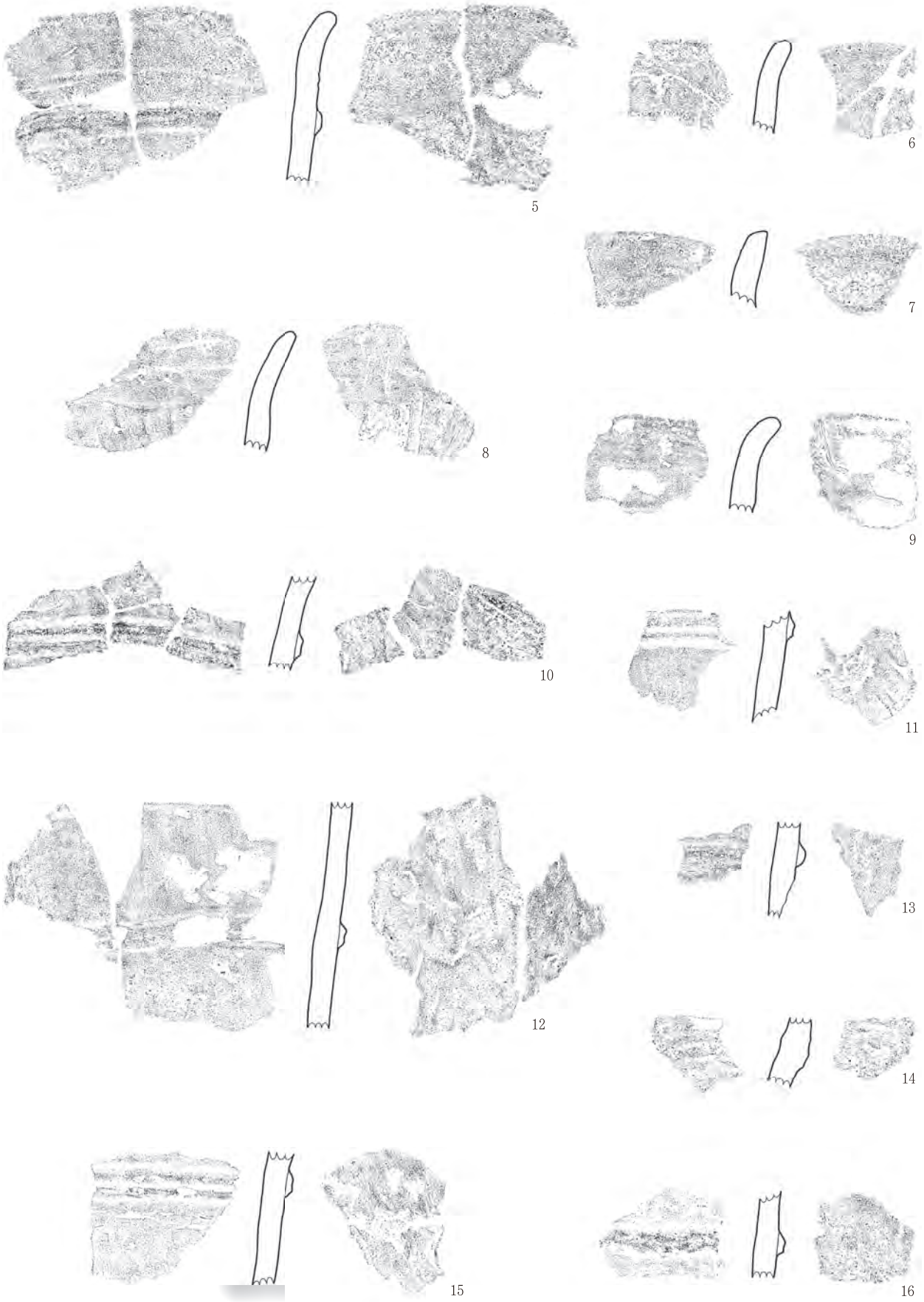


SD51



第63図　埴輪１

SD51

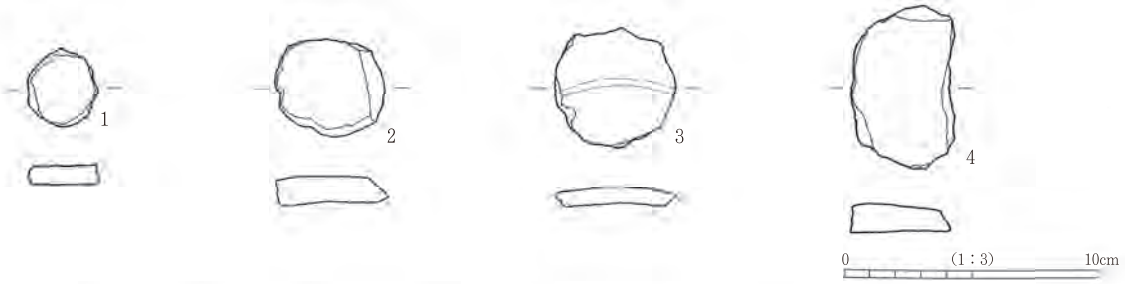


第64図　埴輪２

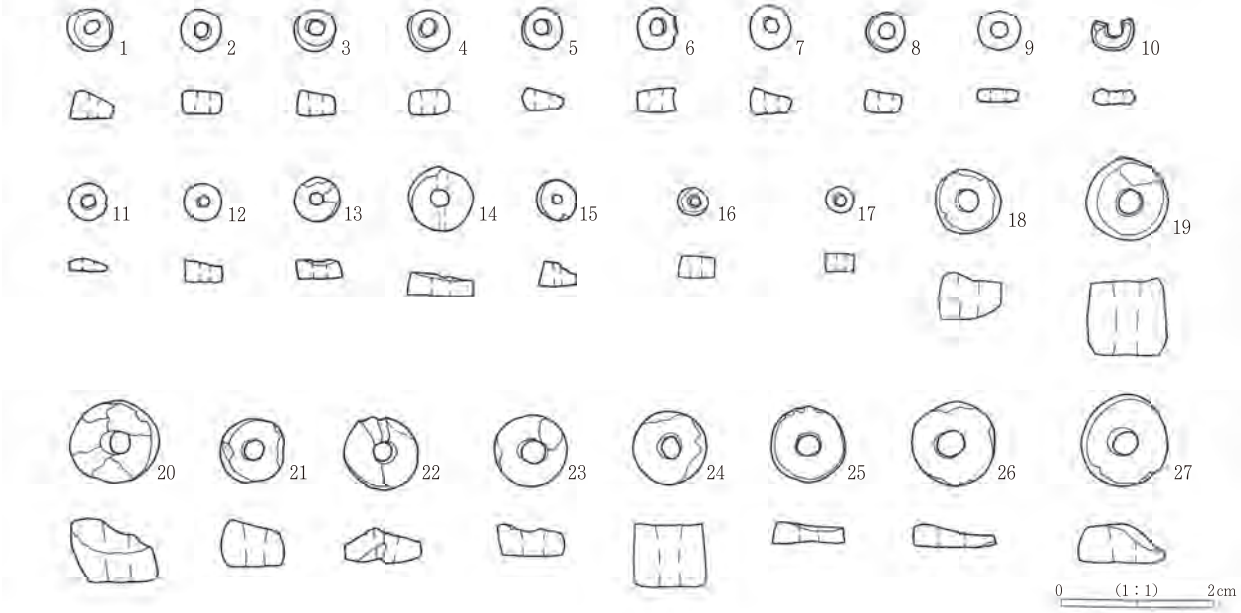
SD51

第65図　埴輪 3

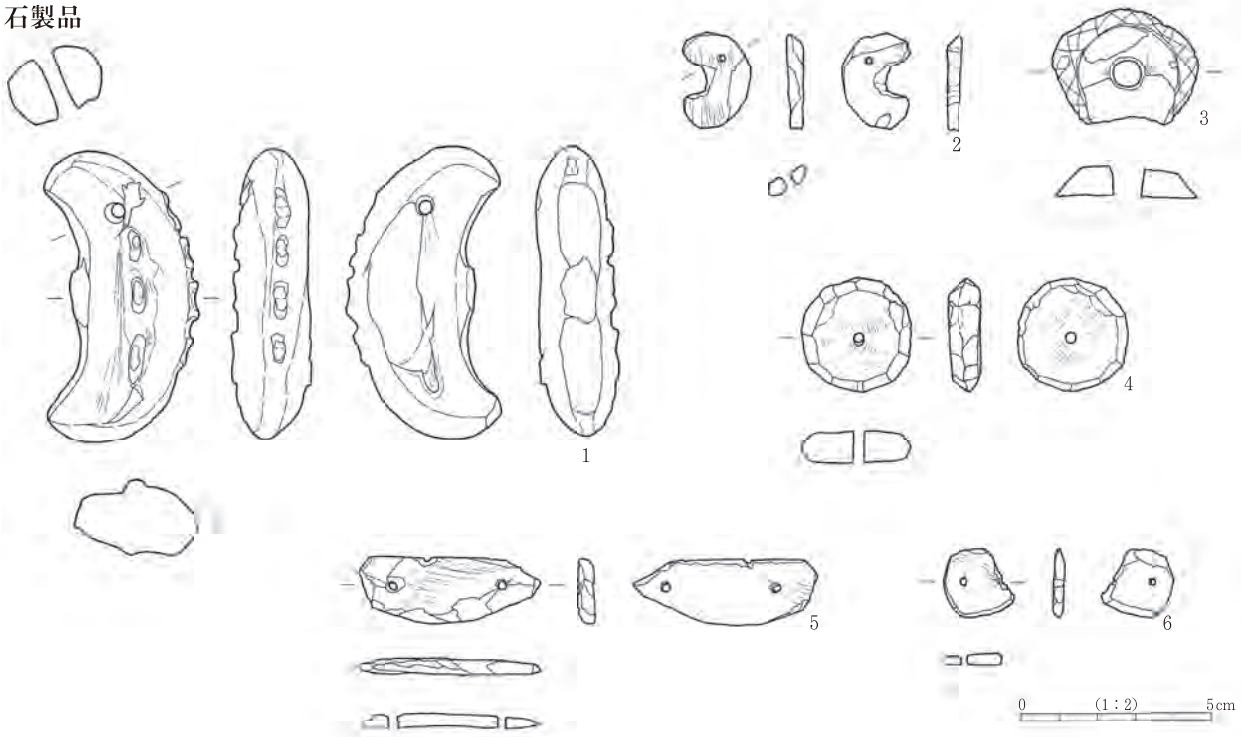
土製品



臼玉



石製品



第66図　土製品・臼玉・石製品

第３節　平安時代前期

１　遺構概観

平安時代前期と考えられる遺構は、①・②区で検出された水田跡の他に③・④区で９世紀と考えられる竪穴住居跡が確認されている。本節では水田跡を中心に報告し、竪穴住居跡については第４節で報告する。

２　水田跡（第12～15・67～69図）

検出：長さ約700ｍ、幅約40ｍの調査区の中で、水田跡は調査区の西半部、長さ約200ｍにわたり確認された。中地区で示すとⅧK17～ⅧX23の範囲で洪水砂層（基本Ⅳ層）が確認され、その砂層を除去すると水田面と畦畔、溝とも良好な状態で検出することができた。それぞれの畦畔にはSC、畦畔に囲まれた水田面にはSL、溝にはSDという遺構記号を付し、調査を進めた。ただし、溝脇の畦畔にはSCの記号は付さなかった。確認された水田区画は17箇所になる。水田跡を覆う洪水砂層は、東側はSD20を境に、西側はSC17を境に薄くなり、粘質土へと置換していた。なお、SL12では南北方向に幅約15cm程度の耕作痕が水田面全体に伸びていた。耕作痕が確認されたのは最東端に位置するSL12のみである。このSL12より東側には、水田面は確認できなかった。

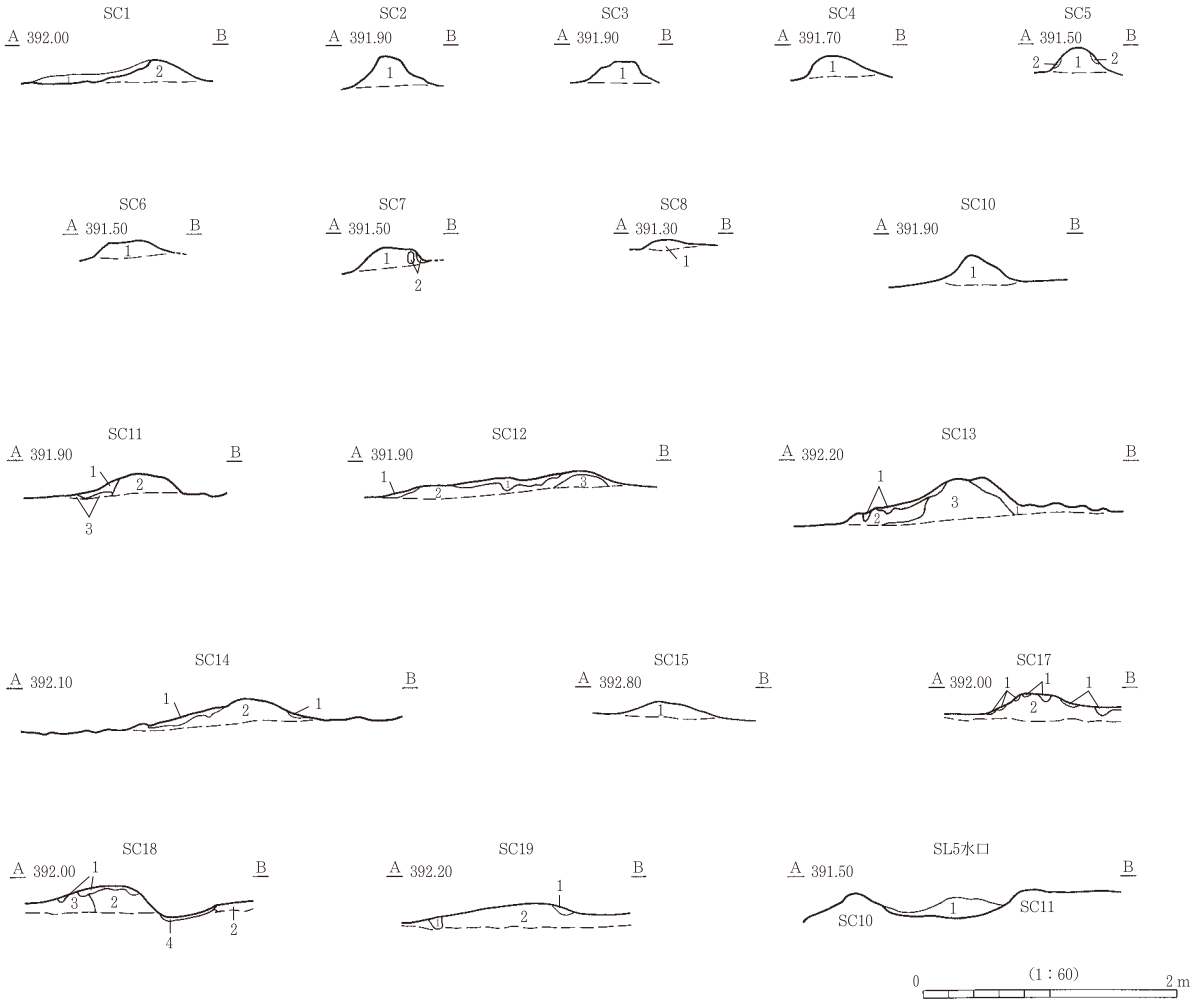
構造：水田区画は、南北に細長い矩形を基本としている。ただし、溝(SD20)が東西方向から北へ振れるため、溝沿いの水田区画の形状は三角形を呈するものがある。また、溝に沿って畦畔を造り出した結果、矩形を呈さない水田も複数確認された。矩形を呈する水田区画の南北の長さが確認できるのはSL2のみで、およそ16ｍを測る。調査区内で東西方向の畦畔や溝が無いSL10～SL12の南北長は18m以上となる。東西方向は、SL9がおよそ24ｍと最大で、東西12m幅の水田区画が最も多い。

いずれの水田区画も北西隅方向に向かって低くなっており、溝に面している水田区画では、畦畔が切れ、水が溝（SD20）へ落ちる構造となっている。したがって、SD20は排水路と把握できる。取水に関する造作については、調査区の範囲内では何ら確認できなかった。なお、SD20を含め、検出された水田跡に係るすべての溝から、護岸のための杭等は痕跡も含めて一切確認されなかった。また、畦畔に規模の差は見られず、芯材等も一切確認されなかった。

SD20の北側に水田区画が展開していた可能性も否めないが、今回の調査結果からは、SD20を排水路として自然堤防状の微高地と後背湿地の境目を流し、自在山側から配水して、後背湿地の多くの部分を、畦畔を南北に揃えた水田として経営していたのではないかと想定しておきたい。

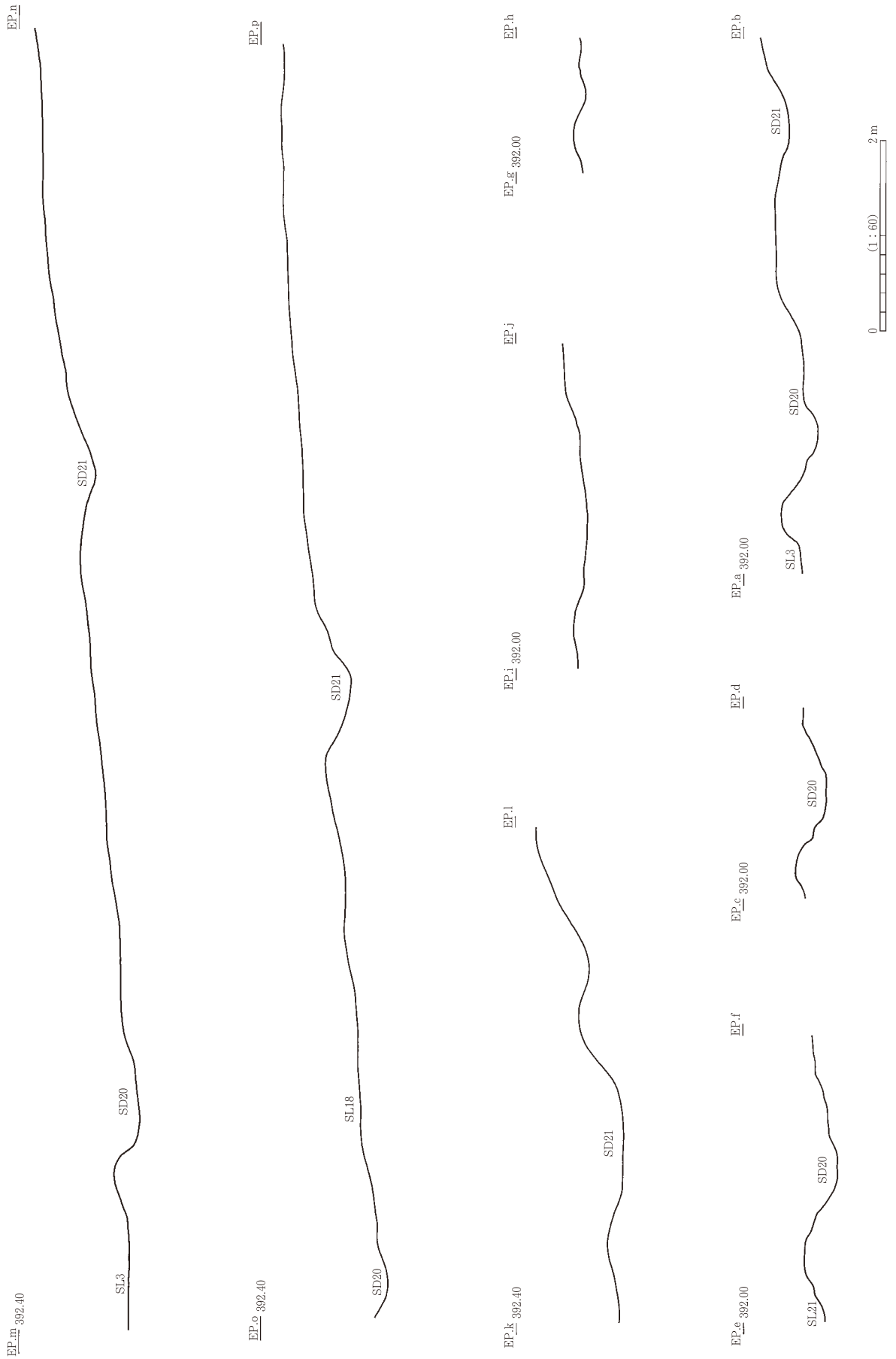
遺物：溝脇の畦畔から、底部回転糸切りの須恵器杯（第127図SD20-2）が出土したほか、水田面から土師器杯が破片の状態でわずかに確認された。

水田の時期：畦畔から出土した須恵器杯が９世紀代と想定されること、被覆砂層を切って10世紀代の竪穴住居跡が構築されていることから、水田跡の時期は平安時代前期、９世紀代と考えられる。また、水田跡を被覆する砂層は、仁和の洪水砂層に相当すると考えておきたい。

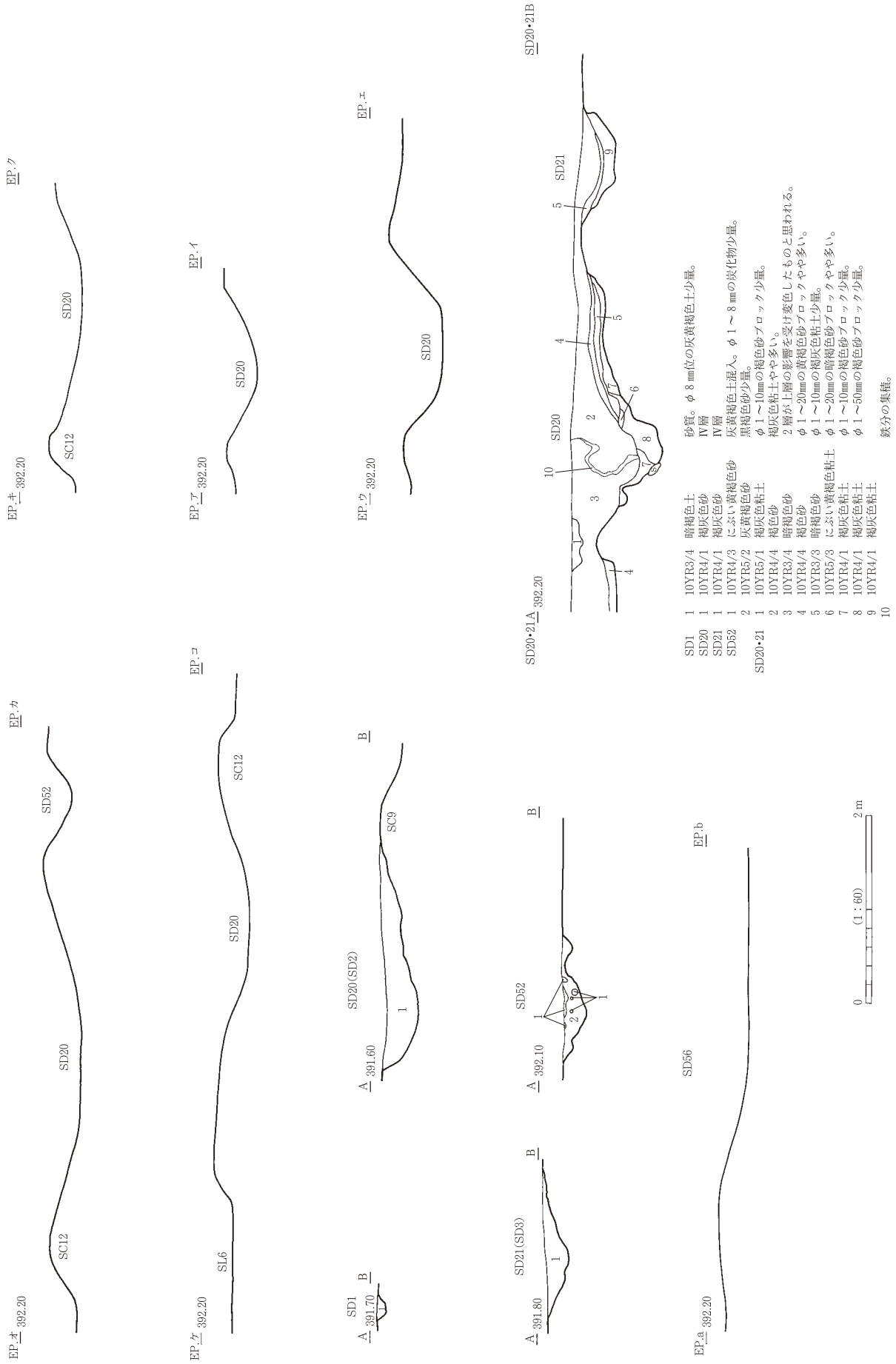


SC1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質。φ８㎜位の灰黄褐色土（やや明るい）やや多い。
	2	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC2	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC3	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC4	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC5	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
	2	10YR4/1	褐色灰砂	Ⅳ層
SC6	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC7	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
	2	10YR4/1	褐色灰砂	Ⅳ層
SC8	1	10YR5/2	灰黄褐色土	
SC10	1	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC11	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	
	3	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC12	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	
	3	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC13	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	
	3	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC14	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC15	1	10YR5/1	褐灰色粘土	
SC17	1	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の黒褐色砂少量。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～10㎜の黒褐色砂少量。φ１～５㎜の褐色粘土少量。
SC18	1	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の黒褐色砂少量。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～10㎜の黒褐色砂少量。φ１～５㎜の褐色粘土少量。
	3	10YR5/1	褐灰色粘土	２層より黒褐色砂多い。
	4	10YR4/6	褐色土	φ１～10㎜の黒褐色砂やや多い。φ１～10㎜の褐灰色粘土少量。
SC19	1	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の黒褐色砂少量。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	φ１～10㎜の黒褐色砂少量。φ１～５㎜の褐色粘土少量。
SL5水口		10YR4/1	褐色灰砂	Ⅳ層。φ８㎜位の灰黄褐色土少量。

第67図　水田遺構図１


EP.n
SD21
SD20
SL3
EP.m 392.40
EP.p
SD21
SL18
SD20
EP.o 392.40
EP.h
EP.g 392.00
EP.j
EP.i 392.00
EP.l
SD21
EP.k 392.40
EP.b
SD21
SD20
SL3
EP.a 392.00
EP.d
SD20
EP.c 392.00
EP.f
SD20
SL21
EP.e 392.00
0
(1：60)
2 m

第68図　水田遺構図 2


EP.ク
EP.キ 392.20
SC12
SD20
EP.イ
EP.ア 392.20
SD20
EP.エ
EP.ウ 392.20
SD20
SD20・21B
SD20・21A 392.20
SD20
SD21
EP.カ
EP.オ 392.20
SC12
SD20
SD52
EP.コ
EP.ケ 392.20
SL6
SD20
SC12
B
SD20(SD2)
A 391.60
SC9
SD1
A 391.70 B
B
SD52
A 392.10
SD21(SD3)
A 391.80 B
EP.b
SD56
EP.a 392.20
0
(1：60)
2 m
SD1 1 10YR3/4 暗褐色土
SD20 1 10YR4/1 褐灰色砂
SD21 1 10YR4/1 褐灰色砂
SD52 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
2 10YR5/2 灰黄褐色砂
SD20・21 1 10YR5/1 褐灰色粘土
2 10YR4/4 褐色砂
3 10YR3/4 暗褐色砂
4 10YR4/4 褐色砂
5 10YR3/3 暗褐色砂
6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土
7 10YR4/1 褐灰色粘土
8 10YR4/1 褐灰色粘土
9 10YR4/1 褐灰色粘土
10
砂質。φ８㎜位の灰黄褐色土少量。
Ⅳ層
Ⅳ層
灰黄褐色土混入。φ１～８㎜の炭化物少量。
黒褐色砂少量。
φ１～10㎜の褐色砂ブロック少量。
褐灰色粘土やや多い。
２層が上層の影響を受け変色したものと思われる。
φ１～20㎜の黄褐色砂ブロックやや多い。
φ１～10㎜の褐灰色粘土少量。
φ１～20㎜の暗褐色砂ブロックやや多い。
φ１～10㎜の褐色砂ブロック少量。
φ１～50㎜の褐色砂ブロック少量。
鉄分の集積。

第69図　水田遺構図３

第４節　平安時代後期

１　遺構概観

平安時代の集落は、②ａ-ｃ区を中心とした調査区の西側、③ｂ・ｃ・ｉ区を中心とした調査区の中央付近、④ｂ・ｃ区を中心とした調査区東側の３地点で確認された。10世紀から11世紀を中心とするが、それより前の時期の竪穴住居跡も検出されている。また、④ｂ区では集落が見つかった面より上層で、平安時代後期以降と考えられる土坑を多数検出し、調査している（第23図）。出土土器の器種分類は、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書６　松原遺跡-長野市内４-　古代中世編』に基づいて行った。

２　竪穴住居跡

SB1（第70・71図、PL11・26・27）：③ｂ区　XIM8・９・13・14

遺構：Ｖ´層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。ST5を切る。600㎝×580㎝のやや不整な隅丸長方形を呈し、北西隅付近が方形に突出する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面までの壁高は30㎝を測る。傾斜する礫層に土を入れ、平坦にしたうえで貼床を構築している。カマドは北壁中央の張出部に位置し、北から４°東に振れる。張出しカマドと考えられ、石組が残存している。ピットは９基検出し、柱穴と考える。すべて竪穴住居跡の東半分の壁際に位置する。

遺物：５・14・15・19はカマド、８は床面から出土している。１は土師器皿Bで、口縁はやや外反し高台は外れ、内外面は磨いている。２～９は黒色土器Ａ坏Ａ、11～13は黒色土器Ａ碗、10は黒色土器Ａ皿Ｂである。14は黒色土器Ｂ皿Ｂで高台が外れている。15～17は須恵器坏Ａ、19は黒色土器Ａ鉢で外面をロクロ調整している。20は土師器小形甕で外面頸部以下をカキメで仕上げている。18は緑釉陶器皿である。胎土は軟質、削り出し高台で淡黄緑色の釉薬を全体に施しており、京都産である。21は苧引金である。この遺構の時期は土器の様相から９世紀後半と考えられる。

SB2・３（第72図）：③ｂ区　XIM7・８・12・13

遺構：Ｖ´層を剥いで検出。長方形の落ち込みが確認できたが、南壁付近で不定形になっていた。そのため遺構が切り合うことを想定して、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れて断面精査を行ったが、埋土が非常に薄く切り合い関係を確認できなかった。そこでベルトを残して周囲を掘り下げた結果、南壁付近に焼土・炭化物が集中する地点があり、カマドと判断し、南壁付近で不定形になることも考慮して竪穴住居跡２軒の切り合いであるとした。SB2がSB3を切る。

SB2：遺構は一部が調査区外になる。平面形は推定である。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は10㎝を測る。部分的に貼床を確認した。東隅に土器・角礫・焼土・炭が集中する地点があり、このあたりにカマドが構築されていたと思われる。ピットは確認できなかった。

SB3：560㎝前後の隅丸方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は15㎝を測る。カマドは北東隅に近い北壁に位置し、北から西に27°振れる。焼土が壁面から半円状に突出して検出され、張出しカマドと考えられる。ピットは確認できなかった。

遺物：SB2：２・６・７はカマドが構築されたと考えられる箇所から出土している。１・２は土師器坏Ａ、３は土師器碗で高台が外れている。４は黒色土器Ａ碗で体部下半が張る。５は土師器小形甕の口縁部付近、６は土師器羽釜Ａである。７は土師器足釜の脚部と胴部が接する部分の破片だが、全体形状は不明である。

SB2の時期は土器の様相から10世紀後半と考える。
SB3：１・２は土師器坏Ａ、３は黒色土器Ａ坏Ａで外面がかなり摩耗している。５・６は黒色土器Ａ碗の底部付近の破片である。７は土師器小形甕の底部付近で、体部の厚みは薄くロクロ調整の痕跡が残る。４は土師器羽釜Ａである。SB3の時期は土器の様相から10世紀後半と考えられる。

SB5（第73図、PL11・28）：③ｂ区　XIL5
遺構：Ⅴ´層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。SD6を切る。SK26・27を床面で検出したが、切り合い関係は不明。306㎝×305㎝の方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は22㎝を測る。やや硬くなっている面を床とした。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置し、北から東に91°振れる。粘土と石を組み合わせてカマドを構築している。ピットは２基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。
分析：年代測定　竪穴埋土出土の炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その測定結果は、763-890AD（77.5%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
遺物：１・２・４・５・７・10はカマドから出土している。１・２は土師器皿Ｂ、３は黒色土器Ａ坏Ａ、４は土師器碗、５は黒色土器Ａ碗、10は黒色土器Ａ鉢で外面はロクロ調整である。６～８は底部糸切りの須恵器坏Ａ、９は須恵器甕か壺の底部破片である。11・12は土師器甕である。11の外面はハケ状工具によるヨコナデ、12の外面口縁～体部上半部はハケ状工具によるヨコナデ、下半部は削りにより調整が施されている。この遺構の時期は土器の様相から９世紀中頃と思われる。^{14}C年代測定の結果と相違しない。

SB7（第74図、PL11）：③ｂ区　XIH16・17・21・22
遺構：Ⅴ´層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。検出時点で焼土や炭化物が多かったため焼失家屋と考え、炭化材を残しながら調査した。512㎝×305㎝の長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は15㎝を測る。一部に貼り床が確認できる。カマドは東壁の南隅近くに位置し、北から東に３°振れる。礫が２点現位置を保っていると考えられる。カマドの北側床面には特に炭化物が多く見られ、藁かムシロのような形状の炭化物も認められた。ピットは５基検出し、いづれも柱穴と考えられ柱痕跡を確認した。床面全体に焼土・炭化物が分布し、北半分では炭化材が中心に向かって倒れた状態で出土している。
分析：骨　人の歯がカマド周辺より出土した。分析鑑定結果は第４章第１節に掲載してある。
分析：樹種同定　床面出土炭化材を同定し、コナラ属コナラ節と判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した床面出土の炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、981-1034calAD（95.4%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
遺物：１・２は土師器坏Ａで、口径約８㎝・12㎝の大小２法量が存在する。３・４は土師器碗で４は高台が外れている。５は須恵器の瓻だが混入であろう。この遺構の時期は土器の様相から11世紀初頭と考えられる。^{14}C年代測定の結果と相違しない。

SB10（第75図、PL11）：③gh区　XIO23・24
遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。SK31に切られる。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面

及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。435㎝×400㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は25㎝を測る。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置し、北から東に84°振れる。石組み構造で、カマド付近は床面より５～10㎝ほど低い。ピットは確認できなかった。この竪穴住居跡より東側は遺構が極端に少なくなり、一旦、集落が途絶える。

遺物：１・３はカマドから出土している。１は土師器皿Ａ、２・３は土師器坏Ａで、口径約９㎝・15㎝の大小２法量が存在する。４は土師器碗、５は土師器甕底部、７は土師器羽釜Ａでカマドから出土している。６は須恵器坏蓋であるが、混入の可能性がある。遺構の時期は土器の様相から11世紀初頭と考えられる。

SB17（第76図）：③ｂ区　XIN10・15

遺構：Ⅴ´層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の一部が調査区外になるため、形状は不明。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は20㎝を測る。一部で貼り床を確認した。カマドは調査区内では確認できなかった。ピットは２基確認したが。柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

遺物：１は床下出土の土師器坏Ａ、２は黒色土器Ａの碗、３は灰釉陶器碗である。

SB18（第76図、PL12）：③ｂ区　XIN8・９

遺構：Ⅴ´層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の一部が調査区外になるため、形状は不明。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は30㎝を測る。一部に貼り床が確認された。カマドは火床の位置から、東壁の南東隅近くにあったと思われる。ピットは２基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

分析：骨　竪穴埋土からシカの歯が出土した。

遺物：２はピット１から出土している。１・２は底部糸切りの須恵器坏Ａである。３は須恵器壺の口縁部破片であろう。遺構の時期は土器の様相から９世紀と考えたい。

SB19（第77図、PL12・26）：③ｂ区　XIN7・８

遺構：Ⅴ´層を剥いで検出。検出面では遺構の確認が困難であったため、人力で約30㎝掘り下げて検出した。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。386㎝×360㎝の方形を呈する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面までの壁高は12㎝を測る。カマドは火床の位置から、東壁中央より南にあったと考えられる。ピットは３基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

遺物：１・２は底部糸切りの須恵器坏Ａ、４は須恵器坏Ｂで口径は推定で9.9㎝、器高4.5㎝を測る。３は須恵器坏蓋である。５は土師器小形甕である。遺構の時期は土器の様相から９世紀前半と考えたい。

SB28（第78・79図、PL12・28）：④ａ区　XIIQ24　XIIV4

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。SK250・251・254・SD12・13・16などに切られ、SB29を切る。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、平面を精査して検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。504㎝×495㎝の方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は20㎝を測る。カマドは南東壁中央よりやや南寄りに位置し、北から136°東に振れる。石組構造で上部に礫が乗っている。ピットは確認できなかった。

遺物：４・５・10はカマドから出土している。１～３は土師器坏Ａで、口径は９～10㎝である。４・５は土師器盤Ｂで、５は高台が外れている。６は黒色土器Ａ坏Ａ、７は黒色土器Ａ碗である。８は灰釉陶器の壺、９・10は土師器羽釜Ａである。遺構の時期は土器の様相から10世紀後半と考えられる。

SB29（第78・79図、PL27）：④ａ区　ⅫQ24　ⅫV4

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。SB28・SD12・SK260などに切られる。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、平面を精査して検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。SB28に切られるため、全体の形状は不明。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は16㎝を測る。カマド・ピットは確認できなかった。

遺物：埋土から出土している。１～３は土師器坏Ａ、４は黒色土器Ｂ碗で体部下半張る。５は土師器碗で、高台が外れている。６は灰釉陶器碗で、内面が磨滅しており転用硯と思われる。この遺構の時期は土器の様相より10世紀後半と考えられる。

SB30（第80図、PL12・27）：②ａ-ｃ区　ⅧX6・７・11・12

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SD18を切る。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。550㎝×440㎝の不整隅丸長方形を呈する。埋土は薄いが、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面までの壁高は14㎝を測る。下層にある水田層（Ⅴ層）を掘り込んで床にしている。カマドは東壁中央より南に位置し、北から81°東に振れる。石組み構造である。ピットは10基検出した。柱穴はピット３・４・８・９と考えられる。

分析：樹種同定　ピット２出土の炭化材を同定し、コナラ属コナラ節と判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した。測定結果は、991-1048calAD（95.4%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１・３はピット１、５はピット２から出土した。１～３は土師器坏Ａ、４は土師器碗、５は虎渓山窯の灰釉陶器碗で、内面が磨滅しており転用硯と思われる。遺構の時期は土器の様相から10世紀末と考えられる。^{14}Ｃ年代測定の結果と相違しない。

SB31（第81図、PL12・28）：②ａ-ｃ区　ⅧW15

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。390㎝×300㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は42㎝を測る。下層にある水田層（基本Ⅴ層）を掘り込んで床にしている。カマドは東壁中央より南に張り出して位置し、北から93°東に振れる。石組み構造である。ピットは６基検出した。ピット２・３・５は柱穴と考えられる。

遺物：１・２はカマドから出土した。１は黒色土器Ａ碗、２は土師器羽釜Ａ、３はピット３をふさぐように床面から出土した土師器壺である。遺物は少ないが、遺構の時期は10世紀後半頃と考えたい。

SB32（第82～84図、PL７・25・26）：②ａ-ｃ区　ⅧW4

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SK278・279に切られる。床面近くが検出面となり、埋土は非常に薄く、南西側は床面を重機で削平している。平面を精査後、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。推定値で535㎝×468㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床

面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は20㎝を測る。やや硬化した面を床とした。カマドは東壁中央より南に張り出して位置し、北から110°東に振れる。石組み構造でまわりに粘土が貼られていた。ピットは16基検出し、ピット４・７・11・14は柱穴と考えられる。

分析：骨　埋土から骨が出土したが、遺存状態が悪いため種別は判別できなかった。

遺物：床面、床面近く、カマド周辺から土器が多く出土している。６・９はカマドから出土した土器である。１～５は土師器坏Ａ、６～９は土師器碗、10～13・15は黒色土器Ａ碗である。碗は口径約10㎝・14㎝の大小２法量が存在する。14は黒色土器Ｂ碗、16は虎渓山窯の灰釉陶器皿である。17は凝灰岩製、18・19は砂岩製の砥石である。

八稜鏡（20）：住居跡中央近くの床面から、鏡面を上にした状態で出土した。径7.1㎝、厚さ0.1㎝、重さ14.4ｇで非常に薄い。稜の一部が欠けるが、ほぼ完形である。鏡面・鏡背とも錆の付着がみられる。鏡面は平坦に磨きこんでいる。鏡背に界圏は確認できるが、外区・内区の文様は明瞭でない。

鉄鐸・銅鈴（21～28）：塊の状態で床面から出土した。出土状態を保つため土ごと取上げ、この状態でＸ線透過撮影を実施した結果、鉄鐸８点であると考えた。しかし、錆取りをして個々に分離した結果、ほぼ完形の鉄鐸５点（22～26）と破片１点（27）と舌１本（28）、それに銅製の鈴１点（21）であることが判った。ほぼ完形の５個のうち１個（24）の内部には舌が付着している。21は部分的に緑青が観察でき、銅鈴と確認した。内部には殊が残存しており、錆取りの結果音が鳴るようになった。29は鉄鐸・銅鈴と一緒に出土した頁岩製の石製品である。上部を中心に放射状に出土した状況より鉄鐸と一緒に有機質の紐で結わえられ、音をたてる役割をしていた可能性が考えられる。形状より元は磨製石鏃であったと思われるが、半分を欠損し全体に磨滅している。30の鉄鐸は21～29の塊より20㎝ほど東で出土した。この他に土師質の土錘１点（第129図土錘５、PL30）が出土している。遺構の時代は土器の様相から11世紀初めと考えられる。

SB34（第85～86図、PL12・27・32）：②ａ-ｃ区　ⅧR22・23

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SK303・304・329・330に切られ、SB35を切る。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。490㎝×385㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は25㎝を測る。カマドは南壁東隅近くに張り出して位置し、北から145°東に振れる。石組み構造でまわりに粘土が貼られていたと思われる。ピットは５基検出し、ピット１～４は柱穴と考えられる。

分析：製鉄関係　埋土出土の鉄滓を化学成分分析・顕微鏡観察・Ｘ線回析測定を実施した。その結果、この鉄滓は砂鉄系の精錬鍛冶滓であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１～３は土師器坏Ａ、４は土師器碗、７・８は黒色土器Ａ碗、５・６は黒色土器Ｂ碗である。９は丸石２号窯の灰釉陶器碗で、内面が磨滅しており転用硯と思われる。10は軽石に穴が穿ってある石製品、11は砂岩製の砥石である。この遺構の時期は土器の様相から11世紀初めと考えられる。

SB35（第85～87図、PL13・27・31）：②ａ-ｃ区　ⅧR23　ⅧW3

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SB34・SK319～321・334に切られる。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。559㎝×455㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は22㎝を測る。炭化物が広がる面があり、その下を床とした。カマドは火床などの位置から南東壁中央より北寄りにあったと思われる。

ピットは５基検出し、ピット４・５は柱穴と考えられる。

分析：年代測定　竪穴埋土出土の炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、805-957AD（91.6%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１～７は土師器坏Ａ、８・９は土師器鉢である。10は大原２号窯の灰釉陶器碗、11は光ヶ丘窯の灰釉陶器皿で煤痕が観察でき、灯明皿と考えられる。また11は内面が磨滅しており転用硯としても使われていたと思われる。12は砂岩製の砥石、13は鉄製紡錘車である。紡輪・軸とも残存しており、良好な状態である。この遺構の年代は土器の様相より10世紀中頃と考えられる。^{14}C年代測定の結果と相違しない。

SB36（第88・89図、PL13）：②ａ-ｃ区　ⅧR16・17

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SB40を切る。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。578㎝×565㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は36㎝を測る。カマドは壊されているが、礫・炭化物の分布より南東隅周辺に位置したと思われる。ピットは４基検出し、ピット２・３・４は柱穴と考えられる。

分析：樹種同定　カマド付近出土の炭化材を同定し、コナラ属クヌギ節であることが判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、1148-1220calAD（69.6%）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：用途不明土製品（第129図土製品２、PL30）が出土している。土器の出土も少ないため年代の検討は難しいが、切り合い関係から10世紀頃の遺構といえよう。^{14}C年代測定の結果と相違しない。

SB38（第90図、PL13）：②ａ-ｃ区　ⅧR6・11

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SK328・332に切られ。SB39を切る。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、平面精査で切り合いを確認後、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の1/3が調査区外になるため、全体の形状は不明だが、長方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は10㎝を測る。SB38の下層には、水田にともなう溝脇の畦畔がある。これを削って平らにしたときに出た粘土と砂層（基本Ⅳ層）の砂で床を構築していると思われる。壊されているが、カマドは南壁の東にやや張り出して位置し、北から163°東に振れる。ピットは７基検出し、ピット４・５は柱穴と考えられる。

遺物：埋土から土器片、土製品（第129図土製品１、PL30）が出土している。この遺構の年代は、基本Ⅳ層を掘り込んでいるので10～11世紀と思われる。

SB39（第90図、PL13）：②ａ-ｃ区　ⅧR11

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SB38に切られる。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、平面精査で切り合いを確認後、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。478㎝×37㎝の不整隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は37㎝を測る。砂層（基本Ⅳ層）中で、炭が広がるやや硬い面を床とした。カマドは確認できなかった。ピットは７基検出し、ピット２・４・６は柱穴と考えられる。埋土２層下部から床にかけて、形状を残す炭化材が多く出土した。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材２点を同定し、２点ともコナラ属クヌギ節であることが判明した。

分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材２点の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、1030-1155calAD（95.4％）、1067-1155calAD（63.4％）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：埋土から少量の土器片が出土している。この遺構の年代は、基本Ⅳ層を掘り込んでいるので10～11世紀と思われる。

SB40（第88・89図、PL31）：②ａ-ｃ区　ⅧR16・21

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。SB36に切られる。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の1/3が調査区外になるため、全体の形状は不明だが、不整形な隅丸方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は24㎝を測る。カマドは東壁中央より南に位置したと考えられる。やや張り出した石組み構造で、一部礫と粘土が残存していた。ピットは５基検出し、ピット１・２は柱穴と考えられる。

分析：年代測定　カマド出土の炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、966-1049AD（83.3％）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

製鉄関係　竪穴埋土出土の鉄滓を化学成分分析・顕微鏡観察・Ｘ線回析測定を実施した。その結果、この鉄滓は砂鉄系の精錬鍛冶滓であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１は土師器坏Ａ、２は土師器碗、３は土師器羽釜Ａである。４・５は安山岩製の磨石で４はピット２から出土している。この遺構の時期は土器の様相から10～11世紀頃と思われる。^{14}Ｃ年代測定の結果と相違しない。

SB46（第91・92図、PL13）：②ｄ区　ⅧX18・19

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。２～３軒の切り合う竪穴住居跡と考え、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、土層の確認を行った結果、２軒の切り合わない住居跡（SB46・47）と、地形の窪みと判断した。515㎝×418㎝の不整隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は38㎝を測る。下層にある水田層（基本Ⅴ層）を掘り込んで床にしている。カマドは北壁中央より西寄りに位置し、北から35°西に振れる。礫と粘土を利用して袖を構築している。ピットは７基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。ピット１からは土器が多く出土している。周溝を西壁と南壁で検出している。カマド東側には炭化物が集中する。ベルトで土層を確認すると落ち込みのようにみえたが、詳細は不明になってしまった。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材を同定し、カヤであることが判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、891-994calAD（95.4％）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：２・５はカマド、３・６・10はピット１から出土した。１～３は土師器坏Ａ、４・５は土師器碗、６・７は黒色土器Ａ碗である。８は大原２号窯の灰釉陶器段皿で、内面が磨滅しており転用硯と思われる。９は土師器盤Ｂの高台部分と思われ、丸い穴が穿ってある。10は土師器小形甕、11は土師器甕である。12は床面近くから出土した鉄製品である。錆取りをしていないが、形状・Ｘ線撮影結果より鉄鐸の可能性が高い。この遺構の時期は土器の様相から10世紀前～中頃と思われる。^{14}Ｃ年代測定の結果と相違しない。

SB47（第93図、PL13）：②ｄ区　ⅧX19・20

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。２～３軒の切り合う竪穴住居跡と考え、十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れて、断面の精査を行った結果、２軒の切り合わない住居跡（SB46・47）と、地形の窪みと判断した。SK547・548・549に切られる。北東隅が調査区外になるが、485㎝×430㎝の隅丸長方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は18㎝を測る。下層にある水田層（Ｖ層）を掘り込んで床にしている。カマドは東壁中央より南寄りに位置し、北から103°東に振れる。礫と粘土を利用して袖を構築している。ピットは４基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。ピット４の底面付近には炭化物が広がり、床面は焼けていたが用途は不明である。

分析：製鉄関係　竪穴埋土出土の鉄滓を化学成分分析・顕微鏡観察・Ｘ線回析測定を実施した。その結果、この鉄滓は砂鉄系の精錬鍛冶滓であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：１・２は土師器坏Ａ、３は土師器碗である。４は砂岩製の砥石は床面から出土している。５は鉄鎌である。この遺構の時期は土器の様相から11世紀初めと考える。

SB55（第94図、PL13）：①区　ⅧL22・23　ⅧQ2・３

遺構：Ⅲ層を剥いで検出。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。遺構の大半が削られてしまい全体の形状は不明。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面までの壁高は14㎝を測る。削られているためはっきりしないが、床面の焼土や礫の分布の状況から南東壁にカマドがあった可能性がある。ピットは２基検出し、いづれも柱穴と考えられる。

遺物：１・２は土師器碗である。遺物が少ないが、この遺構の時期は土器の様相から11世紀と思われる。

SB57（第95図、PL31）：④ｂ区　ⅫW19・24・25

遺構：Ⅱ´層を剥いで検出。SK665・708に切られ、SB63を切る。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。356㎝×285㎝の不整隅丸長方形を呈する。壁は床面から緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は42㎝を測る。非常に硬い床が中央付近に広がっている。カマドはない。ピットは７基検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。埋土は大きく３層に分層でき、下から褐灰色粘土層、炭と粘土が混在する黒色粘土層、暗褐色粘土層と他遺構と比べ、特徴的である。この遺構に近接してSF4・６があり、関連する可能性がある。

遺物：１は２か所に穴が穿ってある軽石製の石製品で、炭と粘土が混在する黒色粘土層から出土している。

SB58（第96・97図、PL14）：④ｂ区　ⅫW19・20

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。SK774・775に切られ、SB59を切る。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、南北に先行トレンチを入れて切り合いを確認した。先行トレンチに加え、東西にもトレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。東壁が調査区外になるが、隅丸長方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は34㎝を測る。焼土や炭化物の分布状況から、カマドは調査区外に位置すると思われる。ピットは４基検出し、ピット２・４が柱穴と考えられる。

分析：骨　比較的多くの骨が出土している。イノシシの下顎骨、カモシカかシカの上顎骨、シカの歯、哺乳類の四肢骨などが判別できた。

分析：製鉄関係　竪穴埋土出土の鉄製品を化学成分分析・顕微鏡観察・Ｘ線回析測定等を実施した。その結果、この製品は低炭素の鉄素材を酸化性雰囲気下で鍛打加工した製品であることが判った。分析の詳細

については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：埋土より多く出土している。７はピット１、８はピット３、10・12はピット４から出土している。１は土師器皿Ａ、２～５は土師器坏Ａ、６は土師器碗、７は土師器甕の底部である。８～10・12は黒色土器Ａ坏Ａ、11は黒色土器Ａ盤Ｂ、13・14は黒色土器Ａ碗、15は黒色土器A鉢である。16～19は灰釉陶器で、16・17は皿Ｂ、18・19は碗である。17～19は内面が磨滅しており転用硯と思われる。20は須恵器甕の胴部に、偏は不明だが、旁が「也」の漢字を刻書している。21は土器片の内面に種実痕が観察できる。土師質の土錘（第129図土錘６、PL29）が出土しており、SB61出土の破片と接合した。この遺構の時期は土器の様相より９世紀後半と考えたい。

SB59（第96図）：④ｂ区　ⅩⅡW14・19・20

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。SB58に切られる。２軒の切り合う竪穴住居跡と考え、南北に先行トレンチを入れて切り合いを確認した。先行トレンチに加え、東西にもトレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。東壁一部が調査区外になるが、隅丸方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は24㎝を測る。カマドは確認していない。ピットは３基検出し、いづれも柱穴と考えられる。

遺物：土器片がわずかに出土している。

SB61（第98・99図、PL14）：④ｂ区　ⅩⅡW3・８

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。長方形の落ち込みを確認した。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁の確認をした。しかし、遺構の立ち上がりが不明瞭で、平面精査時の長方形を住居跡の平面形と推定、礫が集中しやや硬化した面を床面として、掘り下げを行った。620㎝×306㎝の不整長方形を呈する。しかし、床下調査で掘り方の９層が途中で途切れることが観察できた。この付近で床の硬化がはっきりしなくなっており、北壁の位置はこの周辺だった可能性がある。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は38㎝を測る。カマドは東壁南隅近くに位置し、北から93°東に振れる。礫と粘土を利用して袖を構築している。カマド周辺には土器や円礫が集中していた。ピットは２基検出したが、検出位置からこの遺構に伴うかは不明である。

分析：樹種同定　竪穴埋土出土の炭化材を同定し、コナラ属コナラ節と判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：　カマド周辺より多く出土している。１～８は土師器坏Ａ、９～11は土師器碗、12は土師器盤Ｂである。13・14は黒色土器Ａ碗、17は黒色土器Ａ鉢、15は灰釉陶器皿Ｂで、内面が磨滅しており転用硯と思われる。16は灰釉陶器碗、18は土師器甕である。土師質の土錘（第129図土錘６、PL30）が出土しており、SB58出土の破片と接合した。この遺構の時期は土器の様相から10世紀前～中頃と思われる。

SB62（第100～106図、PL15・27・29）：④ｂ区　ⅩⅡW7・８・13・14

遺構：Ⅲ´層を剥いで検出。大きな長方形の落ち込みを確認し、数軒の竪穴住居跡の切り合いを想定して南北１本、東西２本の先行トレンチを入れ、切り合い・床面及び壁確認をした。その結果遺構の重複はなく、南北960㎝、東西700㎝の大きな隅丸長方形の竪穴住居跡だと判った。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は50㎝を測る。カマドは東壁中央より南側に位置し、北から83°東に振れる。礫と粘土を利用して袖を構築している。この北側にカマドの痕跡があり、カマドは作り替えられていることを確認した。ピットは22基検出した。ピット８・11・16が柱穴と思われる。また、ピット２・３・４か

らは完形に近い土器がまとまって出土している。SF1～３は床面検出の焼土跡である。このうちSF2では溶解した鉄分が底で固まった状態を検出した。

分析：骨　多くの骨が出土している。イノシシの歯・上顎骨・下顎骨、シカの歯・乳臼歯を含む上顎骨・角の基部・中足骨、カモシカかシカの臼歯列、哺乳類の四肢骨などを判別した。

分析：製鉄関係　竪穴埋土出土の鉄製品（釘など３点）、鉄滓とSF2付着の鉄滓の分析を実施した。その結果、釘は砂鉄を始発原料とする可能性があること、残り２点の鉄製品は重量があり、鍛冶用素材として持ち込まれた可能性のある鋳鉄塊であること等が判った。また、SF2付着の鉄滓は精錬鍛冶滓と推察され、小鍛冶炉である可能性が高いことが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：非常に多量の土器が埋土・壁際・ピットから出土した。図示した土器の出土場所は以下のとおりである。床付近出土は１～16・54・66・75・88・89・91・93・100。カマド出土は17～21。ピット１出土は26～28。ピット２出土は29～33・55・56・58・76・79・82・84。ピット３出土は34～39・59・60・67・68・70～72・77・80。ピット４出土は40～43・61・62・73・81。ピット５出土は44・45・78・85。ピット７出土は46。ピット14出土は47・63・86。ピット15出土は48・49・64・74・99。ピット17出土は50・51。ピット20出土は52・53・65・69。ピット21出土は57。これ以外は埋土出土である。

１～53は土師器坏Ａ、54～56は土師器皿Ｂ、57は土師器盤、58～65は土師器碗である。66～69は黒色土器Ａ坏Ａ、70～80は黒色土器Ａ碗、81は黒色土器Ａ盤である。82は黒色土器Ｂ皿Ｂ、83～88・PL27-18は黒色土器Ｂ碗である。89は黒色土器Ａ片口鉢、90は土師器羽釜Ａである。91は近江産の緑釉陶器皿で、素地は軟質、濃緑の釉薬を施している。92は東海地方産の緑釉陶器碗で、素地は須恵質、濃緑の釉薬を施していたと思われるが口縁部一部に施釉が残るだけである。器形は胴部が張っている。93・94は灰釉陶器皿Ｂ、95は灰釉陶器碗、96は須恵器坏Ａである。94～96は内面が研磨されており転用硯とされていたと思われる。97は須恵器長頸瓶、98・99は須恵器甕である。100は須恵器甕の胴部破片を加工転用した猿面硯である。101は安山岩製の磨石、102・103は安山岩製の敲石である。この他に須恵質の土錘１点（第129図土錘７、PL30）が出土している。この遺構の時期は土器の様相から11世紀初めと考えられる。

SB63（第107図、PL14・28）：④ｂ区　XⅡW24・25

遺構：SB57トレンチ調査時にカマドを確認、Ⅲ´層を剥いで検出した。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。340㎝×295㎝の不整隅丸方形を呈する。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は50㎝を測る。カマドは南壁中央よりやや西に位置し、北から174°東に振れる。壊されているが、礫と粘土の一部と支脚石が残存している。ピットは２基検出し、柱穴と考えられる。

遺物：１はカマドから出土しており、SB58床下出土土器と接合した土師器羽釜Bである。鍔が全周しない把手状で、残存部分で２箇所についている。２・PL28-１は土師器羽釜である。土師質の土錘１点（第129図土錘８、PL30）が出土している。この遺構の年代は、11世紀と考えたい。

SB65（第108図、PL14・26）：④ｂ区　XⅡW19・24

遺構：Ⅶ層を剥いで検出した。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。東壁は削られ南壁は調査区外になるが、隅丸長方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は38㎝を測る。カマドは北壁ほぼ中央に位置し、北から18°西に振れる。袖などは壊されているが、よく焼けた煙道の一部が残存している。ピットは３基

検出したが、柱穴と認定できるピットは確認できなかった。

分析：製鉄関係　竪穴埋土出土の羽口を化学成分分析・耐火度測定を実施した。その結果、高耐火度が期待できる胎土を使用して製作された羽口であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：４・５・７・８はカマドから出土した。１は土師器坏Ａ、２～７は底部糸切りの須恵器坏Ａ、８は土師器甕である。埋土から羽口（第130図羽口１、PL31）も出土している。遺構の時期は出土土器の様相から９世紀後半と考えたい。

SB88（第109図、PL14）：④ｂ区　XⅡW16・17・21・22

遺構：Ⅶ層を剥いで検出した。十字に設定したベルトに沿って先行トレンチを入れ、床面及び壁を確認してから周囲の掘り下げを行った。南壁は削られているが、長方形を呈すると思われる。壁は床面からやや緩やかに立ち上がり、検出面までの壁高は18㎝を測る。カマドは東壁中央より南寄りに位置し、北から97°東に振れる。壊されているが、礫と粘土の一部が残存している。ピットは１基検出したが、柱穴と認定できなかった。

分析：骨　イノシシの歯が出土した。

遺物：１は土師器坏Ａでカマドから出土している。２は青銅製の鋲である。四隅にある孔は肉眼では観察できず、X線透過撮影で確認した。

その他SB出土土器

SB4（第110図）：③ｂ区　XⅠM2

１は土師器坏Ａ、２は黒色土器Ａ碗、３は須恵器甕である。

SB6（第110図）：③ｂ区　XⅠL4・５　XⅠG24・25

１は底部ヘラ切りの須恵器坏Ａ、である。

SB8（第110図）：③ｂ区　XⅠL5

１は底部糸切りの須恵器坏Ａである。

SB9（第110図）：③ｂ区　XⅠG23

１は底部糸切りの須恵器坏Ａである。

SB37（第129図）：②ａ-ｃ区　ⅧR12・17

土製品３は用途不明品である。断面が四角の角柱状で、片側は外れた状態である。

SB60（第110図）：④ｂ区　XⅡW2・３・７・８

２・３・６・７はピット４から出土している。１～５は土師器坏Ａ、６は土師器碗で高台が外れている。７は土師器盤Ｂ、８は黒色土器Ａ碗である。

SB64（第110図）：④ｂ区　XⅡW11

１はピット２、２・３はピット１から出土している。１は土師器ⅢＢ、２は土師器坏Ａ、３は土師器盤Ｂである。

SB66（第110図）：④ｂ区　XⅡW17・18・22・23

３はカマドから出土している。１・２は黒色土器Ａ坏、３は土師器甕である。

３　掘立柱建物跡

②ａ-ｃ・ｄ、③ａ・ｂ・ｃ・ｉ区で検出された。遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からそ

の時期を判断したため、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

ST1・14（第111図、PL16）：③ｂ区　XIM4・５・９・10

Ｖ´層を剥いで検出した。調査時はST1としたが、基礎整理時に２棟になると判断し、ST1・14とした。

ST1は南北１間、東西２間の建物で、長軸はN90°Ｅ。柱間寸法は南北120～150㎝、東西250～290㎝である。ピット１・２・４～６が円形～楕円形、ピット３が不整形を呈し、深さは20～40㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。

ST14は南北１間、東西２間の建物で、長軸はN90°Ｅ。柱間寸法は南北240～270㎝、東西210～330㎝である。ピットは円形を呈し、深さは20～40㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。埋土中より土器片がわずかに出土している。SD9を挟んで似た様相のST7・13が検出されている。

ST7・13（第111図、PL16）：③ｃ区　XIN7・８・12・13

Ｖ´層を剥いで検出した。調査時はST7としたが、基礎整理時に２棟になると判断し、ST7・13とした。

ST7は南北２間、東西１間の建物で、長軸はほぼ北を向く。柱間寸法は南北190～220㎝、東西190～200㎝である。ピットは円形を呈し、深さは20～40㎝を測る。埋土中より土器片が出土している。

ST13は南北２間、東西１間の建物で、長軸はほぼ北を向く。柱間寸法は南北200～240㎝、東西190～210㎝である。ピットは円形を呈し、深さは30～40㎝を測る。埋土より土器片が出土している。SD9を挟んで似た様相のST1・14が検出されている。

ST3・４（第112図、PL16）：③ｂ区　XIG24・25　XIL４・５

Ｖ´層を剥いで検出した。調査時は土坑が集中していたため、個別にSKとして調査を進め、その後STを組んだ。

ST3は南北３間、東西３間の建物で、長軸はほぼ北を向く。SK29を切る。SK25との切り合い関係は不明である。柱間寸法は南北160～200㎝、東西140～180㎝である。ただしピット１・10間は約440㎝になる。ピットは円形～楕円形を呈し、深さは30～40㎝を測るが、ピット６はSB6の床面での検出になったため浅い。埋土より土器片が出土している。

ST4は南北２間、東西２間の建物で、長軸はほぼ北を向く。SK29を切る。SB6との切り合い関係は不明である。柱間寸法は南北160～210㎝、東西180～190㎝である。ピットは円形を呈し、深さは20～40㎝を測る。埋土より土器片が出土している。

ST8・９・10（第113図、PL16）：③ａ区　XIG18・19

Ｖ´層を剥いで検出した。土坑が集中する地区で、STに組めるものが３棟、それ以外をSKとした。

ST８は南北１間、東西１間の建物で、長軸はほぼ北を向く。SD6を切る。柱間寸法は南北290～300㎝、東西190～220㎝、ピット１・２・４は隅丸方形、ピット３は楕円形を呈し、深さは20～60㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。

ST9は南北２間、東西２間の総柱の建物で、長軸はほぼ北を向く。SD8に切られる。柱間寸法は南北160～180㎝、東西160～200㎝である。ピットは隅丸方形を呈し、深さは約60㎝を測る。埋土より土器片が出土している。

ST10は南北１間、東西１間の建物で、長軸はほぼ北を向く。柱間寸法は南北280～290㎝、東西約190㎝である。ピット１・２は隅丸方形、ピット３・４は円形～楕円形を呈し、深さは20～30㎝を測る。柱痕跡

は確認できなかった。

ST12（第114図）：③ｂ区　XIG25

Ⅴ´層を剥いで検出した。南北１間、東西１間の建物で、長軸はほぼ北を向く。柱間寸法は南北約195㎝、東西約150㎝である。ピットは円形を呈し、深さは約10㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。

ST15・16（第114図）：②ａ-ｃ区　ⅧX11・12・16・17

Ⅲ層を剥いで検出した。ST15は南北１間、東西１間の建物で、長軸はN80°Ｅ。柱間寸法は南北300～310㎝、東西390㎝である。ピットは円形を呈し、深さ30～40㎝を測る。

ST16は南北１間、東西１間の建物で、長軸はN85°Ｅ。柱間寸法は南北約210㎝、東西約240㎝、ピットは円形を呈し、深さ20～30㎝を測る。埋土より土器片が少量出土している。

ST17（第114図、PL16・30）：②ｄ区　ⅧX12・13・17・18

Ⅲ層を剥いで検出した。南北２間、東西１間の建物で、長軸はN10°Ｗ。柱間寸法は南北190～220㎝、東西約205㎝、ピットは円形～楕円形を呈し、深さ20～30㎝を測る。埋土より土器片が少量出土している。

ST18（第115図、PL16）：③ｉ区　XIN18・19・23・24

Ⅷ層中で検出した。南北２間、東西２間の総柱の建物で、長軸はほぼ北を向く。ただし、南北方向は調査区外に広がる可能性がある。SK503・504・505・506を切る。柱間寸法は南北170～200㎝、東西160～190㎝である。ピットは隅丸方形を呈し、深さは20～40㎝を測る。柱痕跡は確認できなかった。

ST19（第111図、PL16）：②ｄ区　ⅧX24

Ⅲ層を剥いで検出した。南北２間、東西３間の総柱の建物で、長軸は約N90°Ｅ。SK394・403と切り合うが新旧関係は不明、SK405に切られる。柱間寸法は南北210～220㎝、東西180～230㎝である。ピットは円形を呈し、深さ10～30㎝を測る。埋土より土器片が出土している。

４　遺物集中

④ｂ区で検出した。Ⅲ´層を剥いだ時点で土器が集中しているのを確認し、SQ1～５とした。明確な掘りこみは確認できず、坏を中心とした土器がまとまった状態で出土した。出土土器より９世紀と考えられるSQ1・２と、10世紀後半と考えられるSQ3・４・５の２時期ある。SQ1・２は、出土状態に規則性等は見出し難いが、SQ3・４・５については、食器類を合わせ口にしたような配置が読み取れ、時期差とともに興味深い。いずれも機能・用途は不明だが、占地も含めて何らかの行為に基づいた出土状況を示していると考えられる。

SQ1（第116・117図、PL18）：④ｂ区　XⅡW18

黒色土器Ａの坏Ａ（１～３）が出土した。口径約12～13㎝、器高約3.5～4.5㎝である。

SQ2（第116・117図、PL18・29）：④ｂ区　XⅡW12・17

土師器の坏Ａ（１～６）・碗（７）・皿Ｂ（８）・甕（17）、黒色土器Ａの坏Ａ（９・10）・碗（11）・皿Ａ（12）、須恵器の坏Ａ（13）、灰釉陶器の碗（14）・皿Ｂ（15・16）が出土した。６・９は墨書である。14は

灰釉陶器碗、15・16は灰釉陶器皿である。土師器坏Ａは口径約12～13㎝、器高3.5～4.5㎝、黒色土器Ａ坏Ａは口径４～4.5㎝である。

SQ3（第116・117図、PL18・29）：④ｂ区　XⅢW12

土師器の坏Ａ（１～５）、黒色土器Ａの碗（６～９）が出土した。土師器坏Ａは口径10～10.5㎝、器高2.5～3.5㎝である。

SQ4（第116・117図、PL18・29）：④ｂ区　XⅢW12

土師器の坏Ａ（１～10）・碗（11～13）が出土した。土師器坏Ａは口径9.5～11.5㎝、器高2.5～3.0㎝である。

SQ5（第116・117図、PL18・29）：④ｂ区　XⅢW7

土師器の坏Ａ（１～６）・碗（７）が出土した。いずれの土器も遺存状態が悪く、取上げ後細かな破片に割れてしまった。土師器坏Ａは口径10.0～11.5㎝、器高2.0～3.0㎝である。

5　墓跡・土坑

土坑は調査区全体で検出された。そのうち、墓跡と考えられる土坑、特徴的な土器の出土状態であった土坑、製鉄関連遺物が多く出土した土坑を図示した。遺物の出土が少ないため、検出面や遺構埋土からその時期を判断したため、若干時期の前後する遺構が含まれると思われる。

SK4（第118・119図、PL６・24）：③ｂ区　XIH23

遺構：Ⅴ´層を剥いで検出した。長軸215㎝、短軸128㎝の隅丸長方形で長軸はほぼ北を向き、深さは44㎝である。歯と棺材と思われる木材の一部も出土しており、木棺墓と考えられる。残存していた歯の位置より、被葬者は頭部を北に安置されていたとみられる。

分析：骨　出土した歯の分析鑑定は第４章１節に掲載してある。

遺物：土師器の坏Ａ（１～４）・碗（５）・甕（９）、黒色土器Ａの碗（６～８）、鉄製紡錘車（10・11）、鉄鐸（12～21）が出土した。出土位置等より１～３・５～９は木棺の外、鉄製紡錘車は木棺内の頭部近く、鉄鐸は木棺内の腰付近に置かれたと考えられる。なお、鉄製品は鉄鐸のみ錆取りを実施し、紡錘車は錆付着の状態で実測し、X線透過撮影フィルムを参考に線を加えている。紡錘車のうち10は紡輪と考えるが、紡輪にしては重いため他の製品の可能性もある。遺構の時期は10世紀後半と考えられる。

鉄鐸：出土状態を保つため土ごと取上げ、X線透過撮影を実施した。その結果、鉄鐸は８点であると考えた。しかし、錆取りをして個々に分離した結果、鉄鐸９点と舌１本であることが判明した。９点のうち４点（15～18）の内部には舌が残っていた。また２点（18・19）の外側には木質が付着している。同じ方向に倒れていたり、重なっていたりする出土状況より有機質の紐で結わえていた可能性が考えられる。

SK250（第120図、PL17）：④ａ区　XⅢV4

遺構：SB28の床面精査時に検出した。SB28の床がSK250の埋土上部に広がらないことから、SK250がSB28を切るとした。長軸146㎝、短軸90㎝の隅丸長方形で、長軸は約15°西に振れる。深さは50㎝である。北側の壁際から頭部付近の人骨が出土した。被葬者は頭部を北に安置されていたとみられる。

分析：骨　出土した骨は遺存状態が悪いため、歯のみ分析鑑定し、第４章１節に掲載してある。

遺物：副葬品と思われる遺物は出土していない。遺構の時期はSB28を切ることから10世紀後半以降と考えられる。

SK643（第120図）：④ｂ区　XⅡW14
遺構：Ⅱ´層を剥いで検出した。直径84㎝前後の円形で、深さ18㎝である。
分析：骨　出土した歯の分析鑑定は第４章１節に掲載してある。
遺物：埋土より土器片がわずかに、人の歯が土坑北より数点出土している。遺構の時期は検出面より平安時代後期以降と考えられる。

SK580（第120図、PL17・29）：①区　ⅧK12・13
遺構：Ⅳ層中で検出した。長軸113㎝、短軸58㎝の隅丸長方形で長軸は西に約80°振れる。深さは18㎝である。
分析：リン・カルシウム分析　出土した坏の内部と下・遺構外の３地点の土壌を採取し、分析を実施した。リン酸含有量・カルシウム含有量とも、坏内部の土壌が他の２地点より高い値であった。しかし特に高い値ではないため、土器内にリン酸やカルシウムを含む生物遺体が存在していた可能性があるが、確定的なことは言えない。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
遺物：西壁近くで坏２個が合わせ口の状態で出土（１・２）した。上に乗っていた須恵器坏（２）には「加」と読める墨書があった。墓か祭祀遺構の可能性が考えられるが、遺構の性格は不明である。

SK513・515・621・622（第121図）：②ｄ区　ⅨD5・10
遺構：Ⅲ層を剥いで検出した。SK513・515が調査区外に広がっていたため、調査区を拡張した。SK515・621・622は円形～楕円形、SK513は不整形である。
分析：骨　SK513からシカの歯が出土している。
分析：樹種同定　SK513埋土出土の炭化材２点を同定し、２点ともカヤと判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材２点の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、984-1045calAD（88.7％）、981-1040calAD（95.4％）である。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
分析：製鉄関係　SK513出土の炉壁２点・羽口１点、・鉄滓１点、SK515出土の羽口１点の化学成分分析・顕微鏡組織観察・X線回析測定・耐火度試験を実施した。その結果、SK513出土の炉壁・鉄滓、SK515出土の羽口が砂鉄精錬にかかわる遺物であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。
遺物：SK513から土師器坏（１）・黒色土器Ａ碗（２・３）の土器と、炉壁（第130図炉壁１～３、PL32）・鉄滓など製鉄関連の遺物が出土している。SK515からは羽口（第130図羽口２、PL31）が出土している。

6　溝跡

SD4・9（第122・123図、PL17）：③ｂｃ区　XⅠH25　XⅠM5・10・14・15・19・20
遺構：Ⅴ´層を剥いで検出した。SK74・101～103他に切られる。平安時代検出面で幅約16ｍ、長さ30ｍ以上で調査区を南北に横断し、調査区外へ伸びる。南壁では深さ最大1.7ｍ平均1.2ｍだが、古墳時代の竪穴住居跡SB27の北付近に浅い部分がある。主流はここからやや北西よりに流れを変えた様子がうかがえる。

西側はほぼ一定の深さを保ち緩やかに立ち上がる。底部付近は鉄分が集積し固い。自然流路で、砂層と砂礫層が入り混じって堆積している。SD4は南壁断面観察の結果、SD9の一部で、埋積する最後の流れの可能性が高い。

分析：樹種・種子同定　埋土出土の加工材と炭化種子を同定し、加工材は針葉樹、炭化種子はイネ炭化胚乳であることが判った。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した埋土出土の加工材と炭化種子の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、炭化材が592-658calAD（95.4%）、炭化種子は671-783calAD（91.7%）である。溝跡なのでやや幅広い年代を示したと考えたい。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

遺物：SD4からは虎渓山窯の灰釉陶器碗が出土してる。SD9からは古墳時代～平安時代の須恵器が多く出土している。土師質の土錘（第129図３、PL30-13）の破片、瓦塔（第129図）や子持勾玉（第66図石製品１、PL23-34）も底部付近から出土した。炭化種子も多く出土した。

瓦塔（第129図、PL30）：全部で８片、土師質で胎土・焼成とも似た様相を示している。SD9の砂礫層を中心に出土している。

１は屋蓋の破片。瓦部は、半截竹管状工具を引き下ろして丸瓦を表現しており、継目は２箇所確認できる。丸瓦１枚は長さ2.5㎝、幅0.8㎝。軒裏には垂木が削り出しで表現されており、真ん中に１本、破片の端にもう１本がわずかに観察できる。垂木の幅は上部で約1.0㎝、下部で1.2㎝とやや広がる。所々に赤色の付着が見られるが、土中の鉄分の付着か意図的な塗彩かは不明である。

２は屋蓋軒先の破片。瓦部は一部痕跡を残すが、大半は剥落している。軒裏には削り出しで垂木１本が表現されている。垂木の幅は約1.0㎝、段から先の長さ2.0㎝である。

３は屋蓋の破片。瓦部のみで軒裏は剥落している。半截竹管状工具を引き下ろして丸瓦を表現している。継ぎ目は２箇所確認できる。丸瓦１枚は長さ2.6㎝、幅0.8㎝。

４は軸部上部破片で、柱の表現が多くみられるので初層の破片と思われる。柱は粘土が剥がれた痕跡も含めて、縦３本、横２本確認でき、縦方向の上２本は斗栱、横方向の上の柱は台輪、下の柱は内法長押と考えられる。斗栱の粘土が剥がれた跡には、幅0.3㎝の棒状工具のようなもので引きずった跡が２本平行して観察できる。これは粘土を貼りつける際の成形・調整痕の可能性がある。内法長押を表現した粘土が剥がれた跡にも、粘土の端に沿うように幅0.1㎝の細い線刻が観察できる。残存している台輪の粘土は上部の幅0.4～0.5㎝、基部0.6～0.9㎝。壁部分はケズリ調整と思われる。

５は軸部の破片で、縦方向の柱が確認できる。初層上部付近、開口部から四隅の角の破片の可能性が高い。およそ16㎝四方の大きさとなる。柱は粘土を貼りつけた突帯で表現され、幅は上部0.6㎝、基部で0.8㎝。突帯の外側には縦方向に引きずった跡が観察できる。破片左下には工具による切り込みの跡があり、この部分が開口部の四隅の角の可能性も考えられる。また、右隅は表から裏にかけては斜めに剥離しており、軸部の四隅の角の可能性がある。瓦塔４より薄い。

６は軸部の破片の可能性が高い。上下不明。線刻が観察できる。

７は軸部の破片の可能性が高い。小破片だが、開口部の可能性がある部位で、工具の痕跡が確認できる。工具の痕跡は、粘土を貼りつけたときのものと思われる。今までの破片で工具を使用して粘土を貼りつけたものは横向きの柱が多いため、図のような向きになると思われる。

８は軸部の柱を表現した粘土が剥がれ落ちたものと思われる。

以上の８点について年代を特定することは難しいが、出土した遺構（SD9）が、５世紀後半の竪穴住居跡を壊し10世紀頃の集落の時期には埋まっていたこと、周辺に９世紀代の住居跡が存在すること、今まで出

土した瓦塔の時期の中心が８～９世紀であることなどから、９世紀頃の可能性が高いと考えられる。なお、瓦塔については、出河裕典氏にご指導いただいた。

この遺構の時期は、洪水砂と考えられる砂層を埋土に持ち、古墳時代後期の竪穴住居跡を切っている点から、古墳時代後期～平安時代と考える。

SD11・12・13・14・16（第124・125・126図、PL27・31）：④ａ区　XIIQ23・24　XIIV3・４・８・９

SD11・12・13：Ⅱ´層を剥いで検出した。SD11・12は幅0.3～0.6m、SD13は幅0.5～1.2mで調査区を南北に横断し、調査区外へ伸びる。SD11はSB29を、SD12はSB28・29を、SD13はSB28・SD16を切る。SD11はSK260に切られる。SK252・253・257はSD12の底面、SK251・255・256・258はSD13の底面で検出したが、切り合い関係は不明である。いずれの遺構も埋土より土器片がわずかに出土している。

SD14：Ⅲ´層を剥いで検出した。この遺構を境に東側は段状に0.4mほど地形が上がり、これに沿ってSD14は構築されている。幅1.6～3.6m、深さ約0.6mで調査区を南北に横断し、調査区外へ伸びる。底部は中央付近と南端で楕円形の土坑状に落ち込む。遺物は底部近くから花崗閃緑岩製の石帯（第126図SD14-22、PL31-８）、埋土より鉄斧（第126図SD14-23）、灰釉陶器の転用硯（第126図21）、底部中央付近の土坑状の落ち込みから多量の土師器坏・碗を主にした土器（第126図SD14-１～20）が出土したが、それ以外の地点から遺物はほとんど出土していない。溝底部全体には炭化物、焼土粒が堆積している。この遺構の時期は出土土器の様相より10世紀後半と考えられる。

SD16：Ⅲ´層を剥いで検出した。幅1.2～2.0m、深さ約0.8mで調査区を南北に横断し、調査区外へ伸びる。SB28を切り、SD13に切られる。土師器坏（第126図SD16-１～３）、土師器碗（第126図SD16-４）、転用硯とした朱墨痕のある灰釉陶器段皿（第126図SD16-５）が出土している。この遺構の時期は出土土器の様相より11世紀初めと考えられる。

分析：樹種同定　SD14埋土出土の炭化材を同定し、コナラ属コナラ節と判明した。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

分析：年代測定　上述の樹種同定を実施した炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、890-988calAD（95.4%）であり、土器の様式から考えられる年代と相違しない。分析の詳細については、付属CDに収録したので参照されたい。

その他SK・SD出土遺物（第127・129図、PL31）

SK864（④ｂ区 XIIW12）から土師器坏Ａ、SK188（③ａ区 XIG23）から須恵器坏Ａが出土している。SK10（③ｂ区 XIM3）出土の土師器甕は胴下半部のみで外面はヘラ削り、内面はナデで調整している。SK243は調査区壁検出の遺構で、出土した土師器甕は壁内で若干傾くが直立した状態であった。遺構本来の形状は不明なため、便宜上SKとした。SK312・341・960からは砥石が出土している。SK341出土は凝灰岩製、SK312・960は砂岩製である。SK346出土の鉄製品の刀子は、柄の部分に木質部が残存している。

SD8（③ａ・ｂ区）からは黒色土器Ａ坏Ａ（１）と、須恵器坏Ａ（２）が出土している。SD20からは黒色土器Ａ坏Ａ（１）と、須恵器坏Ａ（２）が出土している。土錘２（第129図、PL30-11）は土師質でSK368から出土している。

７　遺構外出土遺物（第128・129図）

１は①区、２は②区、３～13・15～17は④ｂ区、14は③ｃ区の検出面から出土している。１～３・５～８は土師器坏Ａ、９は黒色土器Ａ坏Ａである。４は土師器皿である。10・11は須恵器坏Ａ、14は須恵器坏

Ｂである。12は黒色土器Ａの皿、13は黒色土器Ａの碗である。15は緑釉陶器碗の底部、16は土師器耳皿、17は灰釉陶器耳皿である。土錘１（第129図、PL30-９）は土師質で④ｂ区から出土した。土製品４（第129図）は用途不明品で断面が四角の角柱状で、片側は外れた状態である。④ｂ区から出土している。

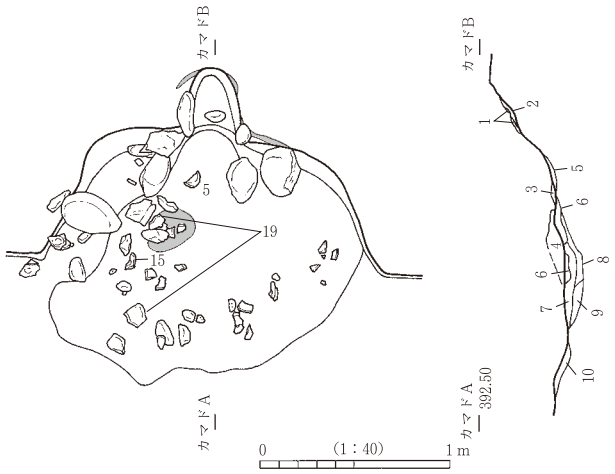
出土馬歯（第131図、PL18）

ほぼ１頭分の馬の歯が、２地点から出土している。

SK2出土　①区 ⅧK17（試掘トレンチ１）：基本Ⅳ層に覆われた水田を切るSK2より出土した。SK2は不整形で底面から緩やかに立ち上がる。深さは16㎝である。馬歯以外の出土遺物はない。

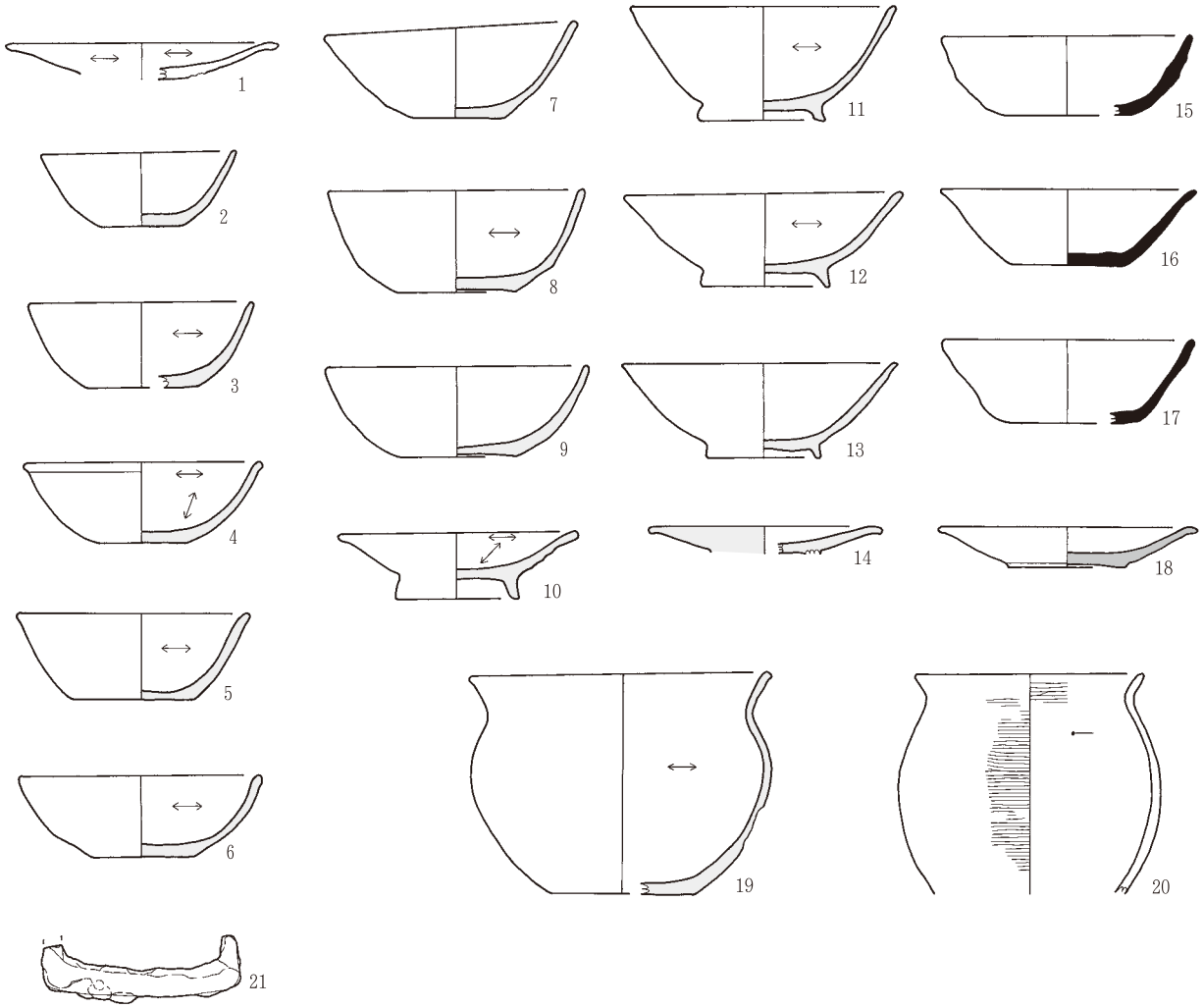
XIN1グリッド出土　③ｃ区 XIN1：SD9そばより出土した。掘りこみは確認されていない。

出土した歯の分析鑑定は第４章１節に掲載してある。

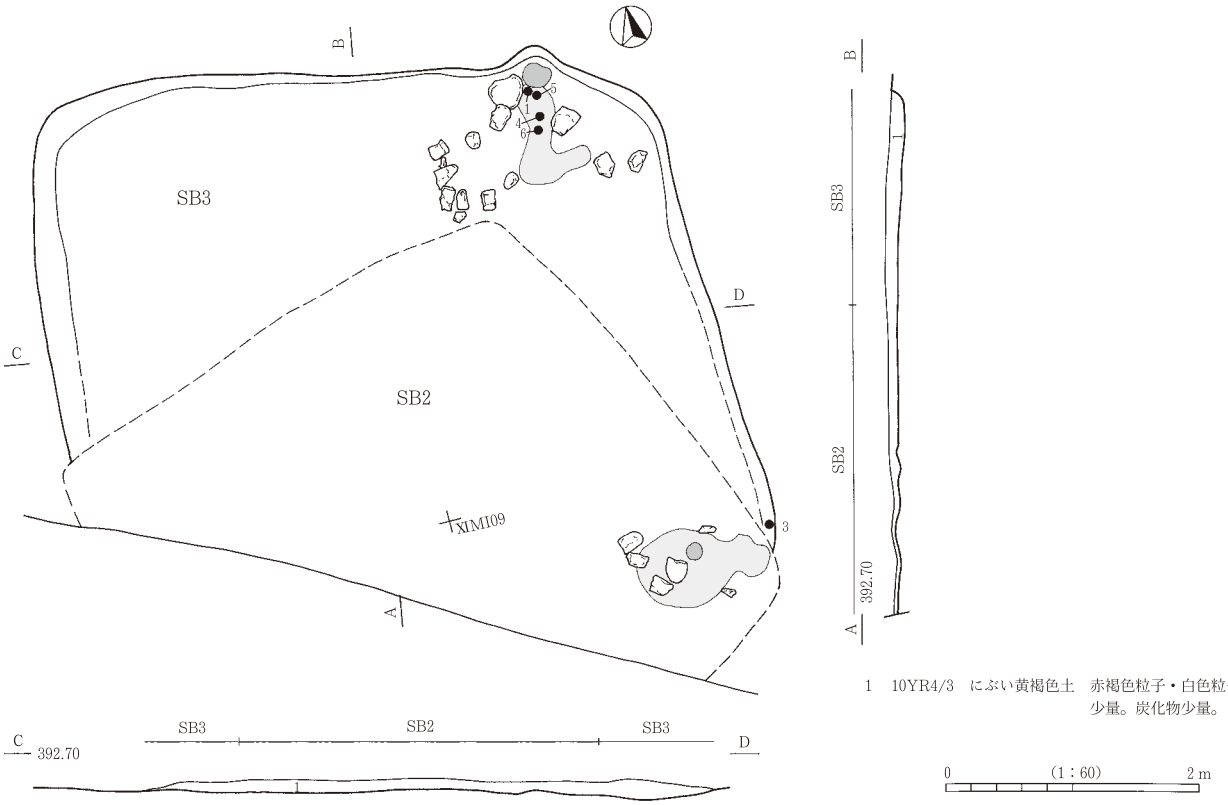


	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～10㎜の黄褐色細砂少量。φ50～100㎜の円礫多い。鉄分の沈着多い。白色粒子少量。
カマド	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	埋土１層より暗く炭化物混入。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	埋土１層よりやや暗く焼土粒少量混入。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	埋土１層に焼土粒少量混入。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	埋土１層に焼土粒少量混入。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色土	埋土１層に焼土粒・炭化物少量混入。
	6	5 YR4/6	赤褐色焼土	φ５㎜位の灰褐色土混入。
	7	10YR4/2	灰黄褐色土	焼土粒・炭化物・灰混入。
	8	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土・灰混入。
	9	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	やや砂質。
	10	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒・炭化物混入。

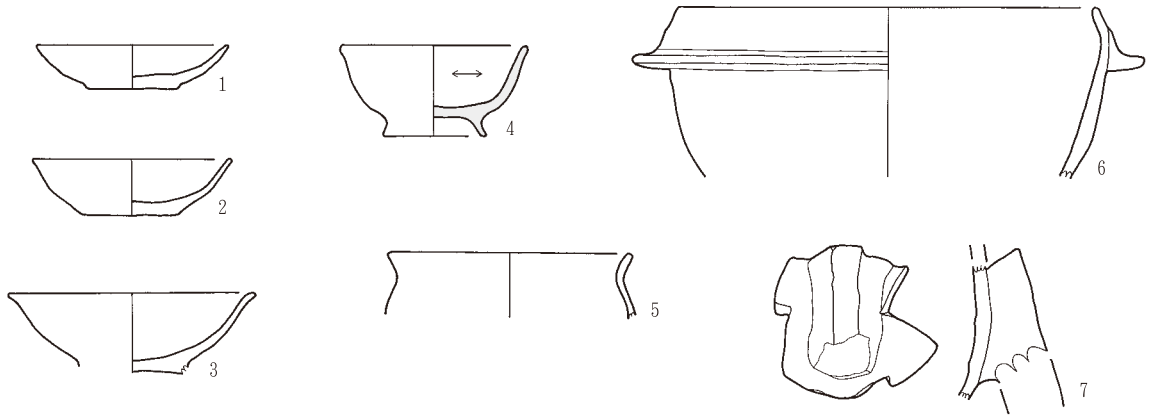
第70図　SB1遺構図



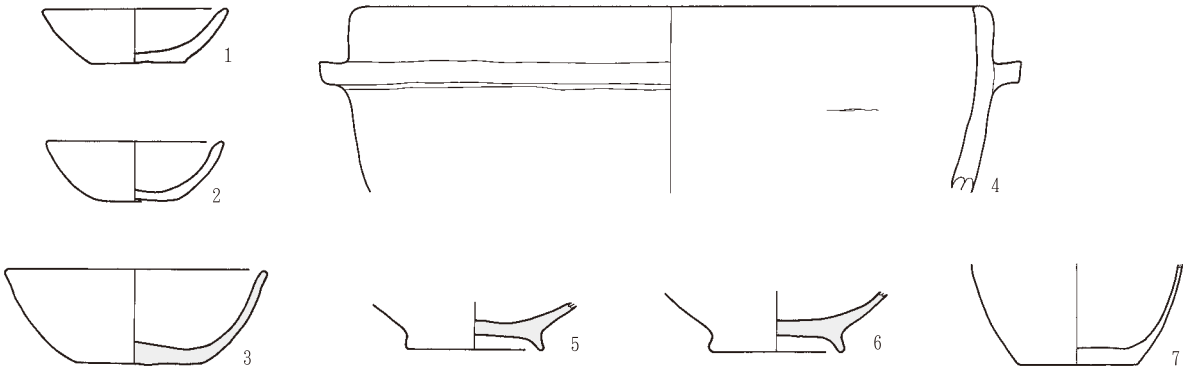
第71図　SB1遺物



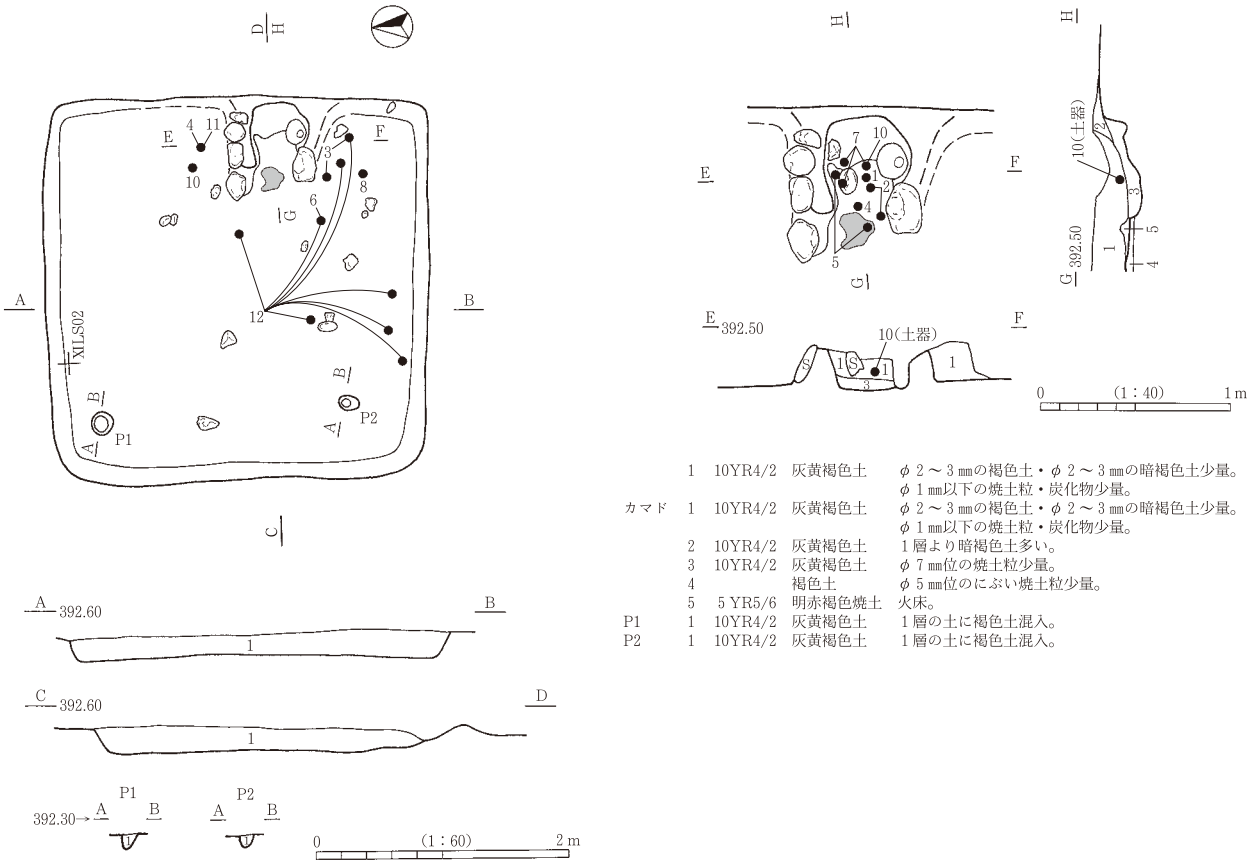
SB2



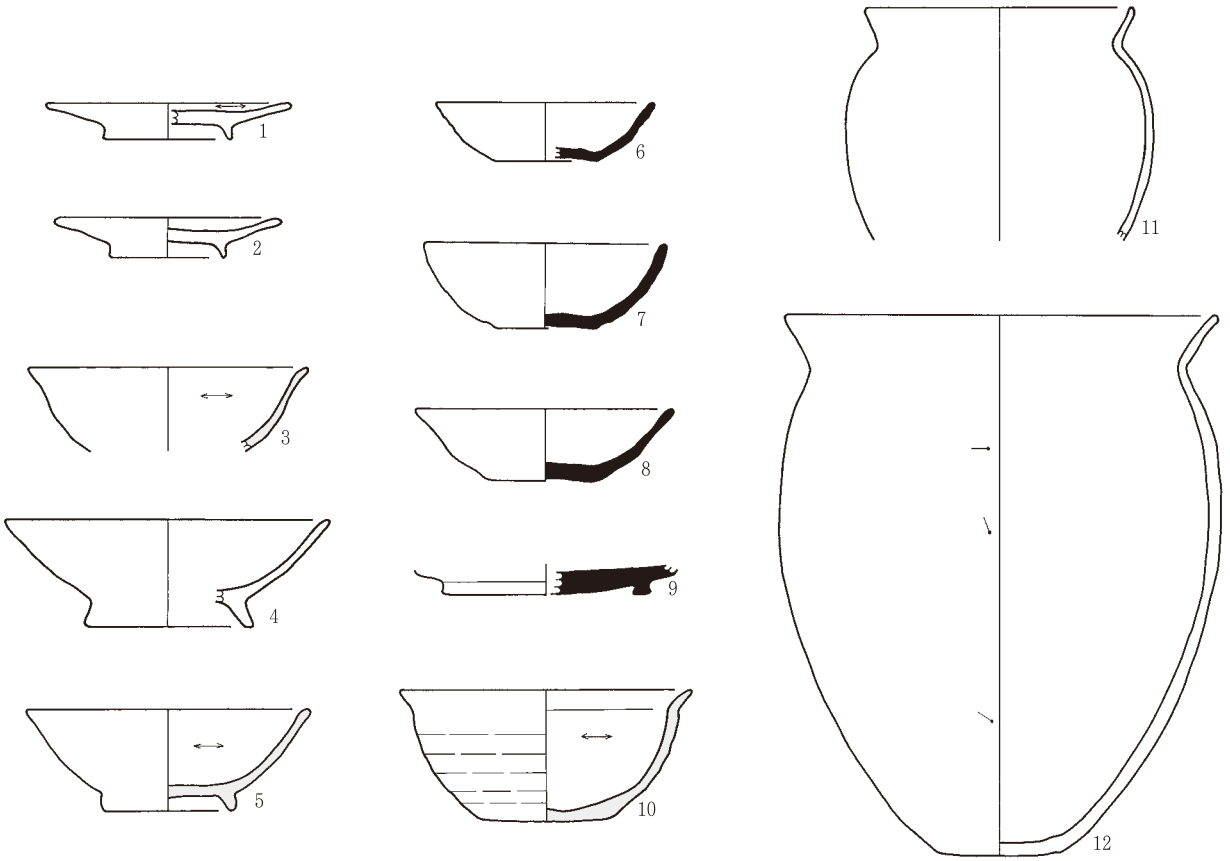
SB 3



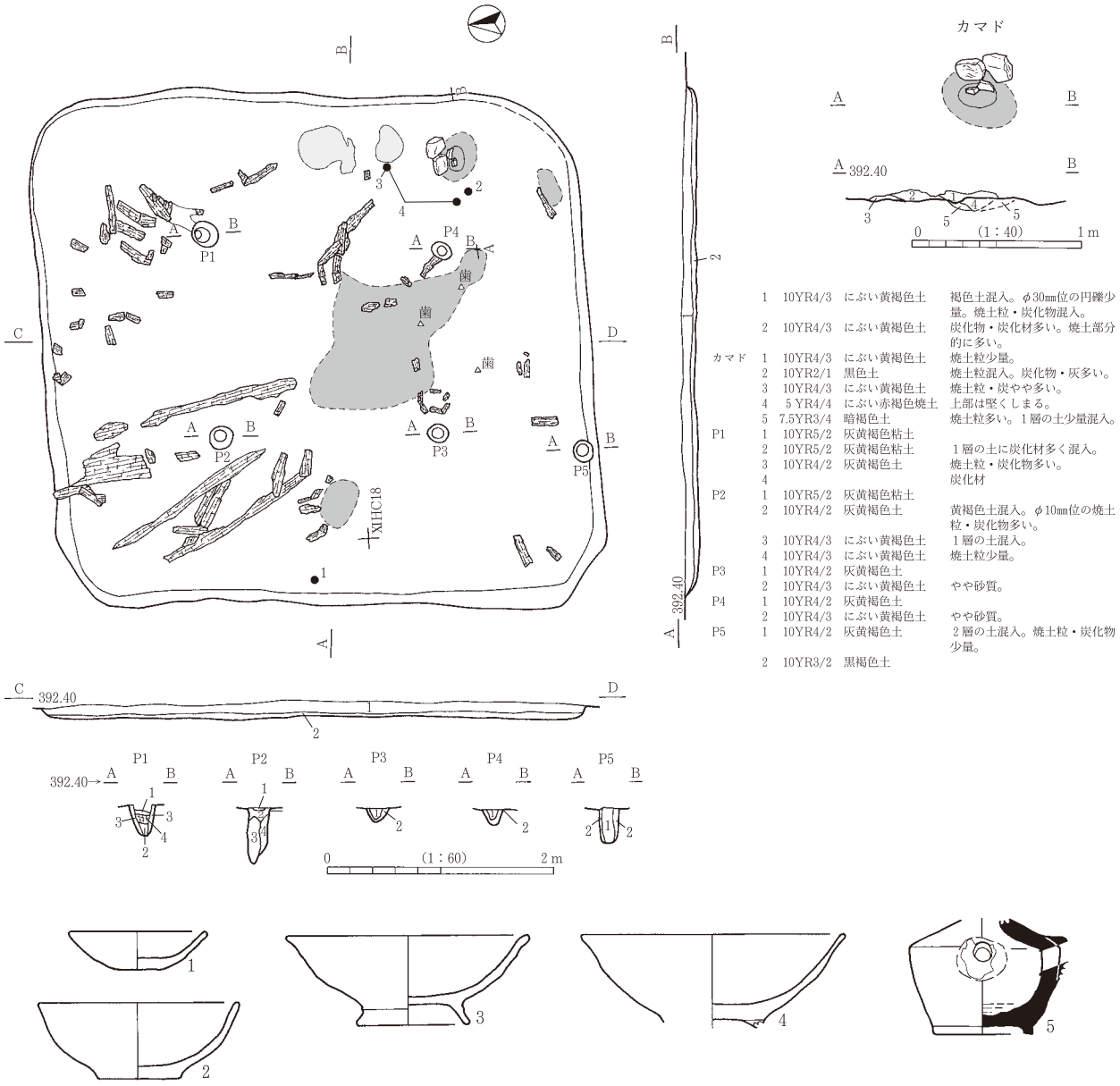
第72図　SB2・3



	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ２～３㎜の褐色土・φ２～３㎜の暗褐色土少量。φ１㎜以下の焼土粒・炭化物少量。
カマド	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ２～３㎜の褐色土・φ２～３㎜の暗褐色土少量。φ１㎜以下の焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR4/2	灰黄褐色土	１層より暗褐色土多い。
	3	10YR4/2	灰黄褐色土	φ７㎜位の焼土粒少量。
	4		褐色土	φ５㎜位のにぶい焼土粒少量。
	5	５YR5/6	明赤褐色焼土	火床。
P1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	１層の土に褐色土混入。
P2	1	10YR4/2	灰黄褐色土	１層の土に褐色土混入。

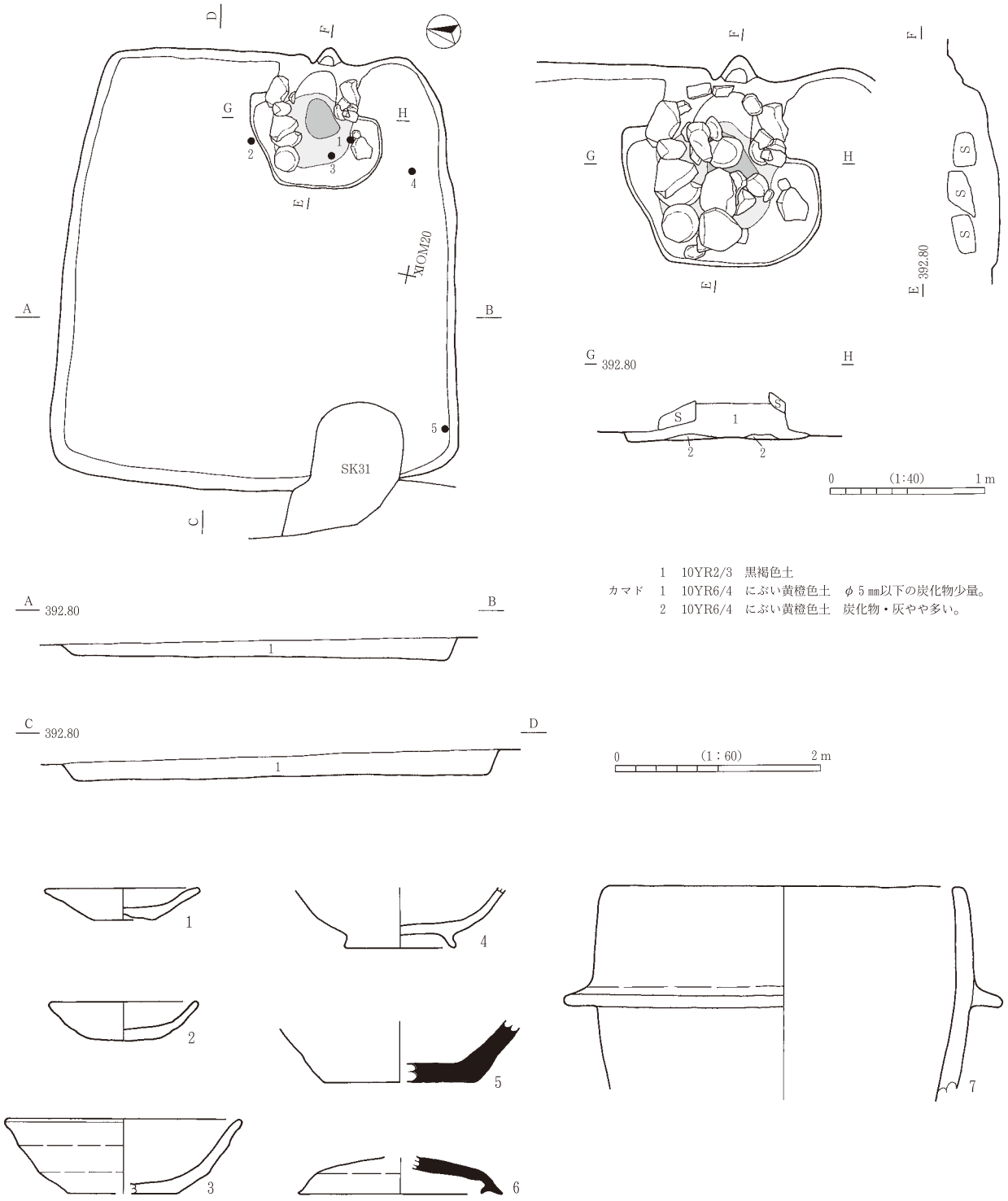


第73図　SB5



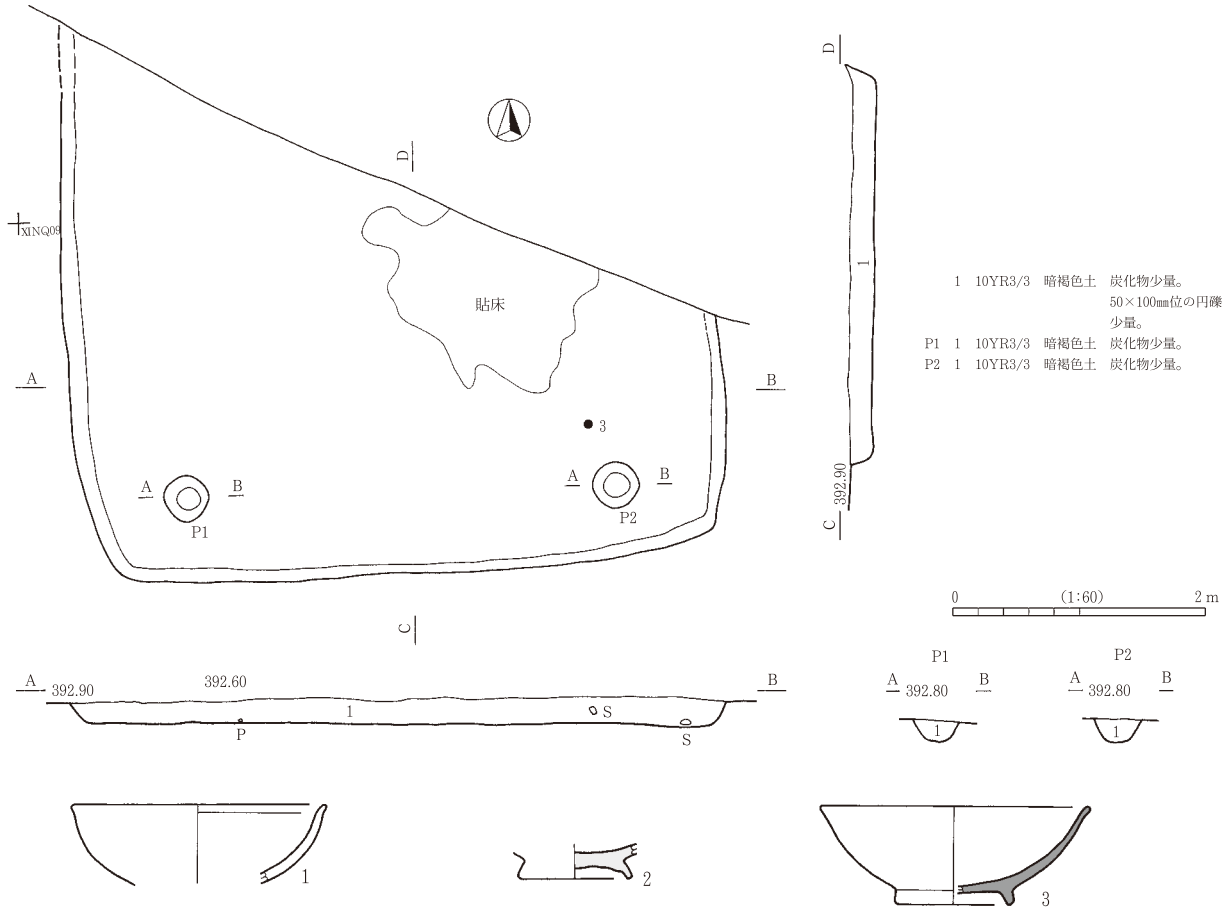
	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	褐色土混入。φ30mm位の円礫少量。焼土粒・炭化物混入。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物・炭化材多い。焼土部分的に多い。
カマド	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒少量。
	2	10YR2/1	黒色土	焼土粒混入。炭化物・灰多い。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒・炭やや多い。
	4	5YR4/4	にぶい赤褐色焼土	上部は堅くしまる。
	5	7.5YR3/4	暗褐色土	焼土粒多い。１層の土少量混入。
P1	1	10YR5/2	灰黄褐色粘土	
	2	10YR5/2	灰黄褐色粘土	１層の土に炭化材多く混入。
	3	10YR4/2	灰黄褐色土	焼土粒・炭化物多い。
	4			炭化材
P2	1	10YR5/2	灰黄褐色粘土	
	2	10YR4/2	灰黄褐色土	黄褐色土混入。φ10mm位の焼土粒・炭化物多い。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	１層の土混入。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒少量。
P3	1	10YR4/2	灰黄褐色土	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	やや砂質。
P4	1	10YR4/2	灰黄褐色土	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	やや砂質。
P5	1	10YR4/2	灰黄褐色土	２層の土混入。焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	

第74図　SB7


D
F
G
H
E
A
B
C
XOM20
SK31
392.80
S
1
2
3
4
5
0
(1:40)
1 m
1　10YR2/3　黒褐色土
カマド　1　10YR6/4　にぶい黄橙色土　φ５㎜以下の炭化物少量。
2　10YR6/4　にぶい黄橙色土　炭化物・灰やや多い。
0
(1：60)
2 m
6
7

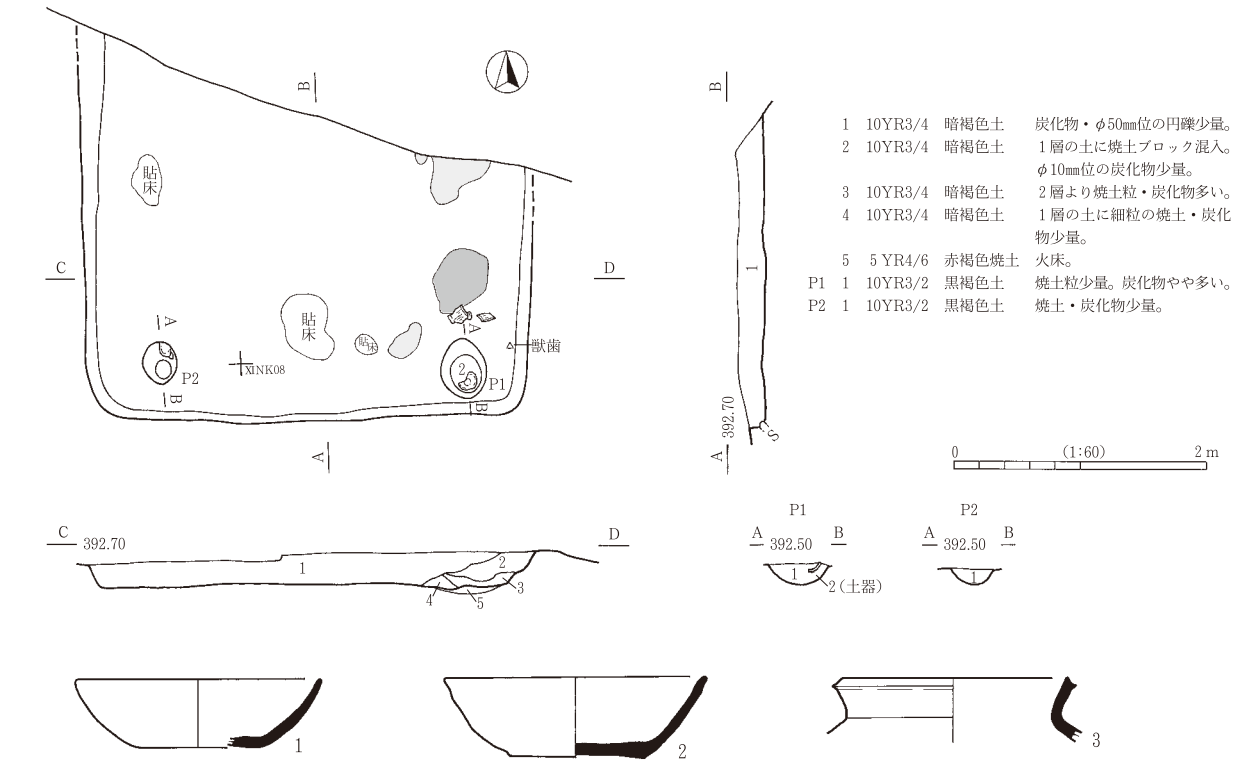
第75図　SB10

SB17



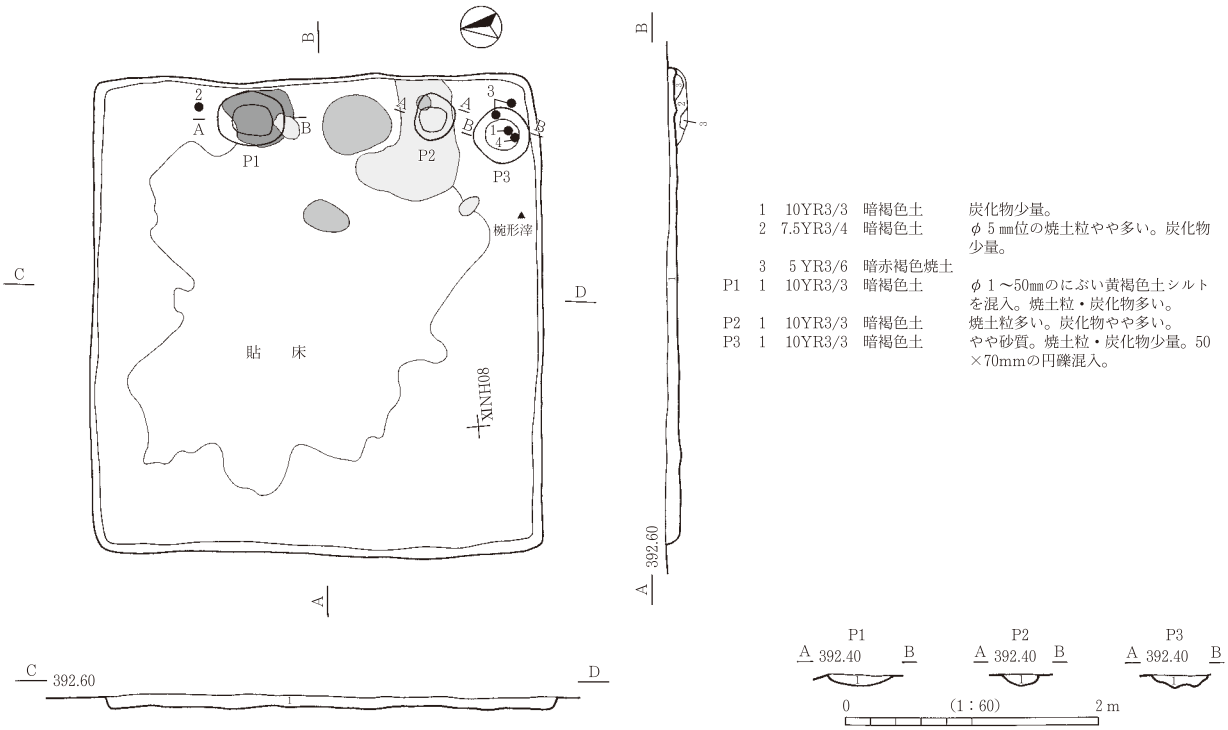
1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。
　　50×100㎜位の円礫少量。
P1　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。
P2　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物少量。

SB18

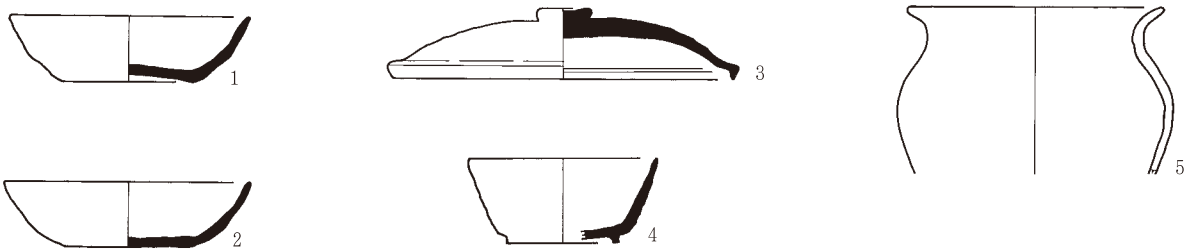


1　10YR3/4　暗褐色土　炭化物・φ50㎜位の円礫少量。
2　10YR3/4　暗褐色土　１層の土に焼土ブロック混入。
　　φ10㎜位の炭化物少量。
3　10YR3/4　暗褐色土　２層より焼土粒・炭化物多い。
4　10YR3/4　暗褐色土　１層の土に細粒の焼土・炭化物少量。
5　5 YR4/6　赤褐色焼土　火床。
P1　1　10YR3/2　黒褐色土　焼土粒少量。炭化物やや多い。
P2　1　10YR3/2　黒褐色土　焼土・炭化物少量。

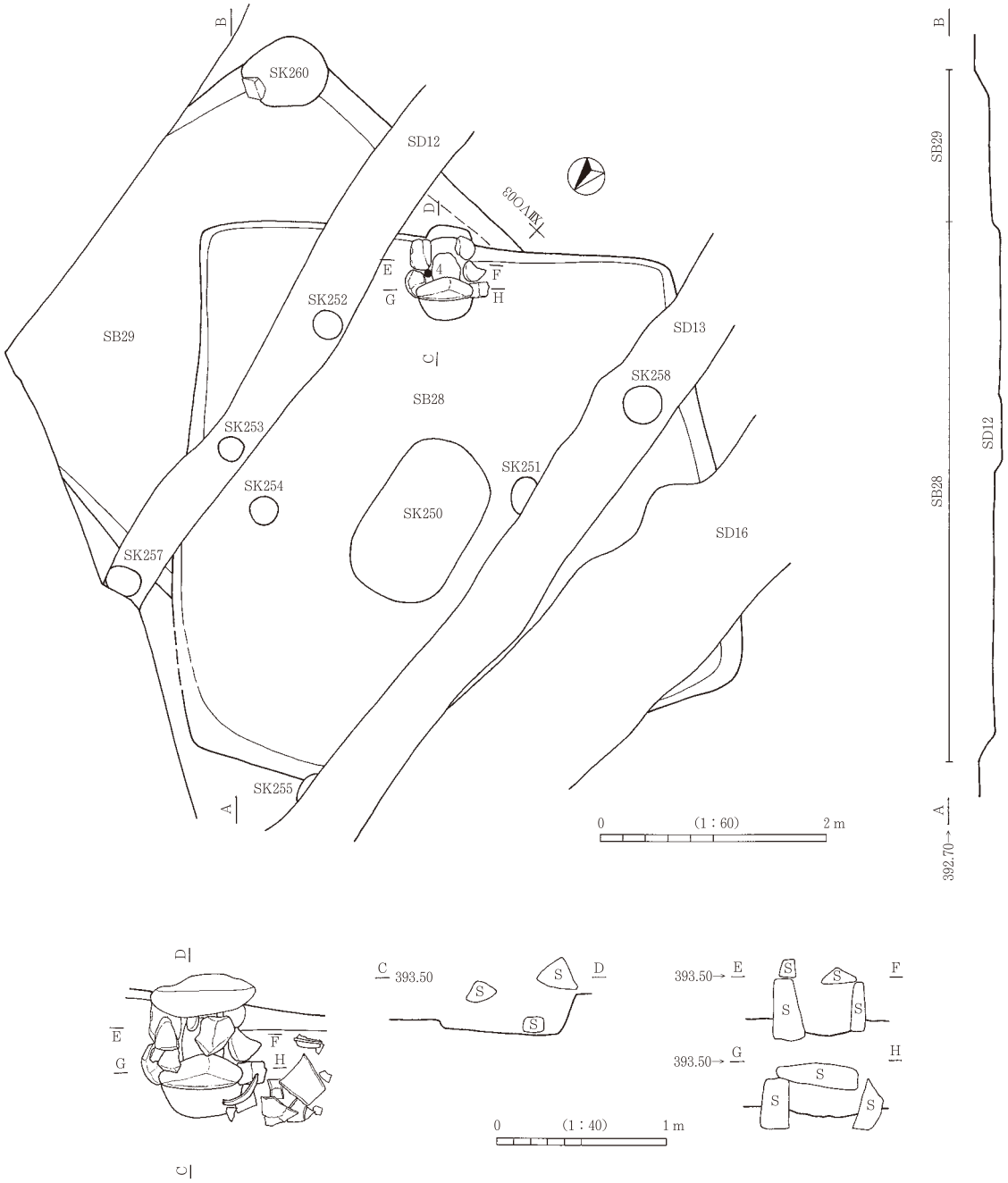
第76図　SB17・18



	1	10YR3/3	暗褐色土	炭化物少量。
	2	7.5YR3/4	暗褐色土	φ５㎜位の焼土粒やや多い。炭化物少量。
	3	５YR3/6	暗赤褐色焼土	
P1	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～50㎜のにぶい黄褐色土シルトを混入。焼土粒・炭化物多い。
P2	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒多い。炭化物やや多い。
P3	1	10YR3/3	暗褐色土	やや砂質。焼土粒・炭化物少量。50×70mmの円礫混入。

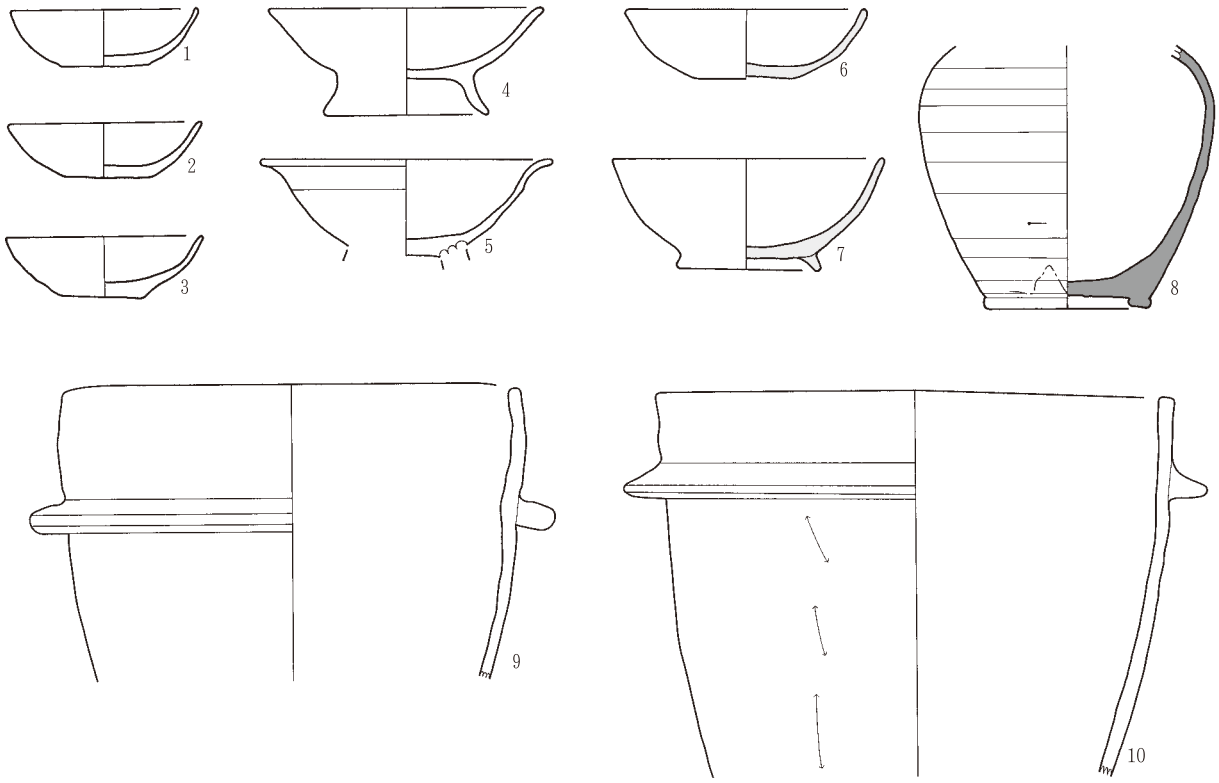


第77図　SB19

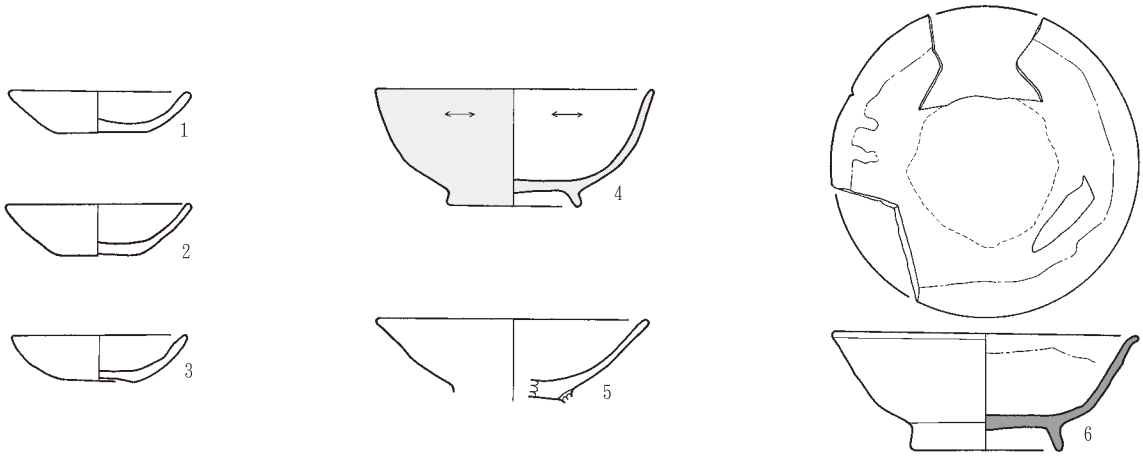


第78図　SB28・29遺構図

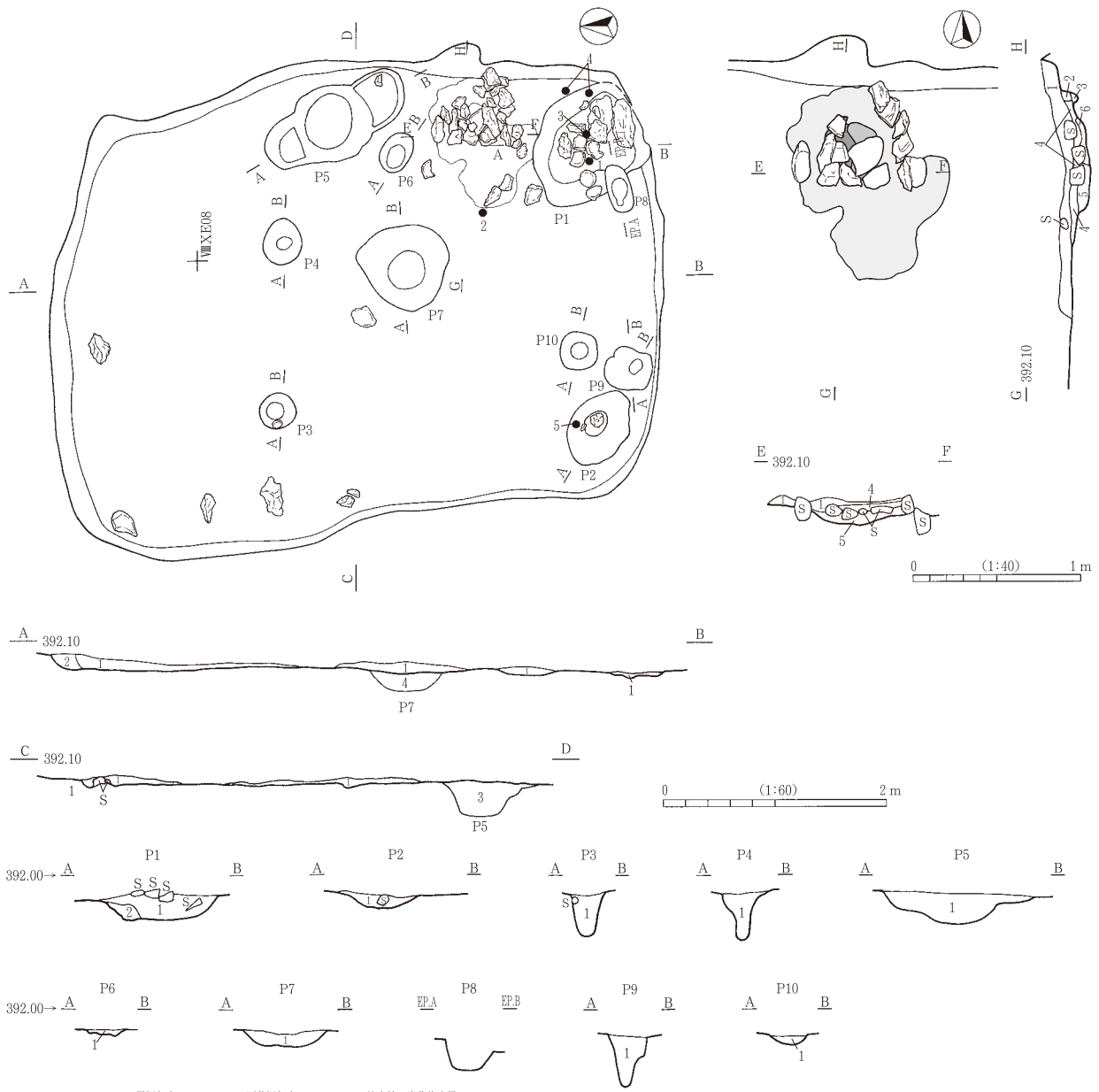
SB28



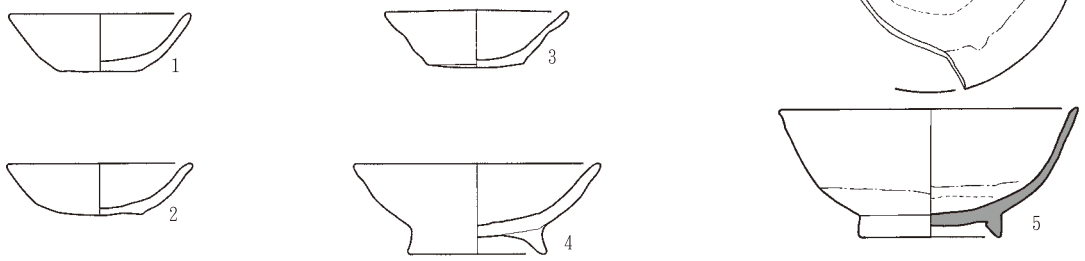
SB29



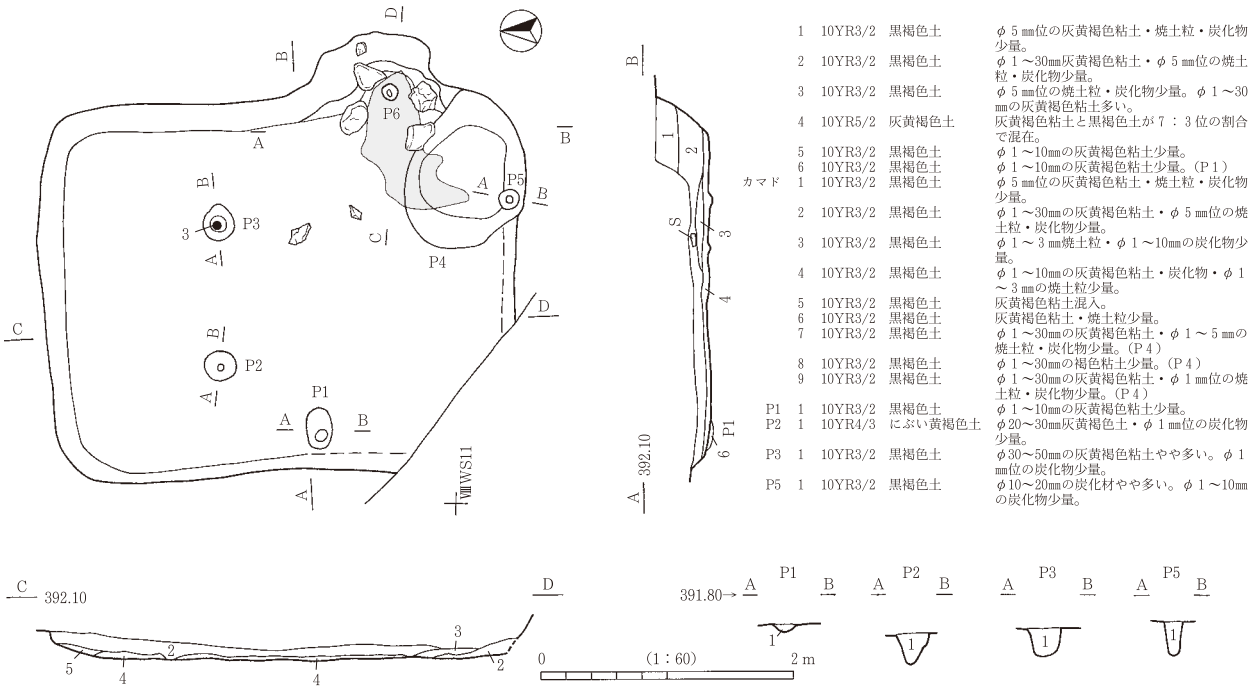
第79図　SB28・29遺物



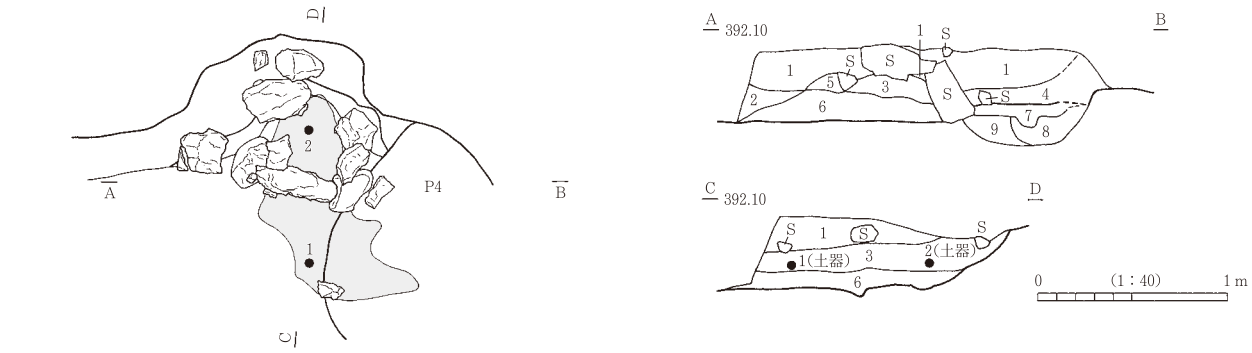
	1	10YR3/2	黒褐色土	φ10～30㎜の灰黄褐色土・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂・φ１～３㎜の炭化物粒混入。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・炭化物、φ１～５㎜の焼土粒混入。
	4	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の灰黄褐色粘土やや多い。φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。(P7)
カマド	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・炭化物、φ１～５㎜の焼土粒少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～40㎜の灰黄褐色粘土多い。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
	4	10YR3/1	黒褐色土	炭・灰を中心に黒褐色砂質土・φ１～10㎜の焼土粒混入。
	5	10YR3/1	黒褐色土	炭・灰を中心に褐色粘土・φ１～10㎜の焼土粒少量。
	6	10YR4/4	褐色土	φ１㎜位の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
P1	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色粘土・φ１～10㎜の焼土粒少量。φ１～15㎜の炭化物やや多い。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～40㎜の灰黄褐色粘土多い。
P2	1	10YR3/2	黒褐色土	φ５～10㎜の灰黄褐色粘土・φ５㎜位の炭化物少量。φ１～３㎜の焼土粒極少量。礫混入。
P3	1	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色粘土混入。φ１～３㎜の炭化物・焼土粒少量。
P4	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～50㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
P5	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の焼土粒・φ１～10㎜の炭化物粒少量。
P6	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物径３％少量。
P7	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の灰黄褐色粘土粒やや多い。φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
P9	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物少量。
P10	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物少量。

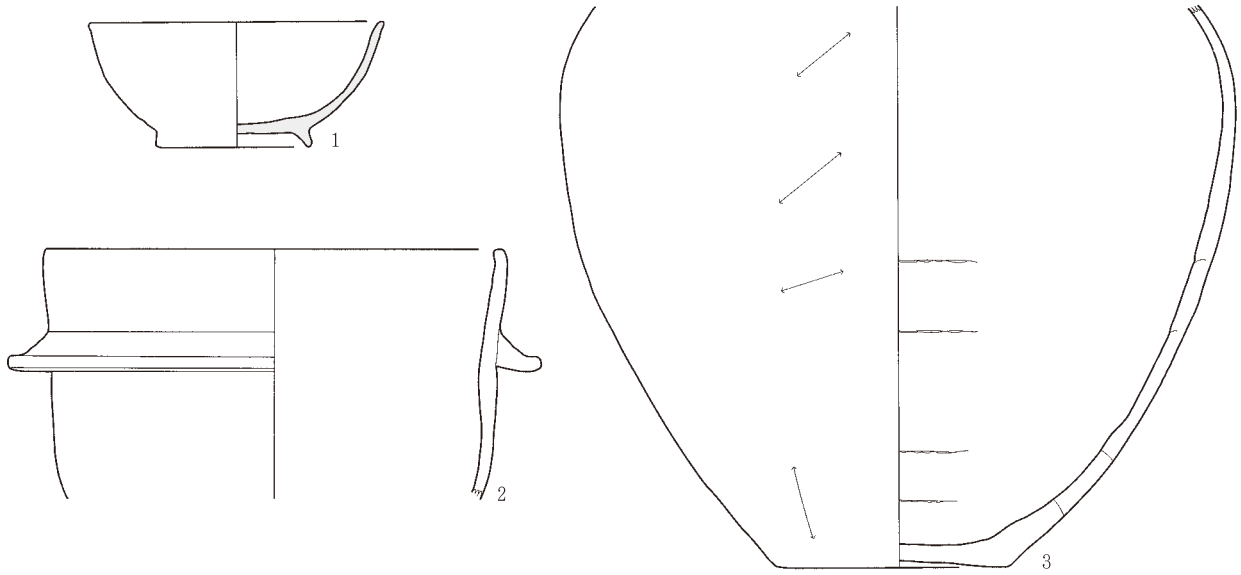


第80図　SB30

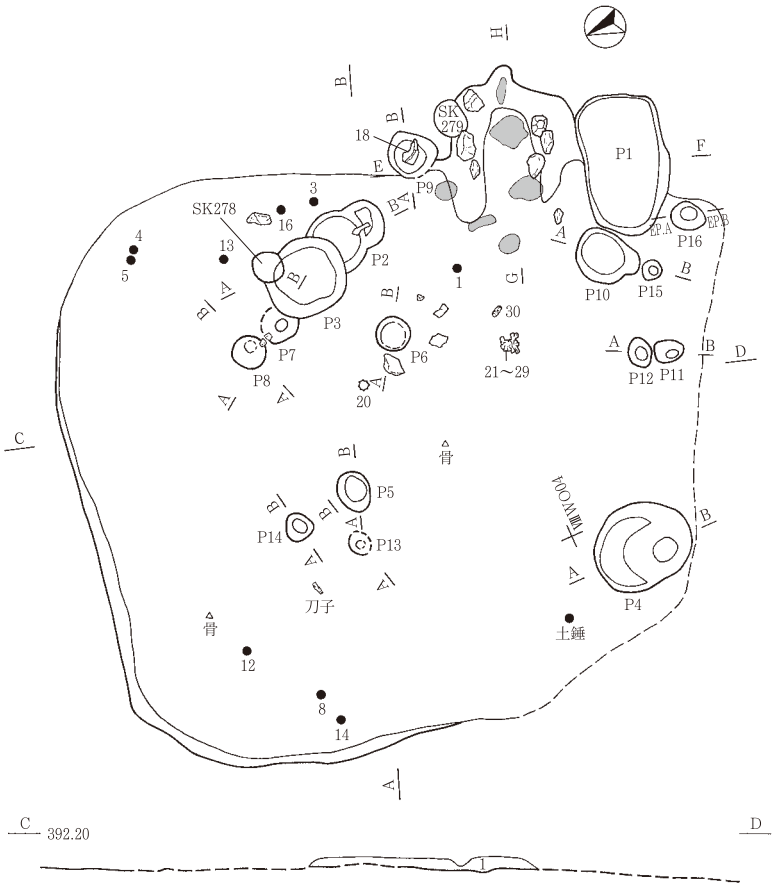


	1	10YR3/2	黒褐色土	φ５㎜位の灰黄褐色粘土・焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜灰黄褐色粘土・φ５㎜位の焼土粒・炭化物少量。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ５㎜位の焼土粒・炭化物少量。φ１～30㎜の灰黄褐色粘土多い。
	4	10YR5/2	灰黄褐色土	灰黄褐色粘土と黒褐色土が７：３位の割合で混在。
	5	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土少量。
	6	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土少量。（Ｐ１）
カマド	1	10YR3/2	黒褐色土	φ５㎜位の灰黄褐色粘土・焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の灰黄褐色粘土・φ５㎜位の焼土粒・炭化物少量。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜焼土粒・φ１～10㎜の炭化物少量。
	4	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・炭化物・φ１～３㎜の焼土粒少量。
	5	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色粘土混入。
	6	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色粘土・焼土粒少量。
	7	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。（Ｐ４）
	8	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の褐色粘土少量。（Ｐ４）
	9	10YR3/2	黒褐色土	φ１～30㎜の灰黄褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・炭化物少量。（Ｐ４）
P1	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土少量。
P2	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ20～30㎜灰黄褐色土・φ１㎜位の炭化物少量。
P3	1	10YR3/2	黒褐色土	φ30～50㎜の灰黄褐色粘土やや多い。φ１㎜位の炭化物少量。
P5	1	10YR3/2	黒褐色土	φ10～20㎜の炭化材やや多い。φ１～10㎜の炭化物少量。

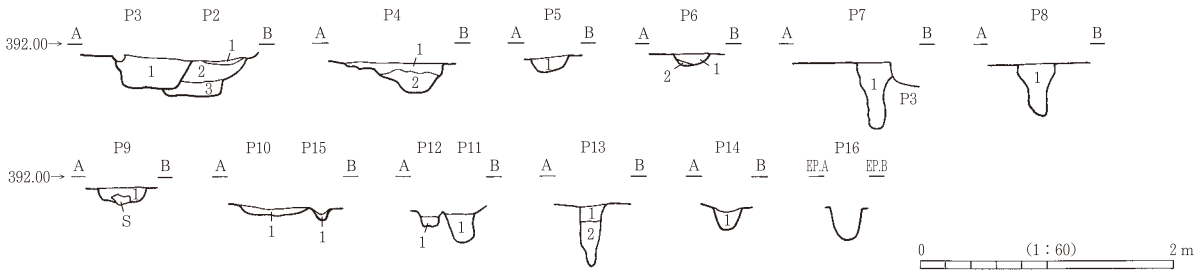


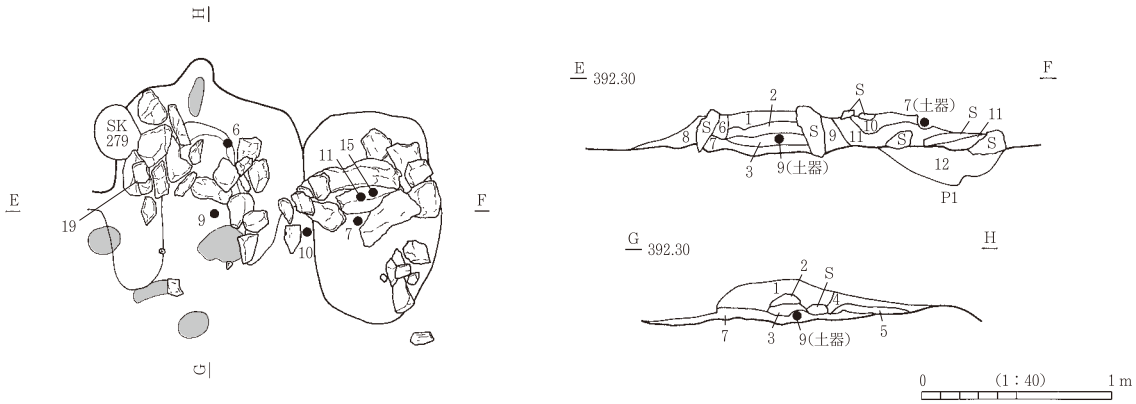


第81図　SB31

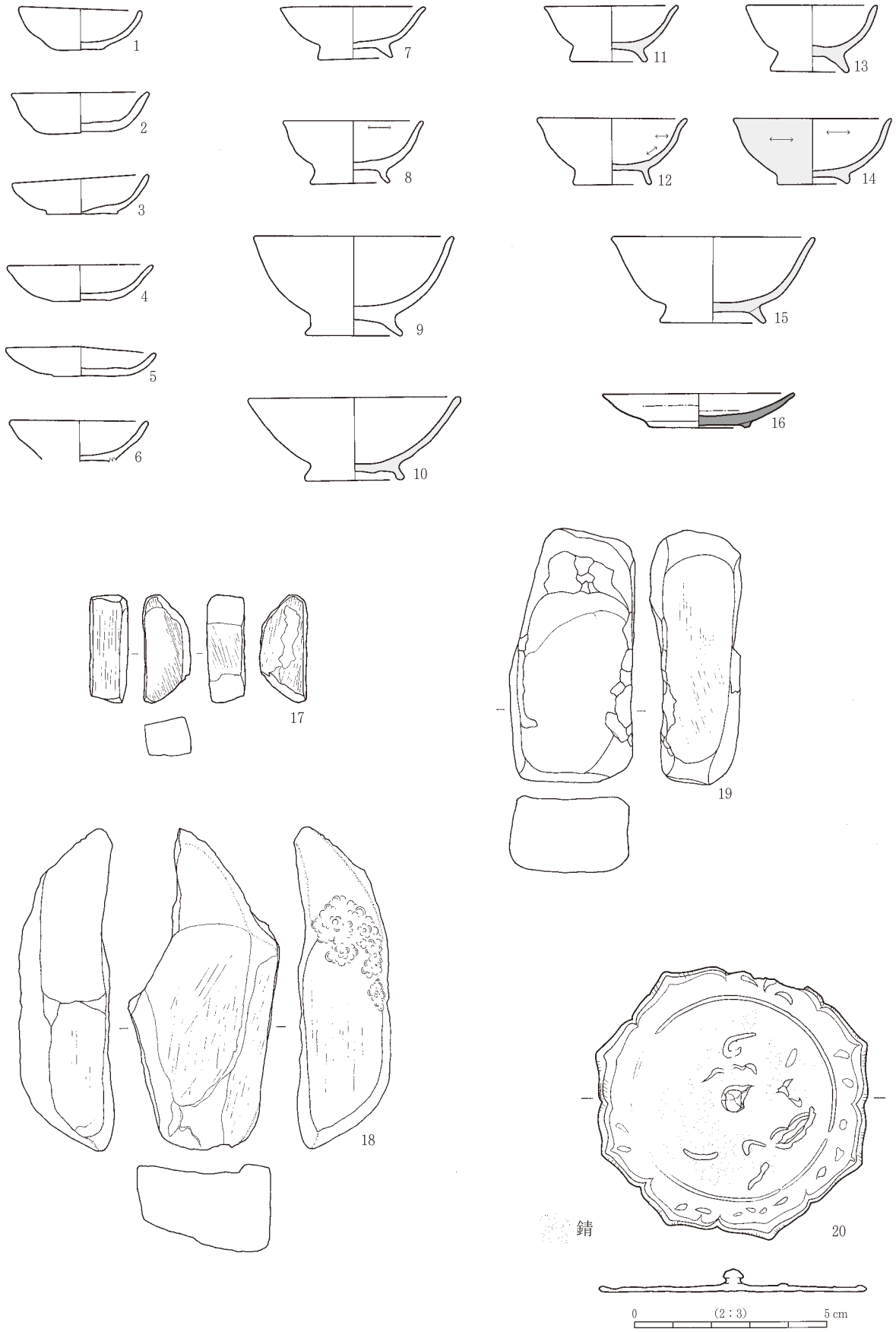


	1	10YR2/1	黒色土	φ10mm以下の灰黄褐色粘土・炭化物少量。
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	φ５mm以下の褐色土やや多い。φ５mm以下の炭化物少量。
	2	10YR4/4	褐色粘土	φ５mm以下の黒褐色土少量。
	3	10YR3/3	暗褐色土	
	4	10YR3/3	暗褐色土	φ30mm以下の褐色粘土・φ３mm以下の炭化物少量。
	5	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色粘土やや多い。φ５mm以下の炭化物少量。
	6	10YR3/3	暗褐色土	φ５mm以下の褐灰色粘土やや多い。φ３mm以下の炭化物・φ５mm以下の黄褐色粘土少量。
	7	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の炭化物やや多い。φ10mm以下の焼土粒・灰少量。
	8	10YR5/1	褐灰色土	φ５mm以下の褐色粘土やや多い。φ３mm以下の炭化物少量。
	9	10YR4/4	褐色土	φ５mm以下の褐灰色土・炭化物少量。
	10	10YR3/3	暗褐色土	φ150mm以下の褐色土やや多い。
	11	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の黒色土やや多い。φ５mm以下の褐色粘土・炭化物少量。
	12	10YR3/4	暗褐色土	φ５mm以下の黒褐色土・褐色粘土・炭化物少量。(P1)
P2	1	10YR2/1	黒色土	φ１～５mmの炭化物やや多い。
	2	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10mmの褐灰色粘土・炭化物少量。
	3	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５mmの褐灰色粘土・φ１～３mmの炭化物少量。
P3	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10mmの褐灰色粘土・φ１～５mmの炭化物少量。
P4	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の炭化物少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ10mm以下の黄褐色粘土やや多い。φ８mm以下の炭化物少量。
P5	1	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。
P6	1	10YR2/3	黒褐色土	φ10mm以下の炭化物少量。
	2			炭層。
P7	1	10YR2/2	黒褐色土	φ30mm以下の褐色粘土やや多い。φ５mm以下の炭化物少量。
P8	1	10YR2/2	黒褐色土	φ40mm以下の褐色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。
P9	1	10YR2/3	黒褐色土	φ８mm以下の褐色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。
P10	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の褐灰色粘土やや多い。φ５mm以下の炭化物少量。
P11	1	10YR2/3	黒褐色土	φ150mm以下の褐灰色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。
P12	1	10YR2/3	黒褐色土	φ３mm以下の炭化物少量。
P13	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の褐色粘土・炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	φ５mm以下の褐色粘土少量。
P14	1	10YR2/3	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色粘土・φ３mm以下の炭化物少量。
P15	1			注記なし。

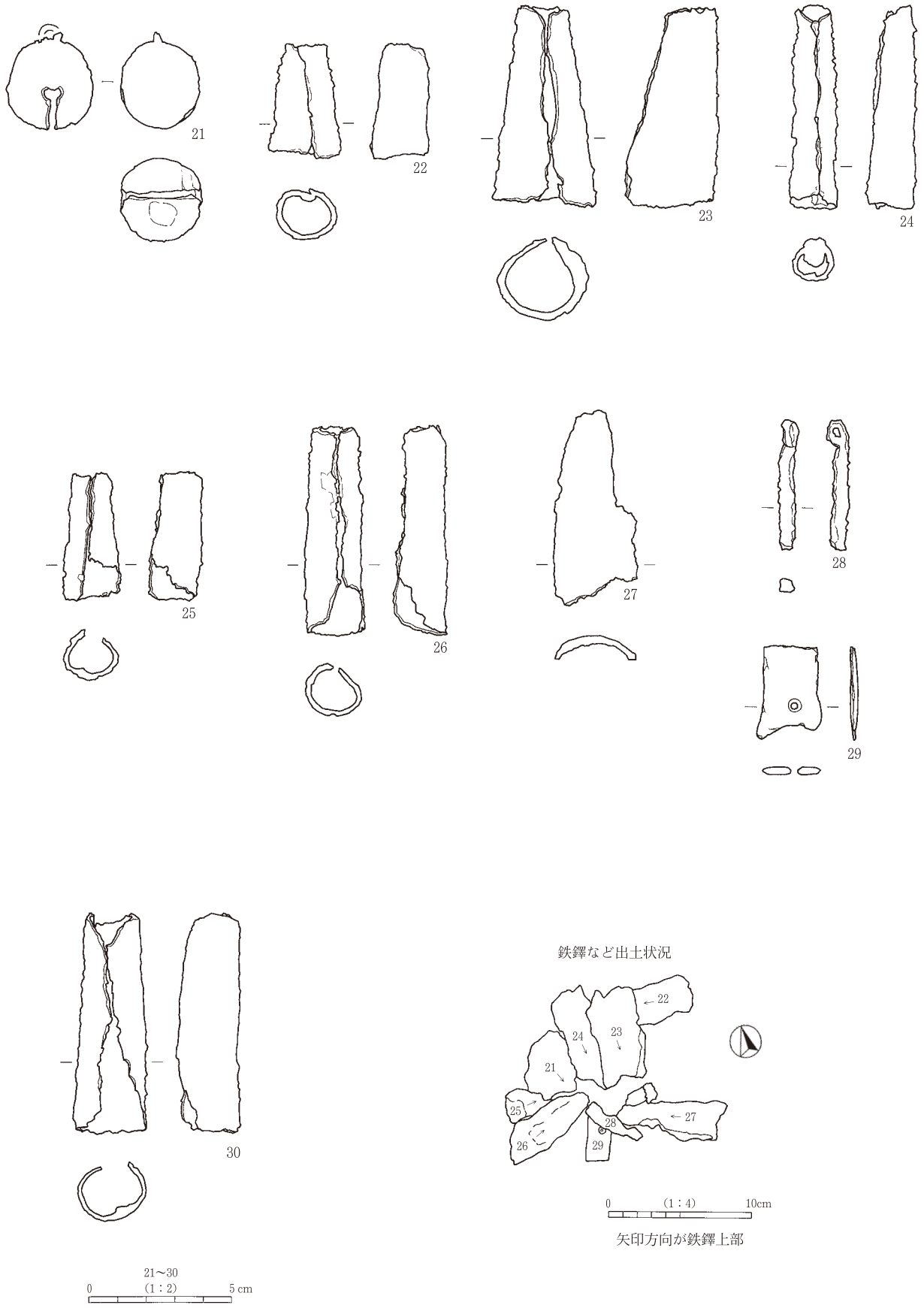




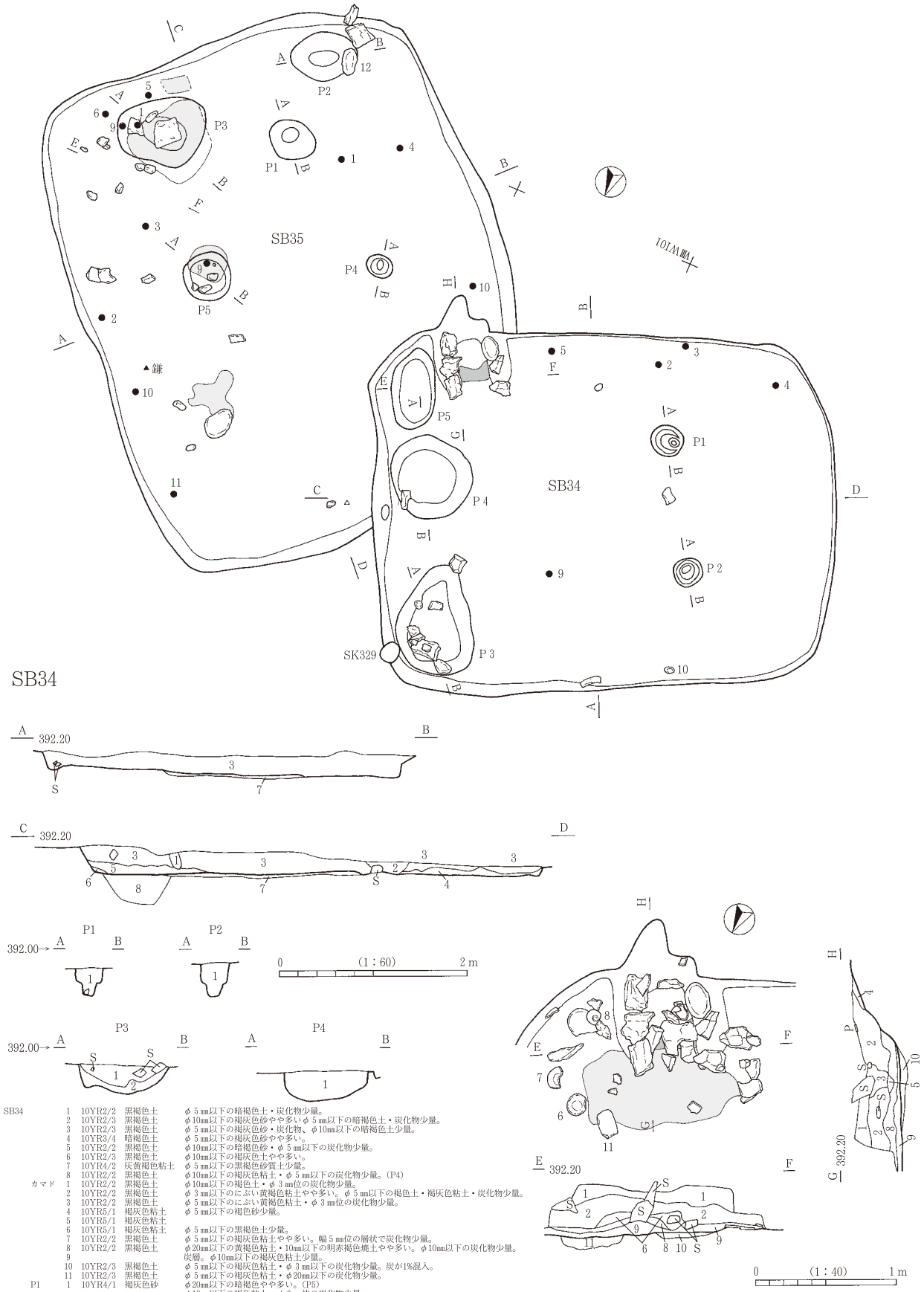
第82図　SB32遺構図



第83図　SB32遺物



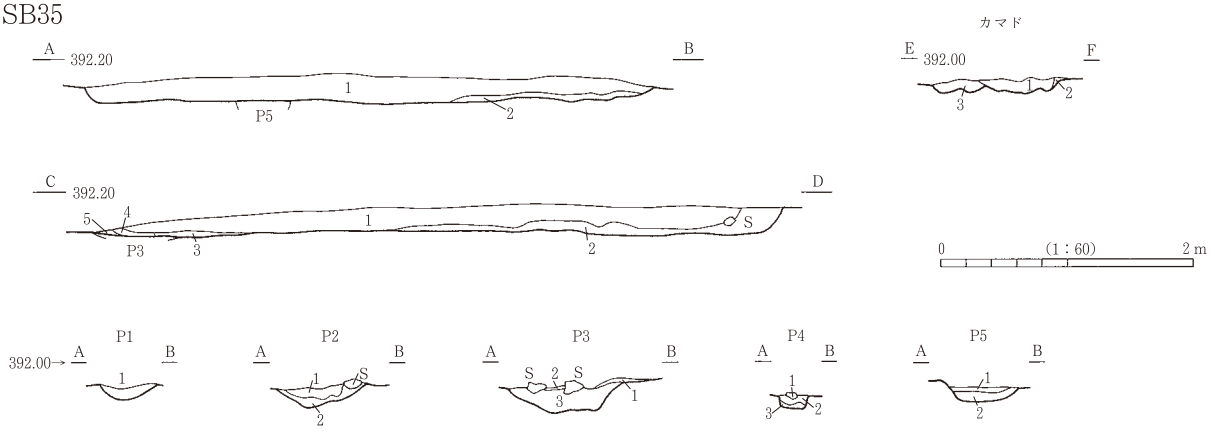
第84図　SB32銅鈴・鉄鐸など



SB34	1	10YR2/2	黒褐色土	φ５mm以下の暗褐色土・炭化物少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色砂やや多いφ５mm以下の暗褐色土・炭化物少量。
	3	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の褐灰色砂・炭化物、φ10mm以下の暗褐色土少量。
	4	10YR3/4	暗褐色土	φ３mm以下の褐灰色砂やや多い。
	5	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の暗褐色砂・φ５mm以下の炭化物少量。
	6	10YR2/3	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色土やや多い。
	7	10YR4/2	灰黄褐色粘土	φ５mm以下の黒褐色砂質土少量。
	8	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。(P4)
カマド	1	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の褐色土・φ３mm位の炭化物少量。
	2	10YR2/2	黒褐色土	φ３mm以下のにぶい黄褐色粘土やや多い。φ５mm以下の褐色土・褐灰色粘土・炭化物少量。
	3	10YR2/2	黒褐色土	φ５mm以下のにぶい黄褐色粘土・φ３mm位の炭化物少量。
	4	10YR5/1	褐灰色粘土	φ５mm以下の褐色砂少量。
	5	10YR5/1	褐灰色粘土	
	6	10YR5/1	褐灰色粘土	φ５mm以下の黒褐色土少量。
	7	10YR2/2	黒褐色土	φ５mm以下の褐灰色粘土やや多い。幅５mm位の層状で炭化物少量。
	8	10YR2/2	黒褐色土	φ20mm以下の黄褐色粘土・10mm以下の明赤褐色焼土やや多い。φ10mm以下の炭化物少量。
	9			炭層。φ10mm以下の褐灰色粘土少量。
	10	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の褐灰色粘土・φ３mm以下の炭化物少量。炭が1%混入。
	11	10YR2/3	黒褐色土	φ５mm以下の褐灰色粘土・φ20mm以下の炭化物少量。
P1	1	10YR4/1	褐灰色砂	φ20mm以下の暗褐色やや多い。(P5)
				φ10mm以下の褐色粘土・φ３mm位の炭化物少量。
P2	1	10YR4/1	褐灰色砂	φ20mm以下の暗褐色土・褐色粘土やや多い。φ３mm位の炭化物少量。
P3	1	10YR2/2	黒褐色砂	φ５mm以下の暗褐色土・φ３mm以下の炭化物少量。
	2	10YR2/2	黒褐色砂	φ10mm以下の褐色粘土少量。
P4	1	10YR2/2	黒褐色土	φ10mm以下の褐灰色粘土・φ５mm以下の炭化物少量。

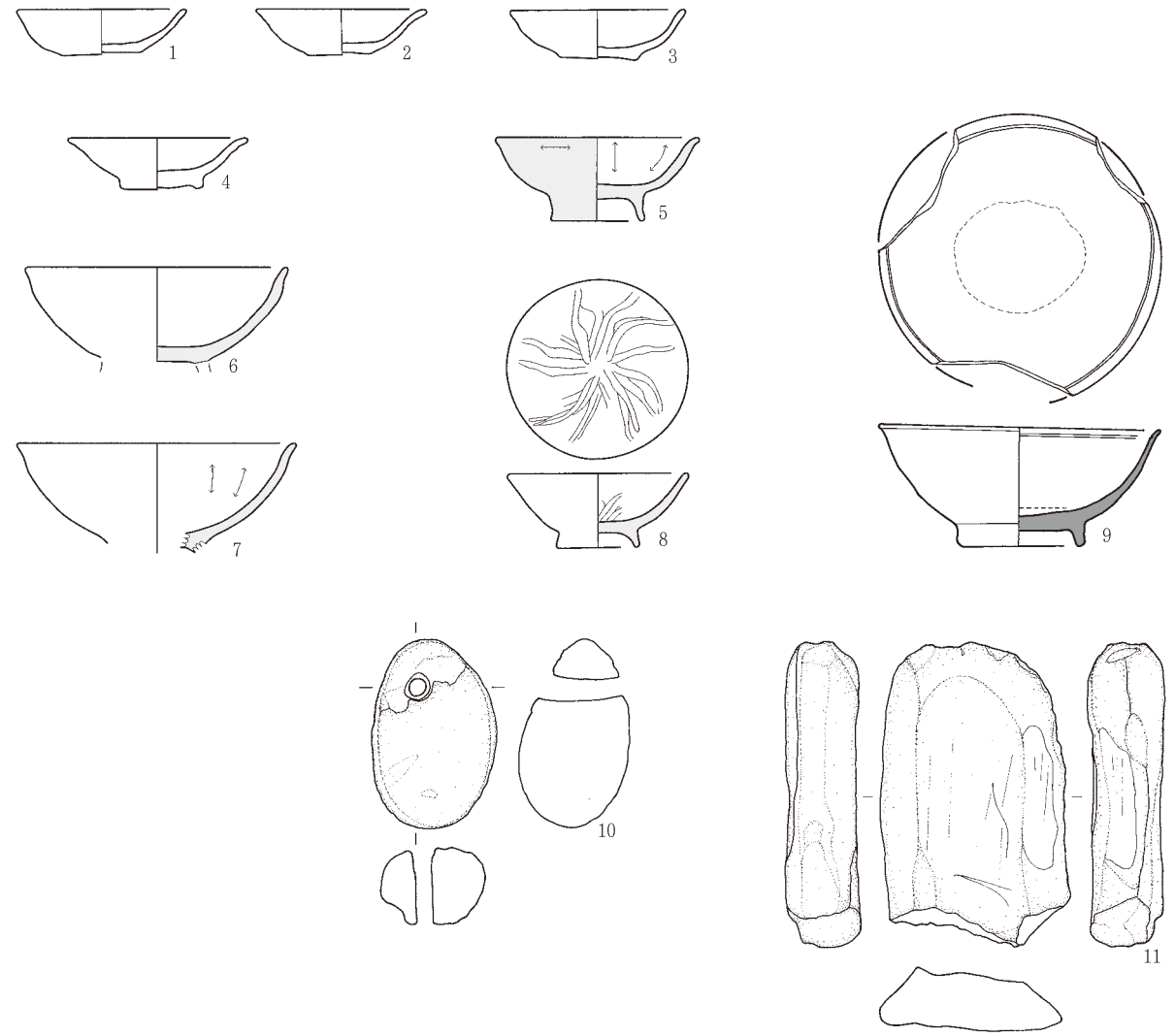
第85図　SB34・35遺構図１

SB35



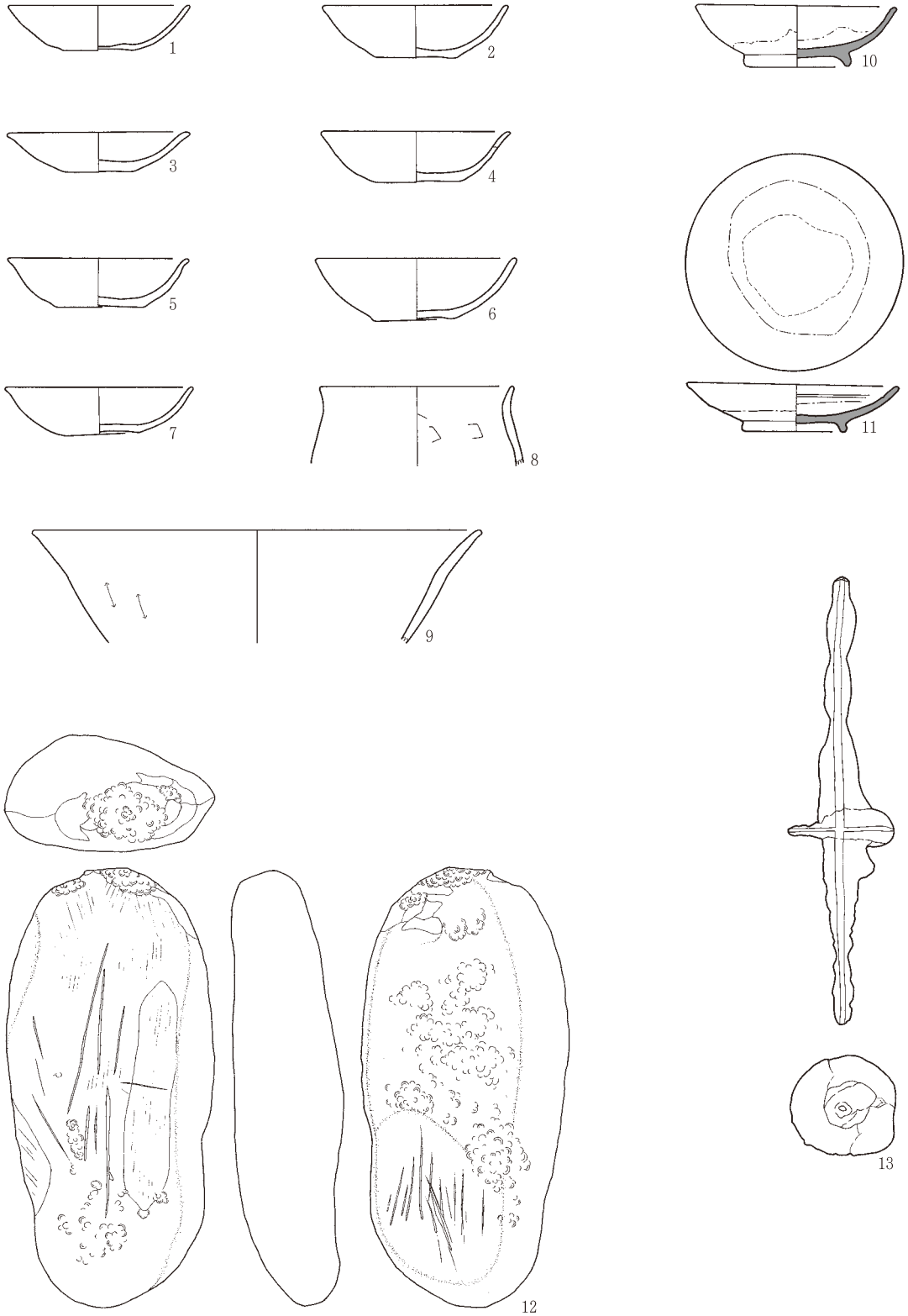
SB35	1	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色砂・炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	φ５㎜以下の褐灰色砂少量。 φ５㎜以下の炭化物やや多い。
	3	10YR2/2	黒褐色土	φ５㎜以下の焼土粒・炭化物少量。
	4	10YR3/3	暗褐色土	φ20㎜以下の炭化物少量。
	5	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色土やや多い。 φ５㎜以下の炭化物少量。
カマド	1	10YR2/3	黒褐色土	φ30㎜以下の褐灰色粘土やや多い。 φ10㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR2/2	黒褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土やや多い。 φ３㎜以下の焼土粒少量。
	3	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐灰色粘土少量。
P1	1	10YR2/3	黒褐色砂	φ10㎜以下の褐灰色粘土・φ３㎜以下の炭化物少量。
P2	1	10YR2/2	黒褐色土	φ30㎜以下の炭化物多い。φ10㎜以下の暗褐色粘土少量。
	2	10YR2/2	黒褐色土	φ30㎜以下の暗褐色粘土やや多い。φ10㎜以下の炭化物少量。
P3	1	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の炭化物・灰少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ20㎜以下の炭化物多い。
	3	10YR2/3	黒褐色土	φ20㎜以下の炭化物やや多い。φ20㎜以下の褐灰色粘土少量。
P4	1	10YR4/1	褐灰色粘土	
	2	10YR3/3	暗褐色土	
	3	10YR5/1	褐灰色粘土	幅10㎜位の層状で褐色粘土やや多い。
P5	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ40㎜以下の褐灰色粘土多い。φ10㎜以下の炭化物少量。

SB34

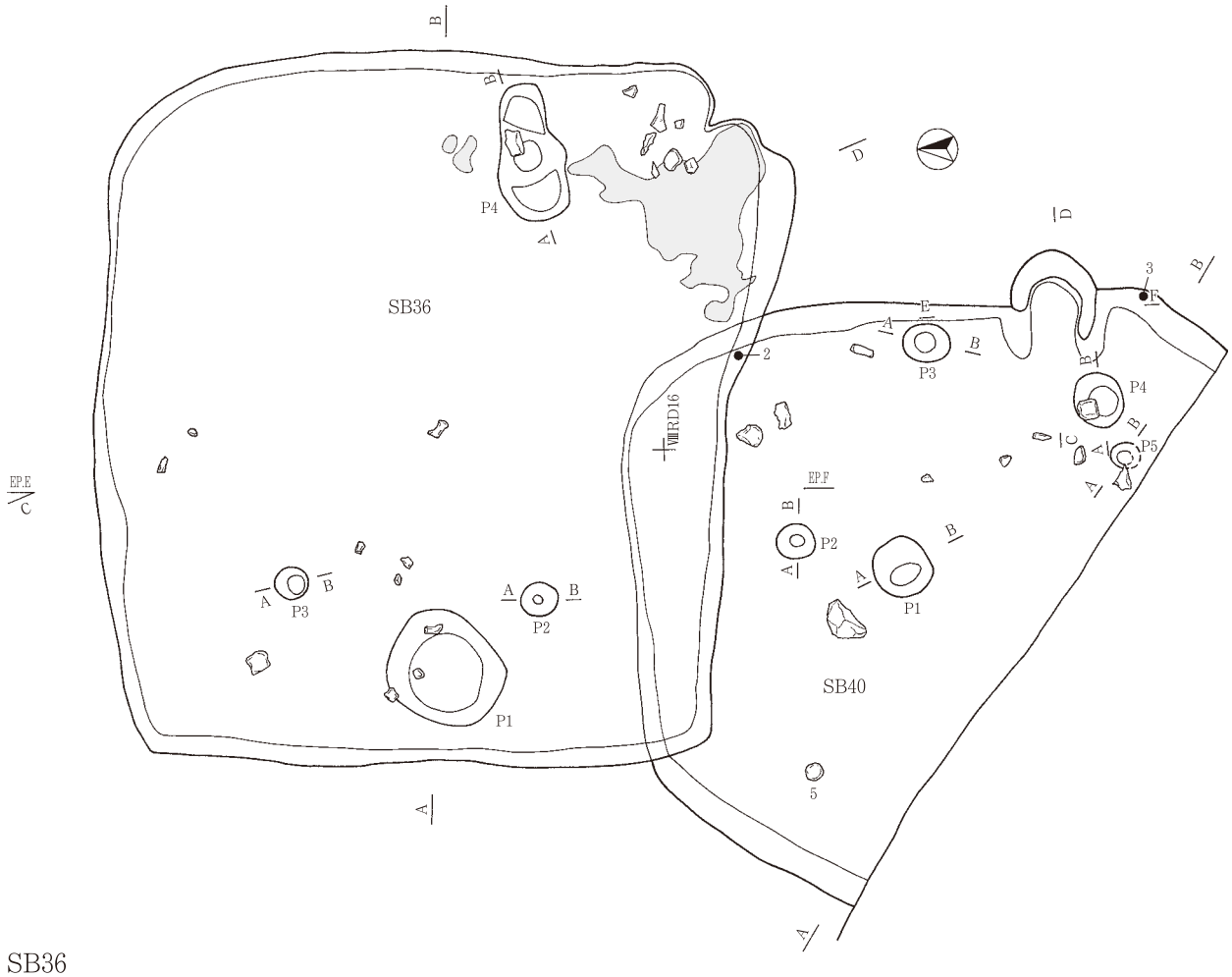


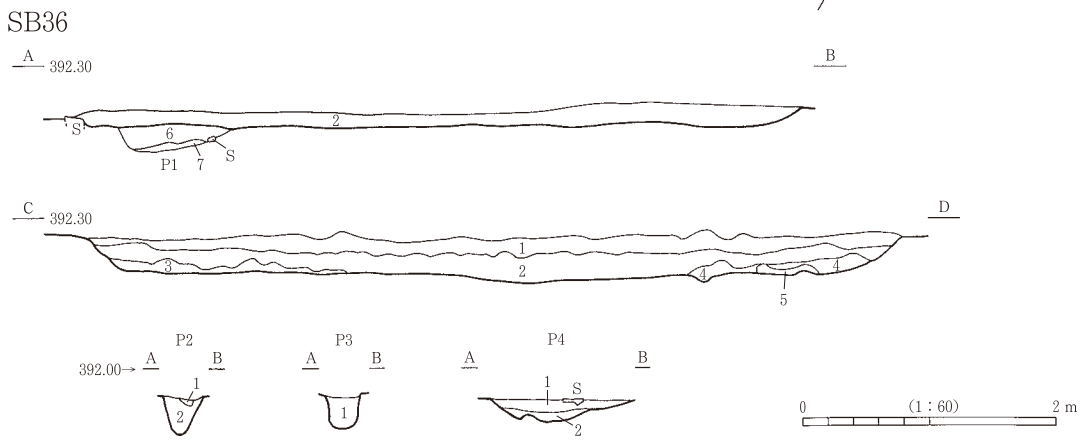
第86図　SB34・35遺構図２・SB34遺物

SB35



第87図　SB35遺物



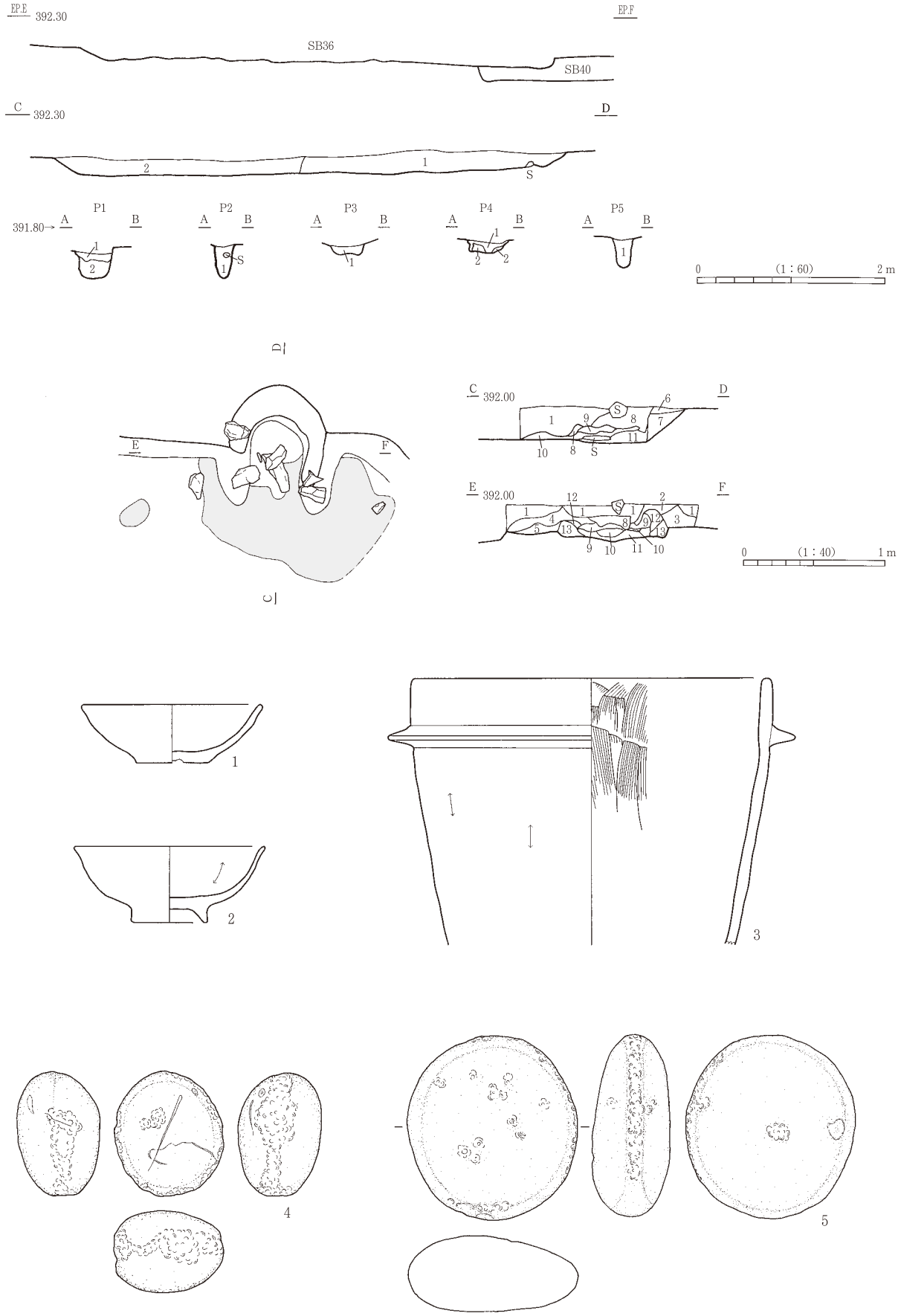


SB36	1	10YR4/1	褐灰色粘土	φ５㎜以下の暗褐色土多い。 φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR2/2	黒褐色土	φ30㎜以下の褐色土・φ10㎜以下の褐灰色粘土・ φ８㎜以下の炭化物少量。
	3	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土・φ20㎜以下の褐色土・ φ５㎜以下の炭化物少量。
	4	10YR2/2	黒褐色土	φ５㎜以下の黄褐色粘土・φ10㎜以下の炭化物 少量。
	5			炭層
P1	6	10YR2/2	黒褐色土	φ50㎜以下の褐色土やや多い。 φ５㎜以下の炭化物少量。
	7	10YR5/2	灰黄褐色粘土	φ20㎜以下の黒褐色土やや多い。(P1)
P2	1	10YR2/1	黒色土	φ５㎜以下の炭化物やや多い。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土・φ５㎜以下の炭化物 少量。
P3	1	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土・φ５㎜以下の炭化物 少量。
P4	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の黄褐色粘土やや多い。 φ８㎜以下の炭化物少量。

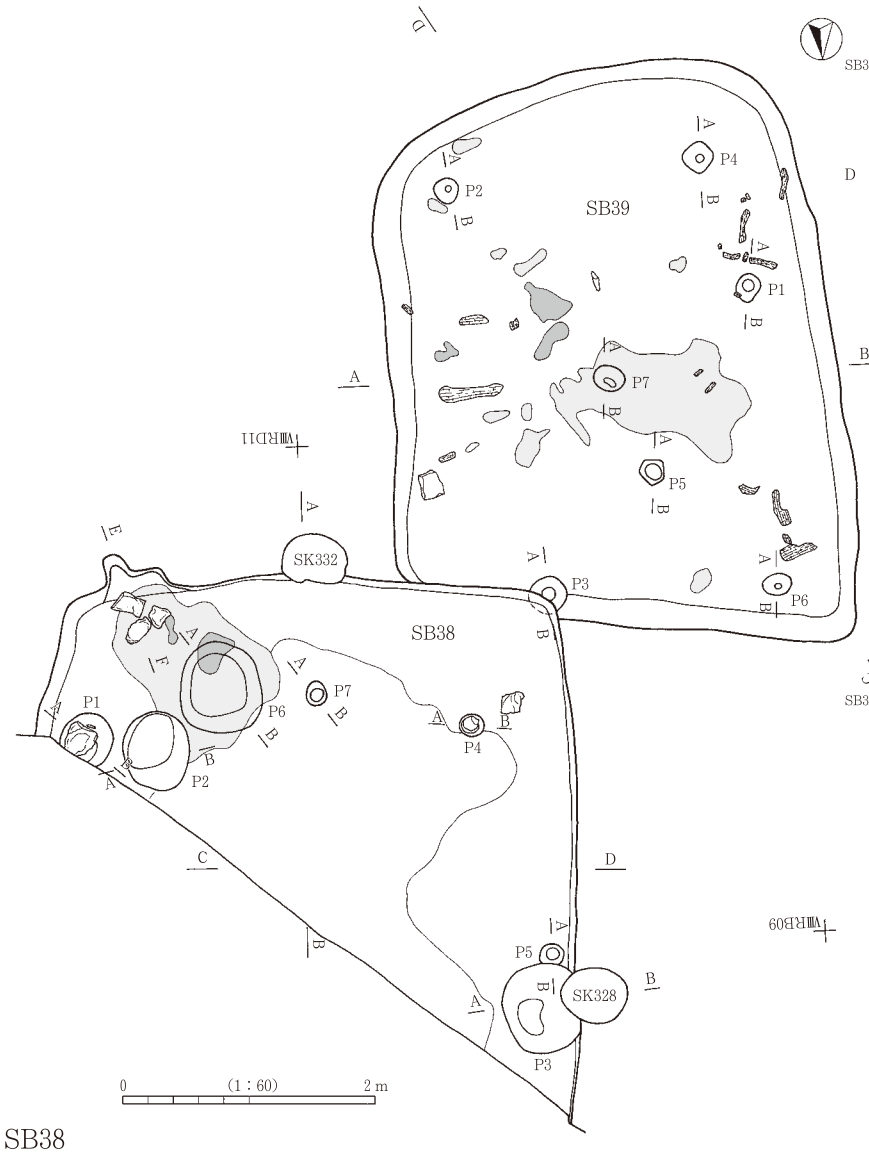
SB40	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR3/1	黒褐色土	φ５㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ６㎜以下の炭化物少量。
カマド	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐灰色粘土やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐色粘土やや多い。
	3	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の焼土粒・灰・φ10㎜以下の炭化物少量。
	4	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の炭化物・φ５㎜以下の灰少量。
	5			炭層
	6	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の褐色粘土やや多い。
	7	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐色粘土・φ10㎜以下の焼土粒少量。
	8	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐色粘土やや多い。 φ５㎜以下の焼土粒・φ炭化物少量。
	9	5 YR4/8	赤褐色焼土	φ30㎜以下の黒褐色土やや多い。
	10			炭層。層状に灰やや多く混入。
	11	10YR5/1	褐灰色土	φ10㎜以下の焼土粒・φ５㎜以下の炭化物・灰少量。
	12	10YR2/3	黒褐色土	φ20㎜以下の赤褐色焼土粒少量。φ５㎜以下の炭化物少量。
	13	10YR5/1	褐灰色土	φ10㎜以下の黒褐色土少量。
P1	1	10YR2/2	黒褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土・φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR5/2	灰黄褐色粘土	φ30㎜以下の黒褐色土やや多い。
P2	1	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の褐色粘土少量。
P3	1	10YR3/3	暗褐色土	φ10㎜以下の褐灰色粘土・炭化物少量。
P4	1	10YR2/1	黒色粘土	φ10㎜以下の赤褐色粘土・褐色粘土・φ５㎜以下の炭化物少量。
	2	10YR5/1	褐灰色粘土	φ10㎜以下の褐色粘土・φ５㎜以下の黒色粘土少量。
P5	1	10YR2/3	黒褐色土	φ５㎜以下の褐灰色粘土・炭化物少量。

第88図　SB36・40遺構図１

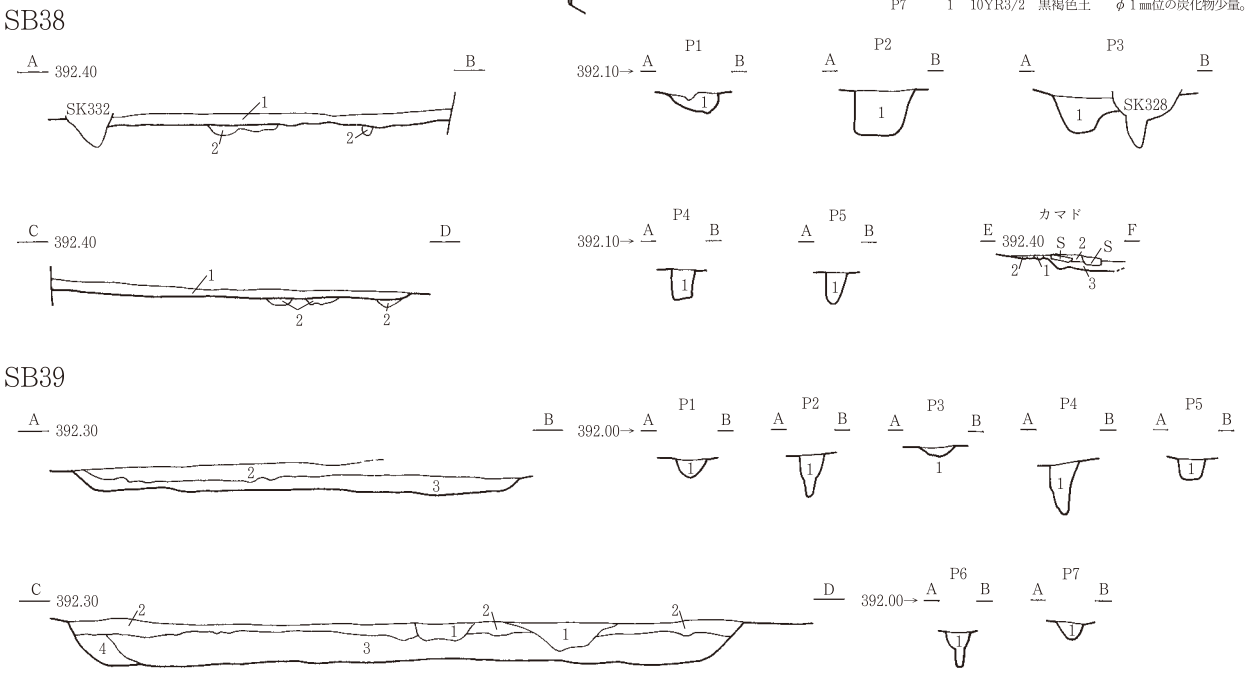
SB40



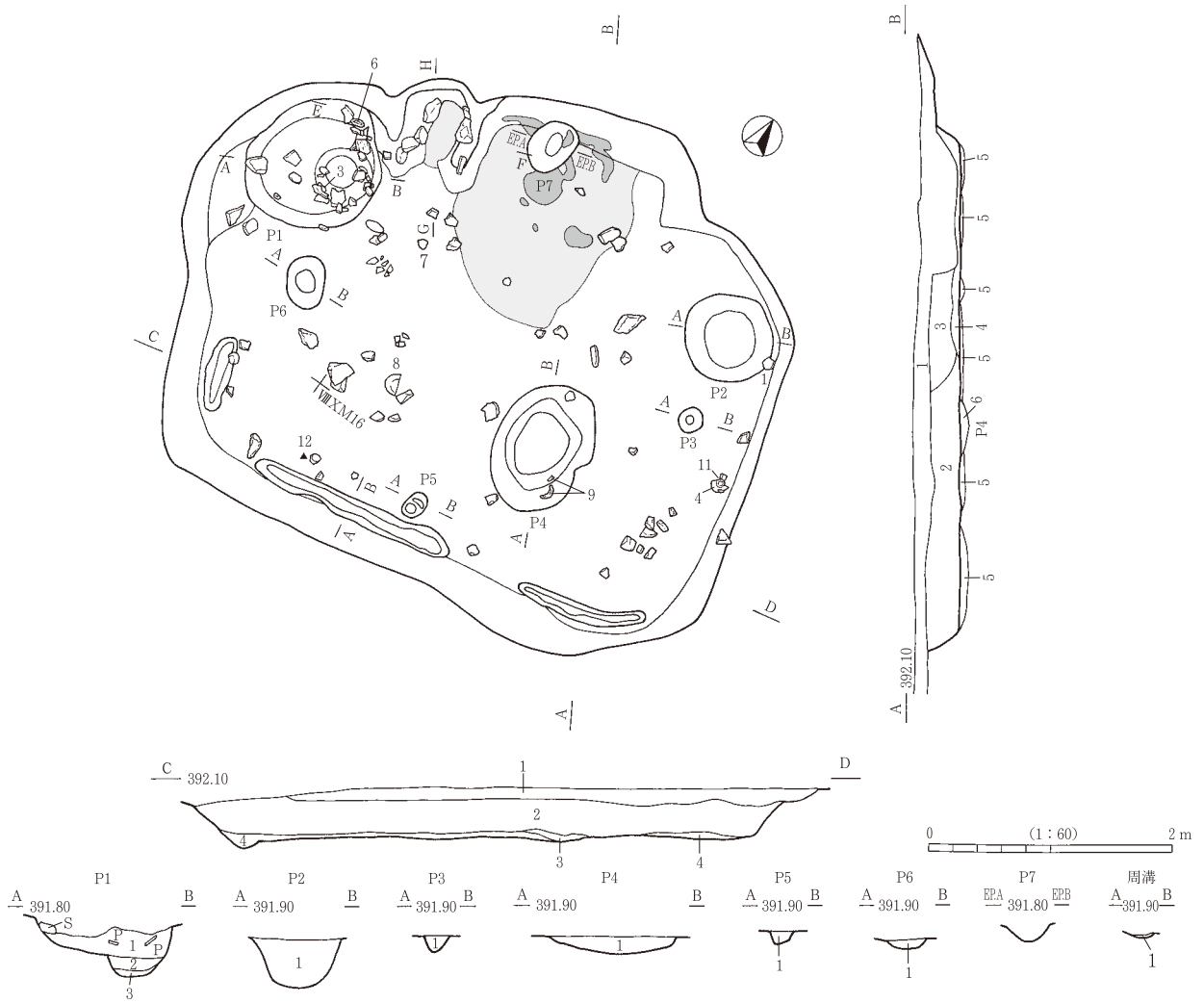
第89図　SB36・40遺構図２・遺物

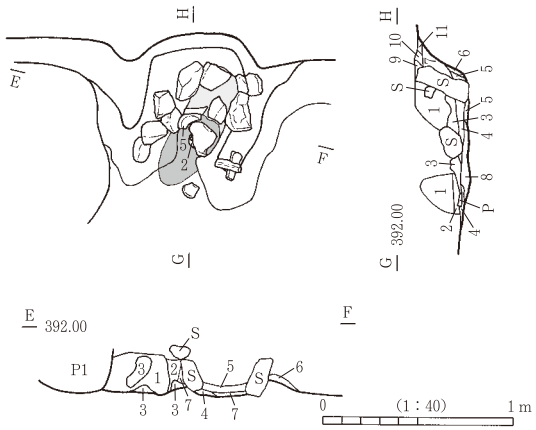


SB38	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒・φ１～７㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	黄褐色砂混入。φ１～３㎜の炭化物少量。
カマド	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～４㎜の焼土粒・炭化物少量。1層よりやや明るい。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～10㎜の炭化物少量。
P1	1	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂・φ１㎜位の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。礫混入。
P2	1	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂・φ１㎜位の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
P3	1	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色砂・φ１～５㎜の炭化物・φ１㎜位の焼土粒少量。
P4	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の灰黄褐色粘土・φ１～10㎜の炭化物少量。にぶい黄褐色砂やや多い。
P5	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～50㎜の灰黄褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
P6	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～50㎜の灰黄褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
P7	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～50㎜の灰黄褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
SB39	1	10YR3/2	黒褐色土	３、４層よりやや明るい。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の灰黄褐色粘質土極少量。φ１～５㎜の炭化物少量。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜灰黄褐色粘質土・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
	4	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色土・φ１～10㎜の灰黄褐色粘土・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
P1	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
P2	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～４㎜の炭化物少量。
P3	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
P4	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１㎜位の焼土粒・φ１～８㎜の炭化物少量。
P5	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１㎜位の灰黄褐色粘土少量。
P6	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～５㎜の焼土粒・φ１～10㎜の炭化物少量。
P7	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１㎜位の炭化物少量。



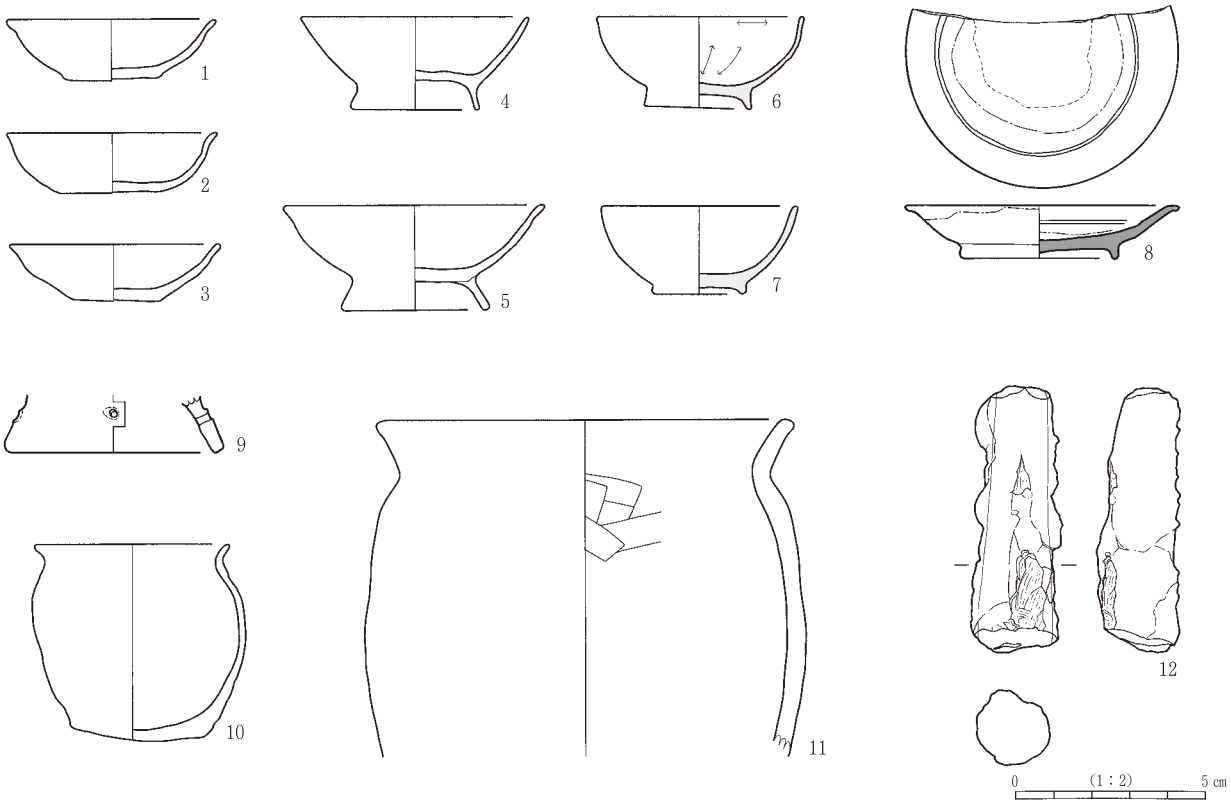
第90図　SB38・39遺構図



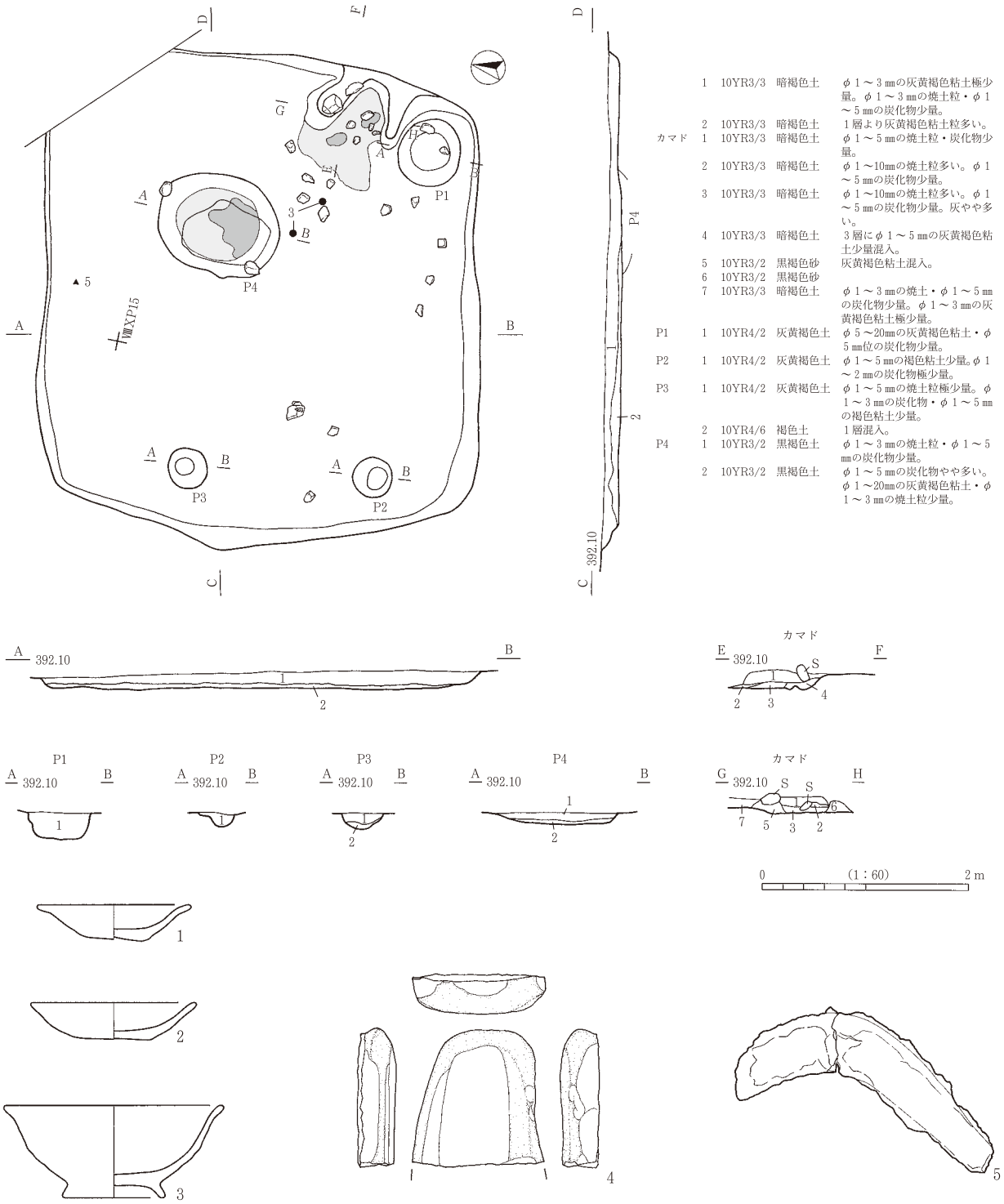


A-B	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１㎜位の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～５㎜灰黄褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の焼土粒・炭化物少量。
	4	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
	5	10YR4/2	灰黄褐色粘土	やや砂質。
	6	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。(P4)
C-D	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１㎜位の焼土粒・φ１～５㎜炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～５㎜の灰黄褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・炭化物少量。
	4	10YR4/2	灰黄褐色粘土	やや砂質。
カマドE-F	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ10～30㎜の灰黄褐色粘土やや多い。 φ１～10㎜の褐色粘土５％・φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR4/2	灰黄褐色粘土	被熱で若干赤味を帯びる。
	3	10YR4/4	褐色粘土	
	4	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒・炭化物混入。
	5	10YR3/2	黒褐色土	炭化物･灰混入。
	6	10YR4/2	灰黄褐色粘土	炭化物・灰多い。
	7			焼土。
カマドG-H	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～20㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の焼土粒やや多い。
	3	10YR4/2	灰黄褐色土	粘土ブロック混入。
	4	10YR3/2	黒褐色土	灰炭+焼土粒・炭化物・灰混入。
	5	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色粘土・炭化物・灰混入。
	6	10YR3/2	黒褐色土	褐色粘土・焼土粒・炭化物混入。
	7	10YR3/2	黒褐色土	灰黄褐色粘土・焼土粒・炭化物混入。
	8			焼土。
	9	10YR3/2	黒褐色土	φ１～20㎜の炭化物少量。
	10	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～20㎜の焼土粒やや多い。
	11	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～10㎜の焼土粒少量。
P1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の炭化物少量。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～20㎜の焼土粒・φ１～30㎜の炭化物少量。
	3	10YR3/3	暗褐色土	やや砂質。
P2	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～10㎜の褐色粘土・φ１～５㎜のにぶい黄褐色粘土・φ５㎜位の炭化物少量。
P3	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色粘土・にぶい黄褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物少量。
P4	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色粘土・φ１㎜位の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
P5	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物少量。
P6	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～３㎜のにぶい黄褐色粘土・炭化物・φ１～５㎜の焼土粒少量。
P7	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜のにぶい黄褐色土・褐色土・炭化物少量。
周溝	1	10YR4/2	灰黄褐色土	やや砂質。

第91図　SB46遺構図

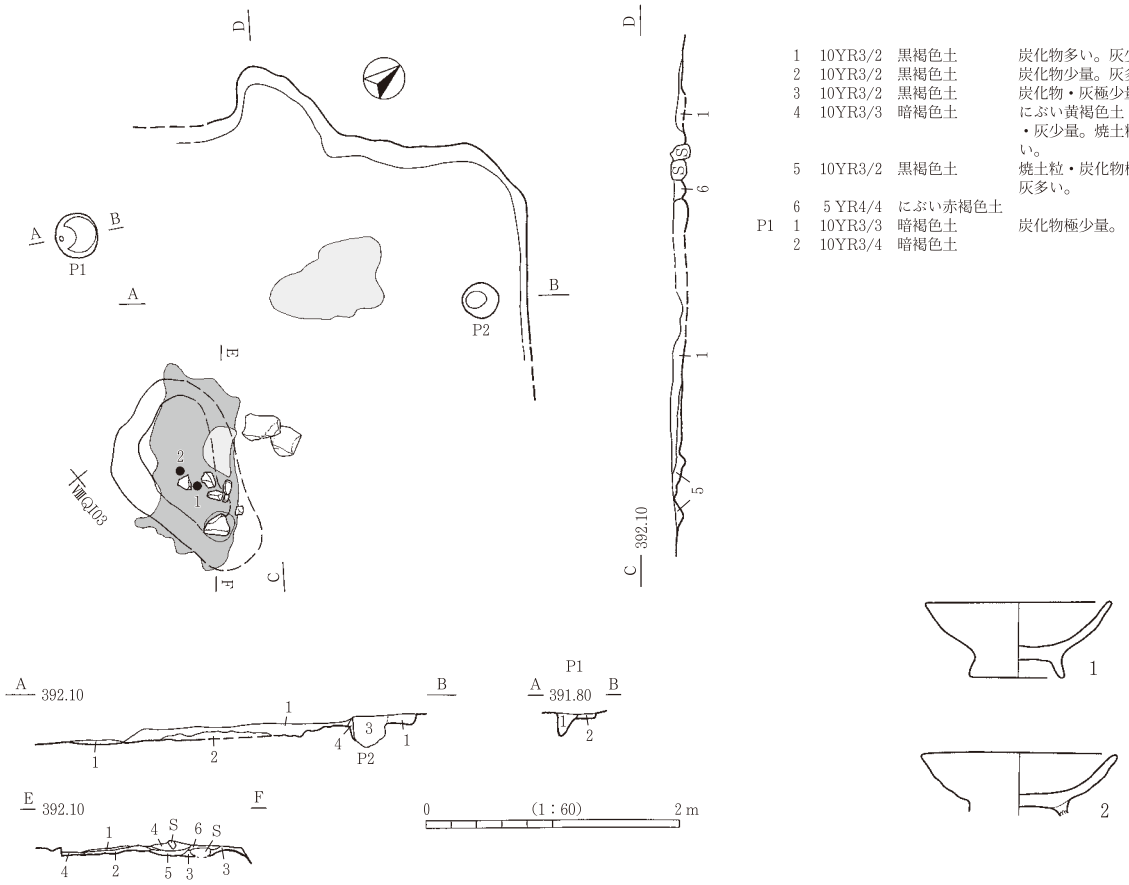


第92図　SB46遺物



	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～３㎜の灰黄褐色粘土極少量。φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	１層より灰黄褐色粘土粒多い。
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の焼土粒多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
	3	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の焼土粒多い。φ１～５㎜の炭化物少量。灰やや多い。
	4	10YR3/3	暗褐色土	３層にφ１～５㎜の灰黄褐色粘土少量混入。
	5	10YR3/2	黒褐色砂	灰黄褐色粘土混入。
	6	10YR3/2	黒褐色砂	
	7	10YR3/3	暗褐色土	φ１～３㎜の焼土・φ１～５㎜の炭化物少量。φ１～３㎜の灰黄褐色粘土極少量。
P1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ５～20㎜の灰黄褐色粘土・φ５㎜位の炭化物少量。
P2	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色粘土少量。φ１～２㎜の炭化物極少量。
P3	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の焼土粒極少量。φ１～３㎜の炭化物・φ１～５㎜の褐色粘土少量。
	2	10YR4/6	褐色土	１層混入。
P4	1	10YR3/2	黒褐色土	φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	φ１～５㎜の炭化物やや多い。φ１～20㎜の灰黄褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒少量。

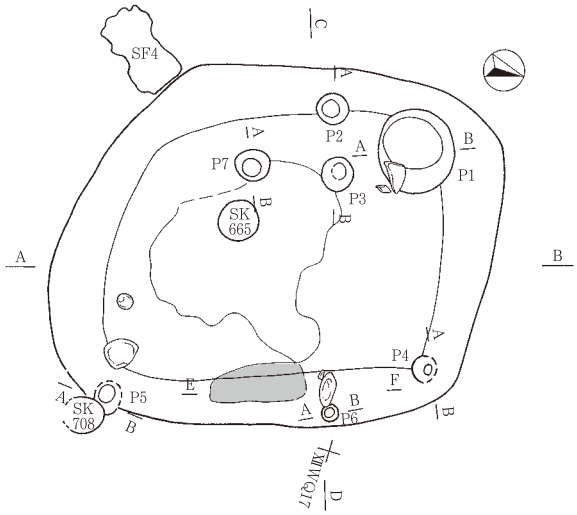
第93図　SB47

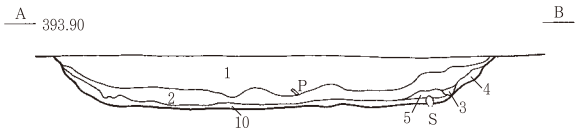


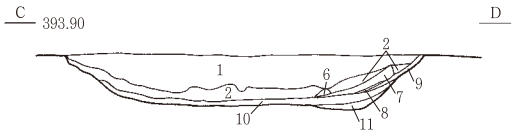
	1	10YR3/2	黒褐色土	炭化物多い。灰少量。
	2	10YR3/2	黒褐色土	炭化物少量。灰多い。
	3	10YR3/2	黒褐色土	炭化物・灰極少量。
	4	10YR3/3	暗褐色土	にぶい黄褐色土・炭化物・灰少量。焼土粒やや多い。
	5	10YR3/2	黒褐色土	焼土粒・炭化物極少量。灰多い。
	6	5 YR4/4	にぶい赤褐色土	
P1	1	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極少量。
	2	10YR3/4	暗褐色土	

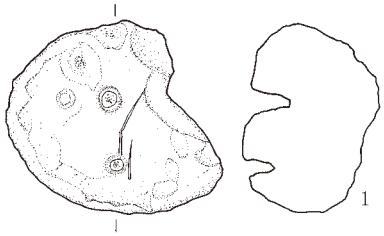
第94図　SB55

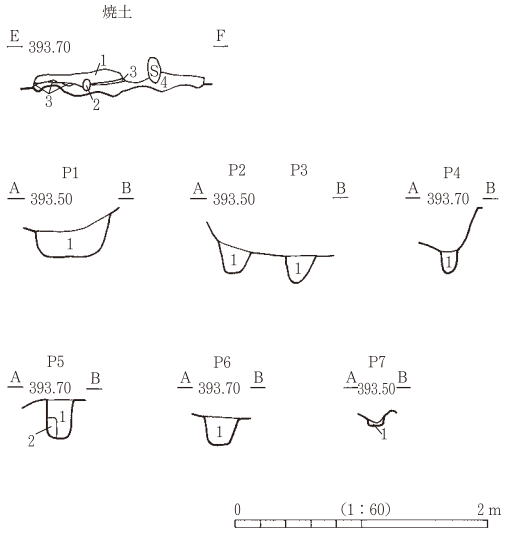
	1	10YR3/3	暗褐色粘土	φ１～50㎜の褐色粘土やや多い。φ１～10㎜の焼土粒・φ１～20㎜の炭化物少量。　φ200㎜位の礫数個混入。
	2	10YR2/1	黒色粘土	φ１～30㎜の褐色粘土少量。φ１～40㎜の焼土粒・φ１～10㎜の炭化物少量。
	3	10YR5/2	灰黄褐色粘土	φ１～10㎜の黒色粘土少量。
	4	10YR5/2	灰黄褐色粘土	
	5	10YR5/2	灰黄褐色粘土	φ１～10㎜の褐色粘土やや多い。
	6	10YR3/3	暗褐色粘土	
	7	10YR6/2	灰黄褐色灰	φ１～10㎜の焼土粒やや多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
	8	10YR2/3	黒褐色土	
	9	10YR3/4	暗褐色粘土	φ１～10㎜の炭化物少量。
	10	10YR4/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の褐色粘土少量。φ１～10㎜の焼土粒・炭化物少量。
	11	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の褐灰色粘土やや多い。
焼土	1			焼土。φ１～５㎜の炭化物少量。φ１～10㎜の灰がやや多い。
	2	10YR4/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の焼土粒・炭化物・灰少量。
	3	10YR2/3	黒褐色土	
	4	10YR4/1	褐灰色粘土	φ１～５㎜の褐色粘土・φ１～10㎜の焼土粒・炭化物少量。
P１	1	10YR2/3	黒褐色砂	φ１～50㎜の褐色粘土やや多い。φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
P２	1	10YR2/3	黒褐色砂	φ１～50㎜の褐色粘土やや多い。φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
P３	1	10YR2/3	黒褐色砂	φ１～50㎜の褐色粘土やや多い。φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
P４	1	10YR4/4	褐色粘土	φ１～20㎜の暗褐色粘土やや多い。
P５	1	10YR4/4	褐色粘土	φ１～10㎜の暗褐色粘土やや多い。φ１～10㎜の炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色粘土	φ１～30㎜の褐色粘土少量。
P６	1	10YR4/4	褐色粘土	φ１～20㎜の暗褐色粘土やや多い。
P７	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～20㎜の褐色粘土・φ１～３㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。



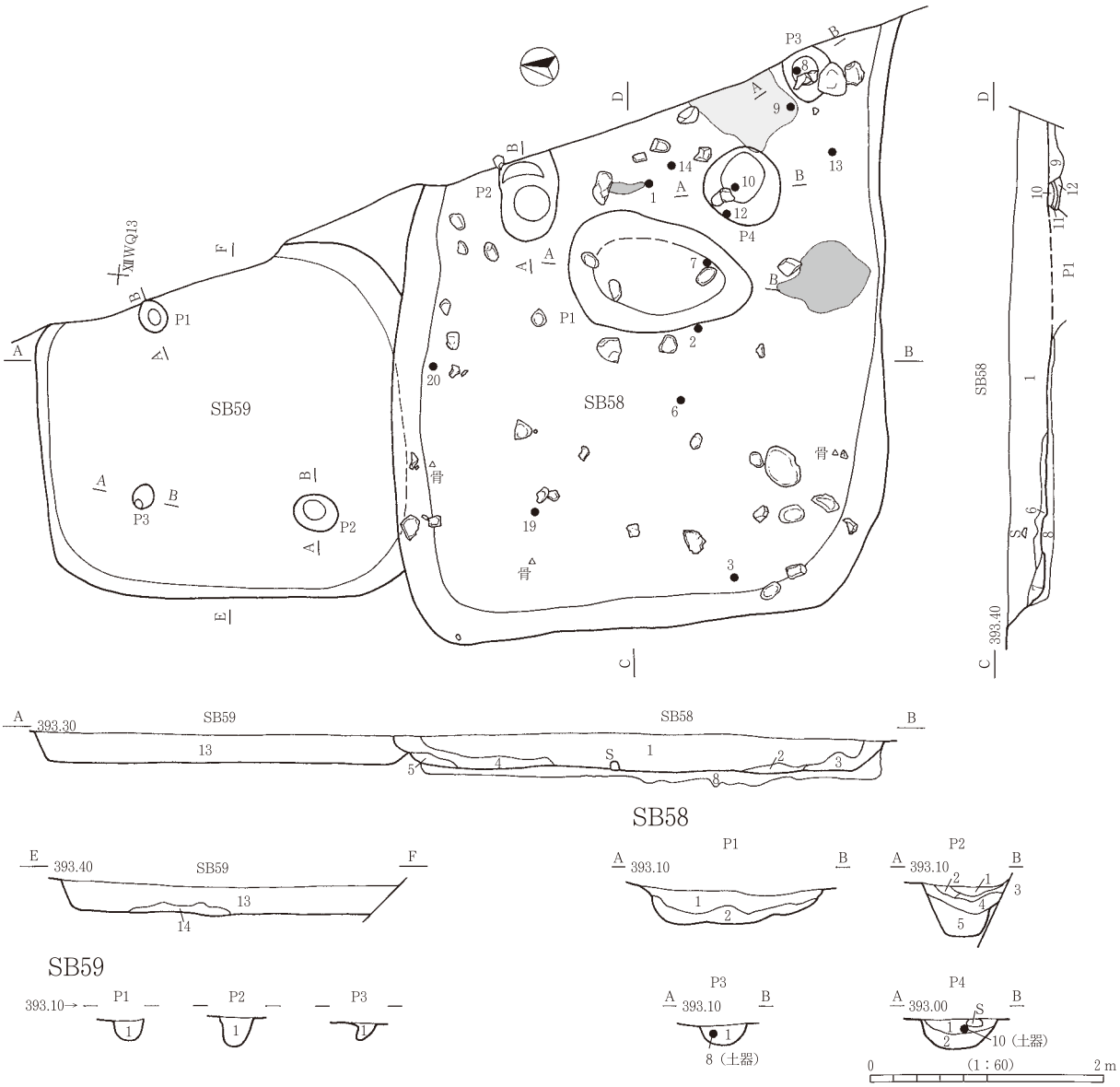






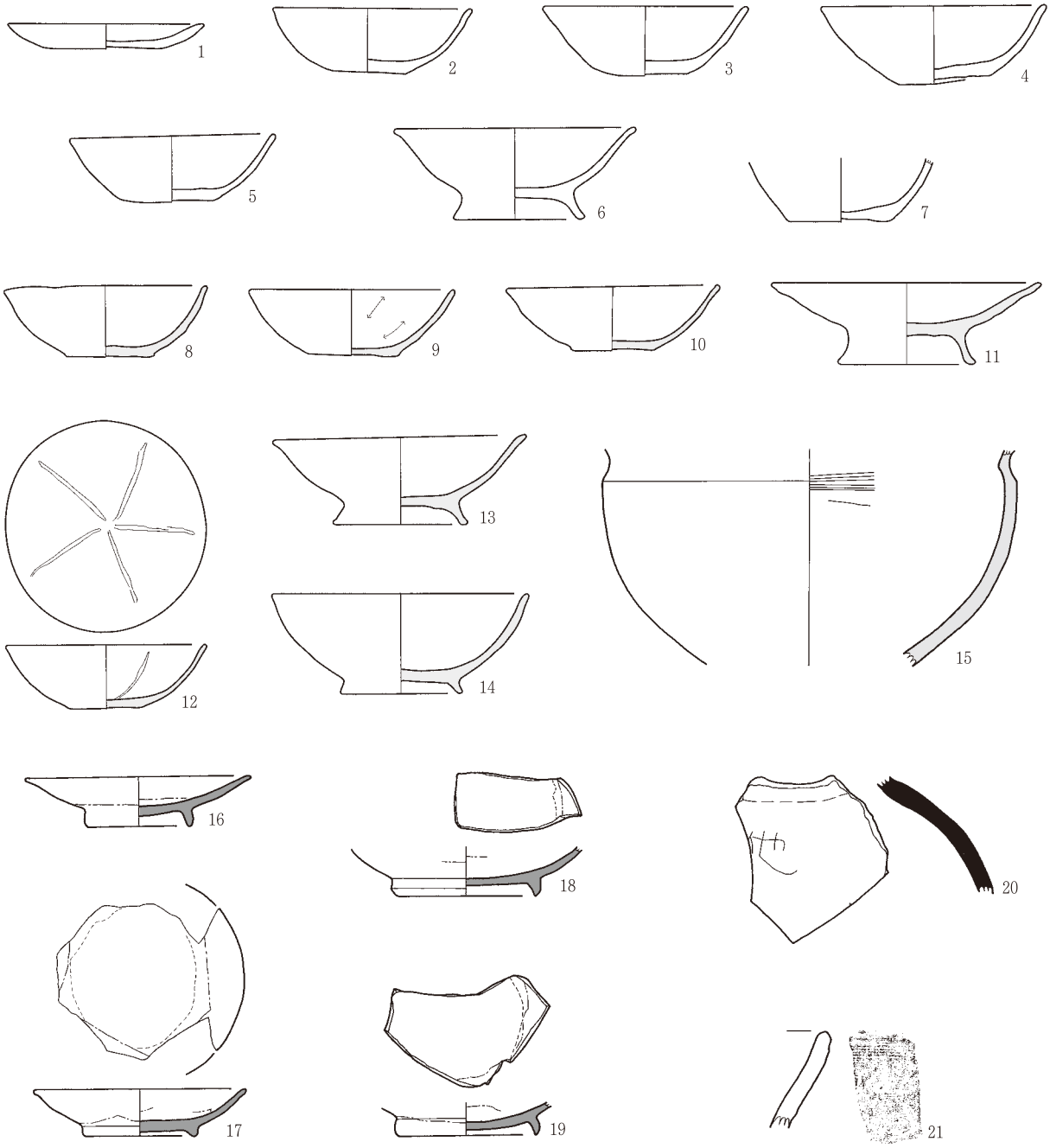


第95図　SB57

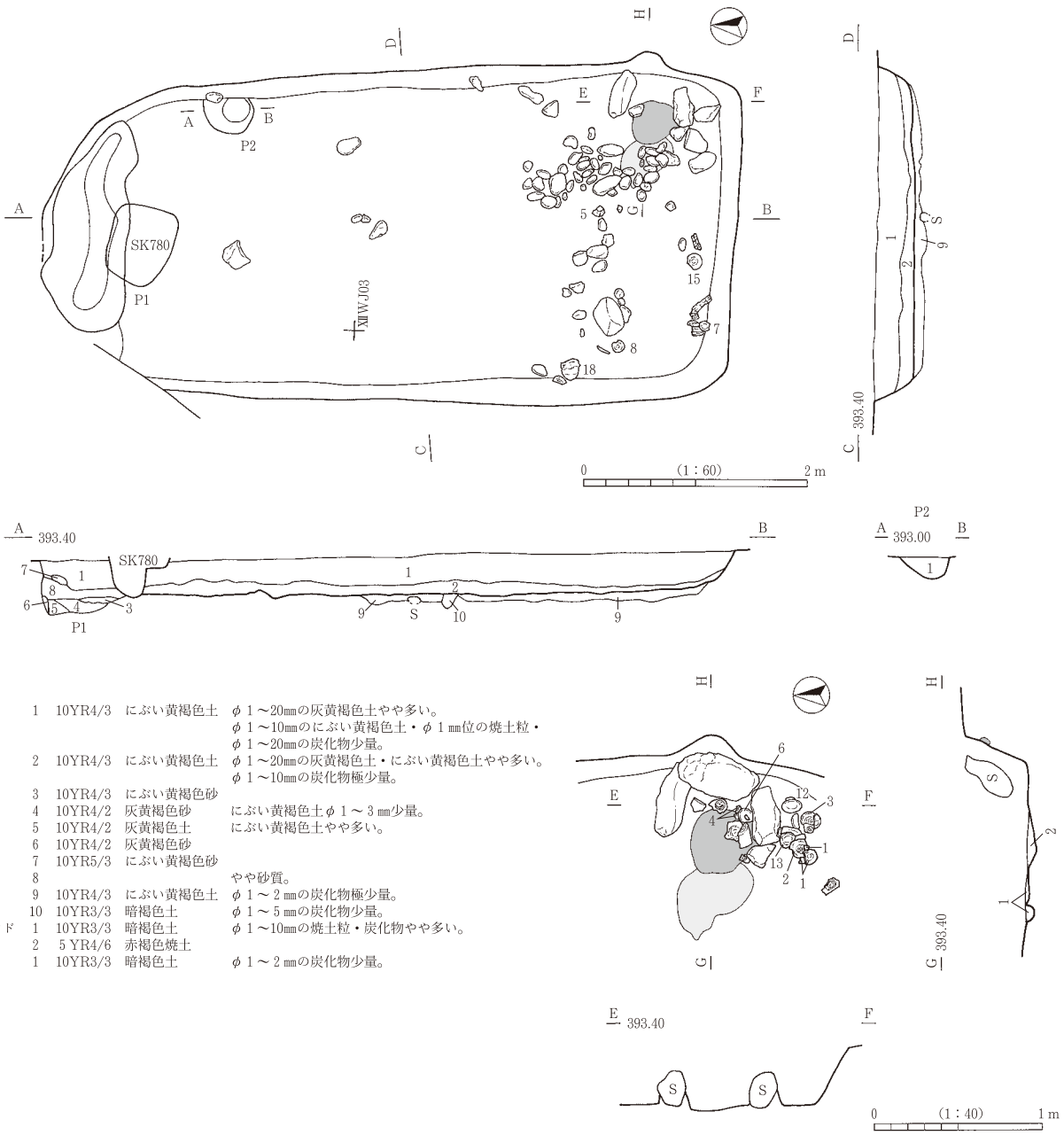


SB58・59		1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色粘土・炭化物・灰・φ１～５㎜の焼土粒・φ１～100㎜の礫少量。
		2	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色粘土・φ１～３㎜の炭化物少量。
		3	10YR2/3	黒褐色砂	φ１～10㎜の暗褐色粘土やや多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
		4	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物・φ１～50㎜の灰少量。
		5	10YR3/4	暗褐色土	φ１～10㎜の黒褐色土やや多い。
		6	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の黒色粘土やや多い。φ１～10㎜の褐色粘土・炭化物・φ１～５㎜の焼土粒少量。
		7	10YR3/4	暗褐色土	φ１～10㎜の黒色粘土・φ１～20㎜の焼土粒少量。
		8	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の褐色土やや多い。φ１～10㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
		9	10YR4/4	褐色土	φ１～10㎜の暗褐色土少量。
		10	５YR5/8	明赤褐色焼土	
		11	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の灰やや多い。φ１～10㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
		12	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の焼土粒やや多い。
		13	10YR3/3	暗褐色土	φ１～20㎜の褐色土やや多い。φ１㎜以下の炭化物少量。
		14	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の褐色土・φ１～20㎜の灰少量。
SB58	P１	1	10YR2/2	黒褐色土	φ１～100㎜暗褐色粘土やや多い。φ１～10㎜の褐色砂・炭化物少量。
		2	10YR3/4	暗褐色土	φ１～20㎜の黒褐色土・φ１～５㎜の炭化物少量。
	P２	1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～20㎜の褐色粘土・φ１～５㎜の炭化物少量。
		2	５YR4/8	赤褐色焼土	
		3	10YR4/4	褐色土	φ１～10㎜の黒褐色土多い。
		4	10YR3/4	暗褐色土	φ１～30㎜の褐色粗砂・φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。
		5	10YR3/4	暗褐色土	φ１～10㎜の褐灰色粘土やや多い。φ１～20㎜の焼土粒・φ１～30㎜の炭化物少量。
	P３	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の黒褐色粘土やや多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
	P４	1	10YR4/4	褐色土	φ１～10㎜の暗褐色土やや多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
		2	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の褐色土やや多い。φ１～20㎜の炭化物少量。
SB59	P１	1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色土・φ１～５㎜の炭化物少量。
	P２	1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色土やや多い。φ１～５㎜の灰少量。
	P３	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の黒褐色土・φ１～５㎜の炭化物少量。

第96図　SB58・59遺構図

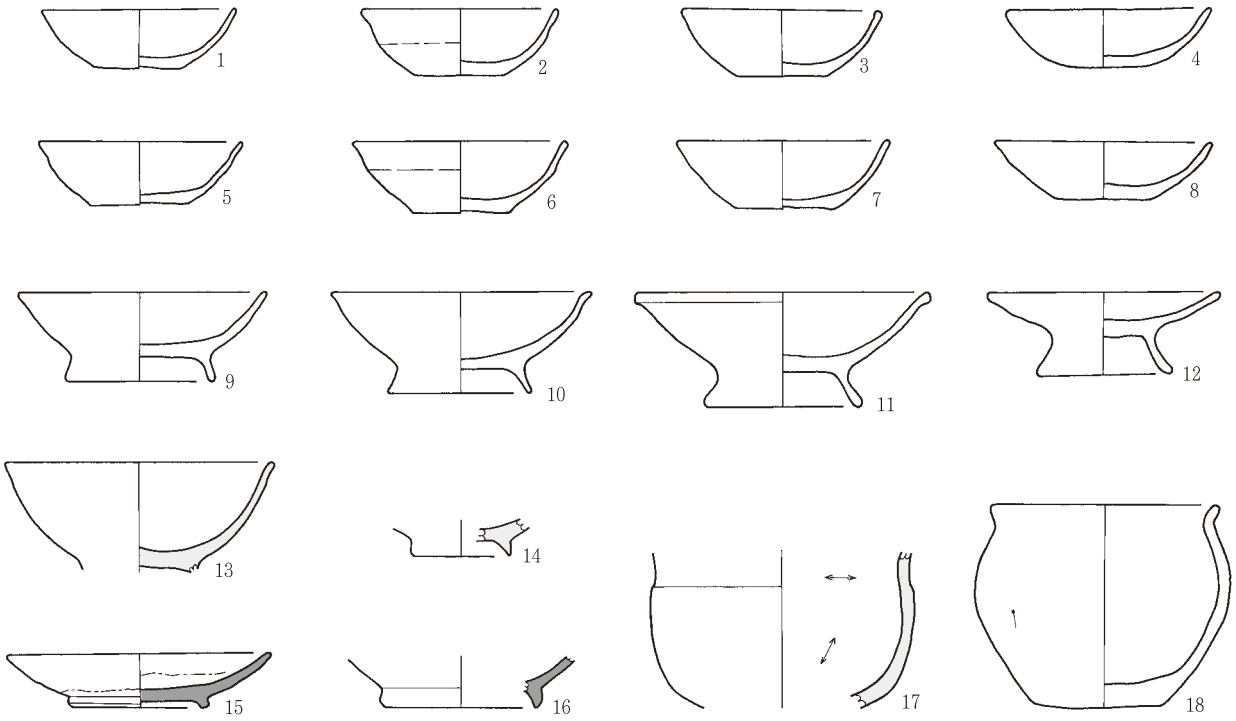


第97図　SB58遺物



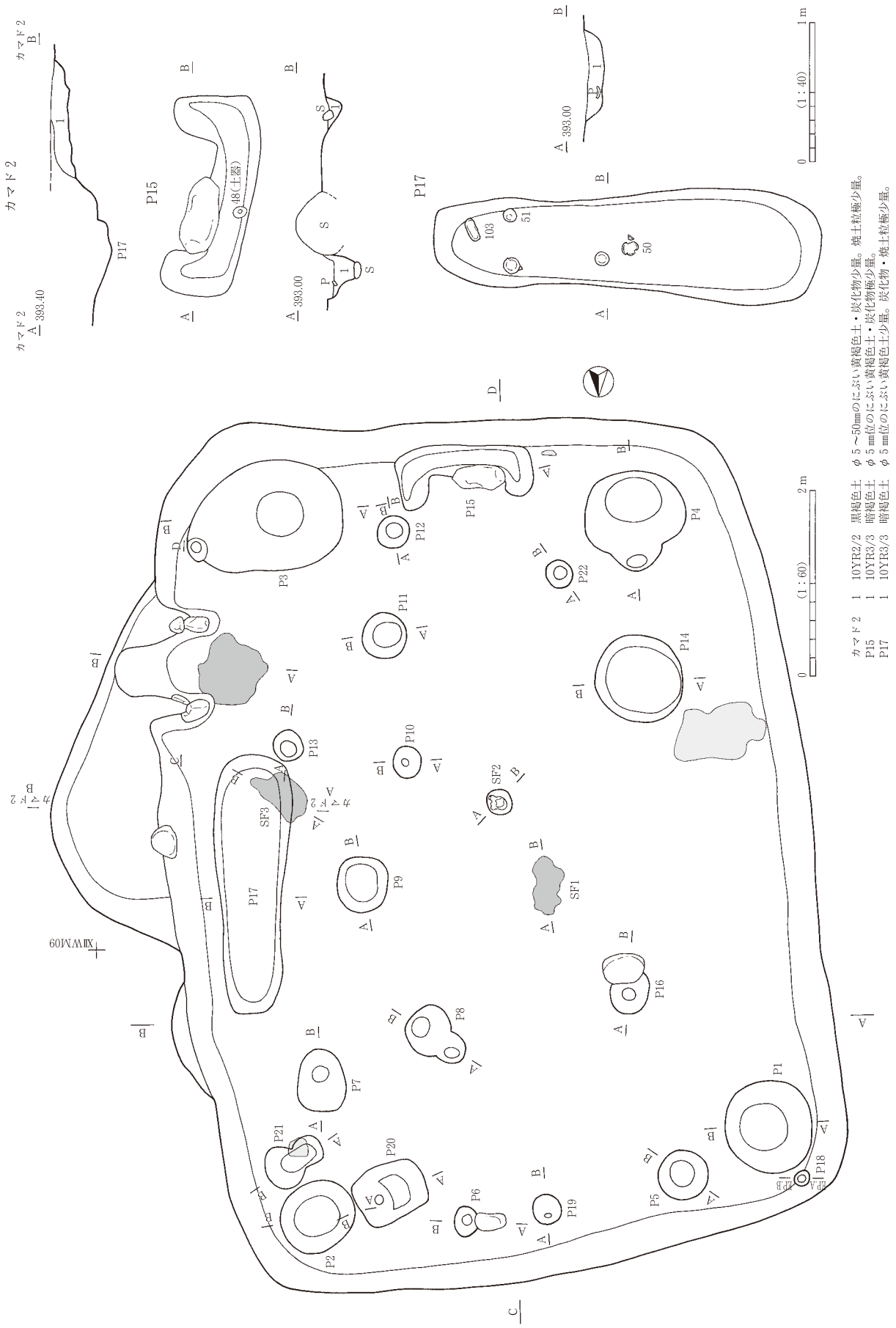
	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色土やや多い。 φ１～10㎜のにぶい黄褐色土・φ１㎜位の焼土粒・ φ１～20㎜の炭化物少量。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～20㎜の灰黄褐色土・にぶい黄褐色土やや多い。 φ１～10㎜の炭化物極少量。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	
	4	10YR4/2	灰黄褐色砂	にぶい黄褐色土φ１～３㎜少量。
	5	10YR4/2	灰黄褐色土	にぶい黄褐色土やや多い。
	6	10YR4/2	灰黄褐色砂	
	7	10YR5/3	にぶい黄褐色砂	
	8			やや砂質。
	9	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～２㎜の炭化物極少量。
	10	10YR3/3	暗褐色土	φ１～５㎜の炭化物少量。
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～10㎜の焼土粒・炭化物やや多い。
	2	5 YR4/6	赤褐色焼土	
P2	1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～２㎜の炭化物少量。

第98図　SB61遺構図

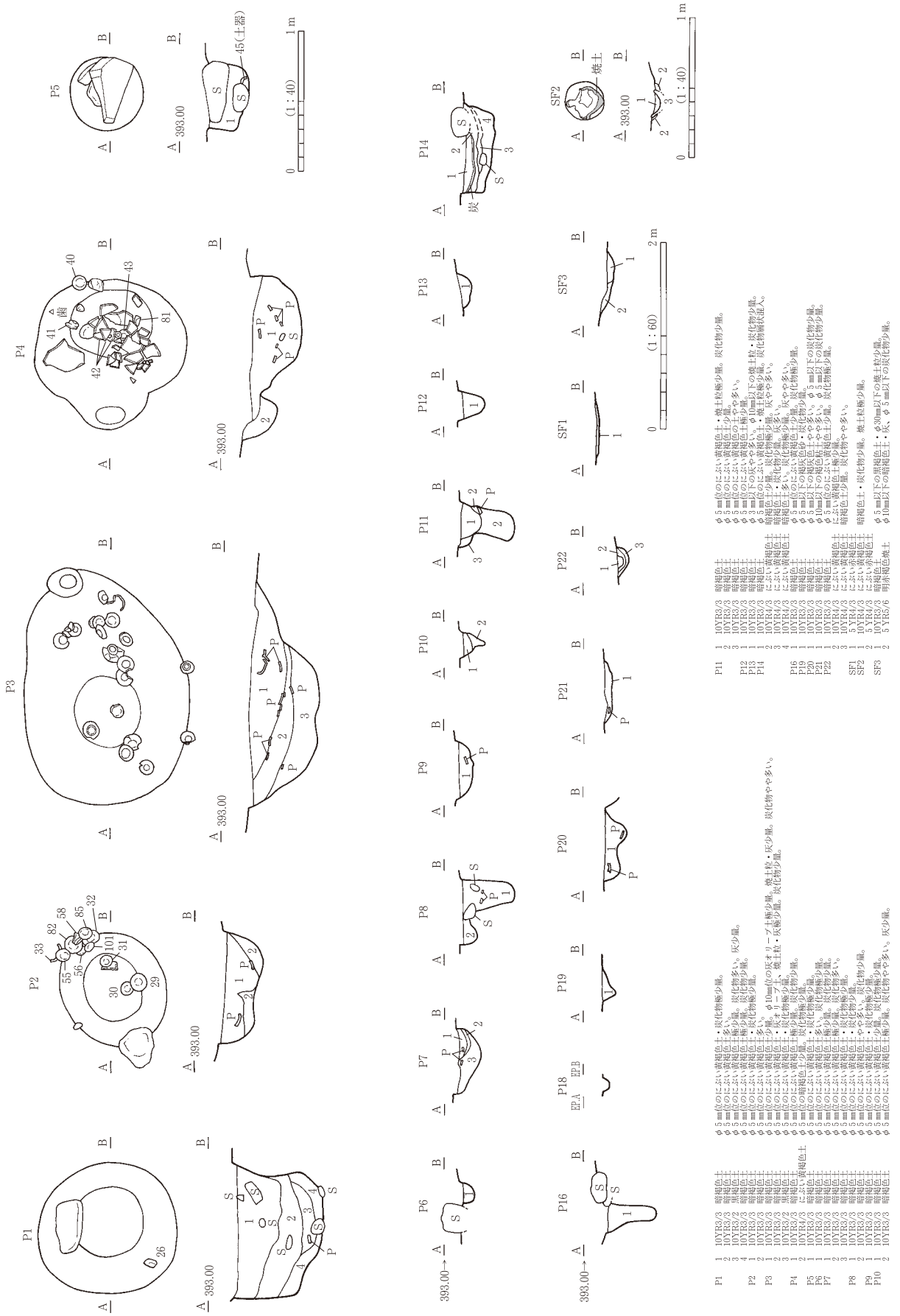


第99図　SB61遺物

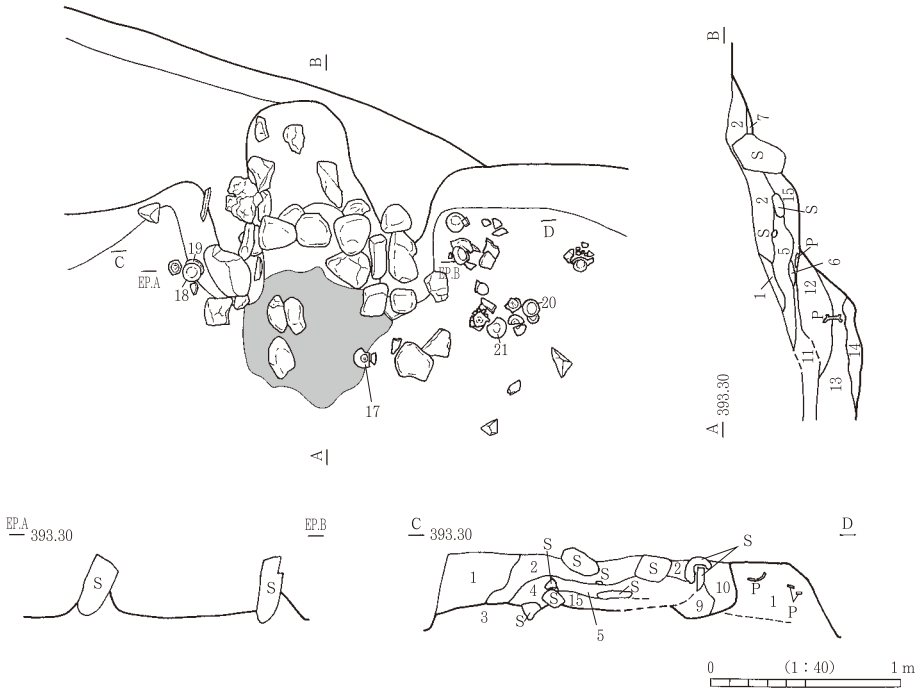
第100図　SB62遺構図１



第101図　SB62遺構図２

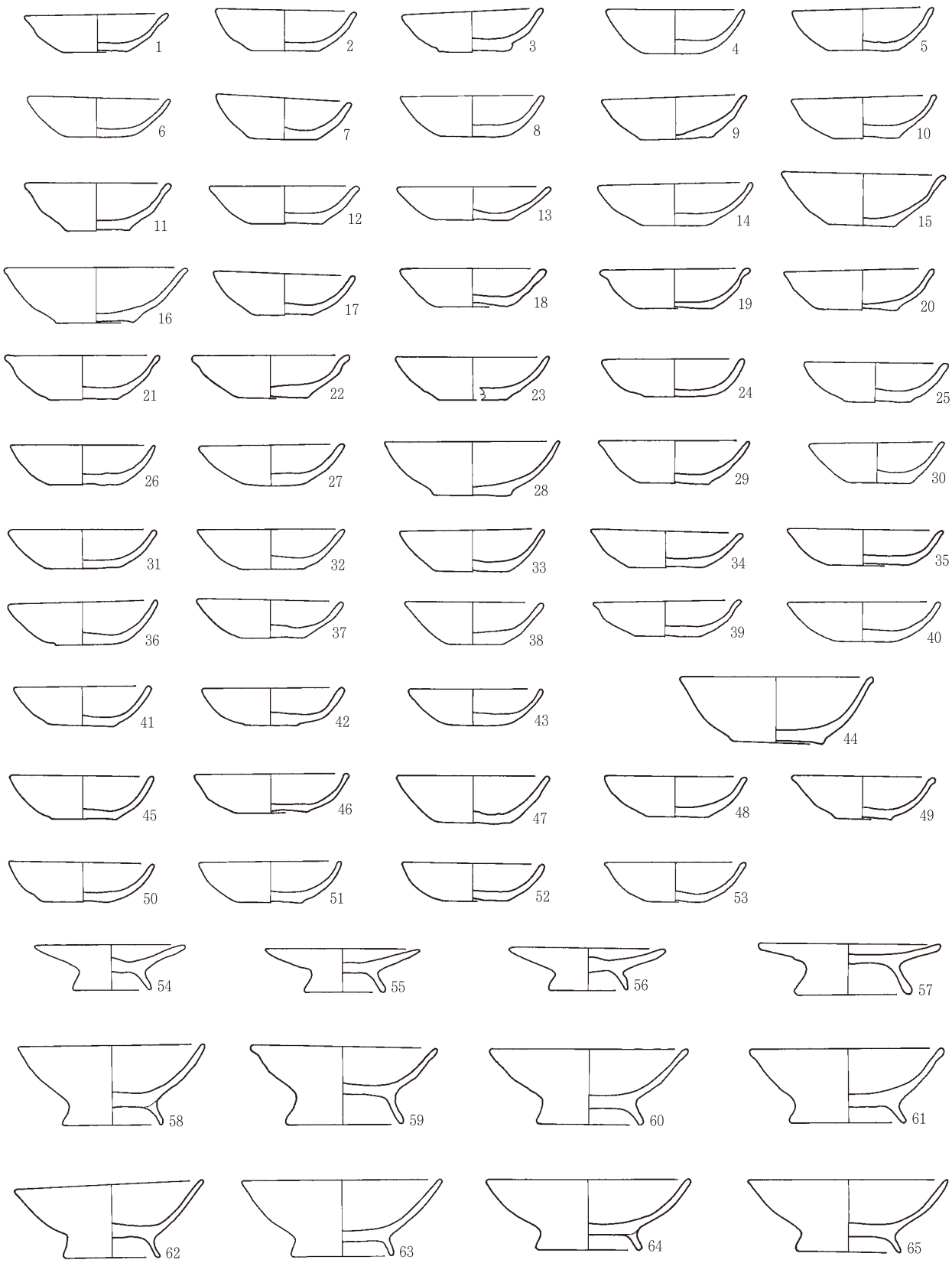


第102図　SB62遺構図３

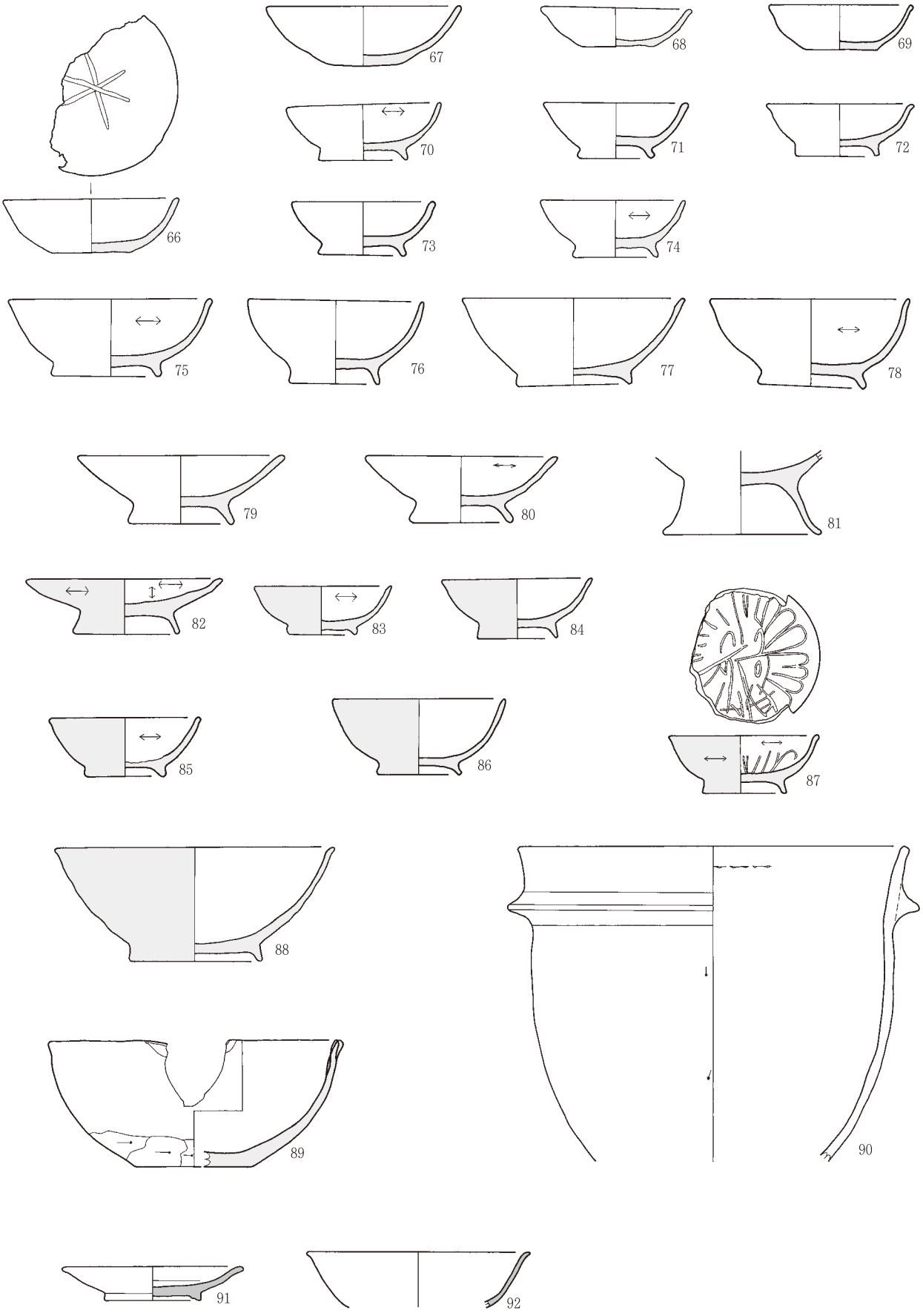


カマド	1	10YR3/4	暗褐色土	炭化物・φ３㎜大の礫少量。右袖には土器多い。
	2	10YR3/3	暗褐色土	にぶい赤褐色土・炭化物少量。人頭大～拳大礫が崩落した状態で混入。
	3	10YR3/4	暗褐色土	やや灰色がかるにぶい黄褐色土少量。
	4	10YR3/4	暗褐色土	炭化物少量。（カマド袖石内の層）
	5	10YR3/4	暗褐色土	にぶい赤褐色土少量。全体に斑状（炭粒・焼土粒が多く）に見える。（カマド熱焼部内）
	6	10YR4/1	褐灰色土	灰層。左袖方面に広がる。
	7	10YR4/4	褐色土	砂質。カマド袖石のずれに入り込んだ土。
	8	10YR2/3	黒褐色土	φ10㎜以下の褐色土やや多い。φ５㎜炭化物少量。
	9	10YR2/3	黒褐色土	φ40㎜以下の褐色土・φ10㎜以下の褐色粘土・10㎜以下の焼土粒・φ５㎜以下の炭化物少量。
	10	10YR4/4	褐色土	φ10㎜以下の暗褐色土やや多い。φ５㎜以下の炭化物少量。
	11	10YR4/4	褐色土	炭層。φ20㎜以下の褐色土やや多い。
	12	５YR4/8	赤褐色焼土	φ10㎜以下の灰少量。
	13	10YR2/3	黒褐色砂	φ30㎜以下の褐色土やや多い。φ10㎜以下の炭化物少量。
	14	10YR4/4	褐色土	φ10㎜以下の黒褐色砂・φ５㎜以下の炭化物少量。
	15	10YR4/2	灰黄褐色土	５層と６層の混じり

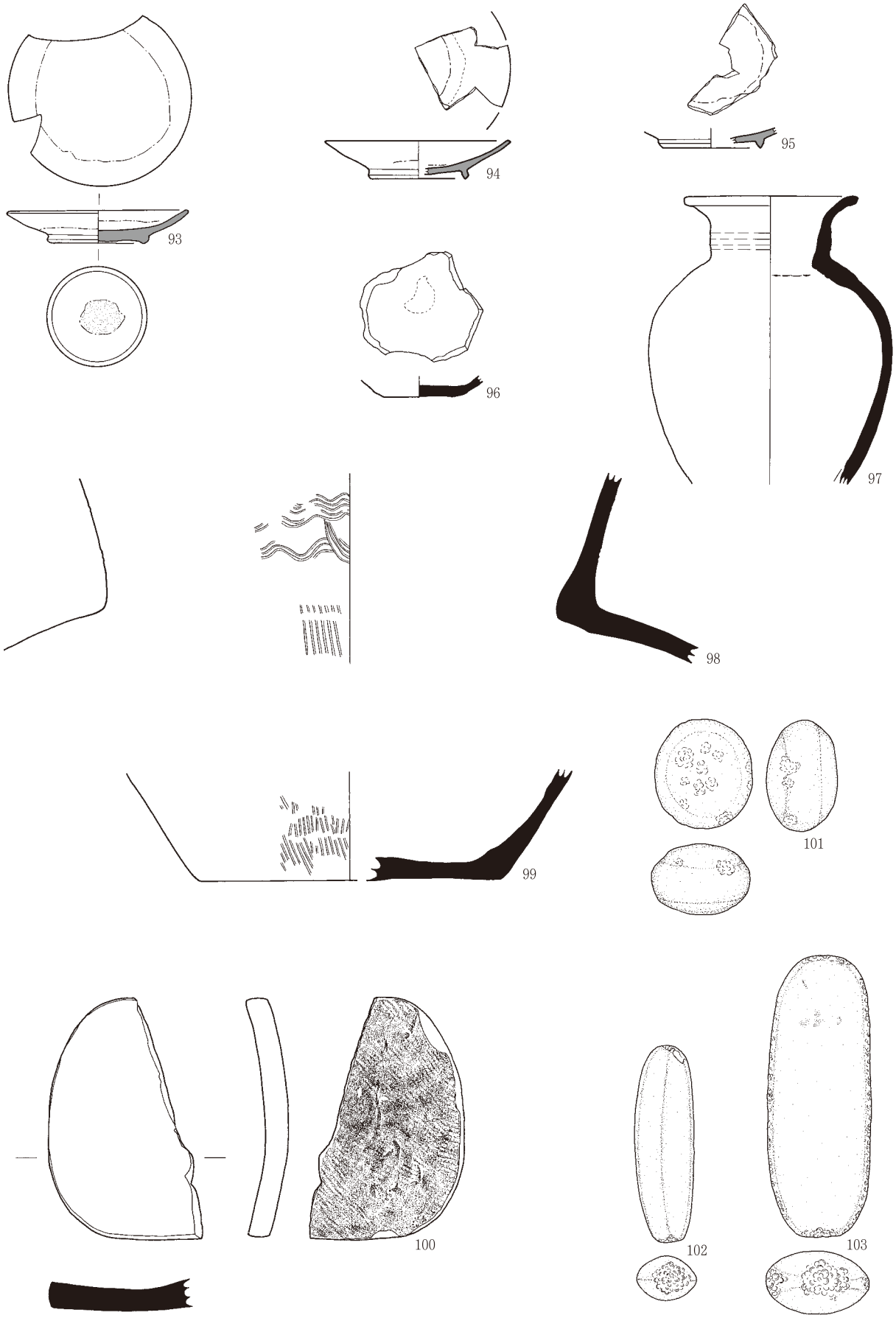
第103図　SB62遺構図４



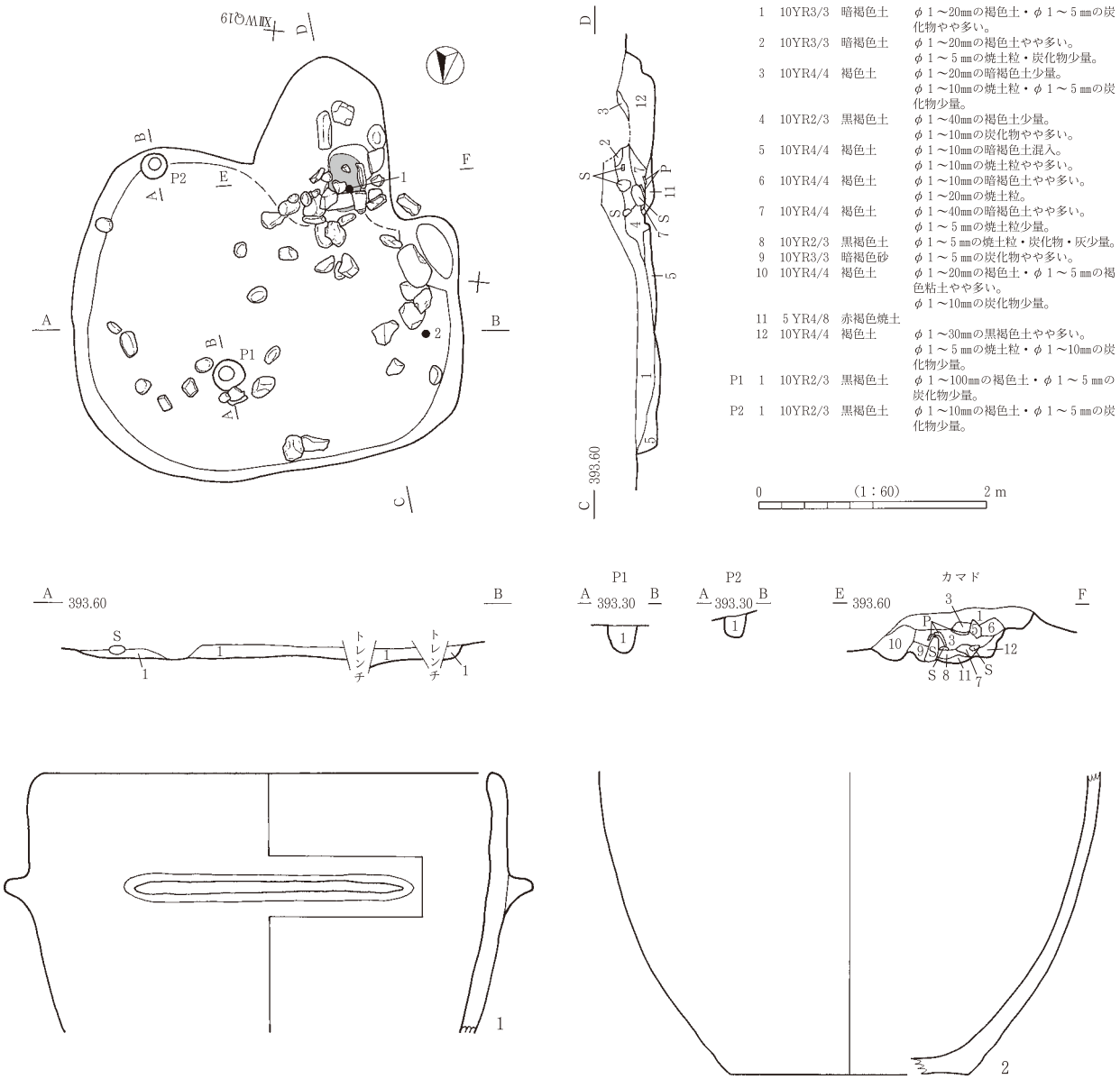
第104図　SB62遺物１



第105図　SB62遺物２

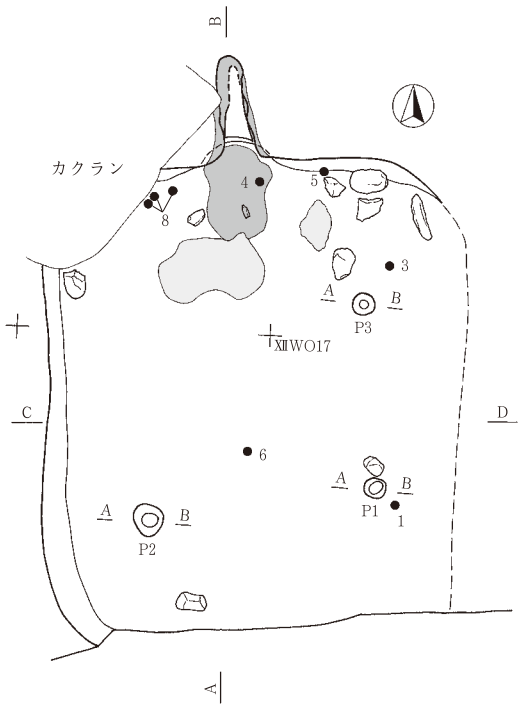


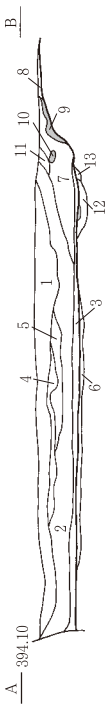
第106図　SB62遺物 3



1	10YR3/3	暗褐色土	φ１～20㎜の褐色土・φ１～５㎜の炭化物やや多い。
2	10YR3/3	暗褐色土	φ１～20㎜の褐色土やや多い。 φ１～５㎜の焼土粒・炭化物少量。
3	10YR4/4	褐色土	φ１～20㎜の暗褐色土少量。 φ１～10㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
4	10YR2/3	黒褐色土	φ１～40㎜の褐色土少量。 φ１～10㎜の炭化物やや多い。
5	10YR4/4	褐色土	φ１～10㎜の暗褐色土混入。 φ１～10㎜の焼土粒やや多い。
6	10YR4/4	褐色土	φ１～10㎜の暗褐色土やや多い。 φ１～20㎜の焼土粒。
7	10YR4/4	褐色土	φ１～40㎜の暗褐色土やや多い。 φ１～５㎜の焼土粒少量。
8	10YR2/3	黒褐色土	φ１～５㎜の焼土粒・炭化物・灰少量。
9	10YR3/3	暗褐色砂	φ１～５㎜の炭化物やや多い。
10	10YR4/4	褐色土	φ１～20㎜の褐色土・φ１～５㎜の褐色粘土やや多い。 φ１～10㎜の炭化物少量。
11	5YR4/8	赤褐色焼土	
12	10YR4/4	褐色土	φ１～30㎜の黒褐色土やや多い。 φ１～５㎜の焼土粒・φ１～10㎜の炭化物少量。
P1　1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～100㎜の褐色土・φ１～５㎜の炭化物少量。
P2　1	10YR2/3	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色土・φ１～５㎜の炭化物少量。

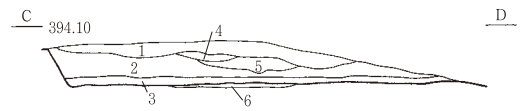
第107図　SB63

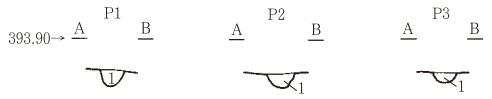


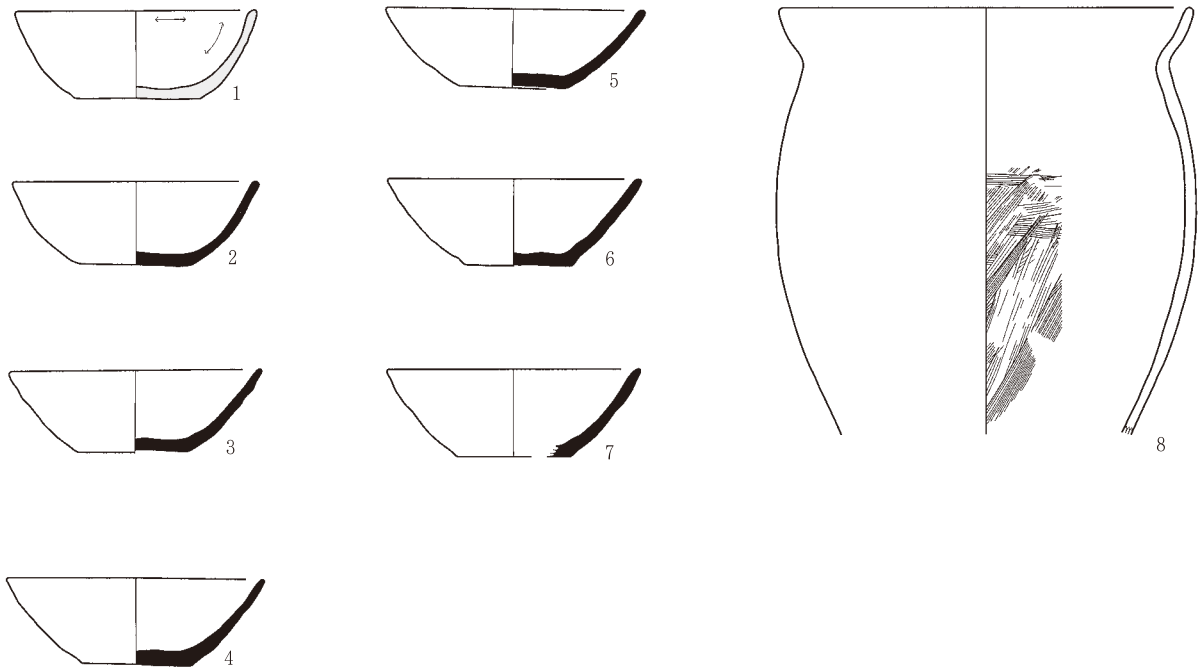


	1	10YR4/4	褐色土	φ１～２㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～２㎜の焼土粒・φ１～５㎜の炭化物少量。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～５㎜の炭化物少量。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	炭化物多い。
	5	10YR4/4	褐色土	
	6			貼床
	7	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～10㎜の焼土粒少量。
	8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～20㎜の焼土粒多い。φ１～３㎜の炭化物少量。
	9	5 YR3/4	暗赤褐色焼土	やや砂質。φ１～２㎜の炭化物少量。煙道下部。
	10	5 YR3/2	暗赤褐色焼土	やや砂質。
	11	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒・炭化物多い。
	12	5 YR3/4	暗赤褐色焼土	
	13			灰にφ１～５㎜の焼土粒・φ１～３㎜の炭化物少量。
P1	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～２㎜の焼土粒極少量。
P2	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～２㎜の焼土粒極少量。
P3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～２㎜の炭化物極少量。

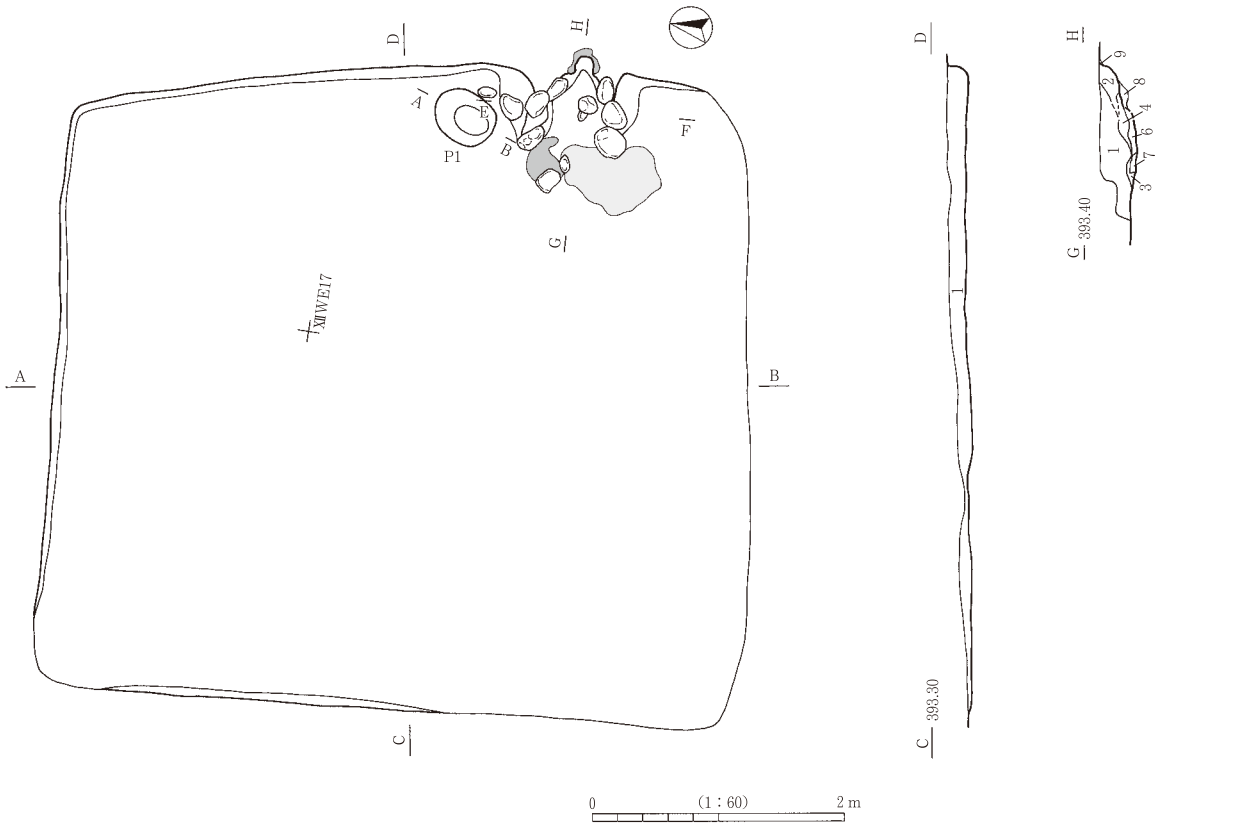
0　(1：60)　2 m

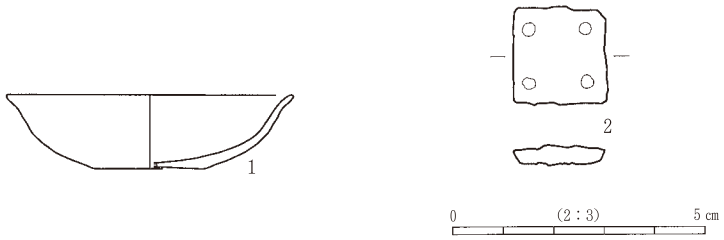






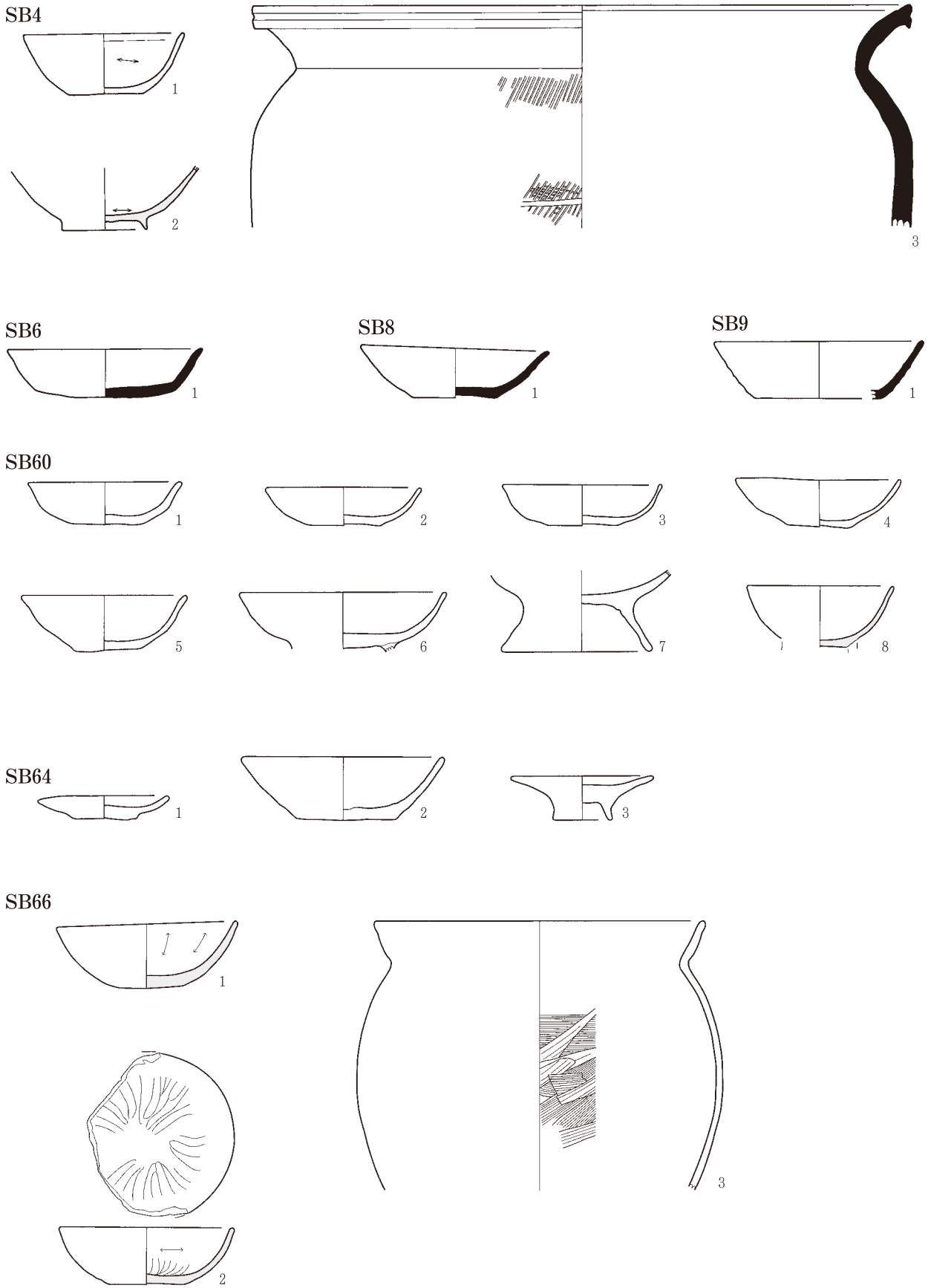
第108図　SB65



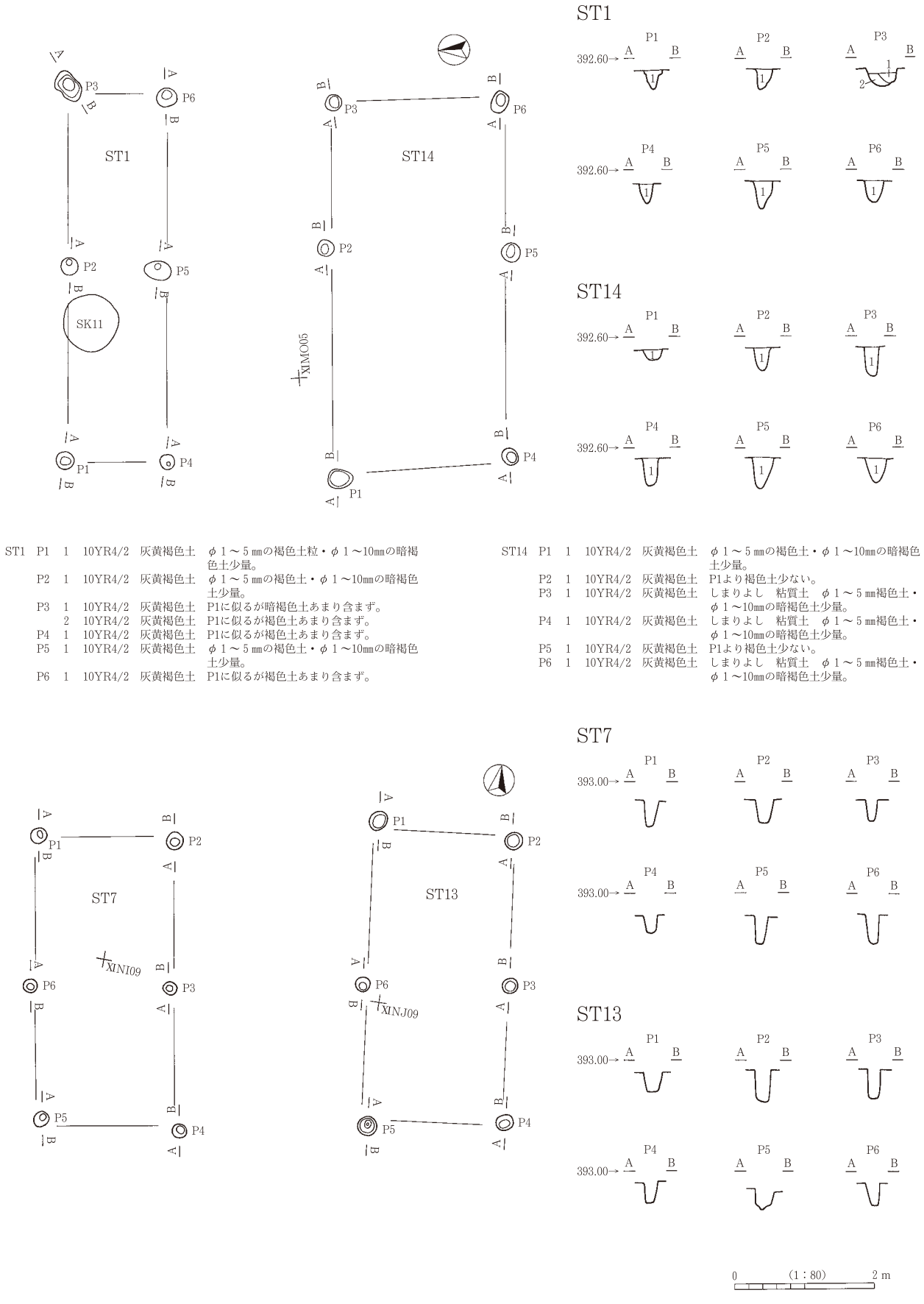


	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物極少量。
	2	10YR3/4	暗褐色土	貼床。
カマド	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒極少量。炭化物少量。
	2	10YR3/3	暗褐色土	φ５㎜位の暗褐色土多い。焼土粒やや多い。炭化物極少量。
	3	10YR3/3	暗褐色土	φ５㎜位の暗褐色土多い。炭化物多い。焼土粒極少量。灰やや多い。
	4	５YR3/6	暗赤褐色土	
	5	10YR3/3	暗褐色土	炭化物極少量。焼土粒・灰やや多い。φ５㎜位の暗褐色土多い。
	6	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒少量。炭化物極少量。灰多い。
	7	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物・灰極少量。
	8	10YR4/3	にぶい黄褐色土	焼土粒・炭化物・灰極少量。
	9	５YR3/4	暗赤褐色土	
	10	10YR4/3	にぶい黄褐色土	暗褐色土少量。
	11	５YR3/3	暗赤褐色土	
P１	1	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化物極少量。

第109図　SB88



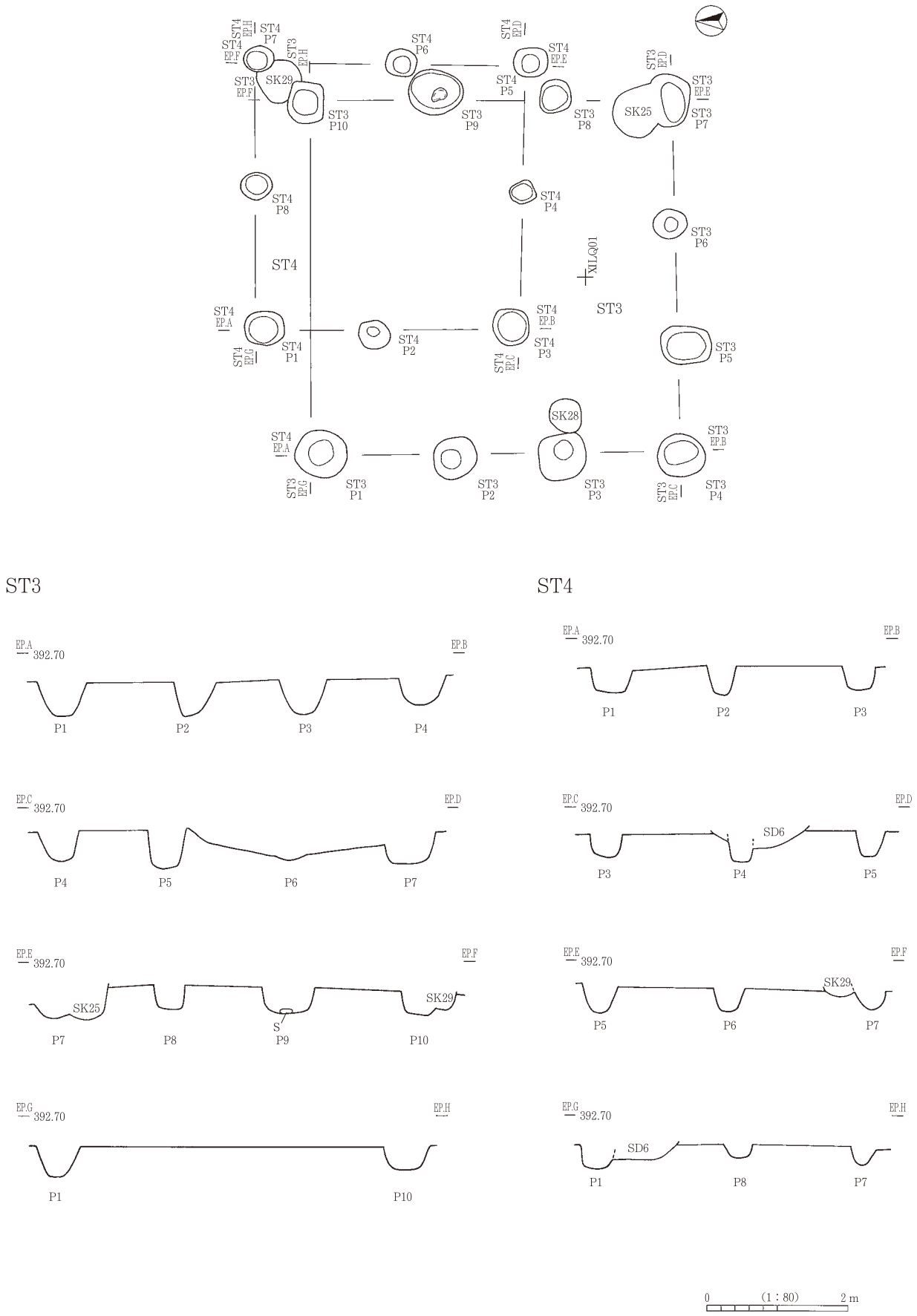
第110図　SB4・6・8・9・60・64・66遺物



ST1	P1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色土粒・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P2	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P3	1	10YR4/2	灰黄褐色土	P1に似るが暗褐色土あまり含まず。
		2	10YR4/2	灰黄褐色土	P1に似るが褐色土あまり含まず。
	P4	1	10YR4/2	灰黄褐色土	P1に似るが褐色土あまり含まず。
	P5	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P6	1	10YR4/2	灰黄褐色土	P1に似るが褐色土あまり含まず。

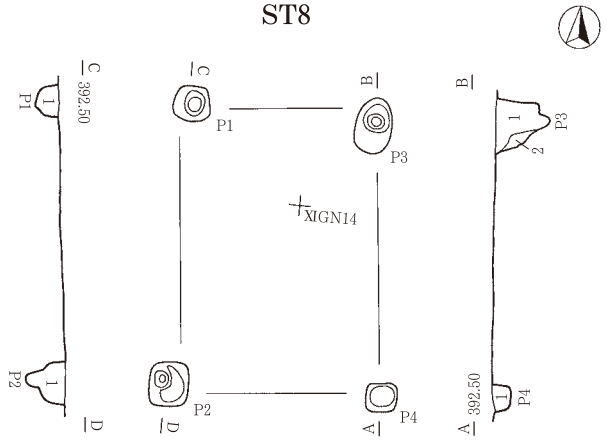
ST14	P1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	φ１～５㎜の褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P2	1	10YR4/2	灰黄褐色土	P1より褐色土少ない。
	P3	1	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりよし　粘質土　φ１～５㎜褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P4	1	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりよし　粘質土　φ１～５㎜褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。
	P5	1	10YR4/2	灰黄褐色土	P1より褐色土少ない。
	P6	1	10YR4/2	灰黄褐色土	しまりよし　粘質土　φ１～５㎜褐色土・φ１～10㎜の暗褐色土少量。

第111図　ST1・7・13・14遺構図



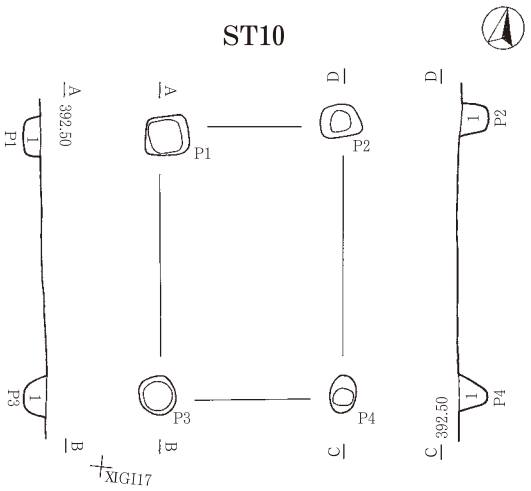
第112図　ST3・4遺構図

ST8



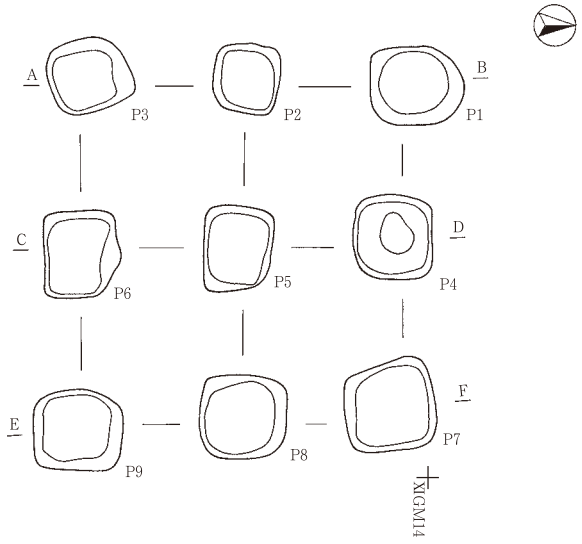
P1　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P2　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P3　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P4　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。

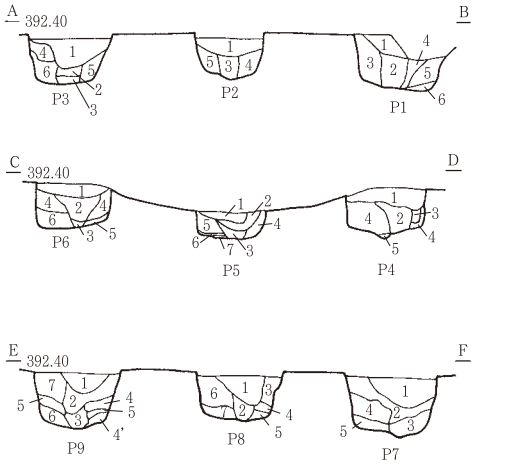
ST10



P1　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P2　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P3　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P4　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。

ST9



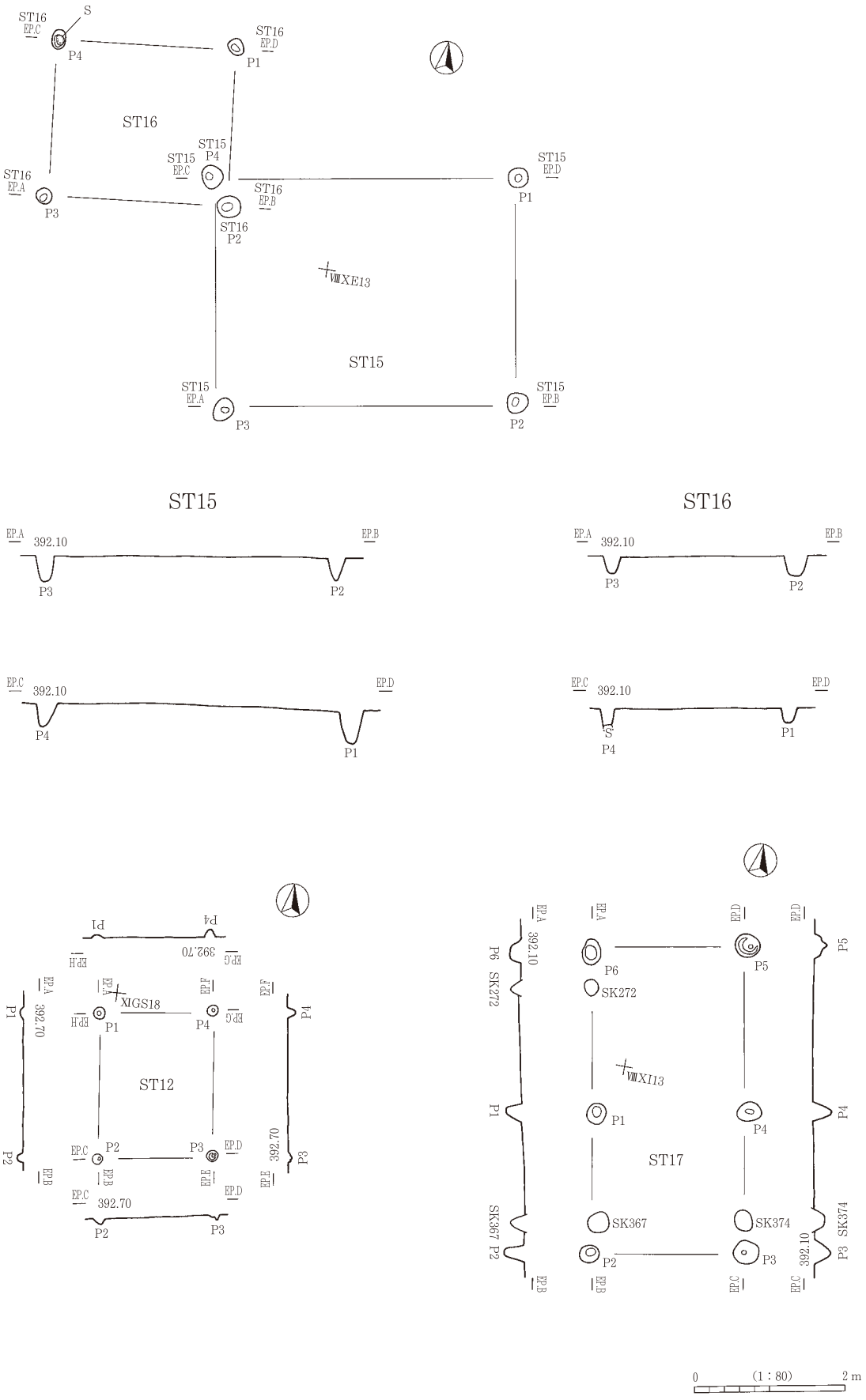


0　(1：80)　2 m

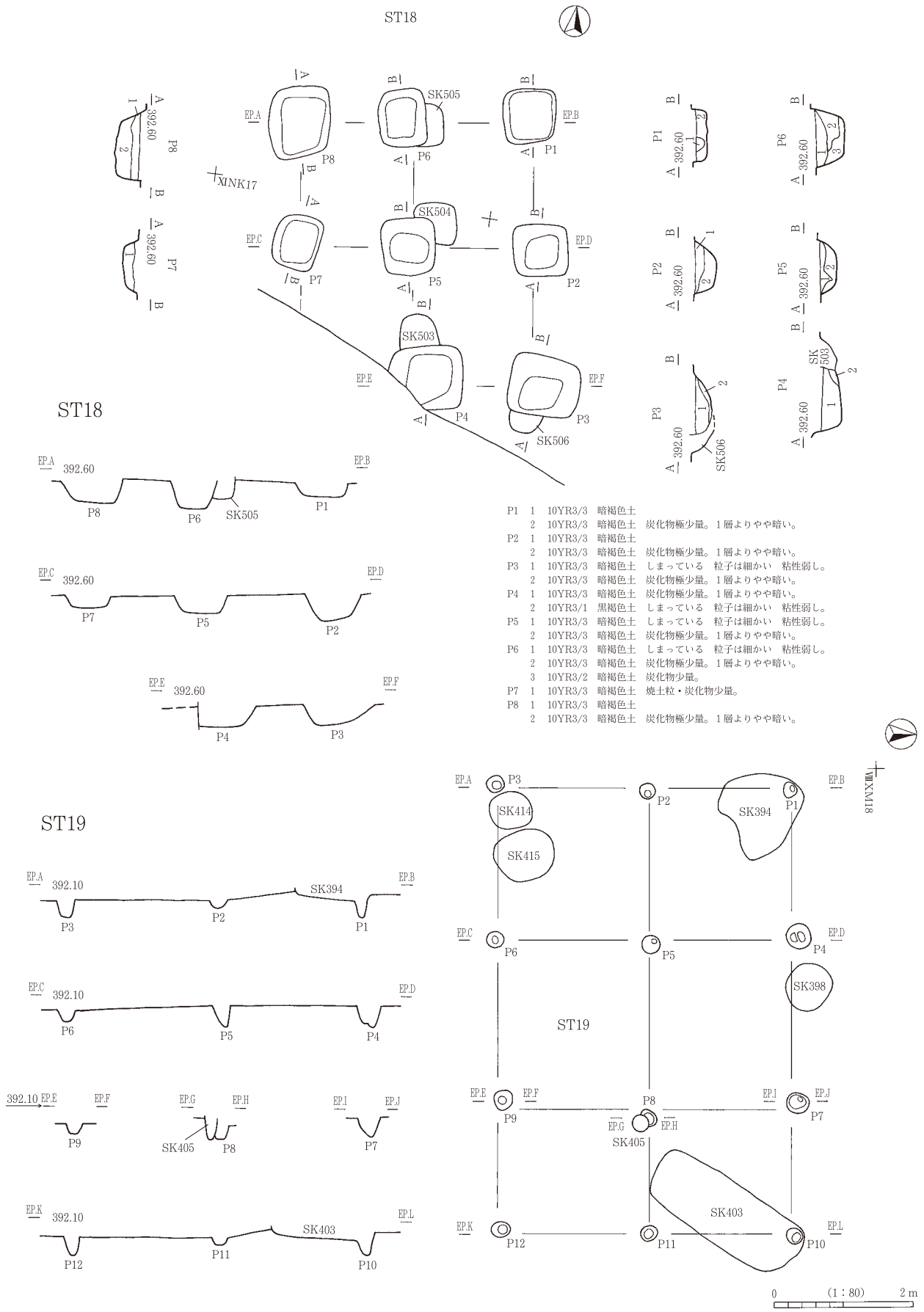
P1　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　6　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土少量。
P2　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　１層より暗褐色土多い。
　　3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。暗褐色土極少量。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P3　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/3　にぶい黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗褐色土極少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　6　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
P4　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土混入。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　5　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土少量。
P5　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色粘土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　１層よりにぶい黄褐色粘土やや多い。
　　3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　暗褐色土少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色粘土少量。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　暗褐色土・にぶい黄褐色粘土少量。
　　6　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。
　　7　10YR4/2　灰黄褐色土　にぶい黄褐色土少量。

P6　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。暗褐色土極少量。
　　3　10YR3/3　暗褐色土　にぶい黄褐色粘土混入。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　5　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土・褐色土少量。
　　6　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土少量。
P7　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。
P8　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。にぶい黄褐色粘土部分的に混入。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。Ｐ７の２層に似る。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　暗褐色土やや多い。
　　5　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　6　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　7　10YR4/2　灰黄褐色土　暗褐色土少量。６層に似る。
P9　1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。にぶい黄褐色粘土部分的に混入。
　　2　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　3　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土少量。
　　4　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。
　　4'　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土・暗褐色土少量。４層に似る。
　　5　10YR3/3　暗褐色土　灰黄褐色土少量。褐色土極少量。
　　6　10YR4/2　灰黄褐色土　暗褐色土やや多い。褐色土極少量。

第113図　ST8・9・10遺構図

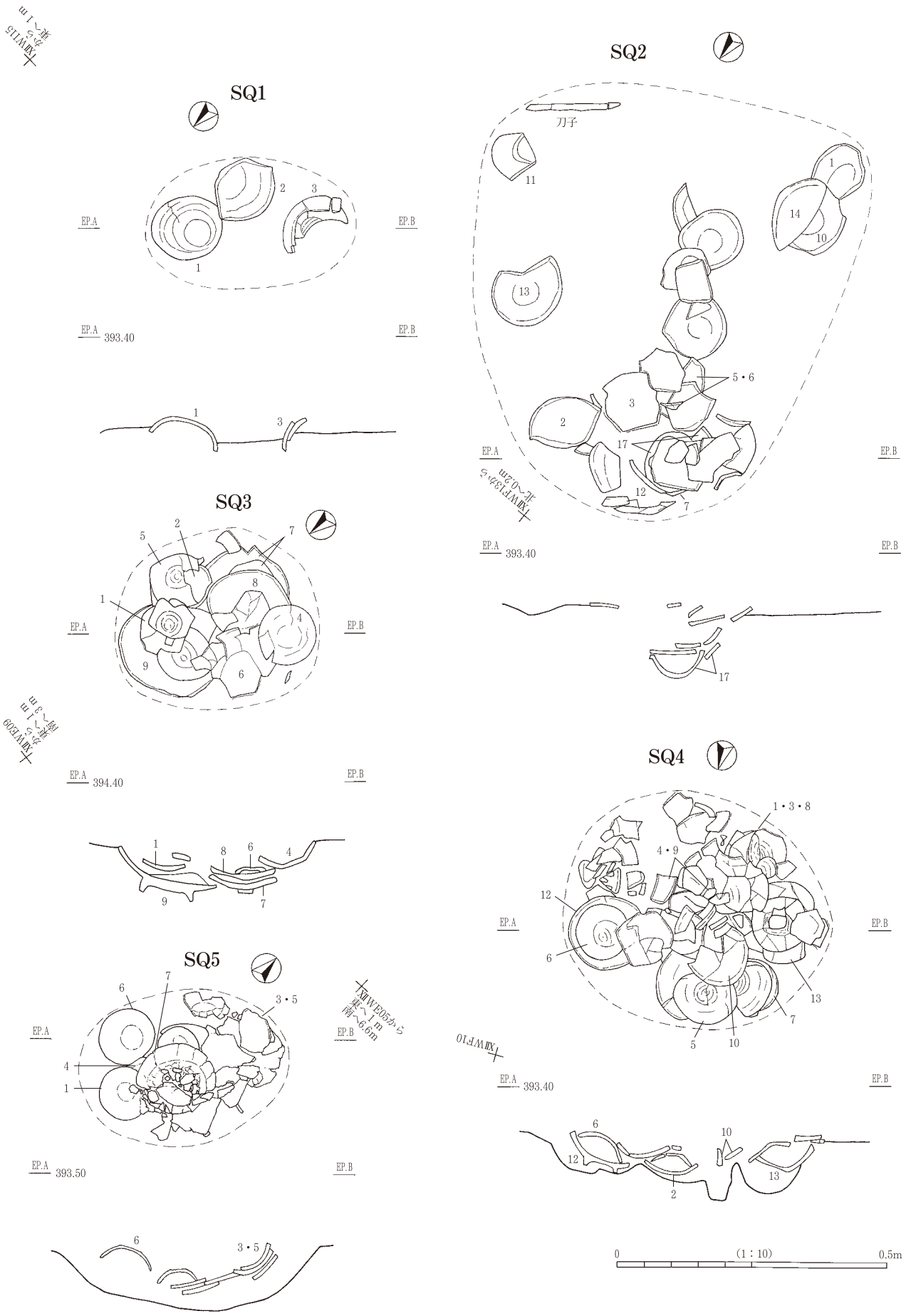


第114図　ST12・15・16・17遺構図



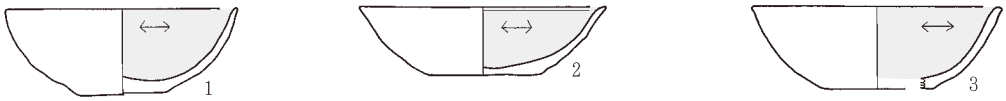
P1　1　10YR3/3　暗褐色土
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
P2　1　10YR3/3　暗褐色土
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
P3　1　10YR3/3　暗褐色土　しまっている　粒子は細かい　粘性弱し。
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
P4　1　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
　　2　10YR3/1　黒褐色土　しまっている　粒子は細かい　粘性弱し。
P5　1　10YR3/3　暗褐色土　しまっている　粒子は細かい　粘性弱し。
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
P6　1　10YR3/3　暗褐色土　しまっている　粒子は細かい　粘性弱し。
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。
　　3　10YR3/2　暗褐色土　炭化物少量。
P7　1　10YR3/3　暗褐色土　焼土粒・炭化物少量。
P8　1　10YR3/3　暗褐色土
　　2　10YR3/3　暗褐色土　炭化物極少量。１層よりやや暗い。

第115図　ST18・19遺構図

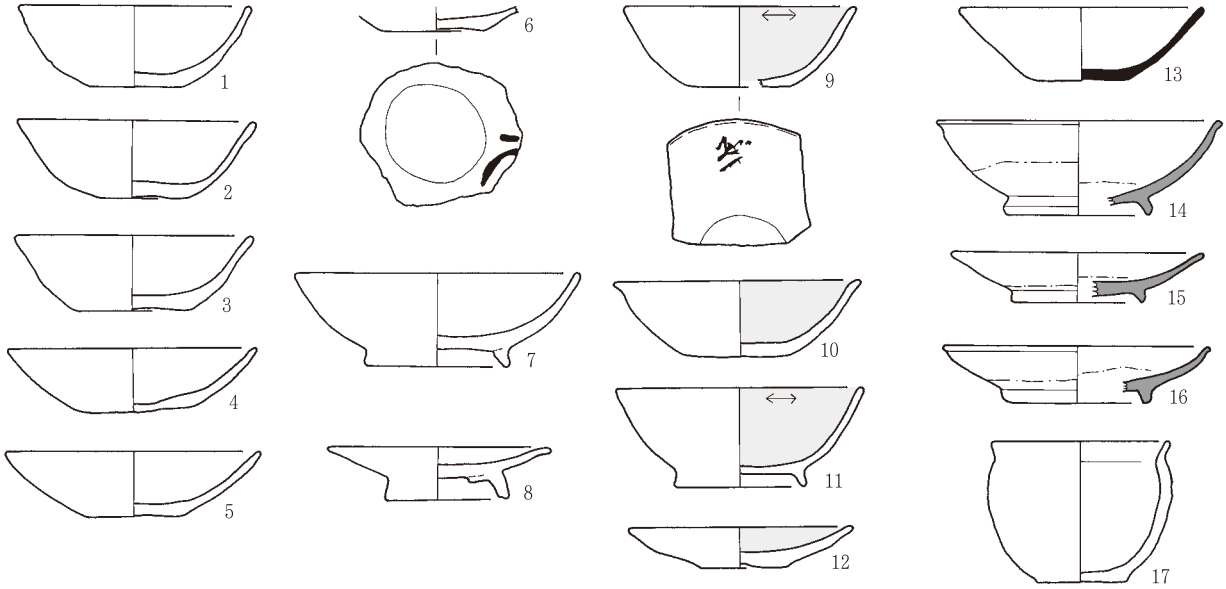


第116図　SQ1・2・3・4・5遺構図

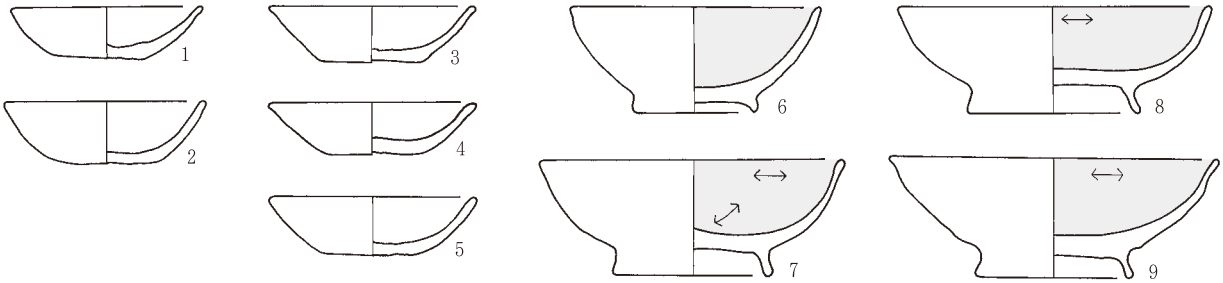
SQ1



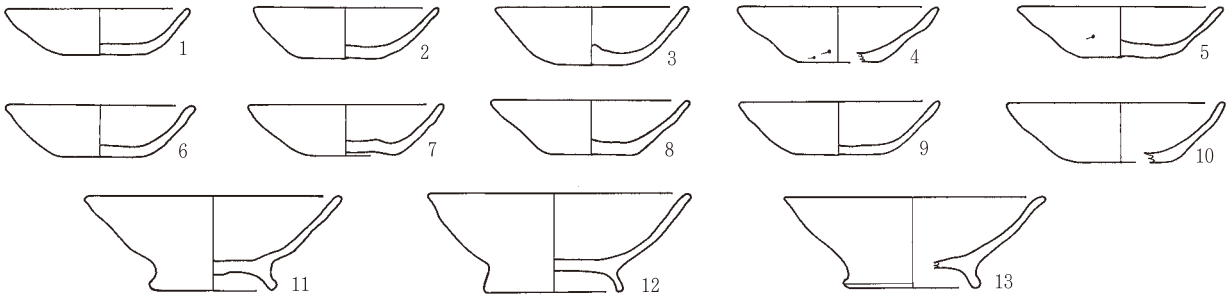
SQ2



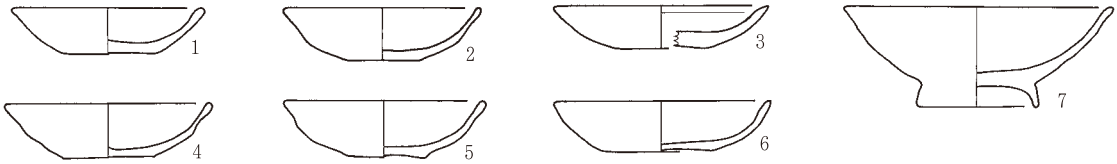
SQ3



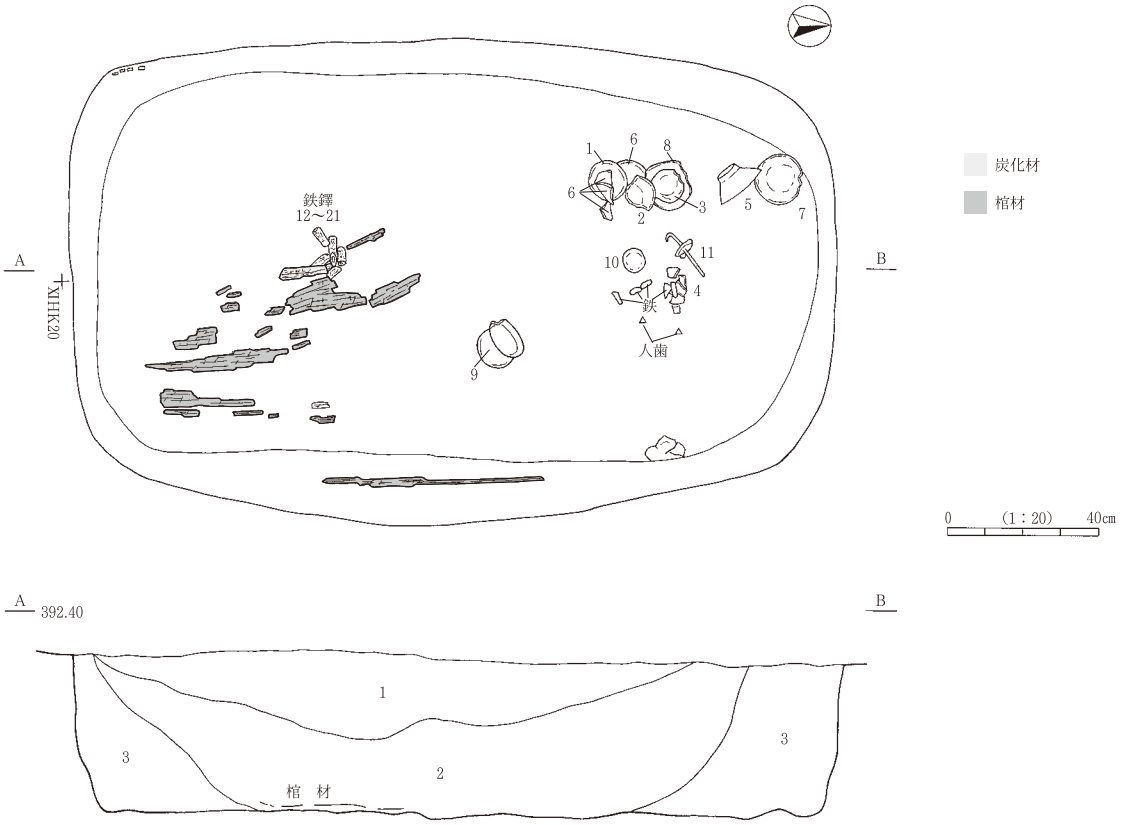
SQ4



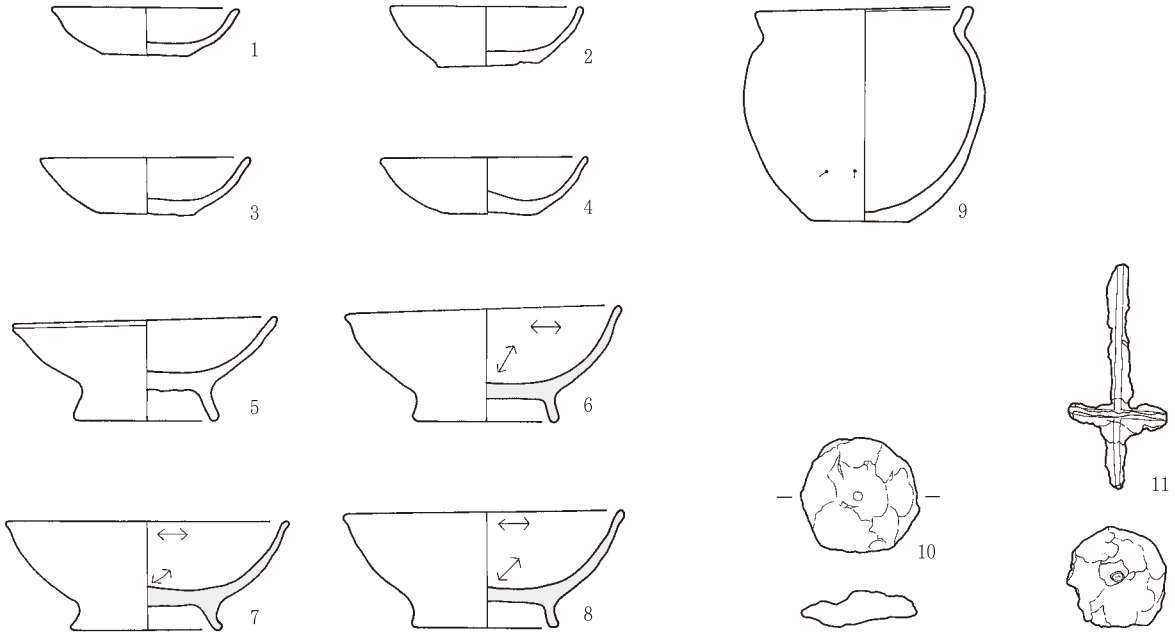
SQ5



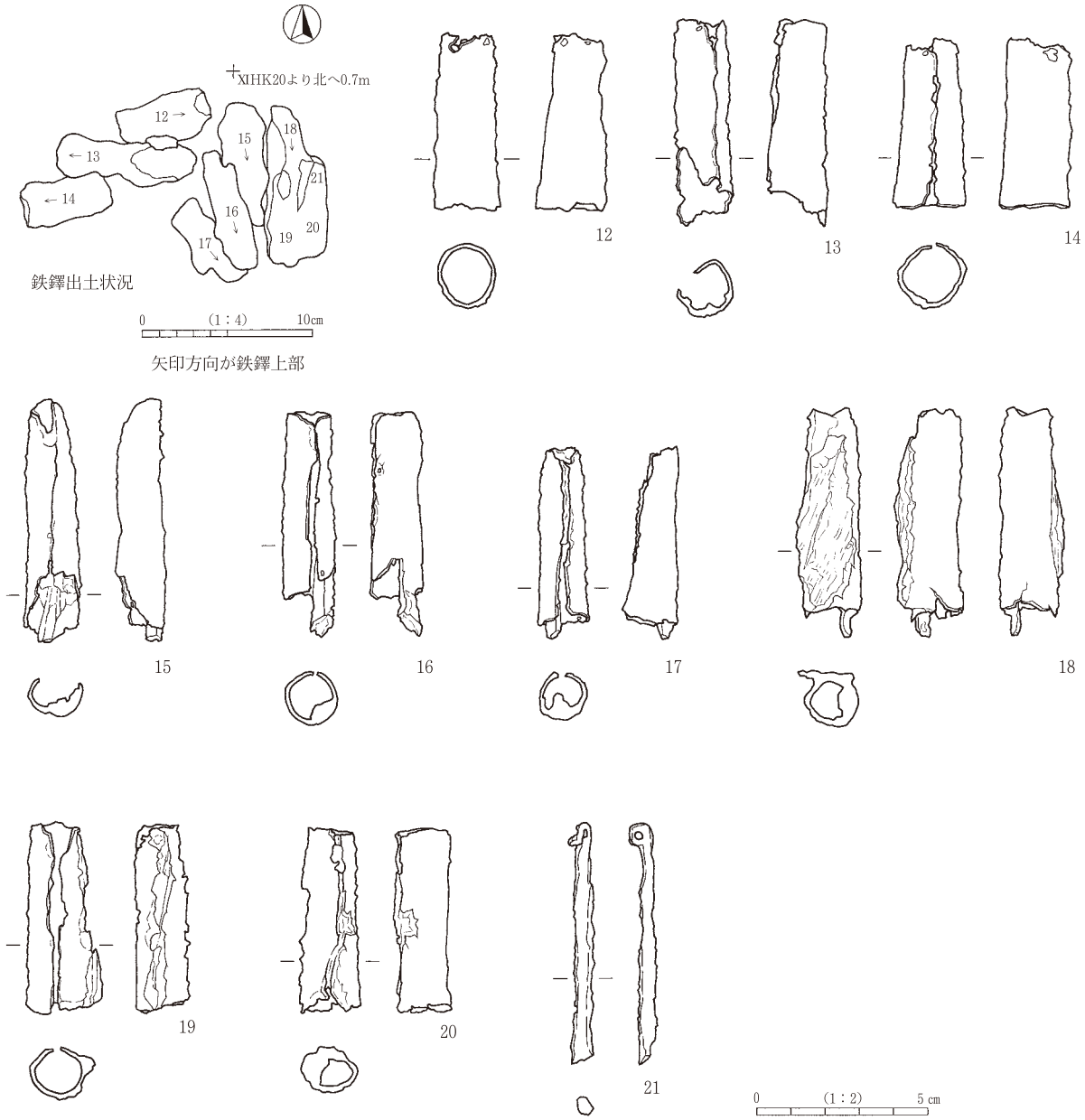
第117図　SQ1・2・3・4・5遺物



1　10YR4/2　灰黄褐色土　褐色土少量。
2　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土・褐色土多い。炭化物少量。
3　10YR3/2　黒褐色土　　褐色土少量。

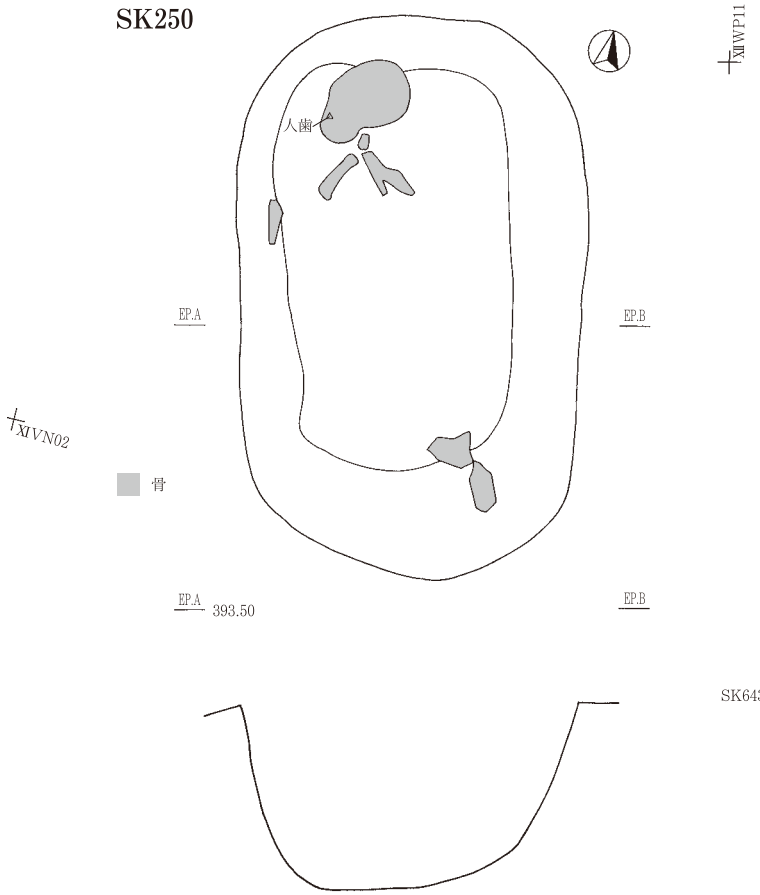


第118図　SK4

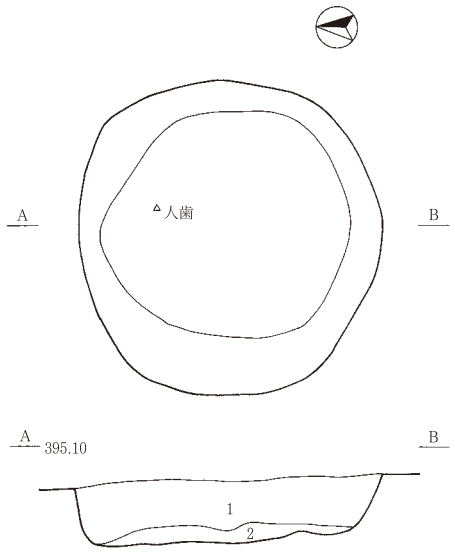

XIHK20より北へ0.7m
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
鉄鐸出土状況
0 (1：4) 10cm
矢印方向が鉄鐸上部
0 (1：2) 5 cm

第119図　SK4鉄鐸

SK250



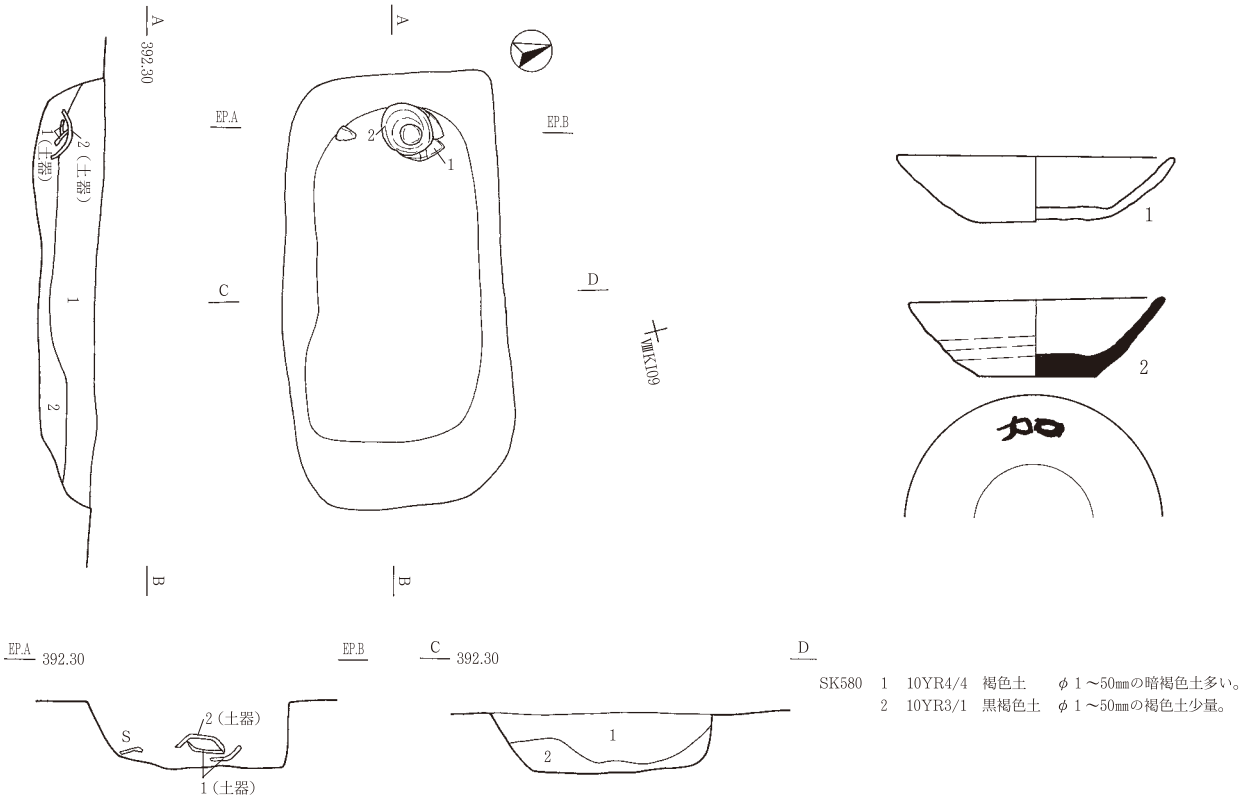
SK643



SK643　1　10YR3/3　暗褐色土　φ１～50㎜の灰黄褐色土やや多い。
φ１～３㎜の炭化物少量。
2　10YR5/3　にぶい黄褐色土　１層の土やや多く混入。

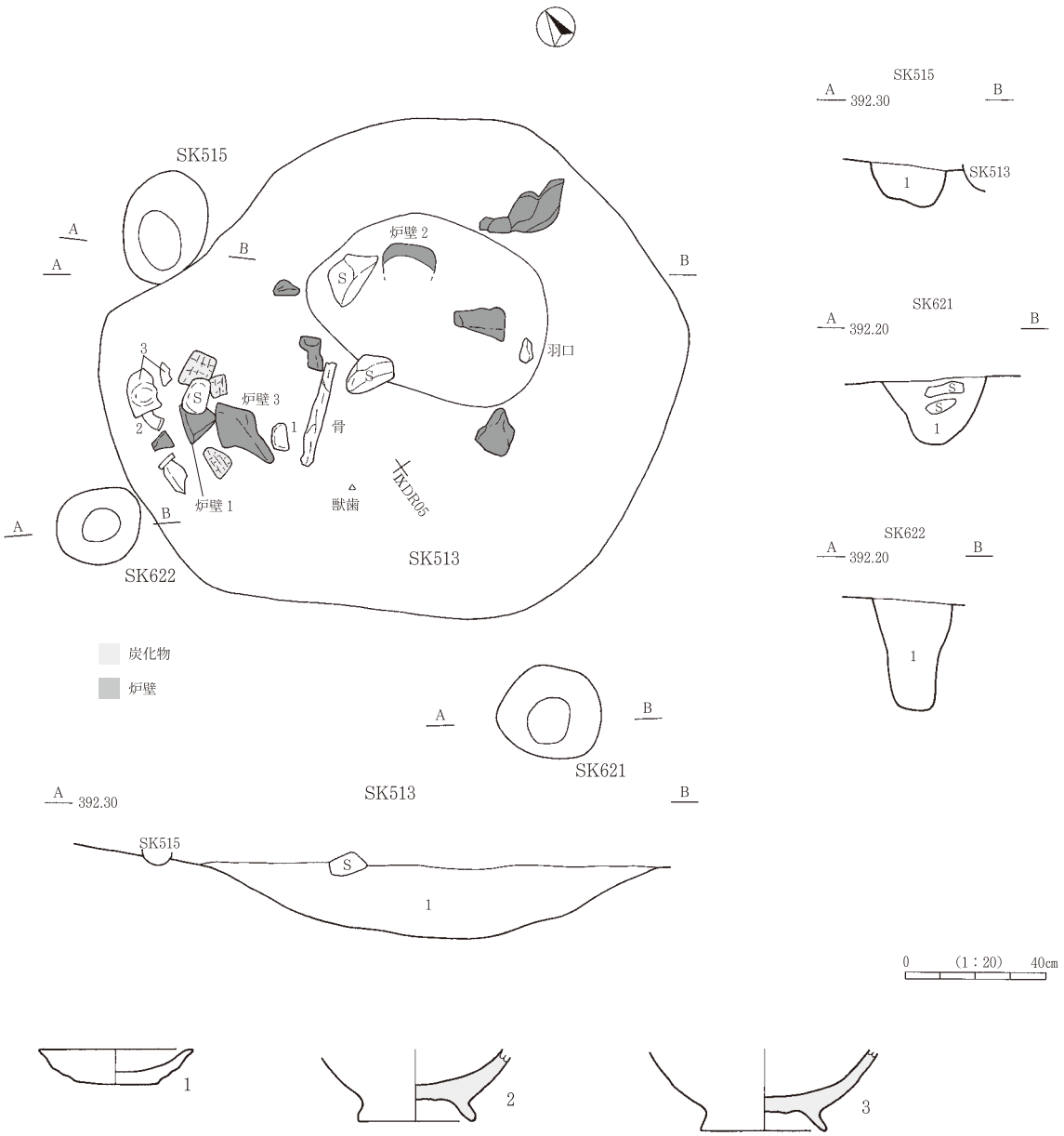
0　(1：20)　40cm

SK580



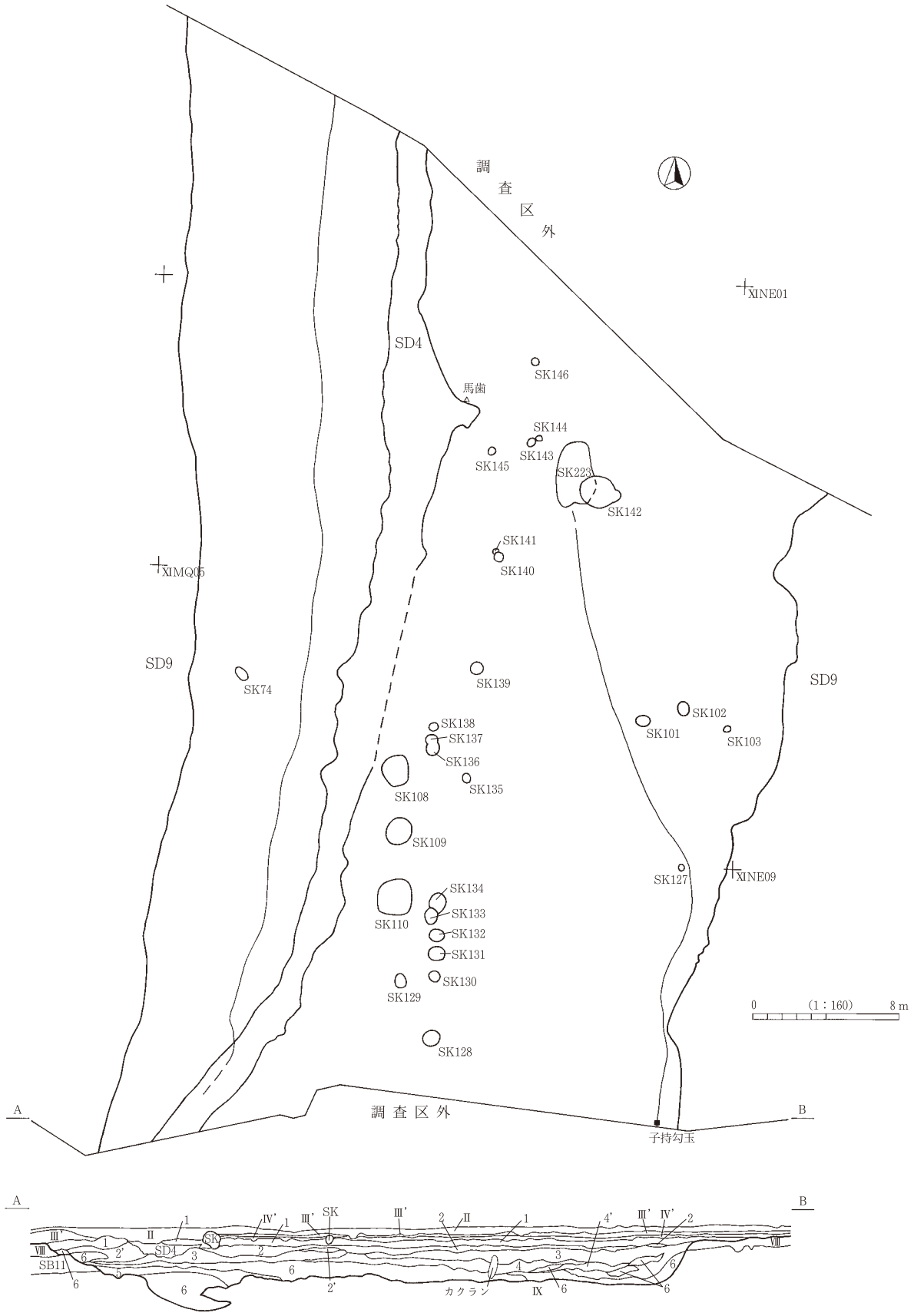
SK580　1　10YR4/4　褐色土　φ１～50㎜の暗褐色土多い。
2　10YR3/1　黒褐色土　φ１～50㎜の褐色土少量。

第120図　SK250・580・643



SK513　1　10YR4/1　褐灰色土　φ１～２㎜の暗褐色土・φ１～10㎜の炭化物少量。
SK515　1　10YR4/1　褐灰色土　φ１～５㎜の暗褐色土やや多い。φ１～５㎜の炭化物少量。
SK621　1　10YR2/3　黒褐色砂　φ１～５㎜以下の褐灰色土少量。
SK622　1　10YR2/3　黒褐色砂　φ１～10㎜の褐灰色土やや多い。φ１～８㎜の炭化物少量。

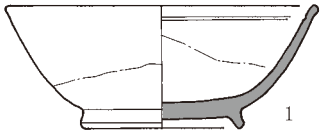
第121図　SK513・515・621・622



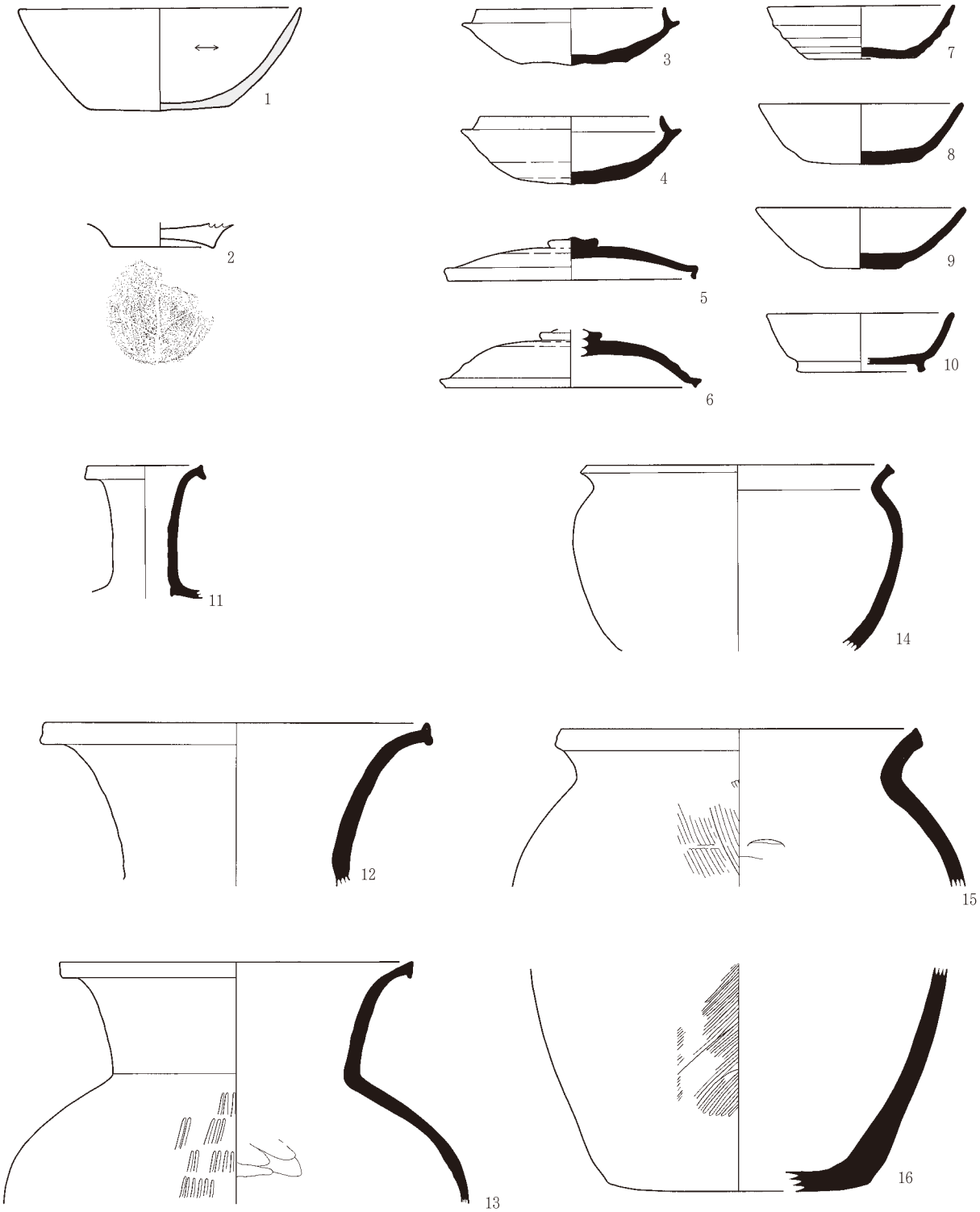
SD9　1　10YR4/3　にぶい黄褐色土　炭化物極少量。φ50㎜位の円礫少量。
2　7.5YR4/6　褐色砂　細かい礫少量。
2’　7.5YR4/6　褐色砂　２層より荒砂・細かい礫多い。
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂　灰黄褐色土混入。φ100㎜位の円礫少量。
4　10YR4/3　にぶい黄褐色砂　シルト質。
4’　10YR4/3　にぶい黄褐色砂　４層よりしまりゆるい。
5　10YR3/4　暗褐色砂　シルト質。
6　砂礫層。層下部は鉄分が厚く沈着。

第122図　SD4・9遺構図

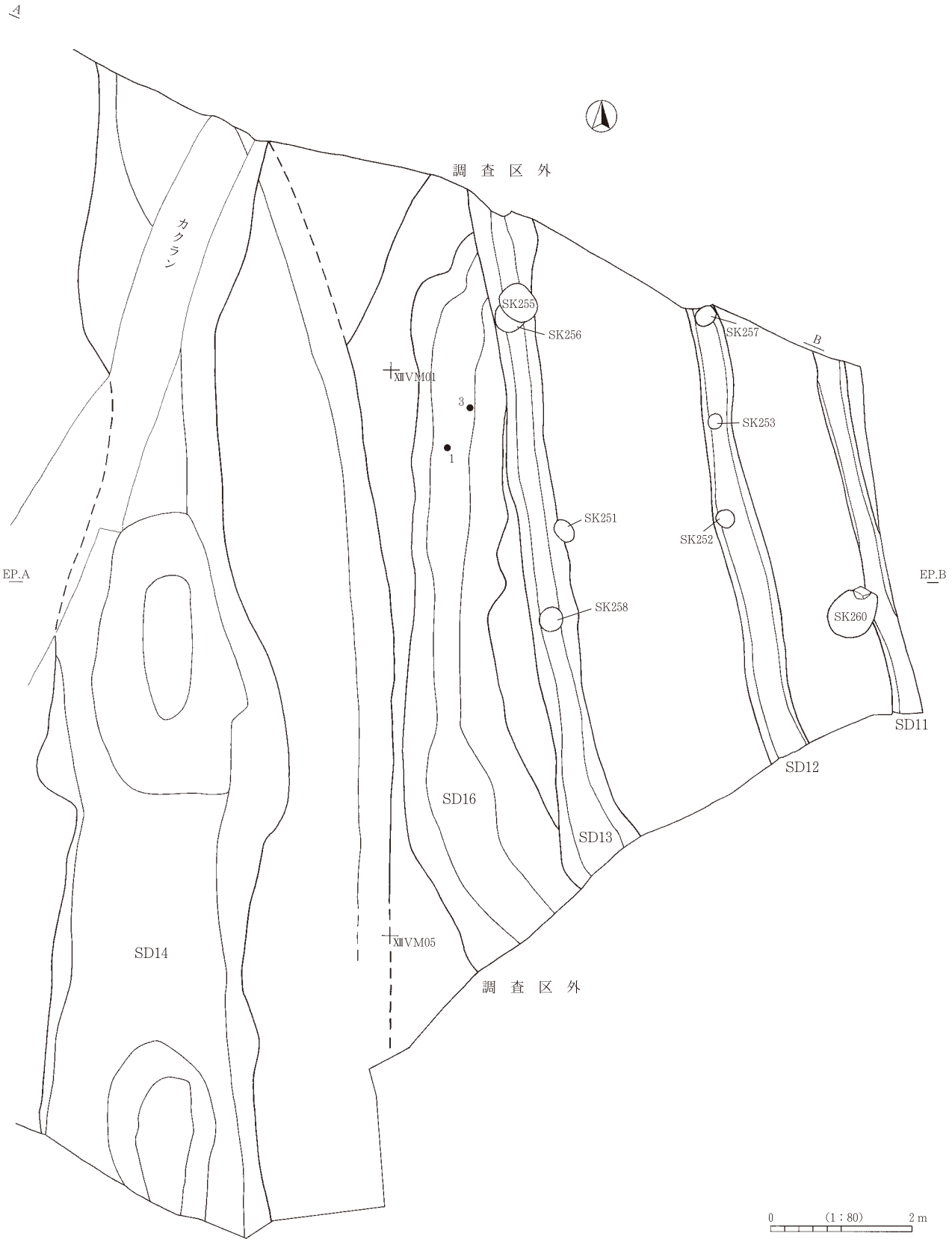
SD4



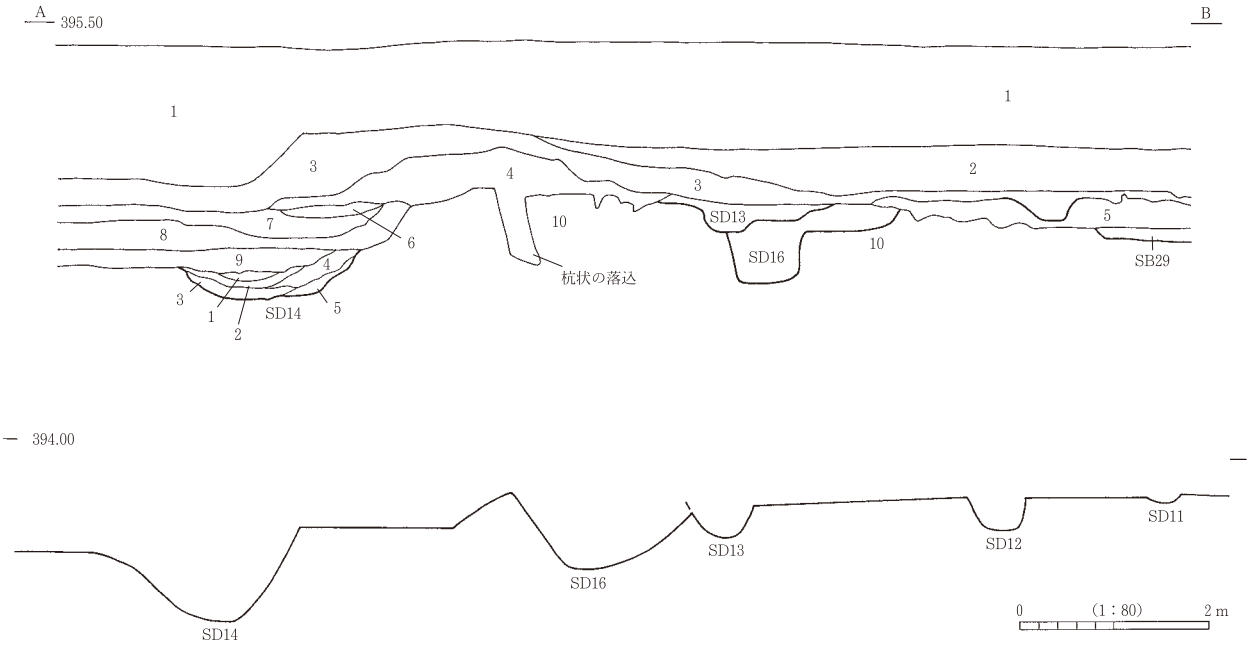
SD9



第123図　SD4・9遺物



第124図　SD11・12・13・14・16遺構図１

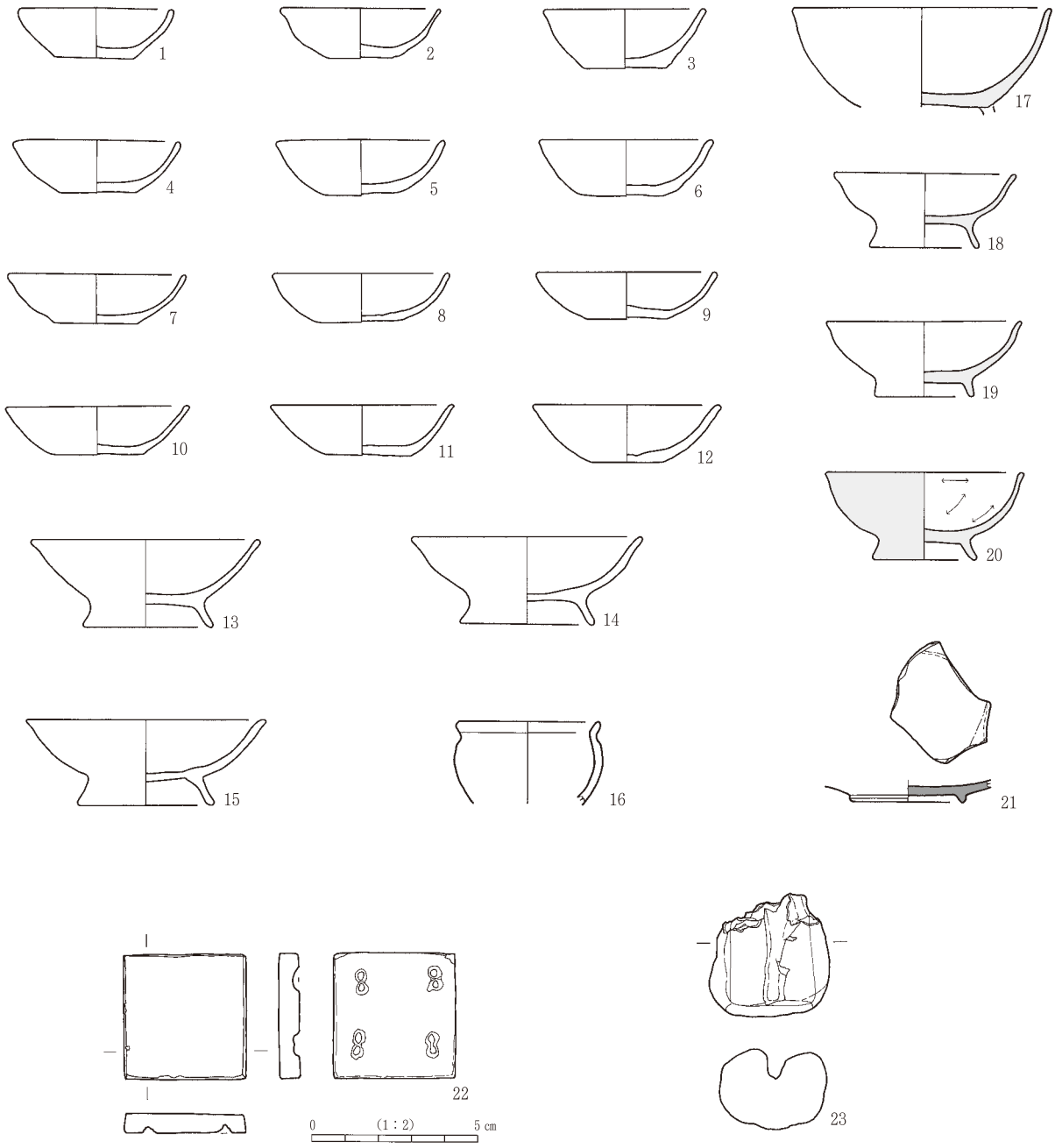


SD11～14・16	1		現・旧耕作土（Ⅰ層）。
	2		旧耕作土（Ⅰ層）。
	3	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の明褐色土やや多い。
	4	10YR4/4	褐色土	砂質。明褐色粘土やや多い。
	5	10YR3/2	黒褐色土	φ１～10㎜の褐色砂ブロック少量。（Ⅲ'層に相当）。
	6	10YR6/1	褐灰色土	
	7	10YR7/3	にぶい黄橙色粘土	層下部に細礫混入。
	8	10YR6/3	にぶい黄橙色粘土	水田層。
	9	10YR3/2	黒褐色土	
	10	10YR4/4	褐色砂	Ⅸ層。

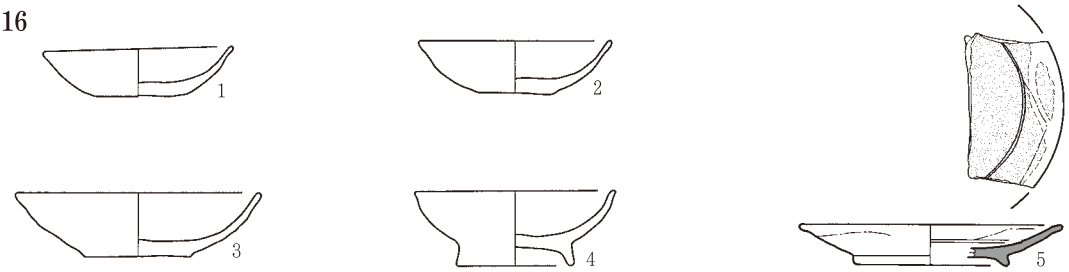
SD14	1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～10㎜の炭化物少量。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	φ１～５㎜の炭化物少量。
	3			炭層。砂混入。
	4	10YR4/4	褐色土	φ１～５㎜の炭化物少量。
	5	10YR4/4	褐色土	砂質。

第125図　SD11・12・13・14・16遺構図２

SD14



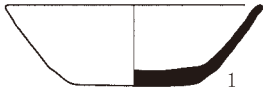
SD16



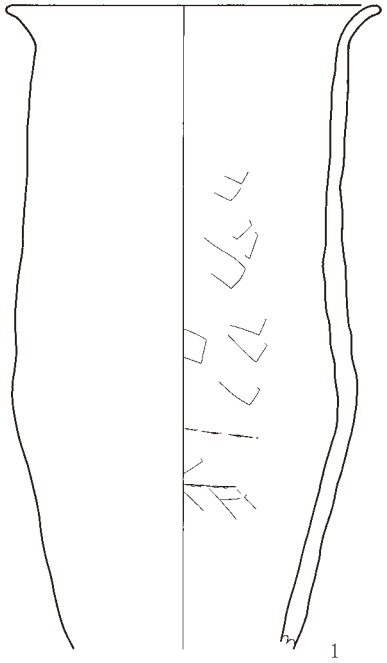
第126図　SD14・16遺物

SK864

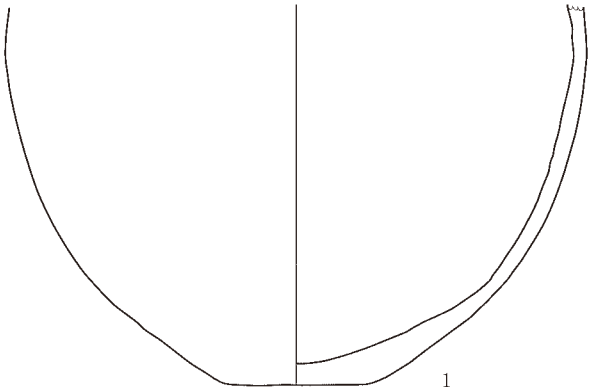
SK188



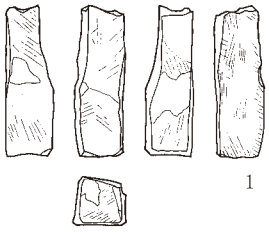
SK243



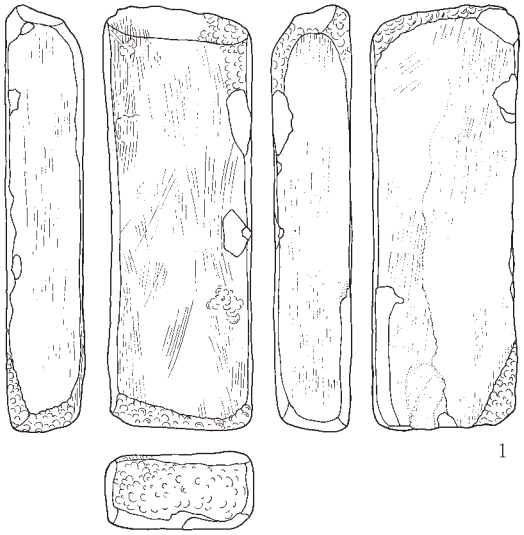
SK10



SK341

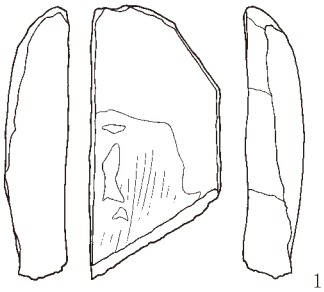


SK960

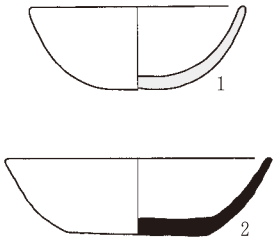


SK346

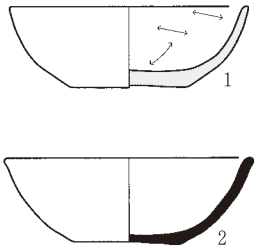
SK312



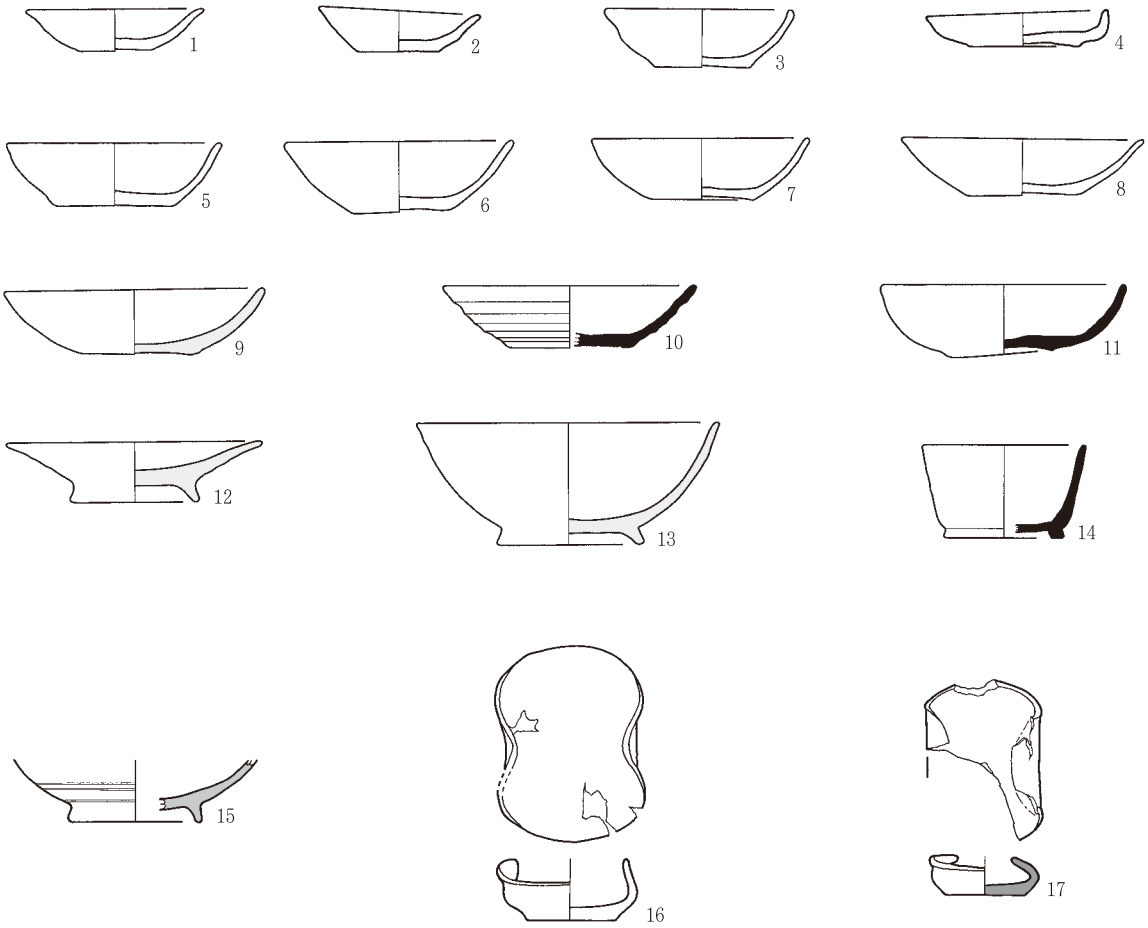
SD8



SD20

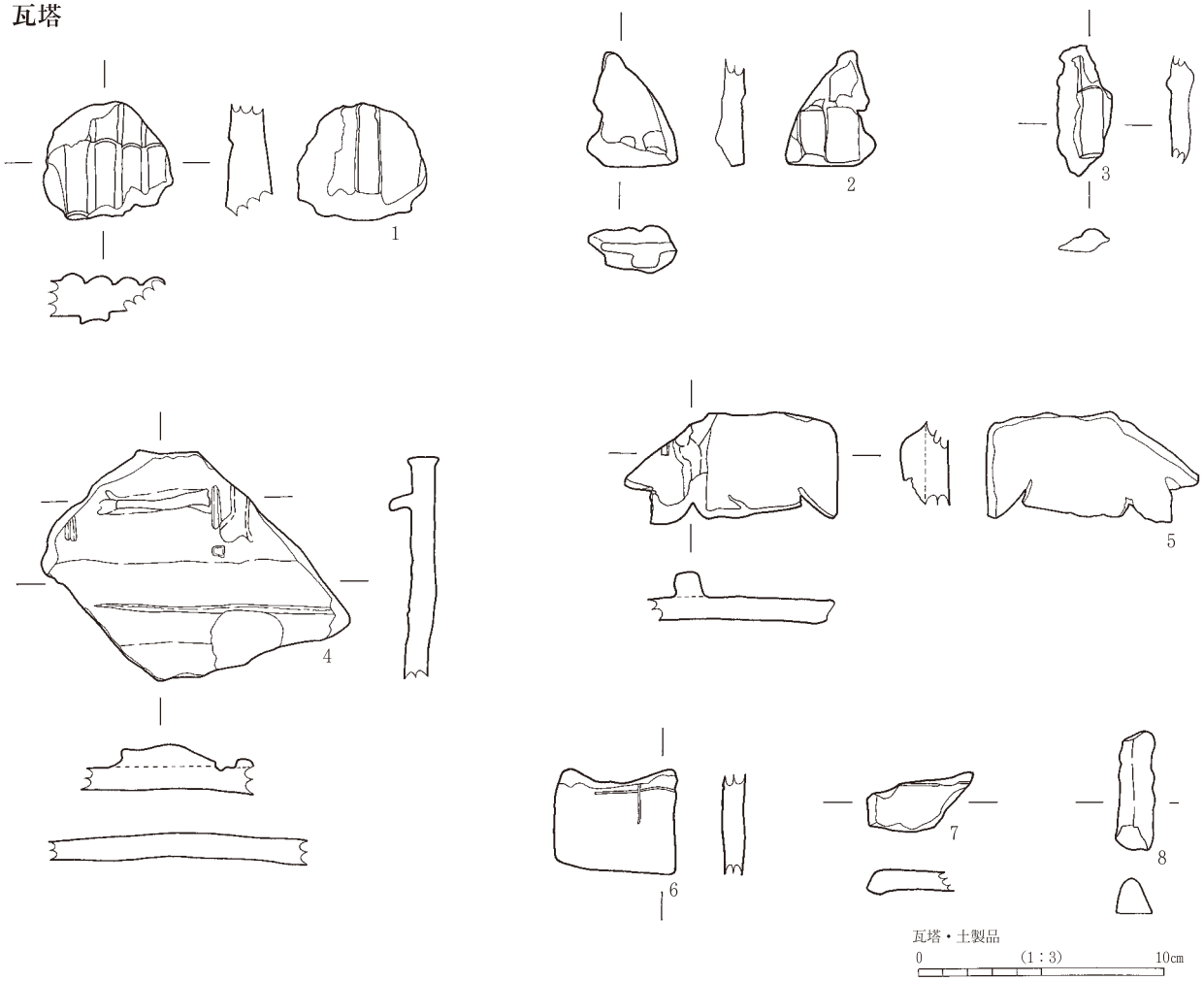


第127図　SK・SD遺物

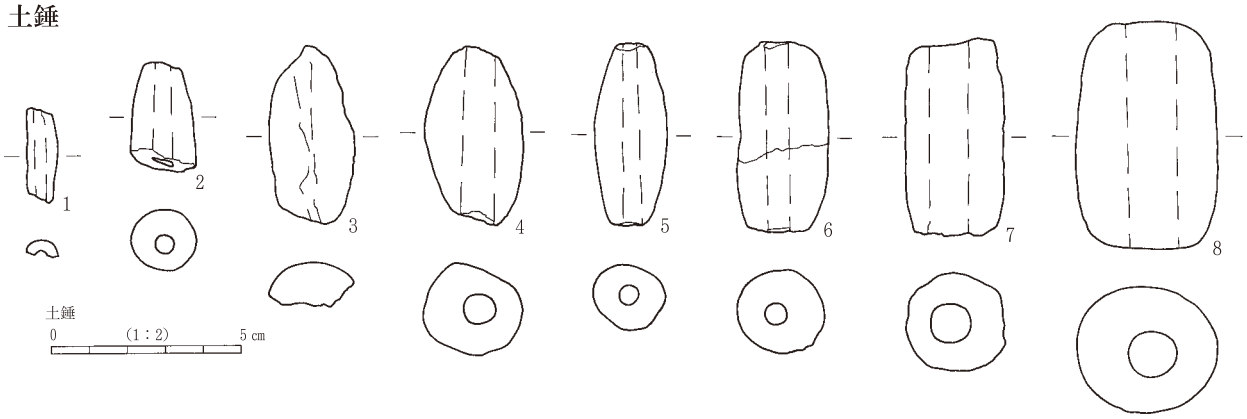


第128図　遺構外出土遺物

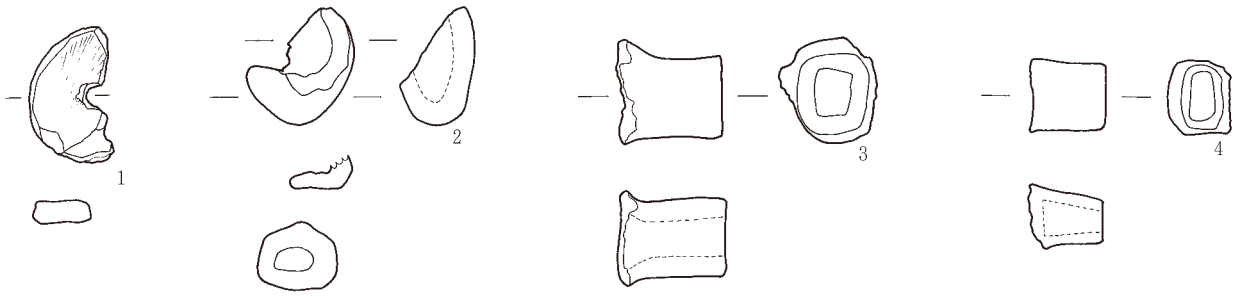
瓦塔



土錘

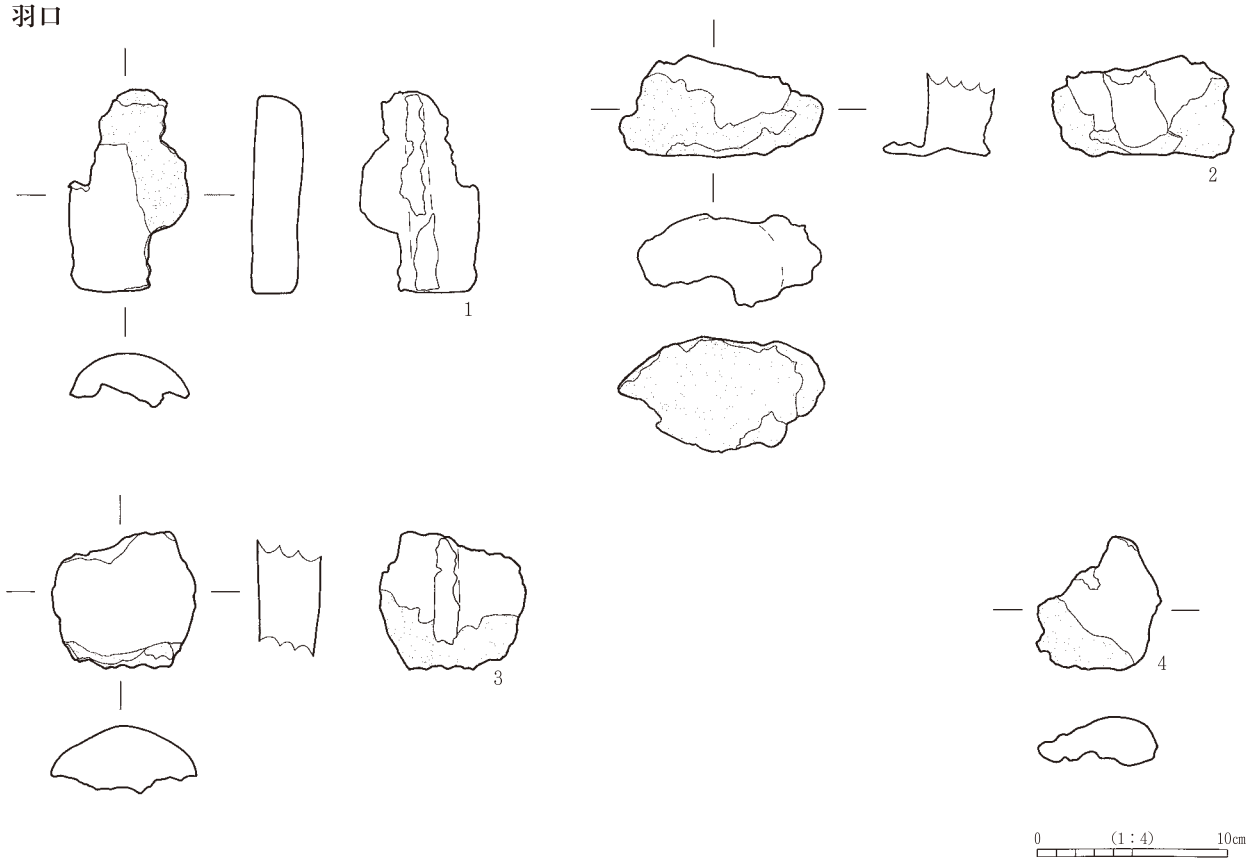


土製品

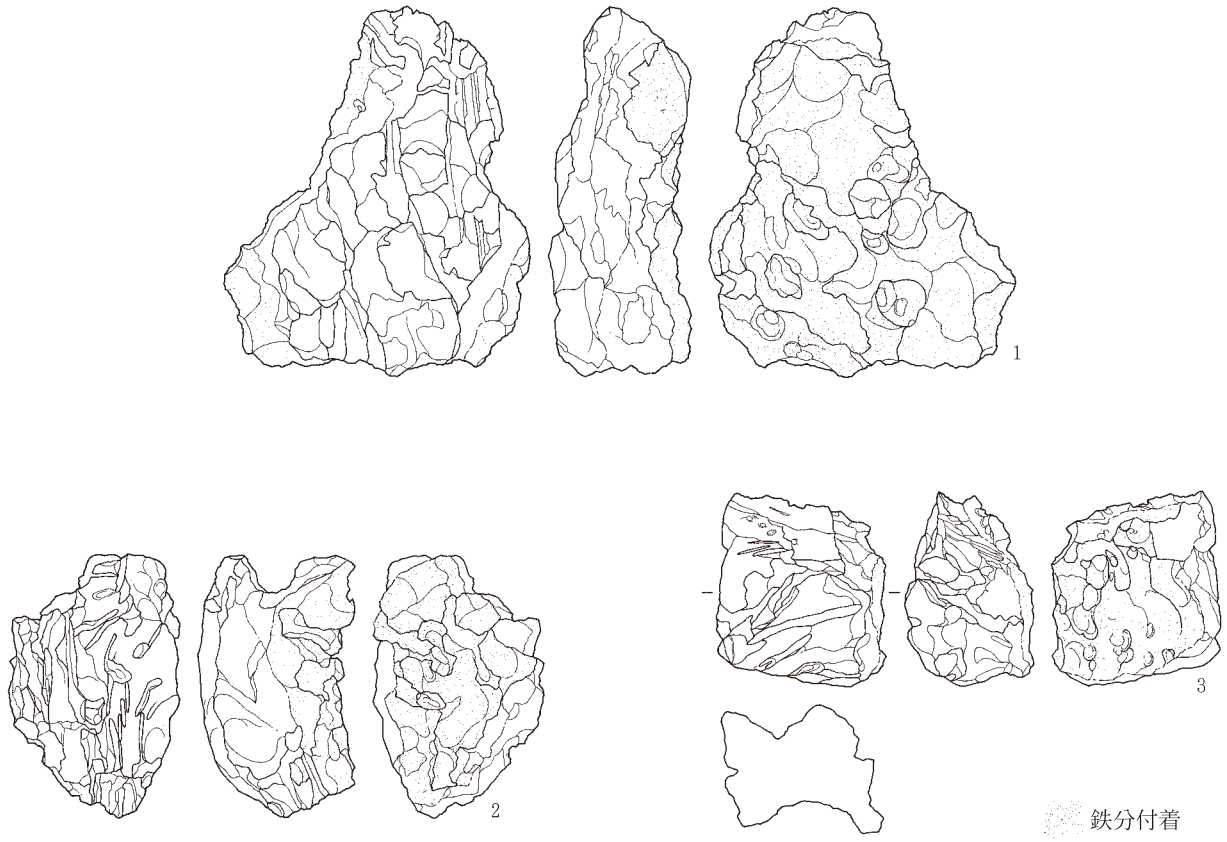


第129図　瓦塔・土製品

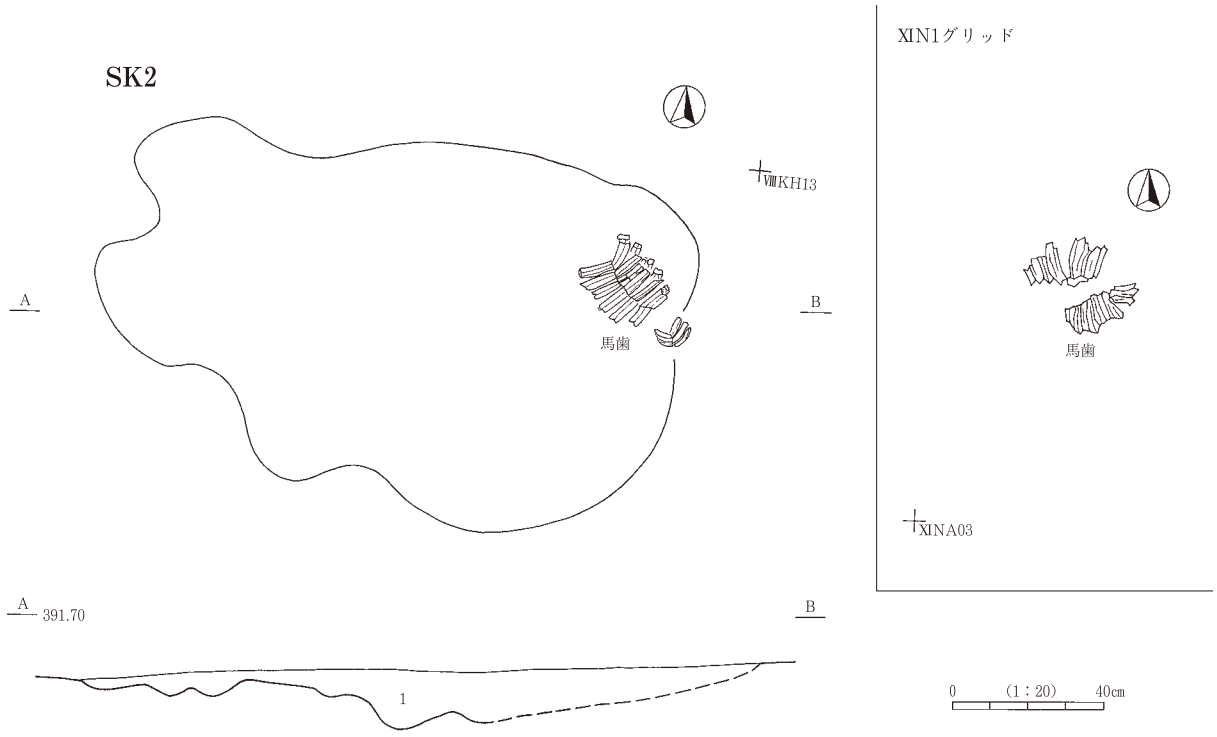
羽口



炉壁



第130図　製鉄関係



SK2　1　10YR4/2　灰黄褐色土　にぶい黄褐色砂やや多い。

第131図　馬歯出土状況

第４章　まとめ

第１節　出土骨に関する分析

１　上五明条里水田址出土の人骨について

京都大学名誉教授　茂原信生

（１）はじめに

上五明条里水田址は、長野県埴科郡坂城町にある遺跡で、県道長野上田線力石バイパス工事の際に長野県埋蔵文化財センターによって平成18年から21年にかけて発掘された。この遺跡は千曲川左岸にある遺跡で、今回報告するのはその際に出土した人骨に関するものである。人骨の所属年代は平安時代（10世紀後半）とされている。保存状態は悪く、どれもおもに歯が残っているだけである。歯の計測法は藤田（1949）にしたがった。

（２）出土人骨の形態と保存状態

①SK4出土人骨（歯）

平安時代（10世紀後半）と思われる木棺墓から出土している。１体分があったと思われるが、残っていたのは副葬品を除くと歯だけである。どの歯も歯根は失われており、歯冠のみで破損しているものもある。

咬耗はさほど進んでいない。下顎右第１大臼歯は頬側の咬頭がやや摩耗して小さく象牙質が露出している程度であり、左第２大臼歯は象牙質の露出はまだ見られない。また、第２大臼歯には遠心に隣接面摩耗がみられないので、第３大臼歯が未萌出であったと思われる。現代人の年齢に照らしてみると18歳前後ということになる。歯の大きさは、現代日本人女性の計測値（權田，1959）よりもかなり小さく、歯が小さいといわれている縄文時代の女性（Matsumura，1989）よりも小さい。10代後半の女性である可能性が高い。

②SK643出土の人骨（歯）

平安時代と思われる土坑から出土している。残っているのは歯冠だけである。計測可能なものは上顎歯で、上顎左第１切歯、第２切歯、右犬歯および右第１小臼歯である。どの歯も全く咬耗はない。切歯、犬歯の歯頚部付近にはエナメル質減形成が認められる。誕生前に何らかのストレスを受けていたものと思われるが原因は不明である。

歯冠の石灰化の状態から判断して、６歳前後と思われる。歯列は乳歯列であったろう。歯の大きさは、上顎中切歯は現代男性の平均値よりも大きいが、それ以外は現代日本人女性の平均値（権田，1959）とほぼ同大かやや小さめである。性別は不明である。

③SB7出土の人骨（歯）

平安時代の住居跡から出土している。数本の歯の破片が含まれる。歯冠のみである。下顎左第１大臼歯はごく軽度の摩耗であり、象牙質は露出していない。他に下顎右第１および第２乳臼歯の歯冠も出土しているので、混合歯列であった可能性がある。乳歯の咬耗などを考えると８歳前後と推測される。下顎第１大臼歯の大きさは現代日本人男性の平均値（權田，1959）を大きく上回っているので、男性の可能性が高い。

④SK250出土の人骨（歯）

平安時代と思われる土坑から出土している。いずれの歯も細片化している。咬合面の残るものもあり、咬耗はしている。歯は小さめの印象であるが、性別は不明である。歯は永久歯で、ある程度の年齢には達していたと思われるが、詳細は不明である。

（３）まとめ

上五明条里水田址出土の人骨は、保存状態が悪く歯だけが調査可能であった。乳歯との混合歯列である若い男性１体、10代と思われる女性１体、性別不明のものが２体であった。

この人骨は坂城町教育委員会に保管されている。

参考文献

藤田恒太郎（1949）　歯の計測規準について。人類学雑誌, 61；1-6.

權田和良　（1959）　歯の大きさの性差について。人類学雑誌, 43(1)；151-163.

Matsumura, H.（1989）　Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population. J. Anthrop. Soc. Nippon, 97(4)；493-512.

第３表　上五明条里水田址出土の人の上顎歯の計測値と比較資料（m-dは近遠心径、b-lは頰舌径）

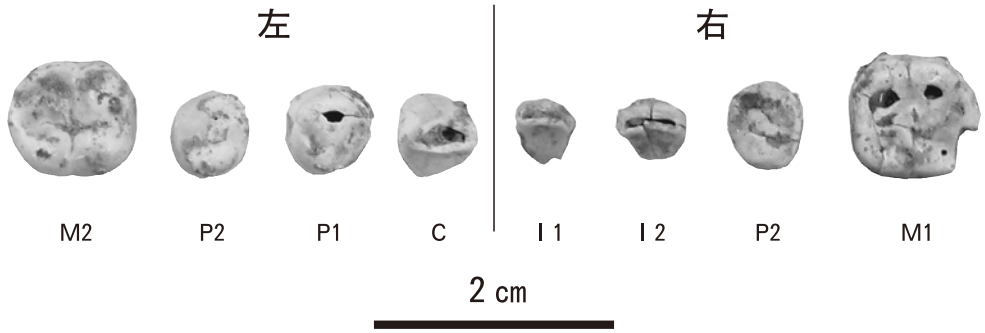
遺跡名	No.	性別	I 1 m-d	I 1 b-l	I 2 m-d	I 2 b-l	C m-d	C b-l	P1 m-d	P1 b-l	P2 m-d	P2 b-l	M 1 m-d	M 1 b-l	M 2 m-d	M 2 b-l	M 3 m-d	M 3 b-l
上五明条里水田址	SK643		9.0		7.1	6.4	7.6	7.2	6.5	8.1								
現代日本人		♂	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
（權田，1959）		♀	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50
関東地方縄文人		♂	8.46	7.41	7.18	6.83	7.64	8.19	6.97	9.40	6.52	9.17	10.16	11.71	9.22	11.59	8.23	10.88
（Matsumura，1989）		♀	8.25	7.08	6.70	6.41	7.40	7.89	6.77	9.16	6.24	8.88	9.92	11.40	8.94	11.20	8.09	10.43

（単位は㎜）

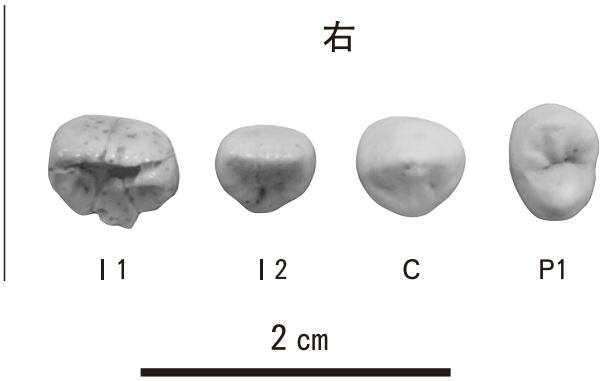
第４表　上五明条里水田址出土の人の下顎歯の計測値と比較資料

	No.		I 1 m-d	I 1 b-l	I 2 m-d	I 2 b-l	C m-d	C b-l	P1 m-d	P1 b-l	P2 m-d	P2 b-l	M 1 m-d	M 1 b-l	M 2 m-d	M 2 b-l	M 3 m-d	M 3 b-l
上五明条里水田址	SK4	左					6.4	7.1	6.9	8.0	6.5	8.0			10.7	9.7		
		右			6.0						6.6	7.8	11.0	10.3				
	SB7	左											12.6	10.8				
現代日本人		♂	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
（權田，1959）		♀	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02
関東地方縄文人		♂	5.28	5.94	5.78	6.27	6.85	7.66	6.93	7.95	6.98	8.40	11.59	11.19	10.94	10.51	10.47	9.94
（Matsumura，1989）		♀	5.19	5.70	5.69	6.19	6.58	7.33	6.71	7.74	6.76	8.24	11.26	11.01	10.65	10.24	10.15	9.65

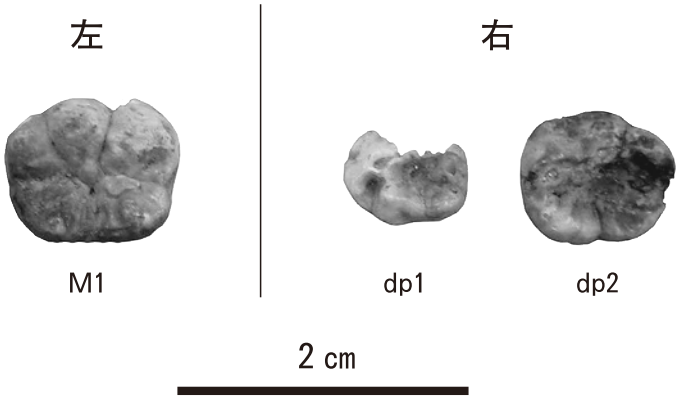
（単位は㎜）



第132図　SK4出土の下顎歯
縦棒は左右を区別するものである（以下同じ）



第133図　SK643出土の上顎歯



第134図　SB7出土の下顎歯
右側のものは乳歯である。

2　上五明条里水田址出土の馬歯について

京都大学名誉教授　茂原信生
総合研究大学院大学　本郷一美

（１）はじめに

上五明条里水田址は、長野県埴科郡坂城町にある遺跡で、県道長野上田線力石バイパス工事の際に長野県埋蔵文化財センターによって平成18年から21年にかけて発掘された。この遺跡は千曲川左岸にある遺跡で、今回報告するのはその際に出土した馬歯に関するものである。この馬歯の所属年代は平安時代（10世紀後半）とされている。歯そのものの保存状態はよいが、割れていたり、セメント質が脱落しているものがある。

歯の計測はDriesch（1976）にしたがったが、象牙質が剥がれているものが多く、計測はエナメル質でおこなった。

（２）歯の特徴とウマの大きさ

①SK2出土の馬歯

平安時代の水田を切る土坑内より出土しており、馬歯は平安時代と考えられている。

右を上にして埋葬されていた。１体分の馬歯が出土しており、骨が侵食によって消失した事による土圧で左右が近接しているが、埋葬された状態で切歯から第３大臼歯までが出土している。歯の保存状態はよいにもかかわらず、犬歯が残っていないのでこの個体はメスの可能性が高い。いずれの歯も咬耗はさほど進んでおらず、第３大臼歯の咬耗もわずかなので、比較的若い個体と考えられる。咬合面は平坦で、特に異常な咬耗はない。

臼歯列長を各臼歯の近遠心径を足した値として求めた結果、このウマは、上顎臼歯長が17.1㎝、下顎臼歯長が17.2㎝であった。歯の大きさは、摩耗などにより年令によって大きく変化するため、大きさだけから判断するのは危険性を伴うが、咬耗を考慮すると中型馬程度ではないかと考えられる。

②XⅠN1グリッド出土の馬歯

古墳時代から平安時代の自然流路の河岸付近より出土しており、馬歯は平安時代と考えられている。

右を下にして埋葬されていた。骨が侵食されて土圧で左右が近接しているが、埋葬された時の位置関係をほぼ保った状態で、臼歯部が出土している。SK2遺構ほどではないが保存状態は比較的よく、やはり犬歯は出土していないのでメスの可能性がある。咬合面は平坦で、特に異常な咬耗はない。

下顎の臼歯列長は16.6㎝でSK2よりやや小さいが、小型のトカラウマよりも大きく、やはり中型馬程度であったと思われる。

（３）まとめ

上五明条里水田址から出土したウマは２頭で、犬歯がないことからどちらもメスと推測される。歯はどちらもさほど咬耗は進んでいない比較的若い個体で、中型馬程度の大きさと推測される。

この標本は坂城町教育委員会に保管される予定である。

参考文献

Driesch, A. von den（1976）：A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1：1-137.

林田重幸（1972）：中世馬――多々良遺跡出土の馬歯を中心に。「多々良遺跡調査報告書」、福岡市教育委員会。（芝田2008より引用）。

林田重幸（1978）：日本在来馬の系統に関する研究。日本中央競馬会、Pp.180。

宮崎重雄（1985）：野火付遺跡出土の馬骨について。「野火付遺跡」、御代田町教育委員会、付編３-５。

宮崎重雄（1986）：長野県佐久市池畑遺跡出土の馬と牛の骨について。佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第２集「池畑・西御堂」、佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター；50-61。

大江正直（1982）：日高遺跡出土の馬歯・馬骨。関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第５集；398-417

芝田英行（2008）：鎌倉の馬の骨。どうぶつ社、Pp.119。

第5表　上五明条里水田址出土のウマの上顎歯の計測値と比較資料（m-dは近遠心、b-lは頰舌径）

遺跡		上五明条里水田址（長野県）		野火付遺跡（長野県）		池畑遺跡（長野県）			サラブレッド	
時代		平安		平安		奈良～平安			現生	
著者				宮崎（1985）		宮崎（1986）			大江（1982）	
個体番号		SK2	N1グリッド	2号	4号	1号馬	2号馬	4号馬		
性別		♀？	♀？	不明4歳	不明10歳	不明	不明	不明	♀3歳	♂3.5歳
P2	m-d	36.0	33.9	36.4	37.0	35.8		34.0	37.2	40.0
	b-l	23.4	21.6	24.6	24.2	21.8		22.7	25.6	26.7
P3	m-d	30.5	26.5	28.2	28.6	29.5	28.6	27.1	31.5	33.1
	b-l	26.5	24.6	25.0	25.7	23.4	26.3	24.7	27.6	29.1
P4	m-d	28.2	25.8	26.6	27.3		26	24.2	30.7	31.9
	b-l	25.3	24.1	25.0	26.2		26.2	25.4	26.9	28.5
M1	m-d	25.1	25.0	24.0	23.8	24.3	23.9	21.2	30.1	39.1
	b-l	25.5	23.6	24.6	24.3	21.8	26.3	25.3	28.1	28.8
M2	m-d	25.8		23.8	23.7	26.7	24.5	22.2	30.8	31.7
	b-l	23.4		22.8	23.6	22.3	25.6	23.1	24.8	26.7
M3	m-d	25.1		25.6	27.0	29.3	29.3	25.4	27.2	28.3
	b-l	20.2		22.4	21.4	25.0	25.4	20.5	26.8	23.6
体高				中型	中型		中型		大型	大型
臼歯列長（和）		17.1		16.5	16.7			15.4	18.8	20.4

（単位㎜）

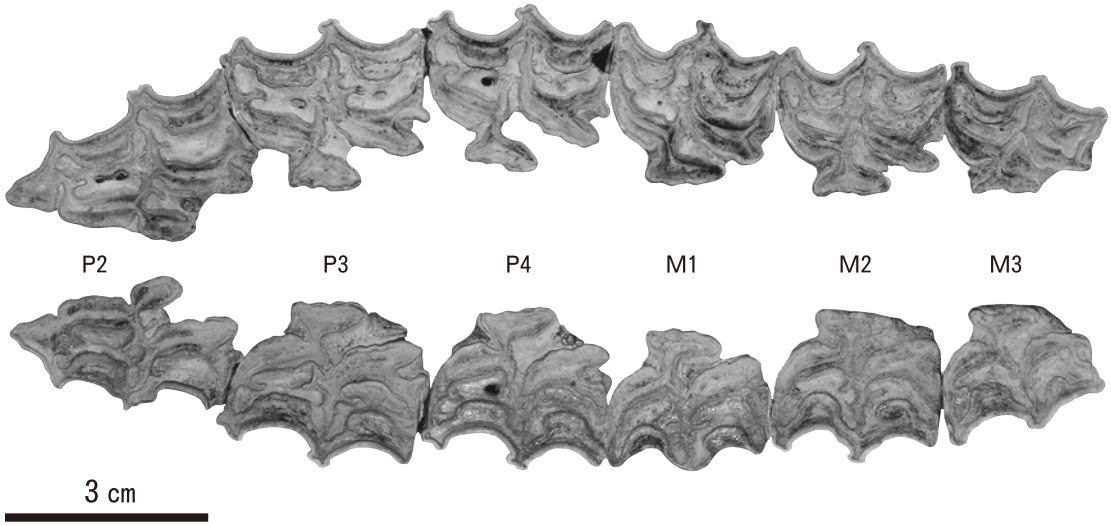
歯冠エナメル質を計測した。 左側を計測し、ない場合は右側を測った。

第6表　上五明条里水田址出土のウマの下顎歯の計測値と比較資料

遺跡		上五明条里水田址（長野県）		野火付遺跡（長野県）					トカラ馬				御崎馬（宮崎県）		サラブレッド
時代				平安時代				時代不明	現生				現生		現生
著者				宮崎（1985）					林田（1973）				林田（1978）		
個体番号		SK2	N1グリッド	1号馬	2号馬	3号馬	4号	6号馬	No.1	No.2	No.3	No.4			
性別		♀？	♀？	不明11歳	不明4歳	不明20歳以上	不明10歳	不明12歳	♀5歳	♀8歳	♀15歳	♂15歳	（25歳？）	（3.5歳）	不明
P2	m-d	32.0	31.6	31.4	33.7	31.0	32.4	33.6	31.0	26.5	26.0	27.5	30.0	33.0	33.0
	b-l	13.8	13.1	—	15.0	14.4	14.3	17.9	16.0	15.0	14.0	15.0	15.0	16.4	
P3	m-d	29.8	27.8	26.0	28.8	25.7	27.6	28.6	27.0	24.0	22.0	23.5	24.0	30.8	29.0
	b-l	15.1	14.4	—	17.7	16.4	16.1	19.3	18.5	16.0	14.0	16.0	15.0	19.3	
P4	m-d	29.2	26.2	24.0	26.2	25.0	25.6	27.5	25.0	23.2	21.5	23.0	24.0	29.5	28.4
	b-l	14.9	13.8	—	16.5	16.3	15.2	19.2	17.5	15.0	15.0	16.5	15.0	19.0	
M1	m-d	25.8	25.8	21.7	26.0	22.0	26.3	24.4	24.0	20.5	20.5	20.0	21.0	27.0	25.5
	b-l	13.2	12.9	—	15.7	16.3	13.8	17.2	17.0	14.0	15.0	16.0	14.0	16.0	
M2	m-d	26.2	25.8	22.2	26.2	23.6	24.4	23.1	25.0	21.4	22.0	22.0	22.0	31.0	27.4
	b-l	12.5	12.2	16.6	13.5	14.0	14.4	17.0	14.5	13.0	14.0	14.0	13.0	16.8	
M3	m-d	29.1	28.5	31.7	28.6	36.6	29.7	31.0	26.0	26.0	27.0	27.0	29.5		35.2
	b-l	11.7	11.0	13.7	12.5	12.7	13.1	15.1	13.5	13.0	12.0	13.0	12.0		
				中型	中型	中型	中型	中型	小型	小型	小型	小型	中型	中型	大型
臼歯列長（和）		17.2	16.6	15.7	17.0	16.4	16.6	16.8	15.8	14.2	13.9	14.3	15.1	15.1	17.9

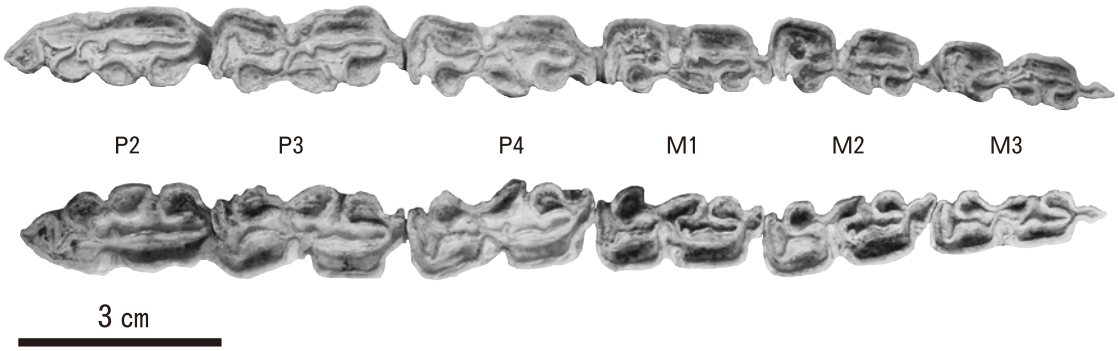
（単位㎜）

左側を計測し、左側がない場合は右側を測った。



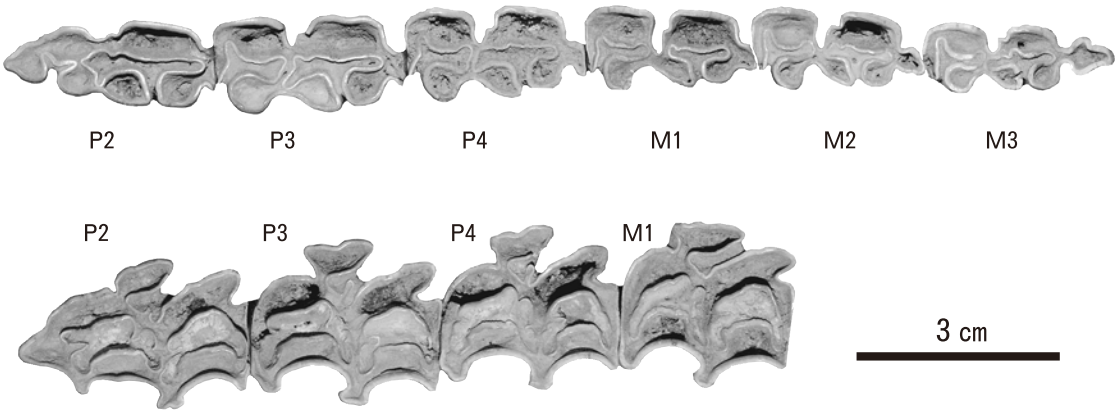
第135図　SK2出土のウマの上顎臼歯

（上）上顎左側臼歯咬合面　　（下）上顎右側臼歯咬合面。左が前方（近心）



第136図　SK2出土のウマの下顎臼歯

（上）下顎右側臼歯咬合面　　（下）下顎左側臼歯咬合面。左が前方（近心）



第137図　XIN1グリッド出土のウマの右側臼歯

（上）下顎右側臼歯咬合面　　（下）上顎右側臼歯咬合面。左が前方（近心）

第２節 調査の成果

今回、千曲川左岸の沖積地に立置する上五明条里水田址で全長約650ｍにわたる調査を行い、弥生時代から中世にいたる土地に刻まれた歴史を垣間見ることができた。。

弥生時代では、後期箱清水式期の竪穴式住居跡が②区で１軒検出された。これ以外の遺構は検出されていないが、土器片は微高地の③区を中心に少量出土している。隣接する千曲市の力石条里遺跡群では、弥生時代の遺構・遺物が多く見つかっており関連が考えられる。

古墳時代になると５世紀後半から③区に人々が住み始め集落を形成するが、一旦途絶えて、６世紀後半～７世紀初めに③・④区で再び集落が営まれる。坂城町教育委員会が隣接地で実施した調査でも、古墳時代の遺構が検出されており、集落の規模はさらに広がる可能性がある。また、集落から離れた①区の溝跡から埴輪片が出土しており、近隣に埴輪を伴う未周知の古墳の存在が考えられる。出土した馬形埴輪は、その特徴から６世紀代と考えられる。したがって、埴輪を伴う後期古墳がこの地域に存在したことはほぼ確実である。今のところ、「坂城広谷」と称される地域や上田盆地を含めても、明確に埴輪を伴う古墳は確認されていない。本遺跡出土の馬形埴輪や円筒埴輪は、千曲川流域における６世紀代の社会構造を考える上で革新的な資料と考えられる。その後調査区内では、９世紀まで人の住んでいる痕跡は確認できない。

９世紀になると、微高地に小規模な集落と低地に水田が営まれ、地形にあった土地利用の様子がうかがえる。その後洪水に襲われ、低地にあった水田は砂に覆われるが復旧は行われなかったようである。10世紀には、かつて水田であった②区と微高地であった④区周辺に集落が営まれる。しかし、この時期を最後に調査区からは、人の住んでいた痕跡は途絶える。以後は土坑や陶磁器片がわずかに確認されるにとどまり、水田に由来すると考えられる土層の堆積が厚く続き、現代に至っている。

今回の調査では鉄鐸が２遺構から出土し、良好な資料を得ることができた。鉄鐸は、10世紀後半のSK4（木棺墓）と、11世紀初めのSB32（竪穴住居跡）から複数個がまとまった状態で出土した。神社に納められている伝世品は複数個のものが多く、今回の出土も、鉄鐸は複数個で１単位を成す可能性を示していると思われる。SK4では墓の副葬品であること、埋土の状況から他からの混入は考えにくいことから、９点で１単位であったと考えられる。SB32では埋土が浅くSK4より条件はよくないが、鉄鐸６点・銅鈴１点・石製品１点がまとまって出土した。少し離れた地点で出土した鉄鐸１点は、出土状況から時間差はほとんどないと思われるが、１単位に含むかは不明である。10世紀後半と11世紀初めの２時期の遺構から出土していることから、この集落ではある程度の継続性をもって鉄鐸が存在していたと考えられる。また、それぞれのセットを比較してみると、木棺墓出土の鉄鐸は形状が揃っており、住居跡出土の鉄鐸は形状が不揃いである。後者が不揃いなのは、使用の過程で破損品が出れば新たに補充した所産とも考えられ、興味深い。なお、錆取りを実施していないが、鉄鐸の可能性が高い鉄製品が、SB46床面付近からも１点出土している。

また、今回の調査で「猿面硯（えんめんけん）」が、SB62から出土している。当初は転用硯の認識であったが、長野県立歴史館原氏の指摘を受け、奈良文化財研究所森川氏にも実見していただき猿面硯と判断した。猿面硯とは『…主に平面偏楕円形や隅円方形の形状を持ち、磨墨面に円形当具の痕跡を、裏面に平行や格子目状の叩き痕跡を残すものを指す。磨墨面を傾斜させて陸と海とする傾斜硯である。製作方法は大きく二つに分類でき、須恵器の壺、甕の胴部破片を利用してつくられたものと、意識的に製作されたものが存在する。…』（『歴史考古学大辞典』吉川弘文館）とある。今回出土したものは、須恵器甕の胴部破片を利用したものである。約１/２を欠損しているが、隅丸方形を呈すると思われる。磨墨面に円形当具の

痕跡はみられないが、側面は丁寧に磨いてある。これを受けて、当センターで過去に報告した遺跡の出土品のなかに、松原遺跡（長野市）で用途不明と報告していた土製品が猿面硯であることが新たに判明した。

上述した以外にも瓦塔・鍛冶炉をもつ竪穴住居跡など興味深い遺構遺物を確認することができたが、それぞれについての十分な分析ができなかった。特に、古墳時代・平安時代の集落構成やそれぞれの土器編年等、遺跡の根幹となる部分について詳細に言及できなかったことは残念である。ただ、分析に値する資料は提示できたと考えており、今後の地域史解明の一助となれば幸いである。

最後に今回の発掘調査から報告書刊行にあたり、多くのご協力・ご支援・ご指導をいただいた皆様、発掘作業・整理作業に参加していただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

第７表　出土鉄鐸・銅鈴一覧

図版No.	遺物No.	PL No.	No.	遺物種類	出土遺構	長さ（mm）	径（mm）	重さ（g）	備考
119	12	24	17	鉄鐸	SK4	51.5	20.5	5.3	
119	13	24	18	鉄鐸	SK4	60.5	18.0	10.3	
119	14	24	19	鉄鐸	SK4	50.5	21.0	9.2	
119	15	24	14	鉄鐸	SK4	71.0	17.0	12.8	舌付着
119	16	24	15	鉄鐸	SK4	66.0	16.5	9.7	舌付着
119	17	24	16	鉄鐸	SK4	56.5	16.5	10.0	舌付着
119	18	24	13	鉄鐸	SK4	67.0	19.0	15.4	舌付着 木質付着
119	19	24	12	鉄鐸	SK4	56.0	19.0	10.5	木質付着
119	20	24	11	鉄鐸	SK4	54.0	18.0	9.8	
119	21	24	10	鉄鐸	SK4	71.0	7.5	2.4	舌のみ
84	22	25	2	鉄鐸	SB32	41.0	21.0	13.8	
84	23	25	3	鉄鐸	SB32	72.0	37.0	36.5	
84	24	25	4	鉄鐸	SB32	72.0	17.5	21.0	
84	25	25	5	鉄鐸	SB32	45.5	20.0	8.4	
84	26	25	6	鉄鐸	SB32	74.0	21.5	19.6	
84	27	25	7	鉄鐸	SB32	69.5	30.0	7.9	破片
84	28	25	8	鉄鐸	SB32	46.0	8.0	2.0	舌のみ
84	30	－	－	鉄鐸	SB32	77.5	23.5	18.5	
92	12	－	－	鉄鐸	SB46	70.0	23.0	32.1	錆取り未実施
84	21	25	1	銅鈴	SB32	－	30.0	13.3	

参考・引用文献

石川日出志　2009「中野市柳沢遺跡・青銅器埋納坑調査の意義」『信濃』第61巻 第４号
井上春雄ほか　1968『更級埴科地方誌』第１巻　更級埴科地方誌刊行会
上田市教育委員会　1994『岳の鼻遺跡』『上田市文化財調査報告書第50集』
上田市教育委員会　2009「中の沢遺跡・半過古墳群」『上田市文化財調査報告書第105集』
大場磐雄　1933「小野神社蔵鉄鐸」『考古学雑誌』第23巻４号　日本考古学会
神澤昌二郎　1986「鉄鐸の新資料について」『長野県考古学会誌』50　長野県考古学会
上山田町教育委員会　1990『力石条里遺構』
上山田町教育委員会　1991『薬師堂遺跡』
上山田町教育委員会　2002『御屋敷遺跡』
坂城町教育委員会　1995「町内遺跡発掘調査報告書」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第３集』
坂城町教育委員会　1996「上五明条里水田址」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第８集』
坂城町教育委員会　2003「坂城町町内遺跡発掘調査報告書2002」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第22集』
坂城町教育委員会　2004「坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第24集』
坂城町教育委員会　2005「坂城町町内遺跡発掘調査報告書2004」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第25集』
坂城町教育委員会　2007「南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ」『坂城町埋蔵文化財調査報告書第30集』
坂城町誌刊行会　1979『坂城町誌』上巻
塩野入忠雄　1991「第１章 地形」『戸倉町誌』第１巻　戸倉町誌編纂委員会
高崎光司　1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第３号　日本考古学会
千曲市教育委員会　2008「長野県千曲市遺跡分布図」
長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編』全１巻（４）　遺構・遺物
長野県農政部農村整備課　1989『土地分類基本調査　坂城』
長野県埋蔵文化財センター　1989「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－　吉田川西遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』３
長野県埋蔵文化財センター　1998「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書　篠ノ井遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』33
長野県埋蔵文化財センター　1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12－長野市内その10－　榎田遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』37
長野県埋蔵文化財センター　1999「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26－更埴市内その５－　屋代遺跡群　古代１」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』42
長野県埋蔵文化財センター　2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書６-長野市内その４-　松原遺跡　古代中世」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』53
長野県埋蔵文化財センター　2002「緊急地方道路整備A（一）上室賀坂城（停）線埋蔵文化財発掘調査報告書　坂城町内上五明条里水田址」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57
長野県埋蔵文化財センター　2009「一般国道20号（坂室バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-茅野市内-御社宮司遺跡・中村外垣戸遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』88
長野市教育委員会　1993「本村東沖遺跡」『長野市の埋蔵文化財第50集』
楢崎彰一　1979「猿面硯について」『MUSEUN』第341号
奈良文化財研究所　1983「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41
奈良文化財研究所　2003『古代の陶硯をめぐる諸問題』
奈良文化財研究所　2007『平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－』奈良文化財研究所史料第80冊
林和男　1985「信濃の瓦塔」『信濃』信濃史学会
原明芳　1996「信濃の鉄鐸」『信州の人と鉄』信濃毎日新聞社
本間不二男　1931『信濃中部地質誌』信濃教育会小県上田部会
松永満夫　1978「鉄鐸を出土した土壙墓」『信濃』第30巻12号　信濃史学会
三村邦夫　1966「朝日村西洗馬五社神社の鉄鉾と鉄鐸」『信濃』第18巻３号　信濃史学会
宮下健司　2001「流域の遺跡」『千曲川の今昔』国土交通省北陸地方整備局千曲川工事事務所
森嶋稔・米山一政ほか　1978『更級埴科地方誌』第２巻　更級埴科地方誌刊行会
森嶋稔・米山一政ほか　1981『坂城町誌』中巻　坂城町誌刊行会
森嶋稔ほか　1999『戸倉町誌』第２巻上　戸倉町誌編纂委員会
吉川貞夫　1988「誓約の音」『図説　長野県の歴史』河出書房新社
吉川弘文館　2007『歴史考古学大辞典』

SB53

SB53　炉

SB11

SB11　カマド

SB12

SB13・14

SB13　カマド

SB27　カマド

SB20

SB20　カマド

SB26

SB44

SB49・50

SB51

SB69

SB71

SB70

SB70　カマド

SB72

SB76

SB78

SB78　カマド

SB79

SB79　カマド

SB92

SB92　カマド

SB81

SB83

SB85

ST5

ST6

ST20

SD7

SD7

SD10

SD10

SD51

SD51　土層断面

SD49

③ｂ区　古墳調査面

SK4　出土状況

SK4　鉄鐸出土状況

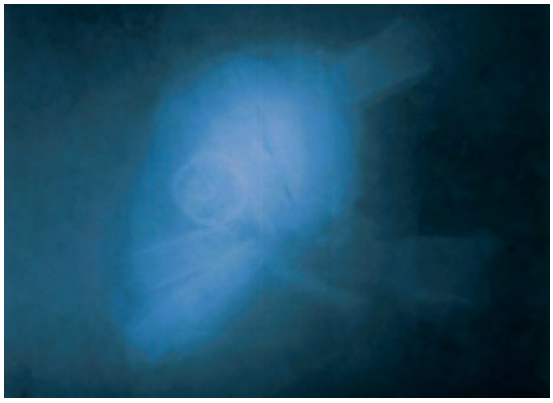
SK4　鉄鐸出土状況　X線写真

SK4　人骨（歯）出土状況

SK4　遺物取上作業

SB32　出土状況

SB32　鉄鐸出土状況



SB32　鉄鐸出土状況　Ｘ線写真

SB32　八稜鏡出土状況

SB32　鉄鐸取上作業

平安時代
前期
水田跡
②ｄ区
遠景

平安時代
前期
水田跡
①区

平安時代
前期
水田跡
②a－c区

平安時代
前期
水田跡
②ｄ区

SL23

SL3　東

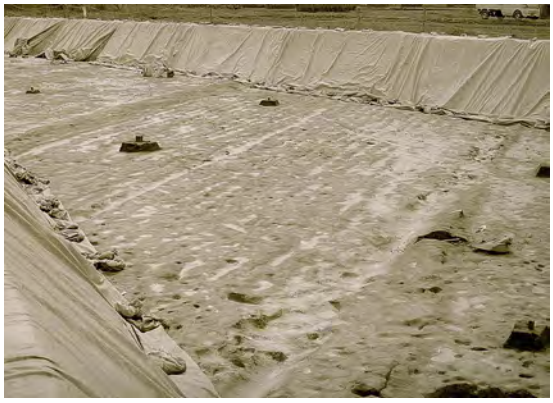
SL5

SL7

SL8　東

SL9

SL10　東


SL12

水田跡　①区

水田跡　①区

南壁土層断面（SC13付近）

SD2　土層断面

SB1

SB5

SB7

SB10

SB18

SB19

SB28

SB28　カマド

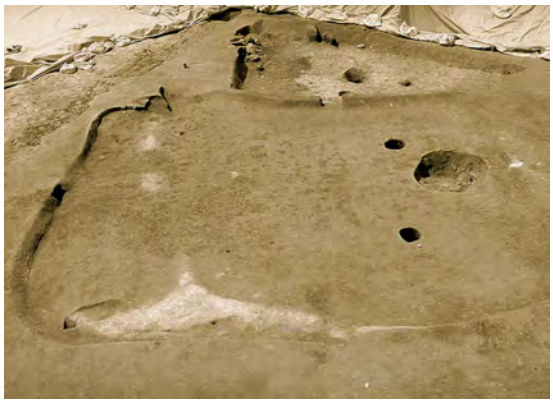
SB30

SB31

SB34

SB34　カマド

SB35


SB36

SB37

SB38・39

SB46

SB46　カマド

SB47

SB55

SB58

SB60

SB61　カマド

SB63

SB65

SB66

SB87

SB88

SB62

SB62　カマド

SB62　鍛冶炉（SF2）

SB62　鍛冶炉（SF2）　土層断面

SB62　ピット2

SB62　ピット3

SB62　ピット4

SB62　作業風景

ST1・14

ST3・4

ST7・13

ST9

ST8・9・10

ST17

ST18

ST19

SD5

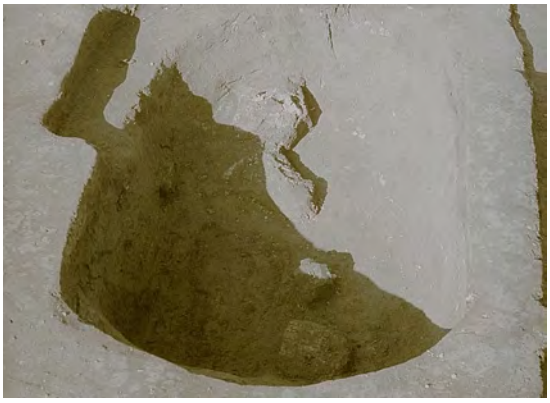
SD9

SD14

SD14

SD15

SK513


SK250

SK560

SQ1

SQ2

SQ3

SQ4

SQ3・4

SQ5

SK2出土馬歯

XIN1グリッド出土馬歯

1(SB53)

1

埴輪
2～4(SD51)
5(SD49)

2

3

4

5

1～11(SB11)

1～3(SB12)
4～6・8・10・11(SB20)
7(SB14)
9(SB43)
14(SD10)
12・13(遺構外)

1～5(SB76)
6～8(SB82)
9～16(SB92)

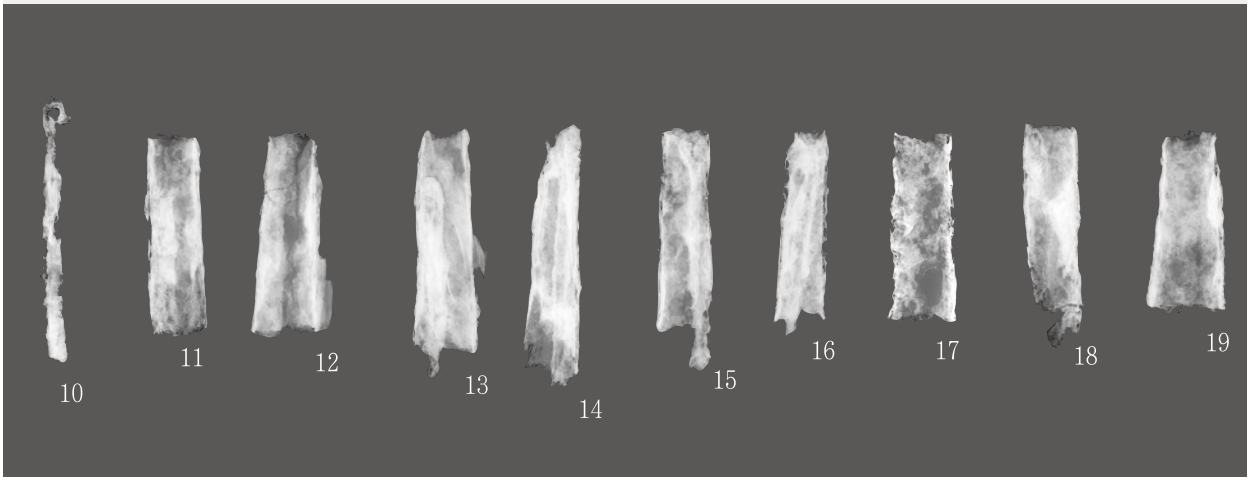
臼玉
1～12(SB27)
13(SB26)
14・15・22
(遺構外)
16•17(SB76)
18•19(SB79)
20(SB21)
21(SB44)
23(SB43)
24•25(SB70)
26•27(SB69)

磨製石斧
28(SD49)
石製模造品
29(SB82•83)
30(SB74)
31(SB91)
32•33(SB11)
子持勾玉
34(SD9)

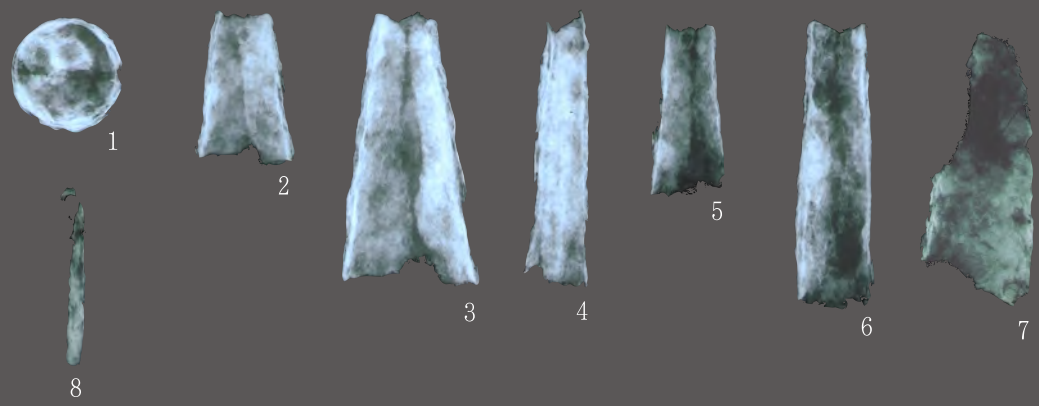
35～37・41
(SD10)
38(SB14)
39(SB43)
40(SB11)

1～19(SK4)

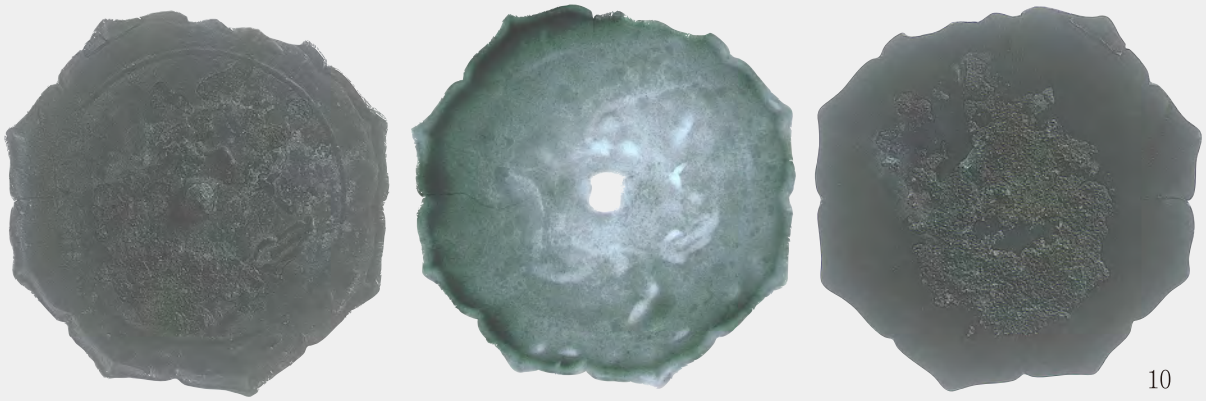
鉄鐸
10～19



1～10(SB32)
銅鈴 1
鉄鐸 2 ～ 8
石製品 9



八稜鏡10



1～13(SB32)
14～16(SB19)
17～23(SB1)
24～29(SB65)

1～21(SB62)

22～25(SD14)

緑釉陶器
26(SB1)
27(SB62)
灰釉陶器
28(SB62)
29・33(SB35)
30(SB30)
31(SB29)
32(SB34)

1(SB63)
2(SB28)
3(SB5)
4(SB31)

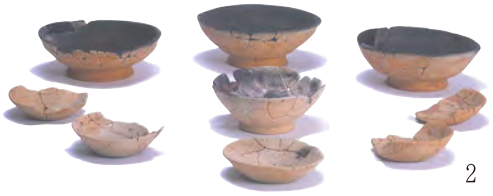
1

2

3

4

1


2

3

4

1(SQ2)
2(SQ3)
3(SQ4)
4(SQ5)

5

猿面硯
5(SB62)

6

7

8

6(SK580)
7(SB58)
8(SQ2)

瓦塔
1～8(SD9)

土錘
9・12(遺構外)
10(SB32)
11(ST17)
13(SD9)
14(SB58・61)
15(SB63)
16(SB62)
土製品
17(SB38)
18(SB36)

1(SK341)
2(SK960)
3(SB35)
4・5(SB40)
6(SB34)
7(SB57)

石帯
8(SD14)

羽口
9(SB65)
10・11(遺構外)
12(SK515)

炉壁
1～3(SK513)

鉄滓
4(SB40)
5(SB41)
6(SB47)
7(SK513)
8(SB62)
9(SK808)
10(SF2)

報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどうながのうえだせんちからいしばいぱすけんせつじぎょうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ２―さかきちょうない―
書　　名	主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書２―坂城町内―
副 書 名	上五明条里水田址
巻　　次	2
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	97
編著者名	上田典男　寺内貴美子
編集機関	（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒388－8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963－4　TEL026－293－5926
発行年月日	2011年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
かみごみょうじょうり 上五明条里 すいでんし 水田址	ながのけんさか 長野県坂 きまちおおあざ 城町大字 うわだいら150 上平150 ほか 他	20521	78	36°27′16″ （世界測地系） 36°27′04″ （旧測地系）	138°09′47″ （世界測地系） 138°09′58″ （旧測地系）	20061026 ～20061215 20070507 ～20071211 20080411 ～20081212 20090403 ～20090722	20,325㎡	主要地方道長野上田線力石バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上五明条里水田址	集落跡 水田跡 墓跡	弥生時代後期	竪穴住居跡１	土器	
		古墳時代後期	竪穴住居跡32、掘立柱建物跡５、溝跡	土器・石器・子持勾玉・埴輪	流路跡から、馬形埴輪や円筒埴輪が出土した。
		平安時代前期	竪穴住居跡10、水田跡、溝跡	土器・石器	洪水砂に覆われた水田跡。
		平安時代後期	竪穴住居跡42、掘立柱建物跡16、墓跡３	土器・石器・八稜鏡・鉄鐸・瓦塔	木棺墓や竪穴住居跡から鉄鐸や八稜鏡が出土した。

要　約

調査区の東側の微高地にあたる地区で、古墳時代後期の集落跡が捉えられた。また、調査地西側の自然流路より、馬形埴輪の破片や円筒埴輪の破片が多数出土した。遺跡周辺では、埴輪が伴う古墳は確認されておらず、未周知の古墳が存在していた可能性も示唆される。調査地中央付近の低地では、洪水により堆積した砂で覆われた、保存状態の良好な平安時代前期の水田跡が確認された。平安時代後期には、水田のあった低地部が洪水で埋没したことにより微高地が広がり、そこに集落域が展開していくことがわかった。集落域からは、竪穴住居跡や掘立柱建物跡・墓跡などが確認された。確認された墓跡には、遺物の保存状態が良好な木棺墓があり、棺内には鉄鐸・鉄製紡錘車が、棺の外側には坏などの副葬品が、埋置されていた様子が良好に観察できた。鉄鐸は、松本平やその周辺の地域では多く確認されているが、北信地方ではまだ少数で、墓からの出土は初見となる。その他に、竪穴住居跡からも鉄鐸と八稜鏡が出土している。また、遺跡からは鉄滓・羽口・炉壁などの鍛冶関連遺物が多数出土しているが、調査区の東端で確認された大形の竪穴住居跡からは鍛冶炉も確認され、遺跡内で鉄製品の製作が行われていたことがわかった。

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　97

主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—坂城町内—

上五明条里水田址

発　行　平成23（2011）年 3 月18日
発行者　長 野 県 千 曲 建 設 事 務 所
（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-Mail　info@naganomaibun.or.jp
印　刷　明和印刷株式会社
〒380-0943　長野県長野市安茂里2161-2
Tel 026-226-5311　Fax 026-228-0799